

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 連携研究

「アジアにおける自然と文化の重層的関係の歴史的解明」

サブプロジェクト「鹿児島県甑島の限界集落における絶滅危機方言のアクセント調査研究」

甑島里方言記述文法書

窪菌晴夫（監修）

森勇太・平塚雄亮・黒木邦彦（編）

2015年3月



このファイルは2015年3月に刊行した『甑島里方言記述文法書』について、
印刷後に判明した誤りを修正したものです。（2015年4月30日）

はじめに

本稿は、鹿児島県甕島里町方言（以下「里方言」）の文法に関する調査結果をまとめたものである。人間文化研究機構連携研究「アジアにおける自然と文化の重層的関係の歴史的解明」のサブプロジェクト「鹿児島県甕島の限界集落における絶滅危機方言のアクセント調査研究」（研究代表者・窪菌晴夫）の中で、黒木邦彦（啓明大学）が中心となって日本語学の若手研究者 14 名による文法研究班を組織し、文法記述のための調査・研究を行った。本研究は今年度（2014 年度）で終了するため、これまでの調査結果をここにまとめる次第である。

このプロジェクトでは、甕島方言の文法書を編み、危機言語とされる甕島方言の姿を後世に伝えることを目標とした。これまでの（本土方言を中心とする）日本語方言研究は、先行研究に基づいて調査地の特徴的な言語現象を見定め、それを集中的に研究するという方策を採ることが多かった。また、興味の中心は標準語との違いに置かれていたと思われる。そうした部分的な記述から、たとえば、ある音韻規則がどの程度まで適用されているか（過剰一般化が進んでいるか、ごく限られた部分にのみ適用されるのか）を掴むのは難しい。また、形態論（動詞の活用や名詞と助詞の融合現象）などでも同様の問題が起こりうる。

標準語との違いだけに目を向けるのではなく、文法の包括的記述によってこそ、方言を後世に残すという目標は達せられるのではないかと考えた（cf. 南 1962; 下地 2011）。日本語学の研究者がこのように集まって、一方言の文法を包括的に記述するという試みは初めてのものだと思われる。メンバーはいずれも方言調査の経験を有しているので、甕島方言の特徴的な言語現象にも目を向けることができているのではないかと思う。

本稿は包括的な記述文法書を目指しているが、各々の興味の違いから、記述文法書で必要とされる調査・研究の配分がうまくいかなかったところがある。前述のように研究期間も限られているため、十分に議論できなかったところや、記述が十分ではないところがあることも自覚している。それでも、一旦は成果報告を行ない、多くの人に読んでいただき、甕島方言の興味深さが少しでも伝わるようにしたいと考え、今回の報告に至った。甕島方言の文法記述はこれで終わりなのではなく、これを第一歩として、さらに精密化・深化させていきたい。

2015年3月1日

窪菌晴夫（監修）

森勇太・平塚雄亮・黒木邦彦（編）

目次

はじめに	1
グロスとその略記	8
言語形式に関する記号	9
例文中の記号	9
第 1 章 社会的状況	11
1.1 甌島の概要	11
1.2 里方言の概要	11
1.3 先行研究	12
1.4 方法とデータ	12
1.4.1 組織	12
1.4.2 話者	13
1.5 本稿の構成	13
第 2 章 音韻論	15
2.1 音素体系	15
2.1.1 音素目録	15
2.1.2 条件異音	17
2.1.3 無声化	17
2.2 音素配列規則	18
2.2.1 母音音素	18
2.2.2 モーラ音素	18
2.2.3 子音音素	19
2.3 音節構造	20

2.3.1	基本構造	20
2.3.2	前音節	20
2.4	モーラ	20
2.5	アクセント体系	21
2.6	音韻解釈	22
2.6.1	子音の口蓋性	22
2.6.2	長母音	23
2.6.3	長阻害音と阻害音連続	24
2.6.4	鼻音	24
2.6.5	渡り音	25
2.6.6	「行」の音韻解釈	25
第3章	音韻規則	30
3.1	連濁	30
3.2	半濁音化	31
3.3	連結音	32
3.4	//rV +h// の交替規則	33
3.5	名詞基幹句の形成過程	34
3.5.1	与格名詞の形成過程	34
3.5.2	被主題化名詞の形成過程	36
3.6	短母音化	37
3.7	形容詞語根語の形成過程	39
3.7.1	準体形容詞の形成過程	40
3.7.2	/k/ 始まりの接尾辞を含む形容詞の形成過程	40
3.8	//j, w, n, t(, d)// の交替規則	41
3.9	複合語の形成過程	43
3.10	主格尊敬動詞語幹の形成過程	43
3.11	念押し動詞の形成過程	44
3.12	子音語幹とそのテ形語幹	45
3.12.1	m-b-w 語幹とそのテ形語幹	46
3.12.2	n-r-t 語幹	46
3.12.3	s-k-g 語幹	47
3.12.4	テ形語幹形成過程の交替規則に見る自然音類	48
3.13	形態音素 //R//	48
3.14	まとめ	49

第 4 章	言語形式の単位	50
4.1	言語形式の単位	50
4.2	語の構成要素	51
4.2.1	語根と接辞	51
4.2.2	派生接辞と語幹	52
4.2.3	指示語語根	52
4.2.4	複合語幹	53
4.3	語	54
4.4	複合体	55
4.4.1	動詞複合体	55
4.4.2	名詞複合体	56
4.5	句	57
4.5.1	動詞句	57
4.5.2	名詞句	58
4.6	節	58
4.6.1	節の構造	58
4.6.2	節の類型	59
第 5 章	形態論	61
5.1	動詞	61
5.1.1	動詞語幹および動詞の構造	61
5.1.2	動詞語幹の自立性	61
5.1.3	動詞の活用	62
5.1.4	動詞語幹	65
5.1.5	<i>ori-</i> ‘下りる’ に対応する動詞語根の特殊性	69
5.1.6	動詞屈折接尾辞	70
5.1.7	動詞屈折接尾辞の分析に関する問題	74
5.1.8	動詞派生接尾辞	77
5.1.9	動詞派生接頭辞	78
5.2	形容詞	79
5.2.1	形容詞語幹および形容詞の構造	79
5.2.2	形容詞語幹	80
5.2.3	形容詞屈折接尾辞	80
5.2.4	形容詞派生接尾辞	81
5.3	名詞	82

5.3.1	名詞語幹および名詞の構造	82
5.3.2	名詞語幹の自立性	83
5.3.3	名詞派生接尾辞	84
5.4	副詞, 連体詞	86
5.5	接尾語	86
5.5.1	動詞語幹を派生させる接尾語	86
5.5.2	名詞を派生させる接尾語	87
5.5.3	副詞, 連体詞を派生させる接尾語	90
第6章	統語論	91
6.1	格	91
6.1.1	基本配列《主節, 待遇なし》	91
6.1.2	主格標示	92
6.1.3	格助詞	95
6.1.4	属格助詞 =ga, =no	96
6.1.5	中心項を標示する格助詞	99
6.1.6	周辺項を標示する格助詞	102
6.2	取り立て	106
6.2.1	被取り立て名詞の構造	106
6.2.2	取り立て助詞	107
6.2.3	= ^w a (主題, 対比)	107
6.2.4	=mo (添加, 並列)	108
6.2.5	=saaka (添加)	109
6.2.6	=zui, =made (添加)	109
6.2.7	動詞の取り立て	109
6.3	述部の構成要素と文法カテゴリー	110
6.4	文の階層構造	111
6.4.1	A 類節	112
6.4.2	B 類節	113
6.4.3	C 類節	114
6.5	名詞節	115
6.5.1	=to 節	115
6.5.2	疑問節	116
6.6	並列節	117

第7章	意味論	119
7.1	有生性	119
7.1.1	存在動詞	119
7.1.2	受動ヴォイスの選択	120
7.2	ヴォイス	122
7.2.1	自動詞語幹化	122
7.2.2	使役・受動表現	123
7.2.3	可能表現	124
7.3	アスペクト	128
7.4	待遇表現	132
7.4.1	主格尊敬表現	132
7.4.2	丁寧表現	136
7.4.3	斜格尊敬表現	136
7.4.4	行為要求表現	137
7.5	否定表現	138
7.5.1	^a n-	138
7.5.2	^a ziN	139
7.6	時制	140
7.7	モダリティ	141
7.7.1	対事的モダリティ	142
7.7.2	対人的モダリティ: 終助詞による表現	151
7.8	ダイクシス	161
7.8.1	指示表現	161
7.8.2	視点表現	165
第8章	副詞節	169
8.1	副詞節の分類	169
8.2	意味的傾向	170
8.3	A 類副詞節を作る形式	170
8.4	B 類副詞節を作る形式	171
8.4.1	順接仮定条件	172
8.4.2	その他	175
8.5	C 類副詞節を作る形式	177
8.5.1	順接確定条件	177
8.5.2	逆接条件	179

8.6	D 類副詞節を作る形式	181
第 9 章	語彙	183
9.1	人称名詞	183
9.2	語彙表	184
参考文献	192

グロスとその略記

グロス	英語	日本語
1:	1st person	一人称
2:	2nd person	二人称
ABL:	ablative	奪格
ACC:	accusative	対格
ADN:	adnominal	連体
CAUS:	causative	使役
CMP:	comparative	比較格
CNF:	confirmative enclitic	間投助詞 (本稿の助詞は enclitic を意味する)
COM:	comitative	共格
CONC:	concessive	逆接確定条件
COND:	conditional	順接仮定条件
CONT:	continuous	継続相
CSL:	causal	順接確定 (=原因・理由)
CTX:	contextual	文脈依存
DAT:	dative	与格
DES:	desirious	希望
DIS:	distal	遠称
ESS:	essive	様格
FIL:	filler	フィラー
GEN:	genitive	属格
HON:	honorific	尊敬
HORT:	hortative	勧誘
ILST:	illustrative	例示
IMP:	imperative	命令
INFR:	inferential	推量
INST:	instrumental	具格
INTR:	intransitivizer	自動
IPFV:	imperfective	不完成相
LOC:	locative	所格
MES:	mesioproximal	中称
NEG:	negative	否定
NL:	nominal	準体
NLZ:	nominalizer	名詞(語幹)化
NOM:	nominative	主格

NPST:	non-past	非過去
OBLG:	obligative	義務
PARA:	parallel	並列
PASS:	passive	受動
PL:	plural	複数
POL:	polite	丁寧
POT:	potential	可能
PROH:	prohibitive	禁止
PROX:	proximal	近称
PST:	past	過去
PURP:	purposive	目的
Q:	question	疑問
QUOT:	quotative	引用
RED:	reduplication	重複
SEEM:	seeming	様態
SFP:	sentence final enclitic	終助詞
SG:	singular	単数
SIM:	simultaneous	並行
TERM:	terminative	限界格
TOP:	topic	主題
TR:	transitive	多動
TTL:	title	敬称
VLZ:	verbalizer	動詞語幹化
VOL:	volitional, volitive	意志

X.Y: 当該形式は X および Y を意味する

X:Y: 当該形式は X を意味する形態素と Y を意味する形態素からなる

言語形式に関する記号

[]: 音声表記	//: 音素表記	// //: 基底表記	「 」: 他方言の形式
?: モーラの境界	::: 音節の境界	-: 接辞の境界	=: 接語の境界
+: 語幹の境界	~: 重複	: 音韻的語の境界	#: 統語的語の境界
(): 選択要素	X ~ Y: 両者は異形態		

例文中の記号

*: 非文法的 #: 意味的に不適切 ?: 適格性の判断に迷う

%: 地域差や個人差がある ‘ ’: 標準語訳 [: 文脈等の補足
《 》: 用法等 (): 出典

- (i) テキストから用例を引く際、言いよどみや繰り返しを一部整理した。
- (ii) テキストやエリシテーションで出てきた人名は「太郎」や「花子」などに置き換えた。

第1章 社会的状況

1.1 甑島の概要

甑島¹は、鹿児島県薩摩半島の西方海上約 40 キロメートルにある列島で、上甑島（里町里，上甑町中甑・中野・江石・小島・瀬上・桑之浦），中甑島（上甑町平良），下甑島（鹿島町蘭牟田，下甑町手打・長浜・青瀬・瀬々野浦・片野浦），および多数の無人島からなる。面積は 119 平方キロメートルである。行政区画は薩摩川内市に属するが、これは 2004 年に川内市などと合併したことによる。2015 年 1 月現在，甑島へは薩摩川内市の川内港より高速船が，いちき串木野市の串木野新港よりフェリーが運航している。

薩摩川内市のホームページによると，2014 年 11 月 1 日時点の甑島の人口は 5,052 人（上甑島 2,323 人，中甑島 265 人，下甑島 2,464 人）である。このうち，本稿の対象である里町里（以下「里」）は島内で最も人口が多い地域で，1,230 人を抱えている。

なお，島内に高校や大学はなく，進学を希望する場合は島外（多くは鹿児島県内）の学校へ出て行くことになる。

1.2 里方言の概要

UNESCO Ad Hoc Expert Group on Endangered Languages (2003) では危機言語（方言）の 1 つとしては認定されていないものの，窪菌（2009），木部（2011）には，甑島方言が危機度の高い日本語方言であるとの言及がある。里の人口 1,230 人のうち，仮に方言を自在に操ることができるのが 65 歳以上であると考えると，その人口はわずか 567 人となる。また平塚（2013）によれば，甑島の中で里の標準語化の度合いは最も高い。よって，人口の観点からも，言語的事実の観点からも，危機に瀕した方言であると言える。

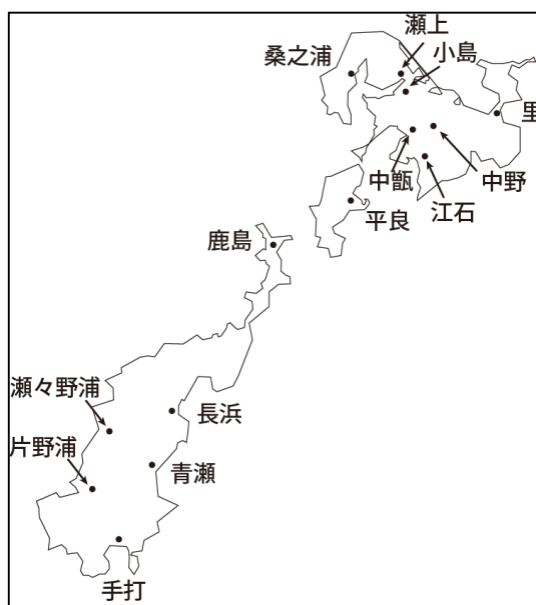


図 1 甑島列島

¹ 島民の間や様々な表記において「こしきじま」と「こしきしま」という 2 つの読み方が混在していたようであるが，2014 年 8 月に薩摩川内市は「こしきじま」から「こしきしま」へと呼称変更した。ただしこれは一部からの反発を招き，2015 年 1 月現在，いまだに議論が行なわれている。

本稿で記述の対象とする里は、藺上 (そのうえ), 藺中 (そのなか), 藺下 (そのした), 村東 (むらひがし), 村西 (むらにし) という地区に分かれており, 本プロジェクトで調査したのは, 主に藺中, 藺下, 村東の話者である。各地区の細かな文法の違いについては, それぞれの言語項目の記述の中で適宜触れていくことにする。

1.3 先行研究

甌島方言は, 鹿児島県内の方言区画では「離島方言」として位置づけられ, 本土の薩隅方言とは区別される (上村

1964)。(i) 二型アクセントで, 丁寧動詞語幹を作る $-i\text{mos-}$ を持つ点では薩隅方言と共通する一方, (ii) 二重母音 ai との対応,

i/u 終わり音節の内破音化, 主格助詞 $=no$, 対格助詞 $=ba$, 形容詞屈折接尾辞 $-ka$, 接続助詞 $=baQte$ を有する点では肥筑方言的な特徴を示すことがわかっている (cf. 上村 1936; 1964)。

ただし, 甌島内の方言は地域差を示しており, 特に音声・音韻の面ではそれが著しいと指摘されている。

甌島方言はこれまで, 上村孝二氏によって精力的な記述が行なわれている。主なものとしては, 音韻に関する上村 (1940; 1941a; 1965), 語彙に関する上村 (1932; 1937; 1982a), 方言概説たる上村 (1970a; 1971; 1982b; 1983; 1985; 1986) が挙げられる。その他にも, 南 (1967), 尾形 (1987a-1988b) が瀬上方言の音韻体系について述べている。また春日 (1931) は敬語語彙について, 尾形 (1988a) は瀬上方言の人称名詞について, 山本 (2009) は瀬上方言の可能表現について, それぞれ記述している。これまでの甌島方言研究を概観すると, 分野では音韻 (語声調が中心) と語彙の記述が多く, 地域では音韻体系に特徴がある瀬上のものが比較的多い。

里方言については, 上村 (1970) で概説が述べられている他, 里村郷土史編纂委員会 (編) (1985), 里村教育委員会 (編) (2003), 小川 (2012) など地元の方々による概説, および語彙・テキストの記録も行なわれている。ただし, これらの研究はいずれも里方言の文法を部分的に記述したものとなっており, 包括的な記述には至っていない。

1.4 方法とデータ

1.4.1 組織

本稿は, 人間文化研究機構連携研究「アジアにおける自然と文化の重層的関係の歴史的解明」のもと進められている, 鹿児島県甌島方言の記述プロジェクト (研究代表者: 窪藺晴夫) の成果をまとめたものである。本プロジェクトで記述を進めているのは, アクセントと (音韻を含む) 文法である。文法記述にあたっているメンバーは次のとおり (岩田以下五十音順)。

黒木邦彦 (文法班代表), 岩田美穂, 門屋飛央, 久保藺愛, 酒井雅史, 坂井美日, 白岩広行, 高

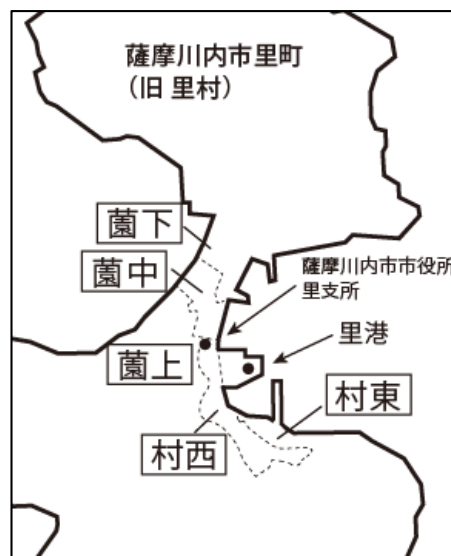


図2 薩摩川内市里町

木千恵, 野間純平, 平塚雄亮, 藤本真理子, 松丸真大, 森勇太, 山本友美
本プロジェクトでは研究期間の制約から里方言の記述を最優先課題とし, 本稿を執筆した。

1.4.2 話者

研究期間である 2011 年から 2014 年にかけて, 甑島内の 9 地点 (里, 中甑, 瀬上, 小島, 桑之浦, 平良, 鹿島, 長浜, 手打) で延べ 99 名の話者にご協力いただき, 面接調査と談話収録を行なった。そのうち, 本稿の対象とした里では 29 名の話者にお世話になった。生年等の内訳を表 1 に示す。

表 1 ご協力くださった話者とその年齢

生年	2014 年現在の年齢	男性	女性	本稿での ID
1920 年代	85–94 歳	4	4	01, 04–10
1930 年代	75–84 歳	3	6	02, 11–18
1940 年代	65–74 歳	4	2	03, 19–23
1950 年代	55–64 歳	5	1	24–29

面接調査の結果については, 1920 年代生男性 (以下「話者 01」), 1930 年代生女性 (以下「話者 02」), 1940 年代生男性 (以下「話者 03」) の 3 名から得たデータを中心にまとめた。このうち, 話者 03 は他の話者より幾分若く, 中学校卒業後, 島外で長期間生活した経験もある。しかし, 当地の方言に対して内省が働くようで, 使用する言語形式も他の話者と大きく変わらなかったため, 本プロジェクトでは話者として適切であると判断している。

この 3 人以外の話者に言及する必要がある場合は, 年齢ごとに振った 04 から 29 までの ID 番号で示す (男女の別はそれぞれの項で必要に応じて記す)。なお, 収録した談話については, プロジェクトメンバーと現地の有志で文字化を進めており, 後日公開を予定している。

本プロジェクトでは時間的制約から里の言語記述を最優先課題としたが, 他の地点でも興味深い言語現象は多々見られた。本稿に盛り込むことが叶わなかった報告については, 別に論文集を刊行する予定である。

1.5 本稿の構成

本稿は 9 章で構成する。構成と各章・節の担当者については次のとおりである (それぞれ五十音順)。語彙調査は十分とは言えないが, 第 9 章には, 人称名詞の記述と語彙表を参考資料として載せた。巻末に詳細な執筆分担を掲載している。

- 1 章 社会的状況: 平塚, 森
- 2 章 音韻論: 黒木
- 3 章 音韻規則: 黒木
- 4 章 言語形式の単位: 黒木
- 5 章 形態論: 黒木, 野間

- 6章 統語論: 岩田, 野間, 坂井
- 7章 意味論: 門屋, 久保菫, 黒木, 酒井, 白岩, 高木, 野間, 平塚, 藤本, 松丸, 森, 山本
- 8章 副詞節: 岩田
- 9章 語彙: 黒木, 平塚, 藤本

本稿は里方言の包括的な記述を目指したものであるが, 限られた期間で調査を行なったため, 執筆・編集段階で不足に気づいたところがある。また, 各章・節の記述の関連が十分に図れていないところもあるものと思われる。大きな問題として, 以下の点に気づいている。

- (1) a. 5.4節「副詞, 連体詞」。副詞に関する記述が特に不十分である。
- b. 7.2.2節「使役・受動表現」。各形式の意味に関する記述が特に不十分である。
- c. 7.6節「時制」。従属節の時制に関する記述が特に不十分である。
- d. 文法カテゴリー間の相関関係に関する記述。7.1節「有生性」では, 名詞階層について十分考察できていない。また定性などについてもわずかに調査を行なってはいるものの, 記述するには至っていない。
- e. テキストの分析が進んでいないため, 面接調査の結果に大きくよっている。テキストに出てくる形式と面接調査で得た形式の相違についても, 考察できていない。
- f. 里の中での地域差や個人差 (特に音韻の面。cf. 2.6.5–2.6.6節)。

しかし, 広く公開を行なって多くの方にご覧いただき, 議論のきっかけとすることによって, 里方言の記述を深化させたいと考えている。

第2章 音韻論

2.1 音素体系

2.1.1 音素目録

里方言の音素目録は次のとおり（本稿では、音素表記 // を理解に障らない範囲で省く）。

- (1) a. 母音音素 (V; +moraic, +syllabic): i [i]; u [ʊ] (表記の便宜上, 以下 [u]); e [je ~ je ~ e]; o [wo ~ o]; a [a]
 b. モーラ音素 (M; +mora, -syl): Q [-sonorant]; N [+nasal]
 c. 子音音素 (C; -mora, -syl): m [m]; p [p]; b [b]; w [w]; n [n]; r [r]; s [s]; c [tʃ]; z [z ~ dz]; t [t]; d [d]; j [j]; k [k]; g [g]; h [ɸ ~ h]

弁別的素性によって母音音素と子音音素を分類すると, [表 2-3] のようになる。

表 2 母音音素の弁別的素

	+front	-front
+high, -low	i	u
-high, -low	e	o
-high, +low		a

表 3 子音音素の弁別的素性

		m	f	p	b	w	n	r	s	c	z	t	d	k	g	h	
P A						LAB											
							DOR			COR					DOR		PHA
M A	voi	+	-	-	+	+	+	+	-	-	+	-	+	-	+	-	-
	son	+	-	-	-	+	+	+	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	nas	+	-	-	-	-	+	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	cont	-	+	-	-	+	-	-	+	±	+	-	-	-	-	-	+

(注) PA: 調音点; LAB: 唇音; COR: 舌頂音; DOR: 舌背音; PHA: ; MA: 調音法; voi: 有声性; son: 共鳴性; nas: 鼻音性; cont: 継続性

音韻解釈すれば, モーラ音素の (2) /q/ は子音の直前の閉鎖音に, (3) /N/ は子音の直前の鼻音にあたる。両者の調音点素性は定まっておらず, 直後の子音のそれに同化する。

- (2) koQpa [kop:a=kop̄pa] (B) ‘切り干し芋’, iQsjoki [ic:okʲi=ic̄cokʲi] (B) ‘一緒に’, seQzii

[se̞t̚dzi:] (B) ‘ケチ’, cuQgomi [su̞k̚gom̚i]² (B) ‘十五夜の行事³’

- (3) giNmi [g̚im̚i:i=g̚im̚im̚i] (A) ‘会議’, huNnaka [ɸun:aka=ɸunnaka] (B) ‘古い’, huNde [ɸunde] (B) ‘踏んで’, naNka [naŋka] (B) ‘長い’, oNseN [onsen, o̞isen] (A) ‘温泉’

里方言における /s/ の直前の /N/ は、標準語のそれより閉鎖性に富むようで、(3) のように閉鎖鼻音 [n] でも実現する。

本節の最後に、主要な最小対に対する解釈を参考までに次に示す。

(4) 母音の違い

- | | |
|---------------------------|------------------------|
| a. [haku] /haku/ (B) ‘吐く’ | b. [ai] /ai/ (B) ‘ある’ |
| [hake] /hake/ (B) ‘吐け’ | [au] /au/ (B) ‘合う’ |
| [haka] /haka/ (B) ‘墓’ | [ao] /ao/ (B) ‘青’ |
| c. [k̚i:] /kii/ (B) ‘切る’ | d. [toi] /toi/ (A) ‘鳥’ |
| [k̚u:] /kjuu/ (B) ‘今日’ | [to:] /too/ (A) ‘戸’ |
| [k̚a:] /kjaa/ (B) ‘貝; 櫂’ | |

(5) 子音の違い

- | | |
|--------------------------------|------------------------------|
| a. [mane] /mane/ (A) ‘真似’ | b. [bane] /bane/ (B) ‘バネ’ |
| [kane] /kane/ (A) ‘金属’ | [sane] /sane/ (B) ‘種’ |
| [gane] /gane/ (A) ‘蟹’ | [jane] /jane/ (B) ‘屋根’ |
| [hane] /hane/ (A) ‘羽’ | |
| c. [kat̚a:] /katjaa/ (B) ‘勝てば’ | d. [çi:te] /hiite/ (A) ‘引いて’ |
| [katca:] /kacjaa/ (B) ‘勝ちは’ | [ɸ̚i:te] /hwiite/ (A) ‘拭いて’ |

(6) 子音の口蓋性の有無

- | | |
|-----------------------------|-----------------------------------|
| a. [kawa:] /kawaa/ (A) ‘川は’ | b. [kata:] /kataa/ (B) ‘肩は’ |
| [kaw̚a:] /kawjaa/ (A) ‘川に’ | [kat̚a:] /katjaa/ (B) ‘肩に’ |
| c. [kui] /kui/ (B) ‘来る’ | d. [jamazoi] /jamazoi/ (B) ‘山沿い’ |
| [k̚ui] /k̚jui/ (B) ‘胡瓜’ | [jamazoi] /jamazjoi/ (B) ‘農作業用草履’ |

(7) 母音の長短

- | | |
|----------------------------|----------------------------|
| a. [m̚ite] /mite/ (B) ‘見て’ | b. [kui] /kui/ (B) ‘来る’ |
| [m̚i:te] /miite/ (A) ‘剥いて’ | [ku:i] /kuui/ (B) ‘来よう’ |
| c. [mame] /mame/ (B) ‘豆’ | d. [kak̚i] /kaki/ (B) ‘書き’ |
| [mame:] /mamee/ (B) ‘豆に’ | [ka:k̚i] /kaaki/ (B) ‘牡蠣’ |

² /Qb, Qz, Qd, Qg/ の /q/ は無声阻害音で実現する。このことから分かるように、里方言では長有声阻害音を使用しない。

³ 「十五夜の夜、カズラタテで使ったカズラを2つに切り、切った先どうしを、両軍の先頭がカズラを互いに絡ませあい、水平状に抑え込んだ方が勝ちとなった。その後連結されたカズラで綱引きが行なわれ、かなり過激な綱引きでけんかも度々起きた」(小川 2012: 12)

(8) 子音の長短

- a. [kata] /kata/ (B) ‘肩’
[kat:a] /kaQta/ (B) ‘勝った’
- b. [makeŋ] /makeN/ (A) ‘負けない’
[mak:ej] /maQkeN/ (A) ‘眉間’
- c. [suna] /suna/ (A) ‘砂’
[sun:a] /suNna/ (A) ‘するな’
- d. [kamaŋ] /kamaN/ (B) ‘噛まない’
[kam:aj] /kaNmaN/ (B) ‘構わない’

2.1.2 条件異音

子音音素 (1)c の大半は /i/ の直前で次のように口蓋化する。この点は、現代日本語一般に通じる。

- (9) m → [m^j] p → [p^j] b → [b^j] w → [w^j] n → [n^j]
r → [r^j] s → [s^j] c → [tɕ] z → [z ~ dz] k → [k^j]
g → [g^j] h → [ç]

複数の条件異音からなる /e/, /o/, /w/, /z/, /h/ は次のように実現する。

- (10) e → [je] / #_ eda [jeda] (A) ‘枝’
→ [j_ɛ] / V_ hu.e [φu.j_ɛ] (A) ‘笛’
→ [e] / EW ki.see [k^jise:] (A) ‘煙管’
- (11) o → [w_o] / V_ si.o [ɕi.w_o] (B) ‘塩’
→ [o] / EW orooi [oro:i] (A) ‘いようよ’
- (12) z → [z] / V_ kaze [kaze] (A) ‘風’
→ [dz] / EW zenzen [dzendzen] (A) ‘全然’
- (13) h → [φ] / _u hune [φune] (B) ‘船’
→ [h] / EW hai [hai] (A) ‘針’

(注) ∴: 音節の境界 (cf. 2.3 節); EW: elsewhere; [x]: 聞こえの弱い [X]

次のように、話者 03 は、舌頂音音素をしばしば舌端/舌尖後部歯茎音で実現させる。この傾向は摩擦音および破擦音で顕著である。

- (14) a. /misewa/ [m^jifewa] (B) ‘店は’, /sasimi/ [ʃafim^ji] (B) ‘刺し身’
b. /cuita/ [ʃuita] (B) ‘付いた’, /miicii, miicjaa/ [m^ji:ʃi:, m^ji:ʃa:] (A) ‘道に, 道は’,
/cjai|toQta/ [ʃaitot:a] (A|A) ‘落ちてたぞ’
c. /iizen/ [i:ʒeN] (B) ‘以前’, /kaazii, kaazaa/ [ka:ʒi:, ka:ʒa:] (B) ‘火事に, 火事は’, /mazeNka/
[ma^dɕeŋka] (B) ‘混ぜないか’
d. /surecigaQta/ [ʃureʃigat:a] (??) ‘すれ違った’

(注) |: 音韻的語の境界

また、稀にはあるが、語頭の /w/ は [βw] ないし [b] でも実現する。

- (15) a. /wakaraN/ [βwakaraN] ‘混ぜて’ (話者 10)
b. /kamoN#wana/ [kamom#bana] ‘鴨の#罾’ (話者 03)

2.1.3 無声化

次のとおり、無声子音間の狭母音は現代日本語一般と同じく無声化する。

- (16) a. [ip^h:ik^hi] (B) ‘一匹’, [e^hitamama] (A) ‘したまま’, [k^hi^hte:] (B) ‘来て’
 b. [ɸ^hutja:] (A) ‘額’, [ik^himosu^htona] (B) ‘来ますのな’, [k^hutadoo] (B) ‘食ったぞ’

上村 (1965) によれば, 里町に隣接する上甕町の瀬上方言では, [C[+nas]V[+h]C[-voi]] (e.g. [mit], [nis], [muts], [nuk], etc.) の狭母音も当時は無声化していたらしい。ただし, 調査した限り, 里方言ではそうではない。

2.2 音素配列規則

2.2.1 母音音素

母音音素に関して言えば, 次の音素配列は稀少ないし不適格である (ただし, 基底ではその限りではない)。

- (17) a. ?VVV (ほぼ非単純語⁴), ?VVM (同左), ?NV (漢語のみ); *QV
 cf. naeete //naos-te// (B) ‘直して’, mioi //mi^h-or^h-u// (A) ‘見てる (IPFV)’, haoi //ha+or^h-Ø// (A) ‘羽織’, maiuci //maai+ut^h-Ø// (A) ‘鞠突き’, kuui //ke^h-u=i// (B) ‘来よう’, nebaaN (A) ‘真綿’, sireeQto //siree-Qto// (A) ‘何食わぬ顔で’, sorooQto //soroo-Qto// (A) ‘密かに’
 ex. aoigusa (??) ‘ススキ’, ioN (A) ‘AEON (商業施設)’
 b. *iu, *ie, *ia
 cf. juu (*iu) (A) ‘言う’, e (*ie) (B) ‘家’, cuQkjaa (*cukiai) (B) ‘付き合い’
 c. *uo, *ua
 cf. io (*uo) (A) ‘魚’
 d. ?ei, *eV[-f]
 ex. eiei (B) ‘戦争ごっこ’
 e. *ou, *oa
 cf. uu (*ou) (A) ‘追う’, jokuu (*ikou) (B) ‘憩う’, onmu (*omou) (B) ‘思う’

/VV/ は適格ではあるが, 例に富むのは次の2種類に限られる。

- (18) a. V_iV_i (以下, 下付きのローマ数字で要素の同一性を示す)
 e.g. cikii (B) ‘棒秤り’, juuzi (B) ‘用事’, eebu (A) ‘海老’, kee (B) ‘蹴る’, oomi (B) ‘海’, saaru (B) ‘猿’
 b. ui, oi, ai, au
 e.g. nui (A) ‘寝る; 塗る’, toi (A) ‘鳥’, ai (B) ‘ある’, kau (A) ‘買う’

2.2.2 モーラ音素

モーラ音素に関して言えば, 次の音素配列は稀少ないし不適格である。

- (19) a. ?#M (#NN のみ), ?MM (#NN のみ); *CM

⁴ 母音音素に関して言えば, 単純語と非単純語は配列上の制約を異にする。

ex. NNme (A) ‘梅’, NNma (B) ‘馬’, NNbee (B) ‘ムベ (植物)’, NNmaka (B) ‘旨い’,
 NNdomo (A) ‘俺たち’, NNmabee (B) ‘ウバメガシ (植物)’

b. *Q#, *QP[+son]

(注) #: 統語的語の境界; P: 音ないし音素

2.2.3 子音音素

子音音素に関して言えば、次の音素配列は稀少ないし不適格である。

(20) a. ?CC (hw, Cj のみ); *C#, *CM (cf. (19)a)

ex. **hwiite** [ɸ^hi:te] { (A) ‘拭いて’ / (B) ‘吹いて’ }, **toohwaa** [to:ɸa:] (A) ‘豆腐は’, **kjaa** [k^ha:] (B) ‘貝; 櫂’, **mizjooka** [m^hizo:ka] (A) ‘見目よい’

b. ?wi (wii のみ)⁵, ?wjV (wjaa のみ); *wu, *wo

ex. **wiite**, **wiita** (A) ‘浮いて, 浮いた’, **toohwii** (A) ‘豆腐に’, **sedowjaa** (??) ‘家と家の間’, **wjaate** (A) ‘沸いて’, **juwjaa** (A) ‘言えば’

c. *nV[+h]#

cf. **oN** (B) ‘ウニ’, **beN** (***beni**) (B) ‘口紅’, **iN** (***inu**) (B) ‘犬’, **siN** (***sinu**) (A) ‘死ぬ’, **keN** (***kinu**) (B) ‘絹’

d. ?cV[-h] (話者 03 の caa のみ)

ex. **naacaa** [na:tsa:] (A) ‘夏は’

e. ?tjV (tjaa のみ); *tV[+h],

ex. **hutjaa** (A) ‘額’, **tjaako** (A) ‘太鼓’, **tjaate** (A) ‘炊いて’

f. ?djV (djaa のみ); *dV[+h]

ex. **zidjaa** (A) ‘地面’, **dodjaa** (B) ‘土台’, **djaate** (B) ‘出して’

g. *jV[+f]

cf. **e** [**je**] (B) ‘家’, **eku** [**jeku**] (A) ‘置く’

h. ?Vh (ほぼ漢語)⁶, ?Nh (漢語のみ); *Qh

ex. **ahoo** (??) ‘母’, **karaho** (??) ‘カラムシ (イラクサ科の多年草)’

⁵ ‘浮いて, 浮いた’ を意味する形式は、伝統的には //ukar-// (A) から作った /ukaQta, ukaQte/ である。

⁶ /h/ は語頭に集中しているが、半濁音化でこれと入れ替わる /p/ (cf. 3.2 節) は、次のように幅広く分布している (いずれも小川 2012 による)。

(I) a. **pojaNsu** (??) ‘肛門’

b. **sepirowata** (??) ‘腸’, **tenkaponka** (??) ‘大事にしている様’

c. **daQpai** (??) ‘黙る’, **kaQpaN** (A) ‘鞆’, **maQpoosi** (??) ‘真正面’, **suQpakuroo** (??) ‘いい加減な怠け者’, **suQpato** (??) ‘全部’, **zaQperazaa** (??) ‘いい加減’, **aQponcjan** (??) ‘がっかり’

d. **kanpaci** (??) ‘旱魃’, **siQtonpee** (??) ‘一番後ろ’, **ciQcjanpee** (??) ‘櫃’, **tereNparen** (??) ‘ぐずぐずしている様’

2.3 音節構造

2.3.1 基本構造

(20)a のとおり, /CC/ は基本的に不適格であるが, /Cj/ と /hw/ だけは適格である。このことを踏まえて, /j, w/ を特別に「子音音素と母音音素の間で渡り音 (G) にもなる子音音素」とすれば, 音節の基本構造は次のようになる。

(21) (C)(G)V₁(V₂)(M)

- (22) V₁: i (A) ‘胃’, e (B) ‘家’, i.ta (A) ‘行った’, mo.e.te (A) ‘燃えて’
CV₁: me (B) ‘目’, te (B) ‘手’, ha (B) ‘歯’, mi.kjaa (B) ‘見に’
CGV₁: cja (B) ‘茶’, zja.ko (B) ‘キビナゴ’, a.cja.gu.ci (??) ‘舌足らず’
V₁V₂: ee (B) ‘家に’, uu (A) ‘追う’, oo.mi (B) ‘海’, aa.mi (B) ‘網’
CV₁V₂: bui (A) ‘鯛’, moo (A) ‘藻’, a.kii (B) ‘秋に’, toi.kja’a (B) ‘取りに’
CGV₁V₂: kjui (B) ‘キュウリ’, wjaa.te (A) ‘沸いて’, too.hwaa (A) ‘豆腐は’
V₁M: in (B) ‘犬’, on (B) ‘ウニ’, iq.too (??) ‘一族’, aQ.te (B) ‘あって’
CV₁M: den (B) ‘出ない’, ken (B) ‘絹; 来ない’, toQ.te (B) ‘取って’
CGV₁M: naN.gjaQ.te (B) ‘投げなさって’, cjaN.to (A) ‘こんな’
V₁V₂M: kjoo.iku.iiN.kai.de (??) ‘教育委員会で’ (借用形態素のみ)
CV₁V₂M: ne.baan (A) ‘真綿’, naaN.mo (B) ‘何も’, si.reeQ.to (A) ‘何食わぬ顔で’
CGV₁V₂M: ci.hoo.sjoon (??) ‘痴呆症に’ (借用形態素のみ)

2.3.2 前音節

圧倒的に少数派ではあるが, 次のように /NN/ からなる音節で始まる語もある。

- (23) NN.me [m::e] (A) ‘梅’, NN.ma [m::a] (B) ‘馬’, NN.bee [m:be:] (B) ‘ムベ (植物)’, NN.ma.ka [m::aka] (A) ‘旨い’, NN.do.mo [n:domo] (A) ‘俺たち’, NN.ma.bee [m::abe:] (B) ‘ウバメガシ (植物)’

Shimoji (2008) に倣って, /NN/ からなる初頭音節を「前音節」とすれば, 里方言における語の音節構造は次のようになる。

- (24) (前音節.)1 個以上の基本的音節

2.4 モーラ

次のように, ピッチの高低は, 基本的音節を成す /(C)(G)V₁, V₂, M/ の前後で変動する。

- (25) a. su↓i ‘する’, su↓u.i ‘しよう (勧誘)’, su.↑re↓.ba ‘すれば’, see.↑zi↓N ‘せず’, si.↑mo↓i.ta ‘しました’
b. ka.↑ku ‘書く’, ka↓.koo.↑i ‘書こう (勧誘)’, ka↓.ke.↑ba ‘書けば’, ka.↑kaa↓.zi↑N ‘書かず’, ka.↑ki↓.moi.↑ta ‘書きました’

(注) ↑: モーラ間の上昇; ↓: モーラ間の下降; ↑: モーラ間の相対的に小さい上昇; ↓: モーラ間の相対的に小さい下降

次のとおり、ピッチの高低は、前音節内 (= /N/ と /N/ の間) でも変動する。

- (26) N↓N.me ‘梅’, N↑N.ma↓.ka.doo ‘美味しいぞ’, N↑N.ma↓.ka.↑mo↓.su↓.do ‘美味しいですぞ’,
 NN.↑do↓.ga ‘俺たちが’, N↑N.do↓.mo.↑de↓.mo ‘俺たちでも’, N↑N.do↓.mo.↑sa↓a.ka ‘俺たちさえ’

(注) ˆ: モーラ内の上昇; ˘: モーラ内の下降

そこで、基本的音節の /(C)(G)V₁, V₂, M/ と前音節の /N/ を1モーラとする。

2.5 アクセント体系

里方言のアクセント体系はいわゆる2型式で、音韻的語は、その基幹たる形態素のアクセント型に基づいて、HL 終わらないし LH 終わり (H: 高; L: 低) で実現する (cf. 上村 1941a; 児玉 2012; 窪園 2012; よって、里方言は語声調言語とも言える)。一般に、HL 終わりのアクセント型は「A型」、LH 終わりのそれは「B型」と呼ばれている。

窪園 (2012) の研究対象である下甕島手打方言と同じく、里方言でも、(i) 語末のピッチ (前述のとおり、HL (A), LH (B)) はモーラ単位で付与され、(ii) 多モーラ語は時に重起伏 HLH (HLHL (A), HLH (B)) を含む。

(27) A型

2μ:	HL	su↓i ‘する’
3μ:	LHL	su↑re↓ba ‘すれば’
	LHL	sita↑ma↓ma ‘したまま’
4μ:	HLHL	a↓gu↑re↓ba ‘上げれば’
	LLHL	see↑zi↓N ‘せず’
5μ-:	HHLHL	age↓e↑zi↓N ‘上げずに’
	LHLHL	a↑ge↓ta↑ma↓ma ‘上げたまま’

(28) B型

2μ:	LH	ka↑ku ‘書く’
3μ:	HLH	ka↓ke↑ba ‘書けば’
	LLH	kjaa↑te ‘書いて’
4μ:	HHLH	kee↓zi↑N ‘来ず’
5μ-:	LHHLH	ka↑kaa↓zi↑N ‘書かず’
	HHHLH	kjaata↓ma↑ma ‘書いたまま’
	HHHLLLH	sagaija↓imoi↑ta ‘下がりました’

重起伏式で実現しうるのは、4モーラ以上のA型語と3モーラ以上のB型語である。一般に、重起伏式における前方の山 ((27): 4μ) a↓gu↑re↓ba, (28): 4μ) kee↓zi↑N で言えば、a↓, kee↓) は「副頂点」、後方の山 (同↑re↓, ↑N) は「主頂点」と呼ばれている。

A型語の主頂点は基本的に次末尾モーラであるが、次のように次々末尾モーラに来る (=A型の音韻的語がHLLで終わる) こともある。

- (29) a. su↓ui ‘しよう’, si↑mo↓ita ‘しました’, age↓jai↑mo↓ita ‘上げなさいました’
 b. u↓nda ‘産んだ’, o↑do↓qta ‘踊った’, u↓qta↑ku↓qta ‘叩きまくった’

(29) のとおり、A 型語の主頂点は、次末尾モーラが V₂ ないし M であれば、直前の (C)(G)V₁ に移る。このことからわかるように、A 型語の主頂点は B 型語のそれとは異なり、音節主音 (= 音節の必須要素) たる V₁ を含む (C)(G)V₁ でしか実現しないのである。

A 型語の主頂点になりうる (C)(G)V₁ を「重モーラ」、その他のモーラを「軽モーラ」とすれば、主頂点の位置は次のように定義できる。

(30) 主頂点の位置

A 型: 末尾モーラ以外の最終重モーラ

B 型: 末尾モーラ (軽重は問わない)

(27)–(29) からわかるように、ピッチの高さに関して言えば、主頂点は副頂点より低く、次のように卓立しない (次の例で言えば、太字モーラの直前に ↑ が来ない) ことさえある。

- (31) |o↑maesamata↓ciN|_B |[[ko↓domoN↓|_A |tokja|_B |naNba|_B |↑sijoi↓jai↑moi↓ta|_A |to|_B?
 あなたさまたちの 子どもの 時は 何を なさってました の

- (32) a. o↓Qtama↓ma (A) ‘いたまま’, si|to↓Qtama↓ma (A|A) ‘してたまま’
 b. mita↓mama (B) ‘見たまま’, o↑reta↓mama (B) ‘下りたまま’

主頂点非卓立例は (31) テキストの非文末に頻出し、(32) 面接調査で得た 1 語のみの回答にも稀に見られる。そのため、主副の別が適切ではないように映るかもしれない。それでも後方の低い山を主頂点とするのは、こちらの方がアクセント型の弁別を担っていると考えられるからである。その理由は次のとおり。

- (33) a. 3 モーラ以下の A 型語と 2 モーラ以下の B 型語は、そもそも副頂点を持たない。
 b. 位置の面でも実現形の面でも、主頂点は副頂点より安定している。

2.6 音韻解釈

最少対 (6)–(8) が存在するので、子音の口蓋性の有無と音の長短は音韻的に区別しなければならない。しかし、/C/ と対立する /Cⁱ/ や、/P/ と対立する /P:/ を一々設定していくと、音素数を徒らに増やしてしまう。

よって、本稿では、合理性を損なわない範囲で経済性に配慮し、音素を設定した。以下、本稿の音韻解釈のうち、説明を要すると思われるものを開示する。

2.6.1 子音の口蓋性

非口蓋化子音 [C] と口蓋化子音 [Cⁱ] は、次のように偏って分布している。

- (34) [C]: [Cu Ce Co Ca]
 [Cⁱ]: [Cⁱu Cⁱu Cⁱe Cⁱo Cⁱa]

(注) 下線: 稀少

分布 (34) で注目される点は次のとおり。

- (35) a. [Ci] は存在せず, [Cⁱ] との対立も確認できない。
 b. [C^e] はほとんど存在せず (ex. [kandze] (??) ‘便所’, [ma:ze:] (??) ‘邪魔’), [Ce] とは対立していない。

(35) のとおり, [C] と [Cⁱ] は, 非前舌母音 [u, o, a] の直前では対立しているが, 前舌母音 [i, e] の直前ではそうではない。そのため, [Cⁱ] の [Cⁱ] と [Ce] の [C] は, /C/ とも /CX/ とも解釈できる。

小川 (2012) の収録語句を見る限り, [Cⁱ] は [C^u, C^e, C^o, C^a] のいずれより圧倒的に (=十数倍から数十倍) 多い⁷。また, (35)b のとおり, [C^e] は2例しかなく, [C^u, C^o, C^a] のいずれより圧倒的に少ない。したがって, [Cⁱ, C^e] の [Cⁱ] と [C^u, C^o, C^a] の [Cⁱ] は音韻的に区別するべきだろう。

以上の分布を踏まえて, 分布 (34) を次のように解釈する。

- (36) /C/: /Ci Cu Ce Co Ca /
 [Cu Ce Co Ca]
 [Cⁱ C^e]
 /Cj/: / Cju Cjo Cja /
 [C^u C^o C^a]

- (37) a. 書き 書く 書けば 書こう 書かず
 [kakⁱ kaku kakeba kako: kakaziŋ]
 /kaki kaku kakeba kakoo kakaziN/
 b. 尻 雑炊 便所 初剃り 砂利
 [dzigo dzu:ci: kandze haḏdzoⁱ dzai]
 /zigo zjuusii kanze haQzjoi zjai /

(36) のとおり, [Cⁱ, C^e] の [Cⁱ] は /C/ と解釈する。(i) /Ci/ が [Cⁱ] で, (ii) /Ce/ が一部の語において [C^e] で実現するのは, 前舌母音 [i, e] が口蓋化を引き起こすためだと考えればよい。

この解釈は音素配列規則の面でも整合的である。なぜなら, この解釈によれば, [ju, jo, ja] の [j]⁸ および [C^u, C^o, C^a] の [ʰ] にあたる /j/ は, /i, e/ の直前には現れない音素ということになるからである。

2.6.2 長母音

長母音 [V:] は /V_iV_i/ と解釈する。

2.5 節で確認したとおり, A 型語の主頂点は, 長母音ないし二重母音の後半にあたる V₂ では実現しないので, この制約を有する長音音素 /R/ (記号は何でもよい) を設定して, /VR/ のように表記する手もある。しかし, A 型語の主頂点に関する制約は, 本稿のように音節構造に基づいても定義で

⁷ 小川 (2012) の収録語句は仮名表記であるため, (i) イ段の仮名を [Cⁱ] とし, (ii) 「〇ユ」, 「〇エ」, 「〇ヨ」, 「〇ヤ」をそれぞれ [C^u], [C^e], [C^o], [C^a] とし解釈した。

⁸ [je] の [j] は子音としての弁別性に欠けるので, /j/ とはしない (cf. 2.6.5 節)。

きるので、経済性の面から /r/ は設定しない。

この解釈によれば、[V:] も [V_iV_i] も /V_iV_i/ となる。しかし、里方言では [V:] と [V_iV_i] が対立していないので、[V:] を /V_iV_i/ と解釈しても、問題はない。

2.6.3 長阻害音と阻害音連続

(38) [p: s: t: k: p̄b t̄dz t̄d k̄g]

a. /Qp Qs Qt Qk Qb Qz Qd Qg /

b. /pp ss tt kk pb tz td kg /

長阻害音 [p:, s:, t:, k:] と阻害音連続 [p̄b, t̄dz, t̄d, k̄g] は、(38)a のように促音音素 /Q/ を立てて、/QC[-son]/ と解釈する。

これらを (38)b のように /C[-son]₁C[-son]₂/ (以下、下付きのアラビア数字で順序を示す) と解釈するのは、次の点で望ましくない。

- (39) a. /C[-son]₁/ は 1 モーラ相当の鼻音音素と対立しているが、/C[-son]₂/ はそうではない。たとえば、/p₁p₂/ の /p₁/ は 1 モーラでありながら、/p₂/ はそうではない。
- b. /C[-son]₁/ は、調音点の等しい鼻音音素としか対立していない (= 弁別性に乏しい)。たとえば、/p₁p₂/ の /p₁/ は /m/ としか対立していない。
- c. /C[-son]₂/ は、調音点の等しい阻害音音素としか対立していない (= 弁別性に乏しい)。たとえば、/p₁p₂/ の /p₂/ は /b/ としか対立していない。

2.6.4 鼻音

2.6.4.1 長閉鎖鼻音

長閉鎖鼻音 [m:], [n:] は、撥音音素 /N/ を立てて、/Nm/, /Nn/ と解釈する (ただし、語頭の場合は /NN/。cf. 2.3.2 節)。これらを /m₁m₂/, /n₁n₂/ と解釈するのは、次の点で望ましくない。

- (40) a. 音節構造を踏まえると、/m₁/, /n₁/ は 1 モーラに相当するが、/m₂/, /n₂/ はそうではない。
- b. /m₁/ も /n₁/ も、どのような子音音素とも対立していない (= 弁別性に欠ける)。
- c. /m₂/ も /n₂/ も、調音点の等しい阻害音音素としか対立していない (= 弁別性に乏しい)。たとえば、(i) /m₁m₂/ の /m₂/ は /p, b/ としか、(ii) /n₁n₂/ の /n₂/ は /r, s, c, z, t, d/ としか対立していない。

2.6.4.2 鼻音-子音

[mp], [ŋg], [ɪr], [ij] などの鼻音-子音も、撥音音素 /N/ を立てて、/NC/ と解釈する。これらを /P[+nas]C/ (e.g. /mp/, /ŋg/, /ɪr/, /ij/, etc.) と解釈するのは、次の点で望ましくない。

- (41) a. /C[+nas]/ は、最大でも、調音点の等しい 1 個の無声阻害音音素としか対立していない (= 弁別性に乏しい)。たとえば、(i) /ij/ の /i/ はどのような子音音素とも、(ii) /mp/ の /m/ は /p/ としか対立していない。
- b. /C/ は、調音点の等しい子音音素としか対立していない (= 弁別性に乏しい)。たと

えば、/mp/ の /p/ は /m, b/ としか対立していない。

c. /w, k, g/ の前にのみ現れる /ŋ/ を設定しなければならない。

2.6.5 渡り音

渡り音 [j], [w] の分布は話者ごとに大きく異なり、すべての話者が使うのは [ju, jo, ja] と [wa] に限られる。そうした中、話者 01, 02, 07 は、次のような語で [je], [we], [wo] を使う。

(42) [jereba] (B) ‘選れば’, [jeda] (A) ‘枝’, [je:bu] (A) ‘海老’

(43) 笛 声 伊代 佳代

Ø: [φu_je ko_je ijo kajo]

DAT: [φu_je: ko_je: i_je: ka_je:]

TOP: [φuja: koja: ija: kaja:]

(44) 魚 塩 言う 買う

Ø: [i_wo ei_wo] COND: [ju_weba ka_weba]

DAT: [i_we: ei_we:] VOL: [ju_wo: ka_wo:]

TOP: [iwa: eiwa:] NEG.CTX: [juwaziŋ kawaziŋ]

(42)–(44) の太字部は [j] ないし [w] を伴っているが、[je], [we] は [e] との、[wo] は [o] との対立を欠いている (= [je] vs. [e]; [we] vs. [e]; [wo] vs. [o] はいずれも確認できない)。つまり、(42)–(44) の太字部の [j], [w] は弁別性に欠けるのである。

そこで、まず、[wo] は /o/ と解釈する。[je] と [we] は次のように対立しているので、一方を /e/, 他方を /Ce/ と解釈する。

(45) [i_je:] (B) [ka_je:] (B)

‘伊代に’ ‘佳代に’

vs. vs.

[i_we:] (B) [ka_we:] (B)

‘魚に’ ‘川に’

(42) のとおり、[je] は語頭でも確認できるが、[we] はそうではない。よって、前者を /e/, 後者を /we/ と解釈する。

2.6.6 「行」の音韻解釈

日本語音韻論の伝統的概念たる「行」(moraiic rows) は、里方言の音素を設定する際も有益である。

表 4 名詞の音形 (音声表記)

	1					2				
	時	灰汁	池	ここ	イカ	海	ゴム	豆	芋	山
Ø	[to:k ^j i	a:ku	ike	koko	ika	o:m ^j i	gomu	mame	imo	jama]
DAT	[to:k ^j i:	a:k ^j i:	ike:	koke:	ik ^j a:	o:m ^j i:	gom ^j i:	mame:	ime:	jam ^j a:
TOP	[to:k ^j a:	a:ka:	ik ^j a:	koka:	ika:	o:m ^j a:	goma:	mam ^j a:	ima:	jama:

	3					4				
	日	豆腐	屁	カラムシ	枯葉	道	夏	盾	人	肩
Ø	[ç <i>i</i>	to:φu	he	karaho	kareha	m ^j i:tc <i>i</i>	na:tsu	tate	φuto	kata]
DAT	[ç <i>i</i> :	to:φ ^j i:	he:	karahe:	kareça:	m ^j i:tc <i>i</i> :	na:tc <i>i</i> :	tate:	φute:	kat ^j a:
	[to:ç <i>i</i> :								kata:
TOP	[ç <i>a</i> :	to:φa:	ça:	karaha:	kareha:	m ^j i:tc <i>a</i> :	na:tsa:	tat ^j a:	φuta:	kata:
	[ç <i>i</i> wa	to:ha:	hewa				na:tc <i>a</i> :	tatç <i>a</i> :		

[表 4: 1-2] のとおり、ハ行音 *hV* ないシタ行音 *tV* 以外で終わる名詞から与格名詞と被主題化名詞を作る際、その末尾音節は次のように交替する。

(46) *hV*, *tV* 以外で終わる名詞

Ø: [C^ji Cu Ce Co Ca]

DAT: [C^ji: C^ji: Ce: Ce: C^ja:] (太字: [+h]; 斜体: [+l]; 下線: the others)

TOP: [C^ja: Ca: C^ja: Ca: Ca:] (太: [+f]; 斜: [-f])

行に基づいて [CV] を整理すると、両名詞の末尾音節は大抵 (46) のように交替する。ところが、[表 4: 3-4] のとおり、*hV* 終わらないし *tV* 終わりの名詞から両名詞を作る際は、必ずしもそうではない。

(47) *hV* 終わりの名詞

Ø: [ç*i* φu he ho ha]

DAT: [ç*i*: φ^ji: he: he: ç*a*:] (太: [+h, +f]; 無: [+h, -f]; 斜: [+l]; 線: the others)

TOP: [ç*a*: φa: ç*a*: ha: ha:] (太: [+f]; 無: [-f, +h]; 斜: [-f, -h])

(48) *tV* 終わりの名詞

Ø: [tei tsu te to ta]

DAT: [tei: tei: te: te: t^ja:] (太: [+h]; 斜: [+l]; 線: the others)

TOP: [tea: tea: t^ja: ta: ta:] (無: [+h]; 太: [-h, +f]; 斜: [-h, -f])

末尾音節が (46) のように交替するのは (48) の与格だけである。このことから、ハ行子音 *h* およ

びタ行子音 *t* は、他の子音とは異なる方法で音韻解釈する必要があると考えられる。以下、それぞれの音韻解釈を示す。

2.6.6.1 ハ行子音 *h*

[表 4: 3] のとおり、ハ行音 *hV* には [çi, φu, he, ho, ha] が対応している。2.6.1 節で述べたとおり、[çi] の [ç] は [h] が口蓋化したものと考えられるので、音韻解釈の便宜上、[h] に含める。さらに、[φu] と対立する [hu] が存在しないので、[çi, φu, he, ho, ha] の [h] と [φ] は相補分布しているように映る。

また、[h] も [φ] も複合により連濁すると、次のように [b] に交替する。

- (49) a. [ha:ei] (B) ‘箸’: [çiba:ei] (B) ‘火+箸’
 b. [φune] (B) ‘船’: [kog^hibune] (B) ‘漕ぎ舟’

以上 2 点により、[h] と [φ] を条件異音とする摩擦音音素 /h/ を設定する。そして、[h] と [ç] が次のように対立していることから、2.6.1 節の要領で [ç] (前述のとおり、[çi] の [ç] は除く) は /hj/ と解釈する。

- (50) /hoo↓si/ [ho:↓ei] (A) ‘星’

vs.

- /hjoo↓si/ [ço:↓ei] (A) ‘拍子, はずみ’

これに続いて考えるべきことは、*hui*, *hua* (e.g. *huita* ‘拭いた; 引いた’, *toohu=a* ‘豆腐は’, etc.) に対応する、話者 02, 03, 07 の [φ^hi:] に対する解釈である。なぜなら、彼らは次のように [φ^hi:] を [çi:] と弁別しているからである。

- (51) CTX PST
 吹く: [φ^hi:te φ^hi:ta]
 引く: [çi:te çi:ta]

[φ^hi:] の [φ] のために音素を新設するのは非経済的なので、これは /hw/ と解釈する。

[φa:] も僅かに存在するが、この [φ] は [h] と [ç] と対立していない。しかし、[h] ないし [ç] の自由変異でも条件異音でもないようであるから、前述の [φ] と同じく /hw/ と解釈する。

なお、すべての話者が (47), (51) のように発音するわけではない。次のように [φ^hi:], [φa:] を失いつつある/失っている話者もいる。

- (52) a. 話者 18, 19 は *hui* に [çi:] を対応させている (= [φ^hi:] を失っている)。
 e.g. *huita*: [çi:ta] (A) ‘拭いた; 引いた’; *toohu=i*: [to:çi:] (A) ‘豆腐に’
 b. 話者 01 は *hui* に [çi:] を、*hua* に [φa:, ha:] を対応させている (= [φ^hi:] を失い、[φa:] を失いつつある)
 e.g. *toohu=a*: [to:φa:, to:ha:] (A) ‘豆腐は’

h との音対応とその音韻解釈を整理すると、次のとおり。

- (53)
- | | 02, 03, 07 | 18, 19 | 01 |
|------------|------------|-----------|-----------|
| <i>hi:</i> | [çi] /hi/ | [çi] /hi/ | [çi] /hi/ |
| <i>hu:</i> | [φu] /hu/ | [φu] /hu/ | [φu] /hu/ |

<i>he, ho, ha:</i>	[hV] /hV/	[hV] /hV/	[hV] /hV/
<i>hju, hjo, hja:</i>	[çV] /hjV/	[çV] /hjV/	[çV] /hjV/
<i>hia, hea, hai:</i>	[ça:] /hjaa/	[ça:] /hjaa/	[ça:] /hjaa/
<i>hui:</i>	[φ ⁱ i:] /hwii/	[çi:] /hii/	[çi:] /hii/
<i>hua:</i>	[φα:] /hwaa/	[φα:] /hwaa/	[φα:] /hwaa/
			[ha:] /haa/

なお、/w/ に先行する子音音素は /h/ しかなく、/w/ に続く母音音素は /i/ と /a/ に限られる (cf. 2.2.3, 2.3.1 節)。また、渡り音の /w/ は語根 (root) には見られず、次のように、2 形態素以上からなる語・句にしか現れない。

- (54) a. **hwiite hwiita** b. **toohwii toohwaa**
 // huk-te huk-ta // // toohu=ⁿi toohu=^wa //
 拭いて 拭いた (A) 豆腐に 豆腐は (A)
 吹いて 吹いた (B)

このように、渡り音の /w/ は、伝統的にも限られた範囲にしか分布していない。その上、(52) のとおり、現在は失われつつある。

[to:φu, to:φⁱi:, to:φα:] (A) ‘豆腐, 豆腐に, 豆腐は’ の関係を踏まえて、これらを /tooφu, tooφii, tooφaa/ のように解釈するのも、1 つの手ではある。ただし、日本語諸変種の音韻体系まで考慮すれば、[φⁱi:, φα:] の衰退は、音素の合流: /φ, h/ > /h/ と解釈するより、唇音性の消失: /Cw/ > /C/ と解釈する方がよい。なぜなら、[k^w, g^w] (いわゆる合拗音)⁹ の唇音性の消失も、後者の一環として捉えられるからである。

よって、本稿では前述のように /toohu, toohwii, toohwaa/ とする。

2.6.6.2 タ行子音 t

前掲 [表 4: 4] (p. 26) のとおり、タ行音 tV には [tei, tsu, te, to, ta] が対応している。2.6.1 節で述べたとおり、[tei] の [te] は [ts] が口蓋化したものと考えられるので、音韻解釈の便宜上、[ts] に含める。さらに、[tsu] と対立する [tu] が存在しないので、[tei, tsu, te, to, ta] の [t] と [ts] は相補分布しているように映る。

ただし、[t], [ts] が複合により連濁すると、閉鎖音 [t] と破擦音 [ts] の違いが見えてくる。前者は (55) のように閉鎖音 [d] と交替するが、後者は (56) のように摩擦音 [z]¹⁰ に交替するのである。

- (55) a. [to:ra] (A) ‘俵’: [koido:ra] (B) ‘肥料用の俵’
 b. [tana] (A) ‘棚’: [teadana] (B) ‘食器棚 (茶+棚)’
 (56) a. [tsukeba] (B) ‘付けば’: [kⁱizukeba] (B) ‘気付けば’
 b. [tei] (A) ‘血’: [hanazi] (A) ‘鼻血’

[ts] は、連濁時に [z] に交替するという点で、次に挙げる [s] に通じる。

⁹ 甕島方言の中では、上甕島上甕町の瀬上方言で耳にする。

¹⁰ 鼻音に続く時は破擦音 [ɬ] に交替すると考えられるが、その例は得ていない。

- (57) a. [sao] (A) ‘竿’: [atezao] (A) ‘泳いでいるキビナゴの量を調べるための棹’
 b. [cioke] (B) ‘塩気, 煮しめ’: [teazioke] (B) ‘お茶うけ’

以上により, [ts] で実現する /c/ と, [t] で実現する /t/ を設定する。そして, [t] と [te] が次のように対立していることから, 2.6.1 節の要領で [te] (前述のとおり, [tei] の [te] は除く) は /cj/ と解釈する¹¹。

- (58) /ta↑ni/ [ta↑ni] (B) ‘谷’

vs.

- /cja↑ni/ [tea↑ni] (B) ‘茶に’

これに続いて考えるべきことは, *tea, tai* (e.g. *tate=a* ‘盾に’, *hitai* ‘額’, etc.) に対応する, 話者 02, 07, 18 の [tʰa:] に対する解釈である。なぜなら, 彼らは, 次のように [tʰa] を [ta], [tea] と弁別しているからである。

- (59) [katʰa:] (B) ‘肩に; 勝てば’ vs. [kata:] (B) ‘肩は’ vs. [katea:] (B) ‘勝ちは’

[tʰa:] の [tʰ] のために音素を新設するのは非経済的なので, これは /tj/ と解釈する。

なお, すべての話者が (48), (59) のように発音するわけではない。次のように [tʰa] を失いつつある/失っている (あるいは, 元々持っていない) 話者もいる。

- (60) a. 話者 03 は *tai* に [ta:] を, *tua* に [tsa:, tea:] を対応させている。

e.g. *hitai* : [ɸʉta:] (A) ‘額’; *kata=i* : [kata:] (B) ‘肩に’

natu=a : [na:tsa:, na:tea:] (A) ‘夏は’

- b. 話者 01 は *tea* に [tea:] を, *tai* に [ta:] を対応させている。

e.g. *tate=a* : [tatea:] (B) ‘盾に’

hitai : [ɸʉta:] (A) ‘額’; *kata=i* : [kata:] (B) ‘肩に’

- c. 話者 19 は *tea* に [tea:] を, *tai* に [tea:] を対応させている。

e.g. *tatea* : [tatea:] (B) ‘盾に’

hitai : [ɸʉtea:] (A) ‘額’; *asita=i* : [aitea:] (B) ‘明日に’

t との音対応とその音韻解釈を整理すると, 次のとおり。

(61)	02, 07, 18	03	01	19
<i>ti:</i>	[tei] /ci/	[tei] /ci/	[tei] /ci/	[tei] /ci/
<i>tu:</i>	[tsu] /cu/	[tsu] /cu/	[tsu] /cu/	[tsu] /cu/
<i>te, to, ta:</i>	[tV] /tV/	[tV] /tV/	[tV] /tV/	[tV] /tV/
<i>tia:</i>	[tea:] /cjaa/	[tea:] /cjaa/	[tea:] /cjaa/	[tea:] /cjaa/
<i>tua:</i>	[tea:] /cjaa/	[tsa:] /caa/	[tea:] /cjaa/	[tea:] /cjaa/
		[tea:] /cjaa/		
<i>tea:</i>	[tʰa:] /tjaa/	[tʰa:] /tjaa/	[tea:] /cjaa/	[tea:] /cjaa/
<i>tai:</i>	[tʰa:] /tjaa/	[ta:] /taa/	[ta:] /taa/	[tea:] /cjaa/

¹¹ 次のとおり, [tsu] と [teu] は一部の語において自由変異である。

(II) [tsu:tsu:, teu:teu:] (B) ‘蝶’, [tsu:, teu:] (A) ‘QUOT.NPST’

第3章 音韻規則

里方言は形態的透明性の低い語を数多く有している。たとえば、与格名詞 (DAT) および被主題化名詞 (TOP) の形態的透明性は、次のように他のそれより低い。

(1)	時	灰汁	池	ここ	イカ
Ø:	tookii	aaku	ike	koko	ika
GEN:	tookii=N	aaku=N	ike=N	koko=N	ika=N
NOM:	tookii=ga	aaku=ga	ike=ga	koko=ga	ika=ga
ACC:	tookii=ba	aaku=ba	ike=ba	koko=ba	ika=ba
DAT:	<i>tookii</i>	<i>aakii</i>	<i>ikee</i>	<i>kokee</i>	<i>ikjaa</i>
TOP:	<i>tookjaa</i>	<i>aakaa</i>	<i>ikjaa</i>	<i>kokaa</i>	<i>ikaa</i>

また、次のように、/w/ ないし /r/ で終わる動詞語幹 (juw-, tor-) の形態的透明性は、他の子音で終わる動詞語幹のそれより低い (以下、「X 終わりの動詞語幹」は「X 語幹」と呼ぶ)。

(2)	読む	貸す	書く	言う	取る
NEG.CTX:	jam-aziN	kas-aziN	kak-aziN	juw-aziN	tor-aziN
CAUS:	jom-ase-	kas-ase-	kak-ase-	juw-ase-	tor-ase-
COND:	jom-eba	kas-eba	kak-eba	juw-eba	tor-eba
POL:	jom-imos-	kas-imos-	kak-imos-	juumos-	toimos-
NPST:	jom-u	kas-u	kak-u	juu	toi
PROH:	jom-una	kas-una	kak-una	juuna	toNna

形態的透明性の低い語は、特定の音韻規則に従って産出されていると考えられる。そこで、本節では、形態的透明性の低い語を産出する過程において、どのような音韻規則が適用されているかを明らかにする。

3.1 連濁

複合語幹を作る際、後項語幹の初頭音素 /s, c/, /t/, /k/, /h/ (= /C[-son, -voi]/) は、次のようにそれぞれ /z/, /d/, /g/, /b/ (= /C[-son, +voi]/) に交替する。つまり、現代日本語一般と同じく、里方言でも連濁が起こる。

(3) C[-son, -voi] → C[+voi] / +_

a. C[*COR*, -son, -voi, +cont] → C[+voi]

e.g. saō (A) ‘棹, 竿’: ate+zao (A) ‘泳いでいるキビナゴの量を調べるための棹 (当て+棹)’, mi+zao (A) ‘水棹’

cjoka (B) ‘土瓶’: cja+zjoka (B) ‘急須 (茶+土瓶)’, kana+zjoka (A) ‘鉄瓶 (金+土瓶)’

cjawaN (B) ‘茶碗’: cja+zjawaN (B) ‘湯呑み (茶+茶碗)’

b. C[COR, -son, -voi, -cont] → C[+voi]

e.g. toora (A) ‘俵’: moomi+doora (B) ‘粃用の俵’, koi+doora (B) ‘肥料用の俵’

tana (A) ‘棚’: cja+dana (B) ‘食器棚 (茶+棚)’

c. C[DOR, -son, -voi, -cont] → C[+voi]

e.g. ke (A) ‘毛’: mjaa+ge (B) ‘眉毛’

kjaa (B) ‘貝’: kawa+gjaa (B) ‘蜆 (川+貝)’

d. C[PHA, -son, -voi, +cont] → C[LAB, +voi, -cont]

e.g. hune (B) ‘船’: kogi+bune (A) ‘漕ぎ船’

haasi (B) ‘箸’: hi+baasi (B) ‘火箸’

ただし、交替 (3) は必ずしも起こるわけではない。里方言でもライマンの法則は適用されるようで、後項語幹が第2音節以降に濁音音素を含む場合は連濁しない。

(4) a. cubo (A) ‘壺’: hoke+cubo (??) ‘煙突 (煙+壺)’

sode (A) ‘袖’: naga+sode (B) ‘振り袖 (長い+袖)’

b. taNgo (B) ‘担い桶’: io+taNgo (A) ‘魚用の担い桶’, mizu+taNgo (A) ‘水用の担い桶’, meesi+taNgo (B) ‘飯用の担い桶’, koi+taNgo (B) ‘肥料用の担い桶’

togo (B) ‘籠’: io+togo (A) ‘魚用の籠’, sio+togo (B) ‘塩用の籠’, sjoi+togo (A) ‘醤油用の籠’

c. kuzii (B) ‘いじくり’: iso+kuzii (A) ‘貝掘り用の鉤 (磯+いじくり)’

kaagi (B) ‘鉤’: zizjaa+kaagi (B) ‘自在鉤’

よって、交替規則 (3) の条件を次のように改める。

(5) C[-voi, -son] → C[+voi] / +_X ∧ (X ≠ C[+voi, -son])¹²

X ≠ Y: X は Y を含まない

3.2 半濁音化

複合語幹を作る際、後項語幹の初頭音素 /h/ は /p/ にも替わる (cf. (3)d)。つまり、現代日本語一般と同じく、里方言でも半濁音化が起こる。

(6) h → p / Q+_

e.g. ni+huN (??) ‘二分’: iq+puN (A) ‘一分’

¹² ただし、次の例は (5) に反する。

(III) haazi (A) ‘蜂’: kuma+baaci (B) ‘スズメバチ (熊+蜂)’

(III) は、共時的・局所的に見れば、当方言の連濁における唯一の例外として処理されるに過ぎない。しかし、通時的・広域的に見れば、日本語の連濁のみならず、複合語幹とその語彙化に対する定説を左右しうる例かもしれない。

ni+hjaa (??) ‘二杯’: iQ+pjaa (A) ‘一杯’
 hogasu (B) ‘穴を空ける’: cuQ+pogasu (??) ‘貫通させる’
 hai (A) ‘張り’: cuQ+pai (??) ‘突っ張り’

3.3 連結音

表 5 子音語幹動詞と母音語幹動詞

	1. 読む	2. 書く	3. 取る	4. 上げる	5. 混ぜる
a. CAUS	jom-ase-	kak-ase-	tor-ase-	age-sase-	maze-sase-
b. COND	jom-eba	kak-eba	tor-eba	agu-reba	mazu-reba
c. NEG.CTX	jom-aziN	kak-aziN	tor-aziN	age-ziN	maze-ziN
d. POL	jom-imos-	kak-imos-	toimos-	age-mos-	maze-mos-
e. NPST	jom-u	kak-u	toi	agu-i	mazu-i
f. PROH	jom-una	kak-una	toNna	agu-Nna	mazu-Nna

[表 5: a–d] のとおり，子音語幹 [1–2] には母音始まりの /-ase-/、/-eba/、/-aziN/、/-imos-/ が，母音語幹 [4–5] には子音始まりの /-sase-/、/-reba/、/-ziN/、/-mos-/ が付く。つまり，動詞接尾辞は，子音語幹と母音語幹のどちらに付くかによって，次のように初頭の 1 音素分だけ音形を異にするのである。

- (7) CAUS COND NEG.CTX POL
 [1–2]: -ase- -eba -aziN -imos-
 [4–5]: -sase- -reba -ziN -mos-

そこで，清瀬 (1971) に倣い，(i) /-sase-/、/-reba/ の /s/、/r/ を「連結子音」，(ii) /-aziN/、/-imos-/ の /a/、/i/ を「連結母音」とし，[a–d] の形成過程を次のように考える。

- (8) [1] [2] [4] [5]
 [a] jom-^sase- kak-^sase- age-^sase- maze-^sase-
 ↓ 形態音韻規則 (9)a
 jomase- kakase- agesase- mazesase-
 [b] jom-^reba kak-^reba agu-^reba mazu-^reba
 ↓ 形態音韻規則 (9)a
 jomeba kakeba agureba mazureba
 [c] jom-^aziN kak-^aziN age-^aziN maze-^aziN
 ↓ 形態音韻規則 (9)b
 jomaziN kakaziN ageziN mazeziN
 [d] jom-ⁱmos- kak-ⁱmos- age-ⁱmos- maze-ⁱmos-
 ↓ 形態音韻規則 (9)b
 jomimos- kakimos- agemos- mazemos-

- (9) a. $C \rightarrow C / V_ _$ b. $V \rightarrow V / C_ _$
 $\rightarrow \emptyset / EW$ $\rightarrow \emptyset / EW$

3.4 //rV[+h]// の交替規則

子音動詞 [表 5: 3d-f, 4e-f, 5e-f] の形成過程を探るにあたっては、次の音対応が参考になる。

- (10) 鰯 鳥 針 キセル 樽
 一般: *buri tori hari kiseru taru*
 里: [*bui toi hai k'ise: tai*]

(10) のとおり、*ri* および *ru* には [i] が対応する。このことと子音動詞 [表 5: 1d-f, 2d-f] の構造を踏まえて、[3d-f, 4e-f, 5e-f] の形成過程を次のように定める。

- (11) [3d] [3e] [4e] [5e] [3f] [4f] [5f]
 tor-ⁱmos- tor-^ru agu-^ru mazu-^ru tor-^runa agu-^runa mazu-^runa
 ↓ 形態音韻規則 (9)
 tor-imos- tor-u agu-ru mazu-ru tor-una agu-runna mazu-runna
 ↓ 交替規則 (12)
 toimos- toi agui mazui toNna agunna mazunna

- (12) 二次的 //rV[+h]// の交替規則

$rV[+h] \rightarrow N / _ =na$ 以外の $_n$ ¹³
 $\rightarrow i / EW$

形態的透明性の低い動詞接尾辞 [表 5: d-f] の基底形は、それぞれ //ⁱmos-//, //^ru//, //^runa// とする。

なお、交替規則 (12) は、あらゆる //rV[+h]// に適用されるわけではない。なぜなら、次のような語が存在するからである。

- (13) a. **ringo** (??) ‘リンゴ’, **muriQto** (??) ‘あまりにも’, **mugurii** (??) ‘一生懸命’, **baarii** (??) ‘おはじき’, **orireba**, **orisaseta**, **orirareta** (B) ‘下りれば, 下りさせた, 下りられた’
 b. **jurui** (??) ‘囲炉裏’, **cjaarui** (A) ‘落ちる’, **magurui** (B) ‘迷う’, **jaru** (??) ‘感心’, **saaru** (B) ‘猿’, **hootaru** (??) ‘蛍’, **aruu** ‘洗う’, **tooruu** (??) ‘母屋’

交替規則 (12) は、(13) の太字部のような一次的音素配列には適用されない。

¹³ 次のように、//=na// の直前の二次的 //rV[+h]// は /i/ で実現する。

- (IV) NPST=Q
 取る 上げる 来る
 tor-^ru=na agu-^ru=na ku-^ru=na
 ↓ 形態音韻規則 (9)
 tor-u=na agu-ru=na ku-ru=na
 ↓ 交替規則 (12)
 toina aguina kuina

3.5 名詞基幹句の形成過程

表 6 名詞基幹句

	1. 棒秤り	2. 瘡蓋	3. 樋	4. 棒	5. 貝	6. 本							
a. Ø	cikii	cuu	tee	boo	kjaa	hoN							
b. DAT	cikii=ni	cuu=ni	tee=ni	boo=ni	kjaa=ni	hoN=ni							
c. TOP	cikii=wa	cuu=wa	tee=wa	boo=wa	kjaa=wa	hoN=na							
d. DAT.TOP	cikii=njaa	cuu=njaa	tee=njaa	boo=njaa	kjaa=njaa	hoN=njaa							
	7. 時	8. 灰汁	9. 池	10. ここ	11. イカ	12. ブリ	13. 鳥	14. 樽					
a. tooki	aaku	ike	koko	ika	bui	toi	tai						
b. tookii	aakii	ikee	kokee	ikjaa	buuii	tooii	taaii						
c. tookjaa	aakaa	ikjaa	kokaa	ikaa	buujaa	toojaa	taajaa						
					buiwa	toiwa	taiwa						
d. tookiinjaa	aakiinjaa	ikeenjaa	kokeenjaa	ikjaanjaa	buuiinjaa	tooinjaa	taaiinjaa						

(注) 被主題化与格名詞 [d] は、基本的には /—CV_iV_injaa/ で実現する。ただし、自由変異に富むので (e.g. koke(e)na (A) ‘ここには’, Ndogenja (A) ‘我が家には’), その正確な実現形は /—CV_i(V_i)n(j)a(a)/ である。

[表 6] のとおり, [b] 与格助詞 (DAT), [c] 主題助詞 (TOP), [d] 与格.主題 (DAT.TOP) 助詞は, [1–5] V_iV_i 終わりの名詞に付く時はそれぞれ /=ni/, /=wa/, /=njaa/ で, [6] N 終わりの名詞に付く時はそれぞれ /=ni/, /=na/, /=njaa/ で実現する。しかし, 非 V_iV_i 終わりの名詞 [7–14] に付く時は, 名詞の末尾音節と融合する。

3.5.1 与格名詞の形成過程

3.5.1.1 基底形と交替規則

与格名詞 [表 6: 7–14b] の形成過程を探る際は, 次の音対応が参考になる。

- (14) 杭 吹いて 時計 樋 漕いで 貝 炊いて
 一般: *kui huite tokei toi koide kai taite*
 里: [k^hi: φ^hi:te toke: te: ke:de k^ha: t^ha:te]

(14) のとおり, *ui, ei, oi, ai* にはそれぞれ [i:], [e:], [e:], [ja:] が対応する。このことを踏まえて, 与格名詞 [表 6: 7–14b] の形成過程を次のように定める。

- (15) [7b] [8b] [9b] [10b] [11b]
 tooki=ⁿi aaku=ⁿi ike=ⁿi koko=ⁿi ika=ⁿi
 ↓ 形態音韻規則 (17)

tookii aaku=i ike=i koko=i ika=i

↓ 交替規則 (18)

aakii ikee kokee ikjaa

(16) [12b] [13b] [14b]

buui="i tooi="i taai="i

↓ 形態音韻規則 (17)

buui=i tooi=i taai=i

↓ 交替規則 (18)

buuii tooii taaii

(17) 与格助詞の連結子音 //ⁿ// の形態音韻規則

ⁿ → n / V_iV_i=_

→ ∅ / EW

(18) 二次的 //Vi// の交替規則

V_i → ii / V[+h, -f]

→ ee / V[-h, -l]

→ jaa / V[+l]

与格助詞の基底形は //="i// で、/V_iV_i/ で終わる名詞には //="ni// が、それ以外の名詞には //="i// が付く。

交替規則 (18) によれば、被主題化与格名詞は次のように分析できる (以下、名詞の音形は末尾音節の母音音素で代表させる)¹⁴。

(19) V_iV_i 非 V_iV_i

V_iV_i=ⁱnjaa i/u=ⁱnjaa e/o=ⁱnjaa a=ⁱnjaa

↓ 形態音韻規則 (20)

V_iV_injaa i/u=injaa e/o=injaa a=injaa

↓ 交替規則 (18)

iinjaaa eenjaa jaanjaa

(20) 与格.主題助詞の連結母音 //ⁱ// の形態音韻規則

ⁱ → ∅ / V_iV_i=_

→ i / EW

3.5.1.2 交替規則 (18) の制約

交替規則 (18) は、すべての //Vi// に適用されるわけではない。なぜなら、次のような語が存在するからである。

¹⁴ 次のように形成過程こそ複雑になるが、非 /V_iV_i/ 終わりの名詞から被主題化与格名詞を作る時は、与格助詞 //="i// を2個付けるとも分析できる。

(V) koko="i="i="a ‘ここ=DAT=DAT=TOP’ → kokoi="i="a → kokee="i="a → kokee="ni="a → kokee="ni="a → kokeenjaa

- (21) a. **ui** (B) ‘瓜’, **bui** (A) ‘鱒’, **kui** (B) ‘栗’¹⁵, **jurui** (B) ‘囲炉裏’, **juika** (A) ‘イルカ’
 b. **eiei** [jeije] (B) ‘戦争ごっこ’
 c. **oigo** (A) ‘甥’, **toi** (A) ‘鳥’, **tokoi** (A) ‘所’, **koibeeso** (B) ‘農作業のゴミを入れる籠’, **goi** (A) ‘水の沈殿物’, **nigagoi** (B) ‘苦瓜’, **noi** (B) ‘海苔’
 d. **aita** (B) ‘明日’, **aibaziN** (B) ‘歩かず’, **kaiki** (A) ‘緑肥’, **haibjoo** (A) ‘結核’, **mai** (A) ‘鞠’, **nai** (B) ‘苗’, **jaiki** (B) ‘屋敷’

交替規則 (18) は, (15) の太字部のような二次的音素配列には適用されるが, (21) の太字部のような一次的音素配列には適用されない。

この点を踏まえて, 交替規則 (18) に「二次的」という条件を加えた。(15) の太字部と (21) の太字部はこの条件で区別される。

3.5.2 被主題化名詞の形成過程

被主題化名詞 [表 6: 7-14c] の形成過程を探るにあたっては, 次のことが参考になる。

表 7 日本語一般と里方言の複合語の音対応

	頼み上げる	伸び上がる	起き上がる	起こし上げる	持ち上げる
一般	<i>tanomia geru</i>	<i>nobia garu</i>	<i>okia garu</i>	<i>oko sia geru</i>	<i>motia geru</i>
里	[<i>tanomⁱ:agui</i>]	[<i>nobⁱ:gai</i>]	[<i>okⁱ:gai</i>]	[<i>oko^ç:agui</i>]	[<i>mott^çagui</i>]

	付き合い	打ち雨	禿げ上がる	寄せ上がる	寄せ上げる	お見せして
一般	<i>tukia i</i>	<i>utia me</i>	<i>hagea garu</i>	<i>jo sea garu</i>	<i>jo sea geru</i>	<i>mi sea gete</i>
里	[<i>tsukⁱ:a</i>]	[<i>ult^çame</i>]	[<i>hagⁱ:gai</i>]	[<i>joc^a:gai</i>]	[<i>joc^a:gui</i>]	[<i>mⁱç:agete</i>]

(注) 打ち雨: 家の中に降り込んでくるほどの強い雨

[表 7] のとおり, *Cia* および *Cea* には [Cⁱ:a] ないし [Cⁱ:a] が対応する。このことを踏まえて, 被主題化名詞 [表 6: 7-14c] の形成過程を次のように定める。

- (22) [7c] [8c] [9c] [10c] [11c]
 tooki=^wa aaku=^wa ike=^wa koko=^wa ika=^wa
 ↓ 形態音韻規則 (24)
 tooki=a aaku=a ike=a koko=a ika=a
 ↓ 交替規則 (25)
 tookjaa aakaa ikjaa kokaa ikaa

¹⁵ 話者 18, 25 は, 「栗は甌島では取れないから, [kui] ではなく, [kurⁱ] と言う」と回答した。ただし, 当該形式に対する話者の「馴染み度」が回答にどう影響するかは, 突き止めていない。

(23) [12c] [13c] [14c]

buui=^wa tooi=^wa taai=^wa

↓ 形態音韻規則 (24)

buui=a tooi=a taai=a

↓ 交替規則 (25)

buujaa toojaa taajaa

(24) 主題助詞の連結音 //^w// の形態音韻規則

^w → w / V_iV_i=_

→ Ø / EW

(25) 二次的 //Va// の交替規則

Va → jaa / V[+f]

→ aa / the others

主題助詞の基底形は //=^wa// で、/V_iV_i/ 終わりの名詞には /=wa/ が、非 /V_iV_i/ 終わりの名詞には /=a/ が付く。なお、/N/ 終わりの名詞に付く /=na/ は、次のような連声形式と見做す。

(26) N=^wa → N=a → N=na (cf. 2.2.1 節: (17)a)

3.6 短母音化

/CV[+h]/ で終わる名詞の次末尾音節は、次のようにしばしば /(C)(G)V_iV_i/ となっている¹⁶。

- (27) a. mii.mi, miN.mi (B) ‘耳’, ii.si (A) ‘石’, guu.mi (B) ‘グミ (果物)’, kuu.ci (A) ‘口’, uu.si (A) ‘牛’, muu.gi (B) ‘麦’, na.suu.bi (B) ‘茄子’, mee.si (B) ‘飯’, see.zi ‘網染め’, nee.gi (B) ‘葱’, oo.bi (B) ‘帯’, oo.mi (B) ‘海’, joo.ki (A) ‘斧’, kaa.mi (A) ‘紙’, aa.si (B) ‘足’, kaa.ki (A) ‘柿’ or (B) ‘牡蠣’
- b. uu.su (B) ‘臼’, ee.bu (A) ‘海老’, hee.bu (B) ‘蛇’, sa.see.bu (??) ‘シャシャンボ (樹木)’, se.mee.zu (A) ‘ハッタケ (茸)’, kaa.bu (A) ‘黴’, maa.cu (B) ‘松’, kaa.su (A) ‘谷川などにいる何かの幼虫’, ka.raa.su (A) ‘カラス’, to.maa.su (A) ‘鼬’, hi.raa.su (A) ‘ヒラス (魚)’

(27) の次末尾音節の /V_iV_i/ は、次のように /V/ と対立しているので、音韻的に有意である (無作為に長く発音しているわけではない)。

- (28) a. u.su (B) ka.ki (B) ma.cu (B) ka.su (A)
口笛 書き 待つ 貸す

¹⁶ 次の例から分かるように、必ずしもそうではない。

- (VI) a. si.bi (B) ‘キハダマグロの子ども’, ka.bu.si (A) ‘撒き餌’, ho.do.ki (B) ‘稼ぎ’, ja.u.ci (B) ‘親戚 (家+内)’, ta.jo.mi (B) ‘田ならし’, cu(Q).go.mi (A) ‘十五夜に二人で行なう勝負事 (蔓を絡ませ合って、水平状に抑え込んだ方を勝者とする)’, daQ.ko.ki, i.ne.ko.gi (B) ‘脱穀’, o.de.i.si (??) ‘網の端の重り石’, mi.cu.da.si (??) ‘下水溜め’, o.to.gjaa.na.si (??) ‘カタクチイワシ (顎+無し)’
- b. mi.zu (A) ‘水’, o.ja.ku (B) ‘親戚’, toN.ko.cu (A) ‘フジツボ’, dee.so.ku (??) ‘松の薪’, i.so.gi.ku (A) ‘薩摩野菊 (磯+菊)’, keN.ci.ma.su (B) ‘キビナゴなどを計る一升枡 (検知+升)’

- vs. vs. vs. vs.
 b. **uu.su** (B) **kaa.ki** (B) **maa.cu**(B) **kaa.su** (A)
 白 牡蠣 松 幼虫

語 (27), 28)b の次末尾音節の V_iV_i は, (29)a のように格助詞を取る時も保たれるが, (29)b のように複合語幹前項になる時は V_i で実現する。

- (29) a. **aa.si=N#djaa** (B#B) ‘足の#台’, **aa.si=N#hara** (B#B) ‘足の#腹’
 b. **a.si+kuubi** (B) ‘足首’, **a.si+guse** (B) ‘足癖’

語 (29)b の類例を次に挙げる。

- (30) a. **kuu.ci** (A) **mee.si** (B) **too.ki** (B) **kaa.mi** (A)
 口 飯 時 紙
 b. **ku.ci+huge** (A) **me.si+gjaa** (B) **to.ki+dooki** (B) **kaN.basaami** (A)
 口髭 杓文字 時々 紙鋏
 (飯+權)

以上を踏まえて, (29)b, 30)b の形成過程を次のように定める。

- (31) **aasi+kuubi kuuci+huge meesi+kjaa tooki+tooki**

↓ 交替規則 (5), (32)

asikuubi kucihuge mesigjaa tokidooki

- (32) $V_iV_i \rightarrow V_i / _ .CV[+h]^+$

次のように / V_i / で終わる名詞も, / V_iV_i / を避けるために短母音化していると考えられる。

- (33) 鰯 胡瓜 鳥 樽
 Ø: **bui kjui toi tai**
 NOM: **bui.ga kjui.ga toi.ga tai.ga**
 ACC: **bui.ba kjui.ba toi.ba tai.ba**
 DAT: **buu.ii kjuu.ii too.ii taa.ii**
 TOP: **buu.jaa kjuu.jaa too.jaa taa.jaa**

よって, 交替規則 (32) の条件を次のように改める。

- (34) $V_iV_i \rightarrow V_i / _ \{ .CV[+h]^+ / i. \}$ (cf. (32))

- (35) **buui tooi taai buui.ga tooi.ga taai.ga buui.ba tooi.ba taai.ba**

↓ 交替規則 (34)

bui toi tai bui.ga toi.ga tai.ga bui.ba toi.ba tai.ba

なお, 理由は定かではないが, 次のように短母音化しないこともある。

- (36) a. **ee.bu** (A) **moo.ci** (A) **ka.raa.su** (A) **too.jaa** (A)
 海老 餅 カラス 鳥は

- b. ee.bu+gane (A) iso+moo.ci+jaki (A) ka.raa.su+heebu (B) niwa+tooi (A)
 伊勢海老 初磯¹⁷ ヤマカガシ 鶏
 (海老+蟹) (磯餅焼き) (カラス+蛇)

3.7 形容詞語根語¹⁸の形成過程

表 8 形容詞語根語

	1. 嬉しい	2. 美しい	3. 酸い	4. 重い	5. 悪い	6. 温い
a. NL	uresjuu	azirosjuu	sjuu	obuu	waruu	nukuu
b. NPST	ureQka	aziroika	siika	obuka	waika	nuQka
c. PST	ureQkaQta	aziroikaQta	siikaQta	obukaQta	waikaQta	nuQkaQta
d. COND	ureQkareba	aziroikareba	siikareba	obukareba	waikareba	nuQkareba

	7. 多い	8. 意地悪い	9. 見目よい	10. 痛い	11. 高い	12. 長い
a. uu	odoo	mizjoo	itoo	takoo	nagoo	
b. uuka	odoka	mizjooka	itaka	taQka	naNka	
c. uukaQta	odokaQta	mizjookaQta	itakaQta	taQkaQta	naNkaQta	
d. uukareba	odokareba	mizjookareba	itakareba	taQkareba	naNkareba	

[表 8] では形容詞語根の境界が不明瞭なので、形容詞語根語の例を次に追加する。

- (37) a. **uresi-gar-eba** (B) ‘嬉しい-がる-COND’
 b. **uu+kaze** (B) ‘台風 (多い+風)’, **uu+goto** (B) ‘大事 (多い+事)’, **uu+dore** (B) ‘大漁 (多い+取れ)’, etc.
 c. **waru+moN** (B) ‘悪者’
 d. **nuku-me-te** (B) ‘暖かい-TR-CTX’
 e. **mizjoo-gar-eba** (A) ‘見目よい-がる-COND’
 f. **taka+ziri** (B) ‘高瀬貝 (高い+先端)’
 g. **naga+sode** (A) ‘振り袖 (長い+袖)’, **naga+io** (A) ‘ダツ (長い+魚)’¹⁹

(37) を踏まえて、[表 8] の形容詞語根の基底形を次のように考える。

- (38) [1] uresi-, [2] azirosi-, [3] sii-, [4] obu-, [5] waru-, [6] nuku-, [7] uu-, [8] odo-, [9] mizjoo-, [10]

¹⁷ 旧暦 1 月 16 日に焼いた餅を海に投げて、豊漁と安全を祈る行事 (小川 2012)。

¹⁸ 「X 詞語根語」は X 詞語根から派生する語を指すが、X 詞とは限らない。たとえば、形容詞語根 ita- ‘痛い’ から派生した [v [VSTM [AR ita]-kar]-eba] ‘痛い-VLZ-NPST’ は形容詞ではなく、動詞である。

¹⁹ ダツ目トビウオ亜目ダツ科ダツ属の魚。体型は細長く、体長は 1m を超える。

ita-, [11] taka-, [12] naga-

3.7.1 準体形容詞の形成過程

[表 8: a] のうち, [1-7a] からは //u// が, [8-12a] からは //o// が形容詞準体接尾辞 (NL) として抽出できそうである。しかし, [10-12a] から /-o/ を除いた /ito-/、/tako-/、/nago-/ は, (38) で推定した [10-12] の形容詞語根の基底形 //ita-//、//taka-//、//naga-// と異なる。

そこで, 形容詞語根と準体形容詞が次のように音対応している点に注目する。

- (39) [1-3] [4-7] [8-12]
Ø: i(i)- u(u)- o(o)-, a-
NL: juu# uu# oo#

(39) を踏まえて, /juu/, /oo/ の基底形をそれぞれ //V[+f]-u//, //V[-f, -h]-u// と推定する。この分析によれば, 準体形容詞 [表 8: a] の形成過程は次のようになる。

- (40) [1a] [2a] [4a] [5a] [8a] [10a] [11a]
uresi-u azirosi-u obu-u waru-u odo-u ita-u taka-u
↓ 交替規則 (42)
uresjuu azirosjuu obuu waruu odoo itoo takoo

- (41) [3a] [6a] [8a]
sii-u uu-u mizjoo-u
↓ 交替規則 (42)
sjuu uu mizjoo

- (42) 二次的 //V_i(V_i)u// の交替規則
V_i(V_i)u → juu / V[+f]
→ oo / V[-f, -h]

ただし, //jo-u// ‘いい-NL’ は /joo/ ではなく, 例外的に /juu/ で実現する。他の甕島方言でも同様であることを踏まえると, 二次的 //V_i(V_i)u// は, かつては次のように交替していたのかもしれない。

- (43) 二次的 //V_i(V_i)u// の交替規則
V_i(V_i)u → juu / V[+f]
→ oo / V[+l]
→ uu / EW

3.7.2 /k/ 始まりの接尾辞を含む形容詞の形成過程

[表 8: b-d] のとおり, 形容詞語根 [1-2, 5-6, 11-12] の末尾音節は, /k/ 始まりの接尾辞を取る際にモーラ数を保ちつつ弱化し, 直前の音節に取り込まれる ([表 8] の例だけでは説得力に欠けるので, 類例を追加している)。

- (44) 嬉しい 美しい 眩しい 名残惜しい
u.re.si-ka a.zi.ro.si-ka hi.ga.ra.si-ka na.go.ro.si-ka
↓ 交替規則 (48)a

u.re'Q.ka a.zi.ro'i.ka hi.ga.ra'i.ka na.go.ro'i.ka

(注) ' : モーラの境界

(45) 悪い 軽い

wa.ru-ka ka.ru-ka

↓ 交替規則 (48)b

wa'i.ka ka'i.ka

(46) 温い 醜い 低い 横着な

nu.ku-ka mi.ni.ku-ka hu.ku-ka oo.cja.ku-ka

↓ 交替規則 (48)c

nu'Q.ka mi.ni'Q.ka hu'Q.ka oo.cja'Q.ka

(47) 高い 若い [12b] 小さい

ta.ka-ka wa.ka-ka na.ga-ka ko.ma.ka-ka

↓ 交替規則 (48)d

ta'Q.ka wa'Q.ka na'N.ka ko.ma'N.ka

(48) 形容詞語根末音節の交替規則

a. si → i / V[-f]_-k b. ru → i / C[DOR]a_-k
→ Q / EW

c. C[DOR]u → Q d. C[DOR]a → N / C[+nas]a_-k
→ Q / C[-nas]a_-k²⁰

3.8 //j, w, n, t(, d)// の交替規則

非単純語の内部では、(20)b, c, e, g (p. 19) に反する音素配列がしばしば生じる。その際は、交替規則 (54) に従って、音素配列違反を正す。

(49) TOP DAT
冬 カヨ 冬 カヨ
huju=^wa kajo=^wa huju=ⁱi kajo=ⁱi
↓ 形態音韻規則 (24) (p. 37)
huju=a kajo=a huju=i kajo=i
↓ 交替規則 (25)
hujaa kajaa hujuii kajee

²⁰ 交替規則 (48) の対象ないし条件に合わなければ、語幹末音節は次のとおり弱化しない。

(VII) a. //maN.ma.ru-ka// ‘まん丸い-NPST’ → maN.ma.ru.ka (A) (*maN.ma'i.ka)
//hu.ru-ka// ‘古い-NPST’ → hu.ru.ka (A) (*hu'i.ka) 《(48)b の条件に合わず》
b. //u.su-ka// ‘薄い-NPST’ → u.su.ka (A) (*u'Q.ka) 《(48)c の対象に合わず》
c. //ka.ta-ka// ‘固い-NPST’ → ka.ta.ka (A) (*ka'Q.ka) 《(48)d の対象に合わず》
d. //a.ka-ka// ‘赤い-NPST’ → a.ka.ka (A) (*a'Q.ka)
//ni.ga-ka// ‘苦い-NPST’ → ni.ga.ka (B) (*ni'N.ka) 《(48)d の条件に合わず》

↓ 交替規則 (54)a

huuii kae

(50) 使う

COND NEG.CTX NPST VOL

cukaw-^reba cukaw-^aziN cukaw-^ru cukaw-^au

↓ 形態音韻規則 (9) (p. 33)

cukaweba cukawaziN cukaw-u cukaw-au

↓ ↓交替規則 (42)

↓ cukaw-oo

↓ 交替規則 (54)b

cukau cukao

(51) NL 複合動詞語幹

使う 食う 言う 追う

cukaw-ⁱ∅ kuw-ⁱ∅ juw-ⁱ∅+curakas- uw-ⁱ∅+kake-

↓ 形態音韻規則 (9)

cukaw-i kuw-i juw-i+curakas- uw-i+kake-

↓ 交替規則 (54)b, (55)

cukai kuu juucurakas- uukake-

(52) 死ぬ

COND VOL NEG.CTX POL NPST

sin-^reba sin-^au sin-^aziN sin-ⁱmos- sin-^ru

↓ 形態音韻規則 (9), 交替規則 (42)

sineba sinoo sinaziN sin-imos- sin-u

↓ 交替規則 (54)c

sinimos siN

siNmos-

(53) 立つ

COND VOL NEG.CTX POL NPST

tat-^reba tat-^au tat-^aziN tat-ⁱmos- tat-^ru

↓ 形態音韻規則 (9), 交替規則 (42)

tateba tatoo tataziN tat-imos- tat-u

↓ 交替規則 (54)d

tacimos- tacu

(54) //j, w, n, t// の交替規則

a. j → ∅ / _V[+f] b. w → ∅ / u/o

c. nV[+h] → N d. t → c / _V[+h]

幹から派生した主格尊敬動詞語幹 (HON) にも見られる。

表 9 主格尊敬動詞語幹

	読む	死ぬ	飛ぶ	貸す	立つ	書く	漕ぐ	投げる
Ø	jom-	sin-	tob-	kas-	tat-	kak-	kog-	nage-
HON	joNmjar-	siNnjar-	toQbjar-	kaQsjar-	taQcjjar-	kaQkjar-	koQgjjar-	naNgjar-

交替規則 (61) を踏まえて、主格尊敬動詞語幹 [表 9] の形成過程を次のように定める。

(62) jom-ⁱjar- sin-ⁱjar- tob-ⁱjar- kas-ⁱjar- tat-ⁱjar- kak-ⁱjar- kog-ⁱjar- nage-ⁱjar-

↓ 形態音韻規則 (9)b (p. 33); 交替規則 (54)

jom-ijar- sin-ijar- tob-ijar- kas-ijar- tac-ijar- kak-ijar- kog-ijar- nage-jar-

↓ 交替規則 (61)²¹

joNmjar- siNnjar- toQbjar- kaQsjar- taQcjjar- kaQkjar- koQgjjar- naNgjar-

//gV[+f]a// が /Ngja/ でも実現することを踏まえると、かつての /g/ は鼻音性を有していたと考えられる。

なお、次のとおり、//ⁱjar-// が w-r 語幹に付く時は、交替規則 (12), (54)b, (55) が適用される。

(63) juw-ⁱjar- kaw-ⁱjar- tor-ⁱjar-

↓ 形態音韻規則 (9)

juw-ijar- kaw-ijar- tor-ijar-

↓ 交替規則 (12), (54)b, (55)

juujar- kaijar- toijar-

3.11 念押し動詞の形成過程

表 10 動詞

	1. 書く	2. 死ぬ	3. 取る	4. 上げる	5. 来る	6. よい
a. NEG.CTX	kak-aziN	sin-aziN	tor-aziN	age-ziN	ke-ziN	jo-kar-aziN
b. COND	kak-eba	sin-eba	tor-eba	agu-reba	ku-reba	jo-kar-eba
c. NPST	kak-u	siN	toi	agu-i	ku-i	jo-ka
d. NPST.念押し	kak-aa	sin-aa	tor-aa	agu-raa	ku-raa	jo-kaa
e. PST	kjaa-ta	siN-da	toQ-ta	age-ta	ki-ta	jo-kaQ-ta
f. PST.念押し	kjaa-taa	siN-daa	toQ-taa	age-taa	ki-taa	jo-kaQ-taa

²¹ 交替規則 (61) が適用される前の音形 (e.g. jom-ijar-, kak-ijar-, nage-jar-, etc.) で実現することもある。

[表 10: 1-5d] を見る限り、非過去・念押し (NPST.念押し) を表す動詞は //VSTM-^raa// (VSTM: 動詞語幹) からなるように映る。しかし、この分析による場合、[6d] 形容詞接尾辞 //kaa// ‘NPST.SFP’ と、[f] 動詞接尾辞 //taa// ‘PST.RMND’ も新たに設けなければならない。

交替規則 (12), 54c から見込まれる [2-5c] の基底形 //sin-^ru//, //tor-^ru//, //agu-^ru//, //ku-^ru// を踏まえて、[1-5c] : [1-5d] および [6c, 1-6f] : [6d, 1-6g] における末尾音節の音対応を示すと、次のようになる。

- (64) [1-5c] Cu [6c, 1-6f] Ca
 [1-5d] Caa [6d, 1-6g] Caa

音対応 (64) と交替規則 (25) (p. 37) を踏まえて、念押し動詞 [d, f] の形成過程を次のように考える。

- (65) kak-^ru=a sin-^ru=a tor-^ru=a agu-^ru=a age-ta=a ki-ta=a na-ka=a
 ↓ 形態音韻規則 (9) (p. 33)
 kak-u=a sin-u=a tor-u=a agu-ru=a age-ta=a ki-ta=a na-ka=a
 ↓ 交替規則 (25)
 kakaa sinaa toraa aguraa agetaa kitaa nakaa

3.12 子音語幹とそのテ形語幹

表 11 動詞語幹

	1. 読む	2. 立つ	3. 書く	4. 上げる	5. 混ぜる
a. NEG.CTX	jom-aziN	tat-aziN	kak-aziN	age-ziN	maze-ziN
b. POL	jom-imos-	tac-imos-	kak-imos-	age-mos-	maze-mos-
c. COND	jom-eba	tat-eba	kak-eba	agu-reba	mazu-reba
d. NPST	jom-u	tac-u	kak-u	agu-i	mazu-i
e. PST	<i>joo-da</i>	<i>taQ-ta</i>	<i>kjaa-ta</i>	age-ta	maze-ta
f. MED	<i>joo-de</i>	<i>taQ-te</i>	<i>kjaa-te</i>	age-te	maze-te

子音語幹は /t/ で始まり、連結母音を要求しない動詞接尾辞 (以下「テ形接尾辞」。//ⁱta-// ‘DES’ は連結母音 /i/ を要求するので、テ形接尾辞ではない) を取る時、[表 11: 斜体部] のような連声語幹 (以下「テ形語幹」) になる。そして、/m, b, n, g/ (= /C[+nas]/ ないし /C[-son, +voi]/) 終わりの (本節では、「/X/ 終わりの Y」を「XY」と略す) 動詞語幹は、後続するテ形接尾辞の初頭音素を /d/ に替える。

- (66) テ形接尾辞における初頭音素の交替
 t → d / { C[+nas] / C[-son, +voi] } _

3.12.1 m-b-w 語幹とそのテ形語幹

m-b-w 語幹とそのテ形語幹は [表 12] のように対応している。

表 12 m-b-w 語幹とそのテ形語幹

	包む	組む	遊ぶ	縮む	飛ぶ	読む	叫ぶ	買う
m-b-w	cucum-	kum-	asub-	cizim-	tob-	jom-	orab-	kaw-
テ形	cucuN-	kuN-	asuu-	cizum-	cizuu-	too-	joo-	oroo-
		kuu-						koo-

(注) /eC[LAB]/ の例は得られなかった。

[表 12] に示すテ形語幹末の音素配列は, (39) (p. 40) で確認した準体形容詞末のそれに酷似している。そこで, 準体形容詞の形成過程 (40) を踏まえて, m-b-w 語幹からテ形語幹を作る過程を次のように推定する。

(67) cucum- kum- kum- asub- cizum- cizim- tob- kaw-

↓ 交替規則 (68)

cucuN- kuN- kuu- asuu- cizuu- ciziu- tou- kau-

↓ 交替規則 (42)

cizuu- too- koo-

(68) テ形語幹形成過程における /m, b, w/ の交替

a. m → u, N / u_ b. b, w → u

→ u / EW

一部の um 語幹は, [+nas] で共通する n 語幹 (cf. 次節) のように語幹末を /N/ に交替させる。「一部の」と述べるとおり, um 語幹でありながら, (i) //cizum-// ‘縮む’ のように, 語幹末を常に /u/ に交替させるものや, (ii) //kum-// ‘組む’ のように, 語幹末を /u/ ないし /N/ に替えるものもある。

なお, //cizim- → ciziu-// ‘縮む’ が /cizjuu-// ではなく, /cizuu-// で実現する点はいささか気にはなる (cf. //uresi-u// ‘嬉しい-NL’ → /uresjuu/ 3.7.1 節)。ただし, ここでの /j/ の有無は弁別性に乏しいので, 問題視するほどでもないだろう。

3.12.2 n-r-t 語幹

n-r-t 語幹とそのテ形語幹は [表 13] のように対応している。

表 13 n-r-t 語幹とそのテ形語幹

	死ぬ	切る	塗る	打つ	蹴る	取る	持つ	割る	立つ
n-r-t	sin-	kir-	nur-	ut-	ker-	tor-	mot-	war-	tat-
テ形	siN-	kiQ-	nuQ-	uQ-	keQ-	toQ-	moQ-	waQ-	taQ-

[表 13] からわかるように、n-r-t 語幹は語幹末をモーラ子音に替えると、テ形語幹になる。

(69) sin- kir- ut- ker- tor- tat-

↓ 交替規則 (70)

siN- kiQ- uQ- keQ- toQ- taQ-

(70) テ形語幹形成過程における /n, r, t/ の交替

a. n → N

b. r, t → Q

3.12.3 s-k-g 語幹

s-k-g 語幹とそのテ形語幹は [表 14] のように対応している。

表 14 s-k-g 語幹とそのテ形語幹

	引く	剥く	泳ぐ	消す	漕ぐ	押す	退く	貸す	剥ぐ
s-k-g	hik-	muk-	ozug-	kes-	keg-	os-	dok-	kas-	hag-
					kog-				
テ形	hii-	mii-	ozii-	kee-	kee-	ee-	dee-	kjaa-	hjaa-

[表 14] に示すテ形語幹末の音素配列は、[表 6: 6-10b] (p. 34) で確認した与格名詞末のそれに酷似している。そこで、与格名詞の形成過程 (15) を踏まえて、s-k-g 語幹からテ形語幹を作る過程を次のように推定する。

(71) hik- ozug- kes- os- hag-

↓ 交替規則 (72)

hii- ozui- kei- ei- hai-

↓ 交替規則 (18)

- ozii- kee- ee- hjaa-

(72) テ形語幹形成過程における /s, k, g/ の交替

s, k, g → i

なお、//ik-// (A) ‘行(く)’ からテ形語幹を作る時だけは、語幹末を次のように交替させる (//ik-// の

テ形語幹が不規則形式になるのは、現代日本語では一般的)。

- (73) k → ∅ / _-ta: e.g. i-ta, i-tai, i-ta(i)ba
 → Q / _-to: e.g. iQ-tor-
 → ta / _-te: e.g. ita-te, ita-teNka

/ita-te/ の /ita-/ は出自不明である。現時点では itar- ‘至る’ に由来する補充形を推定しているが (e.g. *itar-ite > *itaQ-te > ita-te), 確証はない。

3.12.4 テ形語幹形成過程の交替規則に見る自然音類

テ形語幹形成過程の交替規則 (68), (70), (72) は、次のような自然音類の存在を示唆している。

- (74) [LAB] [+nas] [COR, -nas, -cont] the others
 m, b, w n(, m) r, t s, k, g
 ↓
 u N Q i

しかし、交替規則 (68), (70), (72) は子音語幹からテ形語幹を作る時にしか適用されない。したがって、(74) のような自然音類の存在を主張するのは、共時的には妥当ではない。

3.13 形態音素 //R//

次のように、指示名詞および一人称名詞 ore ‘俺’²²では、大半の re に /i/ が対応している。

- | | | | | | | |
|------|------|----------|----------|---------|----------|---------|
| (75) | | これ | それ | あれ | どれ | 俺 |
| a. | ∅: | koi | soi | ai | doi | oi |
| b. | GEN: | koi=no | soi=no | ai=no | doi=no | oi=no |
| c. | NOM: | koi=ga | soi=ga | ai=ga | doi=ga | oi=ga |
| d. | ACC: | koi=ba | soi=ba | ai=ba | doi=ba | oi=ba |
| e. | CMP: | koi=joka | soi=joka | ai=joka | doi=joka | oi=joka |
| f. | DAT: | koree | soree | aree | doree | oree |
| g. | TOP: | kor(j)aa | sor(j)aa | ar(j)aa | dor(j)aa | or(j)aa |

次のとおり、(75)f-g の太字部は、/re/ 終わりの名詞を基幹とする与格名詞および被主題化名詞の末尾音節とほぼ一致する。

- (76) DAT TOP
 マラリア 鱈 砂利 マラリア 鱈 砂利
 okore=**i** hire=**i** habare=**i** okore=**ʷa** hire=**ʷa** habare=**ʷa**

²² 次のとおり、里方言では、一般に「代名詞」と呼ばれる形式も名詞と同様に連体修飾できる。

- (VIII) [NP [ADNCL cume=N kata+goto si-ta] ai]
 爪=GEN 型+様子 する-PST あれ
 ‘爪の型のようなあれ’

このように、名詞とは別に代名詞を設定するのは形態統語的根拠に欠けるので、「指示代名詞」や「人称代名詞」といった用語は採用しない。

↓ 形態音韻規則 (17) (p. 35) ↓ 形態音韻規則 (24)

okore=i hire=i habare=i okore=a hire=a habare=a

↓ 交替規則 (18) ↓ 交替規則 (25)

okoree hiree habaree okorjaa hirjaa habarjaa

したがって、(75)a-e の太字部の /i/ は、/re/ のような音素配列に由来すると考えられる。そこで、(77) のように交替する形態音素 //R// を設けて、(75) の形成過程を (78) のように考える。

(77) $RV_i \rightarrow rV_i / _V$
 $\rightarrow i / EW$

(78) ko-Re=ⁿi ko-Re=^wa
↓ 形態音韻規則 (17), (24)

ko-Re ko-Re=no ko-Re=ba ko-Re=joka koRe=i koRe=a

↓ 交替規則 (77)

koi koino koiba kojoka ko-re=i ko-re=a

↓ 交替規則 (18)

koree kor(j)aa

3.14 まとめ

2.1 節の記述を見る限り、里方言の音素体系は日本語一般のそれと大差ない。ただし、本章で明らかにしたとおり、音韻規則は豊富で、とりわけ、次のように母音の舌の位置に基づくものが数多く認められる。

- (79) a. 舌の高低による音韻規則: (12), (18), (32), (54)d
b. 舌の前後による音韻規則: (25), (59), (42), (48), (54)a

第4章 言語形式の単位

4.1 言語形式の単位

本稿では形態統語的特徴に基づいて、里方言における言語形式 (linguistic form) を次のように分類する。

- (1) a. 語根 (root; R): 語幹の必須要素たる形態素。X 詞語根は単独で X 詞語幹に相当する。
- b. 語幹 (stem; STM): 語の必須要素で、1 個の語根と任意個 (=0 個以上) の派生接辞 (derivational affix) からなる ($\therefore STM \supset R$)。X 詞語幹の形態的特徴は X 詞語根のそれに準じる。
- c. 語 (word; W): 文の必須要素で、1 個の語幹と 0-1 個の屈折接尾辞 (inflectional suffix) からなる ($\therefore W \not\supset STM$)。
- d. 複合体 (complex; CX): 語に相当する形式で、1 個の語と 1 個以上の助詞からなる ($\therefore CX \not\supset W$)。X 詞複合体の形態統語的特徴は X 詞のそれに準じる。
- e. 句 (phrase; P): 語に相当する形式で、2 個以上の語からなる ($\therefore P \supset W$)。X 詞句の形態統語的特徴は X 詞のそれに準じる。
- f. 節 (clause; CL): 語に相当する形式で、1 個の動詞類と任意個の非動詞類からなる ($\therefore CL \supset V$)。X 詞節の形態統語的特徴は X 詞のそれに準じる。
- g. 文 (sentence; S): 話し手の意思を形式化したもので、1 個以上の語からなる。

次の (2) は語根、語幹、語の違いを、(3) は語、複合体、句、節、文の違いを示す例である。

- (2) a. [W=STM=R habare] b. [W=STM [Rko]-gaN]
砂利 こ-んな
 - c. [W=STM [Rbaa]-saN-doN] d. [W [STM [R kire]-kas-imos]-u]
婆-TTL-TTL 切れる-TR-POL-NPST
‘婆さん殿’ (荒木 1970: 108) ‘切らせます’
- (3) [S [CL [P [W soN] [CX [W sasara+dake]=kara]] [P [W de-te] [CX [W ki-ta]=dee]]]
その ささら+竹=ABL 出る-CTX 来る-PST=CSL
[W [W sasara+dake]=N] [CX [W iN]=te] [CX [W cuku-u]=i].
ささら+竹=GEN 犬=QUOT 付ける-HORT=SEF

‘そのささら竹から出てきたので、「ささら竹の犬」って名付けようよ。’

(里村教委 2003: 23)

4.2 語の構成要素

4.2.1 語根と接辞

次のように、語の構成要素は語根と接辞（大半は接尾辞）に分けられる。

(4) 動詞

	読む	書く	上げる	来る	する
NEG.CTX:	<i>jom-aziN</i>	<i>kak-aziN</i>	<i>age-ziN</i>	<i>ke-ziN</i>	<i>se-ziN</i>
IMP:	<i>jom-e</i>	<i>kak-e</i>	<i>age-e</i>	<i>ke-e</i>	<i>se-e</i>
POL:	<i>jom-imos-</i>	<i>kak-imos-</i>	<i>age-mos-</i>	<i>ki-mos-</i>	<i>si-mos-</i>
COND:	<i>jom-eba</i>	<i>kak-eba</i>	<i>agu-reba</i>	<i>ku-reba</i>	<i>su-reba</i>

(5) 形容詞

	酸い	安い	意地悪い	赤い
NPST:	<i>sii-ka</i>	<i>jasu-ka</i>	<i>odo-ka</i>	<i>aka-ka</i>
VLZ:	<i>sii-ka^r-</i>	<i>jasu-ka^r-</i>	<i>odo-ka^r-</i>	<i>aka-ka^r-</i>
NL:	<i>sjuu</i>	<i>jasuu</i>	<i>odoo</i>	<i>akoo</i>
	// <i>sii-u</i>	// <i>jasu-u</i>	// <i>odo-u</i>	// <i>aka-u</i> // (cf. 3.7.1 節: (42))

(6) 名詞

	1SG	2SG	大将	花子
Ø:	<i>wasi</i>	<i>omai</i>	<i>taisjoo</i>	<i>hanako</i>
TTL:	N/A	<i>omai-sama</i>	<i>taisjoo-doN</i>	<i>hanako-zjoo</i>
PL:	(<i>wasi=domo</i>)	<i>omai-taaci</i>	<i>taisjoo-taaci</i>	<i>hanako-taaci</i>
TTL-PL:	N/A	<i>omai-sama-taaci</i>	<i>taisjoo-doN-taaci</i>	<i>hanako-zjoo-taaci</i>

(4)–(6) の斜体部は語根で、残りは（連結音と）接尾辞である。(4)–(5) のとおり動詞語根と形容詞語根は拘束形態素で、単独では語になれない。そのため、これらを語に加工する時は接尾辞を付けたり、他の語幹と組み合わせたりしなければならない。

一方、名詞語根は自由形態素で、(6) のとおり単独でも語になれる。次の副詞語根も同様である。

(7) moo (B) ‘もう’, namana (A) ‘たくさん, とても’, guNbai (??) ‘一杯’, cubakai (??) ‘大体’, heesii (??) ‘いきなり’, manekjaa (??) ‘たまに’, gaQcui (??) ‘丁度’, naikjaa (??) ‘なぜ’, mohjaa (??) ‘もはや’, etc.

- (8) a. moo cjaare-Nmjaate=te b. namana obu-ka.
 もう 倒れる-NEG.INFR=QUOT とても 重い-NPST
 ‘「もう倒れまいて」って’ ‘とても重い’
- c. naikjaa iQsjoo+kenme se-N=jaQ-taro=te
 なぜ 一生+懸命 する-NEG=VLZ-PST.INFR=QUOT
 ‘「なぜ一生懸命しなかったろう」って’

名詞ないし副詞のように接辞を含まない語は存在するが、語根のない語は存在しない。したがって、語の必須要素は接辞ではなく、語根である。

4.2.2 派生接辞と語幹

次のように、派生接辞 ((9)a では *-kai-joQ-*, (9)b では *-meQk-jai-mos-*) を利用して、ある語類の語根から別類の語 (たとえば、名詞語根から動詞) を作ることもできる。

(9) a. *icu=mo* [V [VSTM [AR *samu*]-*kai-joQ*]-*ta*].

いつも 寒い-VLZ-IPFV-PST

‘いつも寒かった’

b. *asa-meQk-jai-moos-a=N*.

[V [VSTM [NR *asa*]-*mekⁱ-jarⁱ-mos^r*]-*u*]=*a=na*.

朝-INTR-HON-POL-NPST=SFP=Q

‘おはようございます’

(注) A: 形容詞; N: 名詞; R: 語根; STM: 語幹; V: 動詞

ただし、派生接辞は必ずしも語類を変えない。次のように、語類を保つ派生接辞も存在する。

(10) a. *naN=ba* *cukuQ-te* [V [VSTM [VR *asob*]-*imos*]-*u*]=*to=N?*

何=ACC 作る-CTX 遊ぶ-POL-NPST=NLZ=SFP

‘何を作って遊びますの?’

b. [N=NSTM [NR *donkjuu*]-*doN*]=*to* [N=NSTM [NR *tomaasu*]-*zjoo*]=*to* *josi=no*

蛙-TTL=COM

イタチ-TTL=COM 葦=GEN

ai tokoi=de asuu=de oQ-ta=soo=jai.

ある:NPST 所=LOC 遊ぶ-CTX いる-PST=SEEM=VLZ:NPST

‘蛙さんとイタチさんとが葦のあるところで遊んでたそうだ’ (里村教委 2003: 9)

(9), (10)a の *samu-kai-joQ-*, *asa-meQk-jai-mos-*, *asob-imos-* の形態統語的特徴は動詞語根のそれと、(10)b の *donkjuu-doN*, *tomaasu-zjoo* の形態統語的特徴は名詞語根のそれと一致する。これらのように、1 個の語根と任意個の派生接辞から成り、ある語類の語根に通じる形式を語幹と呼ぶ。

4.2.3 指示語語根

語根の中には、名詞、副詞、連体詞の語根を兼ねるものもある。これらは何らかのものを指示する点で共通しているので、本稿では「指示語語根」と呼ぶ (語類が特定できないので、「X 詞語根」とは呼ばない)。動詞語根および形容詞語根と同様に、指示語語根も拘束形態素で、次のように必ず接尾辞を取る。

(11)		コ	ソ	ア	ド
名詞	もの:	<i>ko-i</i>	<i>so-i</i>	<i>a-i</i>	<i>do-i</i>
		// <i>ko-Re</i>	<i>so-Re</i>	<i>a-Re</i>	<i>do-Re</i> // (cf. 3.13 節: (77))
	場所:	<i>ko-ko</i>	<i>so-ko</i>	<i>ai-ko</i>	<i>do-ko</i>
	方向:	<i>ko-Qci</i>	<i>so-Qci</i>	<i>a-Qci</i>	<i>do-Qci</i>
副詞	指定:	<i>koo</i>	<i>soo</i>	<i>aa</i>	<i>doo</i>
		// <i>ko-u</i>	<i>so-u</i>	<i>a-u</i>	<i>do-u</i> // (cf. 3.7.1 節: (42))
	性状:	<i>ko-gaN</i>	<i>so-gaN</i>	<i>a-gaN</i>	<i>do-gaN</i>

	<i>ko-gaNte</i>	<i>so-gaNte</i>	<i>a-gaNte</i>	<i>do-gaNte</i>
連体詞 指定:	<i>ko-N</i>	<i>so-N</i>	<i>a-N</i>	<i>do-N</i>
性状:	<i>ko-gaN</i>	<i>so-gaN</i>	<i>a-gaN</i>	<i>do-gaN</i>
	<i>ko-gaNta</i>	<i>so-gaNta</i>	<i>a-gaNta</i>	<i>do-gaNta</i>

(11) のとおり, -gaN は副詞語幹と連体詞語幹を作る。連体詞語幹を作る接尾辞としては -gaNmeeta もある。

4.2.4 複合語幹

日本語一般と同じく, 語幹同士を組み合わせ、複合語幹²³を作ることにもできる。複合語幹は, 前項語幹の修飾機能の有無 (しばしば連濁の有無に反映される) に基づいて, 次の 2 種類に分けられる。

- (12) a. *tee+cuku-i*
 [VSTM*ter-ⁱ∅*]+[VSTM*cuke*]-^ru
 照る-NL+付ける-NPST
 ‘照り付ける’
- b. *kaN+kii*
 [VSTM*kam-ⁱ∅*]+[VSTM*kir*]-^ru
 噛む-NL+切る-NPST
 ‘噛み切る’
- c. *huQ+pai*
 [VSTM*huk-ⁱ∅*]+[VSTM*har*]-^ru
 引き-NL+張る-NPST
 ‘引っ張る’
- d. *kak-ase-∅+cuzuke-moi-ta*
 [VSTM*kak-^sase-ⁱ∅*]+[VSTM*cuzuke-ⁱmos*]-ta
 書く-CAUS-NL+続ける-POL-PST
 ‘書かせ続けなさいました’
- (13) a. [ASTM*uu*]+[NSTM*kaze*]
 多い+風
 ‘台風’
- b. [NSTM*ise*]+[NSTM*koo*]-doN
 伊勢+講-TTL
 ‘伊勢神宮に関する行事’
- c. [NSTM*iso*]+[NSTM*mooci*]+[NSTM*jak-i*]
 磯+餅+焼く-NL
 ‘磯餅焼き (磯で焼いた餅を海に投げて, 豊漁を願う行事)’
- d. [NSTM*kucu*]+[ASTM*gai*]-ka
 靴+痒い-NPST
 ‘くすぐったい’
- e. [NSTM*sikaku*]+[VSTM*baQ-toQ*]-ta
 四角+張る-CONT-PST
 ‘威張ってた’
- f. [NSTM*koQpa*]+[NSTM*kii*]
 切り干し芋+切り
 ‘切り干し用の薩摩芋の薄切り’
- g. [NSTM*ato*]+[NSTM*kuci*]
 後+口
 ‘デザート’

²³ いわゆる複合語において複合している形式は, 語ではなく, 語幹である。なぜなら, 次のように自立性を欠く形式も複合するからである。

- (IX) a. 形容詞語幹: e.g. *uu+kaze* (B) ‘台風 (大き+風)’, *naga+sode* (A) ‘振り袖 (長+袖)’, *jowa+goroo* (B) ‘弱虫 (弱+駄目な奴)’, etc.
- b. 形式名詞語幹: e.g. *uu+goto* (B) ‘大事’, *jama+sama* ‘山の方 (山+様)’, *kata+goto* ‘型のよう (型+様子)’, *kizu+goroo* (A) ‘乱暴者 (傷+駄目な奴)’, *jowa+goroo* (B) ‘弱虫 (弱い+駄目な奴)’, etc.

複合語幹のうち, (12) のように動詞語幹だけからなるものを「複合動詞語幹」, (13) のように様々な種類の語幹からなるものを「混交複合語幹」と呼ぶ。

(12) のとおり, 子音語幹を複合動詞語幹の前項にする時は動詞準体接尾辞 $-i\emptyset$ を付ける。

(13) のような混交複合語幹は, 条件に適えば連濁するが (cf. 3.1 節), 次のように例外も多い。

- (14) a. nabe+suke (B) ‘鍋敷き (鍋+敷き?)’, kuNdai+saka (A) ‘下り坂 (下り+坂)’
 b. deN+cuma (??) ‘横庭 (殿+棲)’, jagura+cukui (??) ‘やぐら組み (矢倉+作り)’
 c. mai+toi (??) ‘鞠投げ (鞠+取り)’, mooci+toi (??) ‘お祝いの日の餅拾い (餅+取り)’,
 kazura+tate (??) ‘蔓を使う十五夜の行事 (蔓+立て)’²⁴
 d. take+moN+kii (??) ‘薪集め (炊き?+物+切り)’, kado+kuci (??) ‘門 (門+口)’ (cf.
 kido+guci (??) ‘門 (木戸+口)’), ta+kosirjaa (??) ‘田植えの準備 (田+拵え)’
 e. ii+hune (??) ‘旅の帰り祝い (入り+船)’, de+hune (B) ‘旅の出発祝い (出+船)’,
 ho+dare+huki (??) ‘旧暦 1 月 14 日に農作物の豊穰を祈る行事 (穂+垂れ+引き)’

4.3 語

(1)c で述べたとおり, 語とは句の必須要素で, 1 個の語幹と 0-1 個の屈折接尾辞 (inflectional suffix) からなる ($\therefore W \not\subset STM$)。本稿では, 形態と機能の両面から里方言の語を次の 5 種類に分ける。

(15)	屈折接尾辞	複合体を形成する助詞	用法 (cf. (32))
動詞 (V):	-e, - ⁱ u, - ⁱ \emptyset , -te, etc.	接続助詞, 終助詞	述部
形容詞 (A):	-ka, -u	接続助詞, 終助詞	述部
名詞 (N):	N/A	準体助詞, 格助詞, 副助詞	補部, 付加部
副詞 (ADV):	N/A	N/A	付加部
連体詞 (ADN):	-N, -gaN, -gaNta, -gaNmeeta	N/A	名詞句の構成要素

(注) 述部: 節の構成要素のうち, 事態を描写するもの; 補部: 節の構成要素のうち, 項を指示するもの; 付加部: 節の構成要素のうち, 述部を修飾するもの

(16) 動詞

- a. ir-aN koto su-Nna.
 要る-NEG:NPST 事 する-PROH
 ‘要らんことするな’
- b. kesa terebi mi-tor-eba
 今朝 テレビ 見る-CONT-COND FIL
 ‘今朝テレビを観てると’

²⁴ 「各部落毎に葛カズラを採り, 山で龍に見立てて, 50~100m 位の長さに束ね, 担ぎ手は束ねたカズラを担ぎ, 先頭では半裸の踊り手がそれぞれの顔や体に, 白粉や墨で独特のペインテングをして, キャー (ほら貝) を吹き, ガンガン (石油缶) をたたいて囃子, 独特の掛け声 (ブーブラブー, ガンガラガン, ヤー) と, 担ぎ手は (ヤーシンヨイ) と力強く声を出しながら村内を踊り, 練り歩く, 里村独特の祭り」(小川 2012: 11-12)

(17) 形容詞

- a. ima uci=Nnja kuuraa=wa na-ka.
今 うち=DAT:TOP クーラー=TOP ない-NPST
‘今うちにはクーラーはない。’
- b. [Cl namana [A obu-ka]] huto
とても 重い-NPST 人
‘とても重い人’

(18) 名詞

- a. kesa terebi mi-tor-eba
今朝 テレビ 見る-CONT-COND
‘今朝テレビを見てると’
- b. asita taroo=wa oosaka ita-tee
明日 太郎=TOP 大阪 行く-CTX
‘明日太郎は大阪行って’

(19) 副詞

- a. [Cl namana obu-ka] huto
とても 重い-NPST 人
‘とても重い人’
- b. zuuQto zibuN=no to ai=o rjoodo=o toi.
ずうっと 自分=GEN 土[地] あれ=ACC 領土=ACC 取る:NPST
‘ずうっと自分の土[地], あれを, 領土を取る。’

(20) 連体詞

- a. oi=ga aNsaN=ni [NP koN hoN]=ba kui-ta=doo.
1SG=NOM 兄さん=DAT この 本=ACC くれる-PST=SFP
‘私が兄さんにこの本をあげたよ。’
- b. [NP sogaNta toki]=jai-moi-ta=na.
そうした 時=VLZ-POL-PST=SFP
‘そんな時でしたな。’

4.4 複合体

(1)d で述べたとおり, 複合体とは語に相当する形式で, 1 個の語と 1 個以上の助詞からなる ($\therefore Cx \neq W$)。X 詞複合体の形態統語的特徴は X 詞のそれに準じる。里方言には, 動詞・形容詞 (以下「動詞類 (VBL)」) を基幹とする動詞複合体と, 名詞を基幹とする名詞複合体が存在する。

4.4.1 動詞複合体

次のように, 動詞類は接続助詞ないし終助詞を 1 個取って, 動詞複合体を形成する。

- (21) [vcx VBL={ CONJ / SFP }]

(注) CONJ: 接続助詞; SFP: 終助詞; VBL: 動詞類

- (22) a. CONJ: =gii ‘COND’, =dee ‘CSL’, =baQte(ka) ‘CONC’, =Qte ‘QUOT’
 b. SFP: =a, =ga, =do, =taa, =na ‘Q’ (文末にしか現れないものに限定。cf. 注 52 (p. 141))
- (23) a. oi=ga aNsaN=ni koN hoN=ba kui-ta=doo.
 1SG=NOM 兄さん=DAT この 本=ACC くれる-PST=SFP
 ‘私が兄さんにこの本をあげたよ。’
 b. asob-i=ga na-ka=baQte=naa.
 遊ぶ-NL=NOM ない-NPST=CONC=SFP
 ‘遊びがないけどねえ’

4.4.2 名詞複合体

名詞は助詞を1個以上取って、名詞複合体を形成する。[図3]のとおり、名詞複合体の構造は、動詞複合体のそれに比べると遥かに複雑である。

N	=to ‘NLZ’ =siko	=dake =baQkai	=kara =zui =made	=ba, =o				
				=to ‘COM’	= ⁱ njaa			
					= ⁿ i	=dake =baQkai	=jokjaa =sikjaa, = ^w a	
						=saka		=mo
					=de	=ga, =no		

図3 名詞複合体の構造

(注) 係助詞 =^wa ‘TOP’, =mo ‘も’ は連体詞以外の様々な種類の語に付くので、名詞複合体の構成要素ではないが、助詞同士の承接関係を示すために挙げる。なお、=dake ‘だけ’, =baQkai ‘ばかり’ は2箇所に出現しうる。

[図3]からわかるように、名詞複合体の構成要素たる助詞を承接関係だけで分類するのは、容易ではない。そこで、統語機能と意味も加味して、次のように分類する。

- (24) a. 準体助詞 (+名詞性): =to ‘NLZ’, =siko ‘限り’, =dake ‘だけ’, =baQkai ‘ばかり’
 b. 格助詞 (-名詞性, +格標示性): =kara ‘ABL’, =zui ‘TERM’, =made ‘TERM’, =to ‘COM’, =de ‘LOC, INST, ESS’, =ga ‘NOM, GEN’, =no ‘NOM, GEN’, =ba ‘ACC’, =o ‘ACC’, =ⁿi ‘DAT, LOC, ESS’, =ⁱnjaa ‘{ DAT / LOC / ESS }.TOP’
 c. 副助詞 (-名詞性, -格標示性): =saka ‘さえ’, =jokjaa ‘CMP’, =sikjaa ‘しか’
- (25) a. kawa=dake=ba ku-ta.
 皮=だけ=ACC 食う-PST
 ‘皮だけを食った。’

- b. *jakuiN-taci=dake=de=te ju-u hanas-i+a-i=o*
 役員-PL=だけ=LOC/INST=QUOT 言う-NPST 話す-NL+合う-NL=ACC
 ‘「役員たちだけで」という話を’
- c. *kuruma=de=saka ik-i=ga nar-aN.*
 車=INST=さえ 行く-NL=NOM なる-NEG:NPST
 ‘車でさえ行けない。’
- d. *huru+sato=no huto=baQkai(=to)=sikjaa cuk-i+a-i=ga na-ka.*
 古い+里=GEN 人=ばかり(=COM)=しか 付く-NL+合う-NL=NOM ない-NPST
 ‘故郷の人ばかり(と)しか付き合いがない’

4.5 句

(1)e で述べたとおり，句とは語に相当する形式で，2 個以上の語からなる ($\therefore P \supset W$)。X 詞句の形態統語的特徴は X 詞のそれに準じる。里方言には，動詞類を基幹とする動詞句と，名詞を基幹とする名詞句が存在する。

4.5.1 動詞句

次のように，動詞類は動詞類や名詞を 1 個以上取って，動詞句を形成する。

(26) $[_{VP}(\wedge N\#)VBL(\wedge\#VBL^+)]$

(注) (\wedge): 選択必須要素; X^+ : X は 1 個以上

(27) $[_{VP}N\#VBL]$

- a. *sigoto=N agaQ-ta=nara [_{VP}[N daijami] [_{VCX} su-u=i]].*
 仕事=NOM 上がる-PST=COND 飲み会 する-HORT=SFP
 ‘仕事が終わったら，飲もう。’

- b. $[_{Cl} omai=to [_{VP}[N keQkoN [_{V} su-u]]] goto ai.$
 2SG=COM 結婚 する-VOL 様子 ある:NPST
 ‘あなたと結婚したい。’

(28) $[_{VP}VBL\#VBL^+]$

- a. *soN sasara+dake=kara [_{VP}[V de-te] [_{VCX} ki-ta=dee]]*
 その ささら+竹=ABL 出る-CTX 来る-PST=CSL
 ‘そのささら竹から出てきたので’ (里村教委 2003: 23)
- b. *koN kairaNbaN=ba taroo-saN=ga e [_{VP}[V moQ-te] [V ita-te] [V kui-jar-e]].*
 この 回覧板=ACC 太郎-TTL=GEN 家:DAT 持つ-CTX 行く-CTX くれる-HON-IMP
 ‘この回覧板を太郎さんの家に持って行ってください。’
- c. *aree [_{VP}[V tanon-doQ-te] [Ajo-ka]]=jo.*
 あれ:DAT 頼む-CTX:おく-CTX いい-NPST=SFP
 ‘あの人に頼んどいたらいいよ。’

- d. karaimo=N [VP[A *hutoo*] [V *si-te*]]
 サツマイモ=NOM 大きい:NL する-CTX
 ‘サツマイモが大きくて’

(29) [VP N#VBL#VBL⁺]

- a. he=ba [VP[N *hui+guroo*] [V *si-te*] [V *mir-oo*]]=ka.
 屁=ACC 振る:NL+比べ する-CTX 見る-HORT=Q
 ‘屁を振り比べしてみようか。’ (里村教委 2003: 11)
- b. oi=ga aqko=ga sigoto=ba [VP[N *kasee*] [V *si-te*] [VCX *kuru-i=ga*]].
 1SG=NOM 2SG=GEN 仕事=ACC 加勢 する-CTX くれる-NPST=SFP
 ‘私がおまえの仕事を手伝ってやるよ。’

4.5.2 名詞句

次のように、名詞は連体詞を1個取って、主要部後置型の名詞句を形成する。

(30) [NP ADN#N]

- (31) a. [NP [ADN *koN*] [N *kuruma*]]=a oi=ga=to=ja na-ka=doo.
 この 車=TOP 1SG=GEN=NLZ=ESS ない-NPST=SFP
 ‘この車は私のではないよ。’
- b. oi=ga aNsaN=ni [NCX[NP [ADN *koN*] [N *hoN*]]=ba kui-ta=doo.
 1SG=NOM 兄さん=DAT この 本=ACC くれる-PST=SFP
 ‘私が兄さんにこの本をあげたよ。’
- c. [NCX[NP [ADN *sogaNta*] [N *hito*]]=kara tanom-are-te
 そうした 人=ABL 頼む-PASS-CTX
 ‘そんな人から頼まれて’

4.6 節

4.6.1 節の構造

(1)fで述べたとおり、節とは語に相当する形式で、1個の動詞類と任意個の非動詞類からなる (∴ CL ⊃ V)。X 詞節の形態統語的特徴は X 詞のそれに準じる。意味の面から節の構成要素を分類すると、次のようになる。

- (32) a. 述部: 事態を描写する語 (=動詞類)。
 b. 補部: 述部の項を指示する語 (=名詞)。
 c. 付加部: 述部を修飾する語 (=名詞および副詞)。

次のとおり、節の種類を決める形式 (=屈折接尾辞, 接続助詞, 終助詞) は動詞類の末尾に現れる。そして、複数の節からなる複文では、従属節の動詞類が主節のそれに先行する。

- (33) a. [S [AdvCL *sigoto=mo se-ziN*] ie=de ne-toi=doo].
 仕事=も する-NEG.CTX 家=LOC 寝る-CONT:NPST=SFP

‘仕事もせず，家で寝てるぞ。’

- b. [S [AdvCL *karada=a maa jo-ka=dee*] *saNka su-i=tai=taa*].
体=TOP まあ いい-NPST=CSL 参加 する-NPST=NLZ:VLZ:NPST=SFP

‘体は，まあ，いいから，参加するのよ。’

4.6.2 節の種類

節のうち，文に相当する節を「主節」，主節の構成要素となる節を「従属節」，その他の節を「並列節」とする。そして，従属節は形態，統語，意味の面から，(i) 名詞に相当する「名詞節」，(ii) 連体詞に相当する「連体節²⁵」，(iii) 副詞に相当する「副詞節」に分けられる。

(34) 主節

- a. [S *ir-aN koto su-Nna*].
要る-NEG:NPST 事 する-PROH
‘要らんことするな。’
- b. [S [AdvCL *isoi-de ku-rjaa*] *wasure-Ø+moN si-ta*].
急ぐ-CTX 来る-COND 忘れる-NL+もの する-PST
‘急いで来たら，忘れものをした。’

(35) 名詞節

- a. [NCX [NCL *too*]=ni] *hanare-te*
too-u
遠い-NL=DAT 離れる-CTX
‘遠くに離れて’ 《名詞複合体の構成要素》(荒木 1970: 113)
- b. [VP [NCL *sono omoci=mo cui-tari*] [V *si-te*] [V *kui-jar-ebaa*]]
その お餅=も つく-ILST する-CTX くれる-HON-COND
‘[役員さんが] そのお餅もついたりしてくだされば’ 《動詞句の構成要素》

(36) 副詞節

- a. [AdvCL *nicijoobi=i kagosima=de kaze hii-te*] *gecujoobjaa waga=no ie=de*
ne-toi.
日曜日=LOC 鹿児島=LOC 風邪 ひく-CTX 月曜日:TOP 自分=GEN 家=LOC
寝る-CONT:NPST
‘日曜日に鹿児島で風邪をひいて，月曜日は自分の家で寝ている。’
- b. [AdvCL *sigoto=mo se-ziN*] *ie=de ne-tor-aa*.
仕事=も する-NEG.CTX 家=LOC 寝る-CONT-NPST:SFP
‘仕事もせず，家で寝てるわ。’

²⁵ 形態統語的には連体詞に準じるため，「名詞節」，「副詞節」に合わせれば，「連体詞節」となる。ただし，本稿では用語の一般性を考慮して，「連体節」と呼ぶ。

(37) 連体節

- a. koNdo=wa [NP [ADNCL *nage-ta*] koQci]=ga
投げる-PST こっち=NOM
- b. [NP [ADNCL *cue cuku*] hito]=mo ki-ta=taa.
杖 つく:NPST 人=も 来る-PST=SFP
‘杖をつく人も来たよ’
- c. [NP [ADNCL *namana obu-ka*] huto]
とても 重い-NPST 人
‘とても重い人’

(38) 並列節

- a. [PARA *asita taroo=wa oosaka ita-tee*] ziroo=wa asaQte kjooto=ni
明日 太郎=TOP 大阪 行く-CTX 次郎=TOP 明後日 京都=DAT
ik-u=cjaroo.
行く-NPST=NLZ:VLZ:INFR
‘明日，太郎は大阪に行って，次郎は明後日京都に行くのだろう。’
- b. [PARA *sjoocjuu=mo ai=si*] biiru=mo ai=doo.
焼酎=も ある:NPST=PARA ビール=も ある:NPST=SFP
‘焼酎もあるし，ビールもあるよ。’

第5章 形態論

5.1 動詞

5.1.1 動詞語幹および動詞の構造

4.3 節: (15) で述べたとおり, 動詞とは屈折接尾辞 $-e$, $-i$, $-i\emptyset$, $-te$ などによって終わり, 事態を描写する語である。

- (1) a. neNgazjoo=ba [VP[V[VSTM=VR kak]-u]=doo].
 年賀状=ACC 書く-NPST=SFP
 ‘年賀状を書く’
- b. taroo-saN=wa sjumi=o [VP=V[VSTM[VR moQ]-toi-jai-mos]-u].
 太郎-TTL=TOP 趣味=ACC 持つ-CONT-HON-POL-NPST
 ‘Xさんは趣味を持っています’
- c. icu=mo [V[VSTM[ARsamu]-kai-joQ]-ta].
 いつも 寒い-VLZ-IPFV-PST
 ‘いつも寒かった’

(1) からわかるように, 動詞語幹および動詞の構造は次のように表現できる。

- (2) a. [VSTM VR]- or [VSTM STM-VLZ]- b. [V VSTM-INFL]
 (注) INFL: 屈折接尾辞

5.1.2 動詞語幹の自立性

子音語幹は拘束形態素で, 動詞になる時は必ず屈折接尾辞 (詳しくは 5.1.6 で述べる) を取る。一方, 母音語幹は, 次に挙げる準体動詞 (NL) を見ると, 自由形態素のようでもある (=age, ki, jom-ase と分析できる)。

- | | | | | | |
|----------|----------|---------------|------------------|-----------------|----------------------|
| (3) | 読む | 切れさす | 上げる | 来る | 読ませる |
| NL: | jom-i | kire-kas-i | age- \emptyset | ki- \emptyset | jom-ase- \emptyset |
| NEG.CTX: | jom-aziN | kire-kas-aziN | age-ziN | ke-ziN | jom-ase-ziN |
| IMP: | jom-e | kire-kas-e | age-e | ke-e | jom-ase-e |
| COND: | jom-eba | kire-kas-eba | agu-reba | ku-reba | jom-asu-reba |

ただし, 共通の形態音韻規則に基づいて加工される, 子音語幹と母音語幹が統語的特徴を異にするというのは, 不審である。よって, 準体動詞のうち, 子音語幹に由来する jom-i, kire-kas-i からは $-i$ を, 母音語幹に由来する age, ki, jom-ase からは $-\emptyset$ を抽出し, 準体接尾辞を $-i\emptyset$ ‘NL’ とする。

5.1.3 動詞の活用

5.1.3.1 動詞語幹および動詞接尾辞の音素配列

[表 15] のとおり, (i) 動詞語幹はその末尾音素に基づいて, 子音語幹, 母音語幹, 混交語幹に, (ii) 動詞接尾辞は, 要求する連結音と連声の有無に基づいて, 無連結音接尾辞, 連結子音接尾辞, 連結母音母音接尾辞, テ形接尾辞に分けられる。

表 15 動詞の活用 (記述の体系的性・経済性を重視)

		子音語幹		母音語幹		混交語幹	
		1. kak-	2. tor-	3. age-	4. ko-	5. mi ^r -	6. s ^e -
		書く	取る	上げる	来る	見る	する
無	-e IMP	kak-e	tor-e	age-e	ke-e	mir-e	se-e
	- ^a u VOL	kak-oo	tor-oo	aguu	kuu	mir-oo	suu
連結母音接尾辞	// kak-au	tor-au	age-u	ke-u	mir-au	se-u	//
	- ^a ziN NEG.CTX	kak-aziN	tor-aziN	age-ziN	ke-ziN	mir-aziN	se-ziN
	- ⁱ mos- POL	kak-imos-	toimos-	age-mos-	ki-mos-	mi-mos-	si-mos-
	//	tor-imos-					//
連結子音接尾辞	- ⁱ or- IPFV	kak-ior-	toior-	age-or-	ki-or-	mi-or-	si-or-
	//	tor-ior-					//
連結母音母音接尾辞	- ^s ase- CAUS	kak-ase-	tor-ase-	age-sase-	ko-rase- ¹	mi-sase-	s-ase-
	- ^r eba COND	kak-eba	tor-eba	agu-reba	ku-reba	mi-reba	su-reba
	- ^r u NPST	kak-u	toi	agu-i	ku-i	mi-i	su-i
	//	tor-u	agu-ru	ku-ru	mi-ru	su-ru	//
	- ^r una PROH	kak-una	toNna	agu-Nna	ku-Nna	mi-Nna	su-Nna
//	tor-una	agu-runna	ku-runna	mi-runna	su-runna	//	
テ形	-ta PST	kjaa-ta	toQ-ta	age-ta	ki-ta	mi-ta	si-ta
	-te CTX	kjaa-te	toQ-te	age-te	ki-te	mi-te	si-te

注 1 は誤植ではないことを意味する。

(i) 連結母音は子音語幹の, (ii) 連結子音は母音語幹の直後に現れる (cf. 清瀬 1971; 屋名池 1986; 1987; 1988)。

基本的に, 連結母音を取る動詞接尾辞は子音始まりで, 連結子音を取る動詞接尾辞は母音始まりである。ⁱor- と ^au が母音始まりの動詞接尾辞でありながら, 連結母音を取るのは, 次の通時的理

由によると考えられる。

- (4) a. ⁱ-or- は複合語幹後項 +or- ‘いる’ に;
 b. ^a-u は古代日本語の子音接尾辞 ^a-m- (推量の助動詞「む」) に由来するから。

そして、子音語幹はテ形接尾辞を取る場合に限り、テ形語幹 (5.1.4.1 節 (C) 参照) に交替する。

5.1.3.2 動詞接尾辞と連結音

意志 (VOL), 非過去 (NPST), 禁止 (PROH) を表す動詞を素直に分析すると、次のように (5) -oo ~ -u, (6) -u ~ -i, (7) -una ~ -Nna が抽出される。

- (5) jom-oo tor-oo agu-u ku-u su-u
 ↓
 jomoo toroo aguu kuu suu
- (6) jom-u tor-u agu-i ku-i su-i
 ↓ ↓ ru → i / _# ↓
 ↓ ↓ (cf. 3.4 節: (12)) ↓
 jomu toi agui kui sui
- (7) jom-una tor-una agu-Nna ku-Nna su-Nna
 ↓ ↓ ru → N / _n²⁶ ↓
 ↓ ↓ (cf. 3.4 節: (12)) ↓
 jomuna toNna agunna kuNna suNna

分析 (5)–(7) によれば、意志、非過去、禁止を表す動詞接尾辞の音形は次のとおり。

- (8) VOL NPST PROH
 子音語幹: -oo -u -una
 母音語幹: -u -i -Nna

この分析は一見妥当であるが、(5) -oo ~ -u, (6) -u ~ -i, (7) -una ~ -Nna はいずれも異形態同士の音形的類似性に欠けるので、基底形を定めるのが困難である。

記述の正確性だけを求めるのであれば、分析 (5)–(7) でも十分であるが、動詞の活用 (= 派生ないし屈折に相当する、動詞語幹への接尾辞添加) に関する形態音韻現象を解明するためには、もう少し踏み込んで考察しなければならない。

[表 15] を見返すとわかるように、動詞接尾辞の大半は連結音と共に ^{-C}V ないし ^{-V}(C)V と表現できる (e.g. ^{-r}eba ‘COND’, ^{-s}ase- ‘CAUS’, ^{-a}ziN ‘NEG.CTX’, ⁻ⁱor- ‘IPFV’, etc.)。そこで、この観点に基づいて、意志、非過去、禁止を表す動詞を次のように分析してみる。

- (9) jom-^au tor-^au age-^au ke-^au se-^au²⁷
 ↓ ^V → V / C_ (cf. 3.3 節: (9)b)

²⁶ 次のように、ru と n の間に形態素境界がある時は i で実現する (cf. 3.4 節: (12))。

- (X) a. //tor-^ru=na// ‘取る-NPST=Q’ → toina (*toNna)
 b. //agu-^ru=na// ‘上げる-NPST=Q’ → aguina (*aguNna)

²⁷ //agu-^au, ku-^au, su-^au// ではなく、//age-^au, ke-^au, se-^au// と見做す理由は 5.1.4.5 節で述べる。

- jom-**au** tor-**au** age-**u** ke-**u** se-**u**
 ↓ Vu → juu / V[+f]
 ↓ → oo / V[-f, -h] (cf. 3.7.1 節: (42))
 jomoo toroo aguu kuu suu
 (10) jom-^r**u** tor-^r**u** agu-^r**u** ku-^r**u** su-^r**u**
 ↓^C → C / V_ (cf. 3.3 節: (9)a)
 jomu tor-u agu-ru ku-ru su-ru
 ↓ ru → i / _# (cf. 3.4 節: (12))
 toi agui kui sui
 (11) jom-^r**una** tor-^r**una** agu-^r**una** ku-^r**una** su-^r**una**
 ↓^C → C / V_
 jom-una tor-una agu-ru-na ku-ru-na su-ru-na
 ↓ ru → N / _n (cf. 3.4 節: (12))
 toNna aguNna kuNna suNna

分析 (9)–(11) は交替規則による分, 分析 (5)–(7) より複雑ではある。その代わり, 前者によれば, ほとんどの動詞接尾辞は連結音と共に $-^C V$ ないし $-^V(C)V$ と表現できる。音素配列規則 (cf. 2.2 節) にも適っているので, これらの利点を重視して, 意志, 非過去, 禁止を表す動詞接尾辞は, それぞれ $-^a u$, $-^r u$, $-^r una$ とする。

5.1.3.3 分析原理の一貫性と記述の体系性・経済性

[表 15: 2–6] の動詞語幹は, to-, ag-, k-, mi-, s- と分析するのが自然に思われる。しかし, この分析によれば, 動詞語幹の分析原理こそ安定するが, [表 16] のとおり, 活用型 (=どのような語幹がどのような接尾辞を取るか。あるいは, どのような接尾辞がどのような語幹に付くか) を覚えるための労力は計り知れないものになる。

表 16 動詞の活用 (動詞語幹の分析原理を重視)

	1. kak-	2. to-	3. ag-	4. k-	5. mi-	6. s-
	書く	取る	上げる	来る	見る	する
- ^r e ~ -ee	kak-e	to-re	ag-ee	k-ee	mi-re	s-ee
-eziN ~ - ^r aziN	kak-aziN	to-raziN	ag-eziN	k-eziN	mi-raziN	s-eziN
-uu ~ - ^r oo	kak-oo	to-roo	ag-uu	k-uu	mi-roo	s-uu
- ⁱ ~ ^e mos-	kak-imos-	to-imos-	ag-emos-	k-imos-	mi-mos-	s-imos-
- ⁱ ~ ^e o-	kak-io-	to-io-	ag-eo-	k-io-	mi-o-	s-io-
-as- ~ - ^o ras- ~ - ^e sas-	kak-as-	to-ras-	ag-esas-	k-oras-	mi-sas-	s-as-
-eba ~ - ^u reba	kak-eba	to-reba	ag-ureba	k-ureba	mi-reba	s-ureba
- ^u i ~ -u	kak-u	to-i	ag-ui	k-ui	mi-i	s-ui
-una ~ - ^u Nna	kak-una	to-Nna	ag-uNna	k-uNna	mi-Nna	s-uNna
- ⁱ ~ ^e te	kjaa-te	toQ-te	ag-ete	k-ite	mi-te	s-ite
- ⁱ ~ ^e .ja-	kaQk-ja-	to-ija-	ag-eja-	k-ija-	mi-ja-	s-ija-

1 音素の動詞語幹は数えるほどしかないの、その活用型は暗記によってでも区別できる。しかし、2音素以上の動詞語幹は無数に存在するので、その活用型を区別するのは容易ではない。また、動詞接尾辞の異形態とその交替原理も混沌としており、褒められた記述とは言えない。

5.1.3 節からわかるように、本稿では、分析原理の一貫性に固執して、記述の体系性・経済性を損なうことを良しとしない。よって、動詞語幹 [表 15: 2-6] については、記述の体系性・経済性を高めるために、異形態を認める (動詞の活用を分析する際、分析原理の一貫性と記述の体系性・経済性をどのように折り合わせるかについては、屋名池 1987 と黒木 2012 に詳しい)。

5.1.4 動詞語幹

5.1.4.1 子音語幹

動詞語幹の大半は子音型 [表 15: 1-2] に属する。子音語幹は、次に挙げる 3 種類の形態素によって形成される。

(12) a. 動詞語根

- i. m 語根: cizi/um-²⁸ (A) ‘縮む’, um- (A) ‘生む’, kum- (B) ‘組む’, jom- (B) ‘読む’, kam- (B) ‘噛む, 食う’, kazam- (A) ‘嗅ぐ’, oNm- (B) ‘思う’, kaNm- (B) ‘構う’, etc.
- ii. b 語根: aib- (B) ‘歩く’, asu/ob- (A) ‘遊ぶ’, tob- (A) ‘飛ぶ’, job- (A) ‘呼ぶ’, orab- (B) ‘叫ぶ’, etc.
- iii. w 語根: { i / ju }w- (A) ‘言う’, k(u)w- (B) ‘食う’, uw- (A) ‘追う’, jokuw- (B) ‘休む’,

²⁸ //cizum-// は小川 (2012) に拠る。本プロジェクトの調査で得たのは cizim- のみ。

huruw- (A) ‘拾う’, tagow- (B) ‘違う’, aw- (B) ‘会う’, kaw- (A) ‘買う’, utaw- (A) ‘歌う’, jokuraw- (B) ‘酔う’, etc.

iv. n 語根: sin- (A) ‘死ぬ’

v. r 語根: ir- { (A) ‘要る’ / (B) ‘炒る’ }, kir- (B) ‘切る’, nur- (A) ‘塗る’, kaer- (B) ‘帰る’, or- (A) { ‘いる’ / (B) ‘折る’ }, tor- (B) ‘取る’, ar- (B) ‘ある’, nar- (B) ‘なる’, daQpar- (??) ‘黙る’, etc.

vi. t 語根: ut- (B) ‘打つ’, mot- (B) ‘持つ’, tat- (B) ‘立つ’, kat- (B) ‘勝つ’, etc.

vii. s 語根: mus- (B) ‘蒸す’, os- (A) ‘押す’, kas- (A) ‘貸す’, uQkujas- (A) ‘壊す’, etc.

viii. k 語根: ik- (A) ‘行く’, kik- ‘聞く’, hik- (A) ‘引く’²⁹, saik- (??) ‘歩く’, muk- (A) ‘剥く’, ek- (A) ‘置く’, dok- (A) ‘退く’, kak- (B) ‘書く, 掻く’, etc.

ix. g 語根: nug- (B) ‘脱ぐ’, ozug- (B) ‘泳ぐ’, teg- (B) ‘研ぐ’, ke/og- (B) ‘漕ぐ’, hag- (B) ‘剥ぐ’, etc.

b. 動詞語幹化接尾辞

i. 動詞派生接尾辞: ^k-as- ~ -Vkas- (以下, 前者で代表) ‘TR’, -tor- ‘CONT’, ⁱ-or- ‘IPFV’, ⁱ-jar- ‘HON’, ^r-ar- ‘2/3’, ⁱ-mos- ‘POL’, ^an- ‘NEG’

ii. 形容詞派生接尾辞: -ka^r- ‘VLZ’, -gar- ‘TR’, -mar- ‘INTR’ (他にもあると思われるが, 突き止めていない)

iii. 名詞派生接尾辞: -mek- ‘INTR’

c. 繫辞動詞語根: =jar- ‘VLZ’

5.1.4.2 テ形語幹

子音語幹はテ形接尾辞を取る場合に限り, [表 17] に挙げるテ形語幹に交替する。この交替は子音語幹の末尾音素に基づいて起こる。

表 17 テ形語幹

取(る)	立(つ)	死(ぬ)	組(む)	読(む)	飛(ぶ)	言(う)	買(う)	干(す)	書(く)	漕(ぐ)
tor-	tat-	sin-	kum-	jom-	tob-	juw-	kaw-	hos-	kak-	keg-
↓交替規則 [1]										
toQ-	taQ-	siN-	kuN-	jou-	tou-	juu-	kau-	hoi-	kai-	kei-
						↓交替規則 [2.1]		↓交替規則 [2.2]		
				joo-	too-	juu-	koo-	hee-	kjaa-	kee-

²⁹ huQpar- ‘引っ張る’ (< //huk-ⁱØ+har-// ‘引く-NL+張る’) の存在と, 次のように, 里方言において hi に hu が対応することを踏まえると, かつては huk- であったのかもしれない。

(XI) huto (B) ‘人’, hutoi (B) ‘1人’, huQka (B) ‘低い’, husjaaku (??) ‘柄杓’, huwa (B) ‘枇杷’ (cf. 薩摩方言: hiwa ‘枇杷’)

(注) 交替規則 [1]	交替規則 [2.1]
m → N, u / u_	Vi(V _i)u → juu / V[+f]
→ u / EW	→ oo / V[-f, -h]
b, w → u	交替規則 [2.2]
n → N	Vi → ii / V[+h]
r, t → Q	→ jaa / V[+]
s, k, g → i	→ ee / the others

[表 17] のとおり、s 語幹末は交替規則 [1] で i に、交替規則 [2.2] で直前の V と共に V_iV_i に変わる。ただし、次のように、ⁱmos- 動詞語幹末だけは交替規則 [2.2] を受けない。

- (13) kak-ⁱmos-te ki-ⁱmos-te
 書く -POL-CTX 来る -POL-CTX
 ↓ 交替規則 [1]
 kakimoite kimoite
 (↓ 交替規則 [2.2])
 (* kakimeete * kimeete)

面接調査でテ形動詞の音形を尋ねたところ、どの話者も基本的に方言形式で回答した。しかし、実際は母語話者同士で話している時も、次のような標準語形式をしばしば使っている。

- (14) a. b.
 履く 漕ぐ 読む 飛ぶ 買う 出す
 hak-te kog-te jom-te tob-te kaw-te das-te
 ↓ 交替規則 [1] ↓ 交替規則 [A]: b, m, n → N w, r, t → Q
 ↓ ↓ s → si k, g → i³⁰
 haite koide joNde tonDe kaQta dasite
 (↓ 交替規則 [2.2])
 (hjaate keede)

(14)a は、交替規則 [2.2] を失った例で、(14)b は、交替規則 [1] の代わりに標準語の交替規則 [A] を適用させた例である。

5.1.4.3 母音語幹

母音語幹は語幹末の交替に基づいて、次の 3 種類に細分できる。

- (15) 二段語幹 [表 15: 3]: 母音語幹のうち、語幹末を u ~ e で交替させるもの (以下、語幹末を e で代表)。子音語幹に次いで多い二段語幹は、次に挙げる 2 種類の形態素によって形

³⁰ 子音語幹末の w が p に由来することと、濁音が鼻音性を有していたことを踏まえると、次のように定式化できそうである。

(XII) C[DOR] → i; C[$\overline{\text{DOR}}$, +nas] → N; C[$\overline{\text{DOR}}$, +cont] → si; the others → Q

成される。

- a. 二段語根: tome- (A) ‘止める’, jame- (A) ‘やめる’, ne- (A) ‘寝る’, tane- (B) ‘尋ねる’, ore- (B) 折れる, ware- (A) ‘割れる’, kire- (B) ‘切れる’, kure- (A) ‘くれる’, kare- (A) ‘枯れる’, hare- { (A) ‘腫れる’ / (B) ‘晴れる’ }, cjaare- ‘落ちる’, sute- (A) ‘捨てる’, de- (B) ‘出る’, huse- (B) ‘繕う’, moje- (A) ‘燃える’, kije- (A) ‘消える’, kaje- ‘変える’, uke- (B) ‘受ける’, toke- (B) ‘溶ける’, age- (A) ‘上げる’, naNge- (B) ‘投げる’, etc.
- b. 二段語幹化接尾辞
- i. 動詞接尾辞: -^sase- ‘CAUS’, -^rare- ‘PASS’
- ii. 形容詞接尾辞: -me- ‘TR’

(16) 四段語幹 [表 15: 4]: 母音語幹のうち, 語幹末を i~u~e~o で交替させるもの (以下, 語幹末を o で代表)。これを形成する形態素は動詞語根 ko- ‘来る’ のみ。

kure- は母音語幹ながら, -^rjar- ‘HON’ を取ると, 次のように連声する。

- (17) iQtooki maQ-toQ-te kui-jai-moi-tenka
しばらく 待つ-CONT-CTX くれる-HON-POL-IMP
‘しばらく待っててくださいませんか’

(里村教委 2003: 4)

二段語幹のうち, 1 音節語幹たる ne- ‘寝る’, de- ‘出る’ は, 否定の動詞接尾辞を取る場合に限り, 次のようにそれぞれ子音語幹 ner-, der- に交替する³¹。

- (18) 寝る 出る
CTX: ne-te de-te
COND: nu-reba zu-reba
NPST: nu-i zu-i
VOL: nu-u zu-u
NEG: ner-an- der-an-
NEG.CTX: ner-aziN der-aziN

5.1.4.4 混交語幹

子音語幹と母音語幹からなる混交語幹は, 語幹末の交替に基づいて, 次の2種類に細分できる。

(19) 混交一段語幹 [表 15: 5]: 混交語幹のうち, r 語幹と i 語幹からなるもの (以下, 語幹末を i^r で代表)。これを形成する形態素は, 動詞語根 mi^r- ‘見る’, ki^r- ‘着る’, oki^r- ‘起きる’ のみ。

(20) 混交三段語幹 [表 15: 6]: 混交語幹のうち, s 語幹と i~u~e 語幹からなるもの (以下, 語幹末を s^e で代表)。これを形成する形態素は動詞語根 s^e- ‘する’ のみ。

本プロジェクトの調査結果によれば, mi^r- ‘見る’ は, -^aX (= -^aziN, -^au, -^an-, etc.) ないし -e ‘IMP’ を取る際, r 語幹になる。しかし, 次のように, 荒木 (1970: 97, 107) では mi- も確認される。

³¹ 子音語幹 //ner-// は, 荒木 (1970: 301) の ciNneQte //ciN-ner-te// ‘EMPH-寝る-CTX’ からも抽出できる。

- (21) ano zii=no ta+uc-i mi-N=kaa.
 mi-^an-^ru=ka
 あの 爺=GEN 田+打つ-NL 見る-NEG-NPST=Q
 ‘あの爺の田打ちを見る’

5.1.4.5 母音語幹末および混交語幹末の交替

母音語幹末および混交語幹末は、取りうる動詞接尾辞の種類により [表 18] のように交替する。

表 18 母音語幹末および混交語幹末の交替

四段型	e 語幹	i 語幹	o 語幹	u 語幹
混交三段型	e 語幹	i 語幹	s 語幹	u 語幹
混交一段型	r 語幹	i 語幹		u 語幹
二段型	e 語幹			u 語幹
屈折	- ^a u, - ^a ziN - ^a zjaa, -e	- ⁱ kjaa, - ⁱ nagara, - ⁱ ∅ - ^s ai, -te, -teNka -ta, -tai, -ta(i)ba		- ^r eba - ^r u - ^r una
派生	- ^a n-	-tor-, - ⁱ or- - ⁱ jar-, - ⁱ mos-	- ^s ase- - ^r are-, - ^r ar-	

(注) 二段語幹に -^reba ‘COND’ を付ける時、ほとんどの話者は u 語幹を選ぶが、話者 28 は e 語幹を選ぶ (e.g. age/u-reba ‘上げる-COND’)。

母音語幹末および混交語幹末の交替に関しては、次のことが指摘できる。

- (22) a. いずれの活用型においても、次の語幹は末尾音素を同じくする。
- i. -^aX ないし -e ‘IMP’ を取る語幹。
 - ii. -t (テ形接尾辞), -ⁱX, -^sai ‘IMP’ を取る語幹。
 - iv. -^sase-, -^rare-, -^rar- を取る語幹。
 - v. -^reba, -^ru, -^runa を取る語幹。
- b. 四段語幹末と混交三段語幹末は交替原理を同じくする。

5.1.5 ori-‘下りる’に対応する動詞語根の特殊性

ori-‘下りる’に対応する動詞語根は、どのような接尾辞を取るかによって、次のように複雑に交替する。

- | | | | |
|----------------------|------------------------|-------------------------|------------------------|
| (23) a. | b. | c. | d. |
| NL: <i>oi-Ø</i> | PASS: <i>ori-rare-</i> | NEG.CTX: <i>ore-ziN</i> | CAUS: <i>ori-sase-</i> |
| POL: <i>oi-mos-</i> | COND: <i>ori-reba</i> | IMP: <i>ore-e</i> | <i>ore-sase-</i> |
| | | CTX: <i>ore-te</i> | HON: <i>ori-jar-</i> |
| | | PST: <i>ore-ta</i> | <i>ore-jar-</i> |
| e. | f. | | |
| NPST: <i>oru-i</i> | NEG: <i>orir-an-</i> | | |
| PROH: <i>oru-Nna</i> | <i>ore-n-</i> | | |
| VOL: <i>oru-u</i> | | | |

分析 (23) によれば, *oi-*, *ori-*, *ore-*, *oru-*, *orir-* の 5 種類が *ori-* に対応する。里方言において *ri* に *i* が対応することを踏まえると, (23)b, d の *ori-* は不審である。また, (23)f の *orir-an-* は九州方言に広く見られる否定語幹で, 必ずしも里方言 (引いては甌島方言) に特有のものではない。伝統的には *oi-* ~ *oru-* ~ *ore-* で交替する三段語幹で, *ori-* と *orir-* を取り入れた結果, このように複雑化したのかもしれない。

なお, (23)a の *oi*, *oimos-* は //*or-ⁱØ*//, //*or-ⁱmos-*// と分析できるが, 動詞の活用体系を踏まえると, この 2 形式において母音語幹が子音語幹に転向するのは不審である (cf. [表 15])。よって, //*oi-ⁱØ*//, //*oi-ⁱmos-*// とする。

5.1.6 動詞屈折接尾辞

動詞語幹を動詞に加工するための接尾辞を動詞屈折接尾辞と呼ぶ。動詞の最終構成要素たるこの接尾辞は, 統語機能の面から次のように分類できる。

- (24) a. 動詞終止接尾辞: 文を統べる動詞を作るための接尾辞。
 b. 動詞連体接尾辞: 連体節ないし文を統べる動詞を作るための接尾辞。
 c. 動詞準体接尾辞: 名詞節を統べる動詞を作るための接尾辞。
 d. 動詞連用接尾辞: 副詞節を統べる動詞を作るための接尾辞。

5.1.6.1 動詞終止接尾辞

動詞終止接尾辞とは, 文を統べる動詞を作るための接尾辞である。里方言で用いられているものは, 次のとおり。

- (25) a. *-anmjaa* ‘neg.infr’ b. { *-^azjaa* / *-^azinja* } (以下, 前者で代表) ‘OBLG’
 c. *-e* ‘IMP’ d. *-teNka* ‘IMP’ e. *-^tuna* ‘PROH’

- (26) a. [*s* *agan* *tokeenja* *ik-anmjaa*].
 あんな ところ:DAT.TOP 行く-NEG.VOL
 ‘あんなところには行かないでおこう’
 b. [*s* *saa* *moQ-te* *ik-azjaa*]. [*s* *kiQ-te* *kam-azjaa*].
 さあ 持つ-CTX 行く-OBLG 切る-CTX 噛む-OBLG
 ‘さあ, 持って行かなきゃ。切って食わなきゃ。’

(荒木 1970: 150)

c. [s moQ-te itaQ-te kui-jai-mos-e].

持つ-CTX 行く-CTX くれる-HON-IMP

‘持って行って下さい。’

d. [s ir-aN koto su-Nna].

要る-NEG:NPST 事 する-PROH

‘要らんことするな。’

e. [s iQtooki maQ-toQ-te kui-jai-moi-teNka].

しばらく 待つ-CONT-CTX くれる-HON-POL-REQ

‘しばらく待っていてくださいますか。’

(里村教委 2003: 4)

『現代日本語方言大辞典』などによれば、かつては依頼を表す *-sai* も使っていたようであるが、現在もこれを日常的に使う話者はいないようである。

5.1.6.2 動詞連体接尾辞

動詞連体接尾辞とは、連体節ないし文を統べる動詞を作るための接尾辞である。里方言で用いられているものは、次のとおり。

(27) a. *-^ru* ‘NPST’ b. *-ta* ‘PST’ c. *-^au* ‘VOL, HORT, INFR’

(28) a. *iso=ni ik-u tokjaa=jo*

[NP [ADNCL *iso=ni ik-^ru*] *toki*]=^wa=jo

磯=DAT 行く-NPST 時=TOP=CNF

‘磯に行く時はよ’

《連体; 不完全》

b. [s *kokenjaa suQkome=no uk-aQ-toi*].

ukar-tor-^ru

ここ:DAT.TOP ニザダイ=NOM 浮く-CONT-NPST

‘ここにはニザダイが浮いてる。’

《終止; 現在》(里村教委 2003: 13)

c. [s *SON=nara soo su-i*].

su-^ru

それ=COND そう する-NPST

‘それならそうする。’

《終止; 未来》

(29) a. *koNdo=wa* [NP [ADNCL *nage-ta*] *koQci*]=ga

投げる-PST こっち=NOM

‘今度は、投げたこっちが’

《連体; 完成》

b. [s *doNkjuu=ga tomaasu=ni kaiw-are-ta*].

蛙=NOM イタチ=DAT 背負う-PASS-PST

‘蛙がイタチに背負われた。’

《終止; 過去》(里村教委 2003: 9)

(28) のように、*-^ru* は非終止用法では不完全を、終止用法では現在ないし未来を表す。一方、(29) のように、*-ta* は非終止用法では完成を、終止用法では過去を表す (吉本 2004 が明らかにした日本語の時制に等しい)。両者のテンス的意味が終止用法において対立することを以って、前者は非過去

(NPST) の、後者は過去 (PST) の動詞連体接尾辞とする。

意志、勧誘、推量を表す ^{-a}u で終わる動詞も、連体節ないし文を統べる。ただし、^{-a}u 節が連体修飾しうるのは、(30)a の形式名詞 goto だけである。

- (30) a. omai=to keQkoN [VP [NP [ADNCL su-u] goto] ai].
 2SG=COM 結婚 する-VOL 様子 ある:NPST
 ‘あなたと結婚したい。’
- b. [s aita=a neNgazjoo=ba kak-oo].
 kak-^au
 明日=TOP 年賀状=ACC 書く-VOL
 ‘明日は年賀状を書こう。’
- c. [V [??hur-oo]=soo=jai].
 降る-INFR=SEEM=VLZ:NPST
 ‘[雨が] 降りそうだ。’

終止用法の連体動詞は、前節で取り上げた終止動詞とは異なり、語り以外では基本的に終助詞を取る。具体的には次のとおり。

- (31) a. zuQto cure-te ik-imos-u=doo.
 ずっと 連れる-CTX 行く-POL-NPST=SFP
 ‘ずっと連れて行くぞ。’
- b. jo-ka buen micuke-ta=a.
 いい-NPST 刺し身 見つける-PST=SFP
 ‘よい刺し身を見つけたわ。’ (里村教委 2003: 17)
- c. io cur-ikjaa ik-oo=i.
 魚 釣る-PURP 行く-HORT=SFP
 ‘魚を釣りに行こうよ。’ (里村教委 2003: 21)

5.1.6.3 動詞準体接尾辞

動詞準体接尾辞とは、名詞節を統べる動詞を作るための接尾辞である。里方言で用いられているものは、次のとおり。

- (32) a. ⁻ⁱ∅ ‘NL’ b. -ta(r)i ‘ILST’

(33) 付加部

- a. saaru=ga [NCL soQci=i hasii] [NCL koQci=i hasii] soN sode=ni
 hasir-ⁱ∅ hasir-ⁱ∅
 猿=NOM そっち=DAT 走る-NL こっち=DAT 走る-NL その 袖=DAT
 sugaQ-te
 縋る-CTX
 ‘猿がそっちに走り、こっちに走り、その袖に縋って’ (荒木 1970: 293)

- b. [NCL baari=N koo³² si-tai] soi=kara [NCL otedama toinokozjoo si-tai]
 おはじき=GEM ?? する-ILST それ=ABL お手玉 お手玉 する-ILST
 sogaN koto hai.
 そんな 事 FIL
 ‘おはじきしたり, それから, お手玉したり, そんなこと, はい’

(34) 動詞句の構成要素

- a. zikatjaanjaa maada ik-jaa se-N=baQte.
 [VP [NCL ik-ⁱ∅]=^wa se-^an-^ru=baQte]
 本土:DAT.TOP まだ 行く-NL=TOP する-NEG-NPST=CONC
 ‘本土にはまだ行きはしないけど’
- b. muzukai-ka kaNzi=ba [VP [NCX [NCL kak-i]=ga] nai=de].
 難しい-NPST 漢字=ACC 書く-NL=NOM なる:NPST=CSL
 ‘難しい漢字を書くことができるよ。’
- c. nikjaanjaa mo+ciQto [VP [NCX [NCL age-∅]=ga] nai=do].
 二階:DAT.TOP もう+ちよっと 上げる-NL=NOM なる:NPST=SFP
 ‘2階にはもうちよっと上げることができるぞ。’
- d. [VP [NCL gohaN tai-tai] [NCL naN si-tai] su-i] moN
 ご飯 炊く-ILST 何 する-ILST する-NPST もの
 ‘ご飯を炊いたり, 何したりする者’ (荒木 1970: 293)

(33)–(34) のとおり, ⁱ∅ ないし -tai で終わる名詞節は, 付加部ないし動詞句の構成要素として用いられている。両者はこの点で名詞に準じるので, ⁱ∅ も -tai も動詞準体接尾辞とする。

ただし, 両者は補部にはなりえないので, 次のように, 連体節と準体助詞 =to からなる名詞がその欠を補っている。

- (35) a. [NCX [N [ADNCL agaNte=so odoi]=to]=ga] jo-ka=doo.
 ああして=CNF 踊る:NPST=NLZ=NOM いい-NPST=SFP
 ‘ああしてさ, 踊るのが, あれがいいよ。’
- b. [NCX [N [ADNCL zikata=de koo-ta]=to]=ba] mise-tenka.
 本土=LOC 買う-PST=NLZ=ACC 見せる-IMP
 ‘本土で買ったのを見せて。’

5.1.6.4 動詞連用接尾辞

動詞連用接尾辞は副詞節を統べる動詞を作るための接尾辞である。次のように, 里方言では, ⁱkjaa ‘PURP’, ⁱnagara ‘SIM’, ^reba, ^rjaa ‘COND’, -ta(i)ba ‘PST.COND’, -te ‘CTX’, ^aziN ‘NEG.CTX’ の6種類が使用されている。

³² 指示副詞 koo ではなく, 何らかの形式名詞であると考えられる。

- (36) a. [AdvCL kaeQ-te ki-oi-jar-eba] saaru=ga soQci=i hasi-i
 帰る-CTX 来る-IPFV-HON-COND 猿=NOM そっち=DAT 走る-NL
 koQci=i hasi-i soN sode=ni sugaQ-te
 こっち=DAT 走る-NL その 袖=DAT 縫る-CTX
 ‘[炊事者が] 帰ってきなさるところで、猿がそっちに走り、こっちに走り、その袖
 に縫って’ (荒木 1970: 293)

- b. [AdvCL sigoto=mo se-ziN] ie=de ne-tor-aa.
 仕事=も する-NEG.CTX 家=LOC 寝る-CONT-NPST:SFP
 ‘仕事もせず、家で寝てるわ。’

-^fja が -^an- に接尾すると、次のように -^anja ないし -^aNna で実現する (後者は不規則形式)。

- (37) a. jaQpai soaN se-n-ja taiheN=na wakee=de.
 やはり そんな する-NEG-COND 大変=VLZ.NPST 訳=VLZ.CTX
 ‘やはりそうしなければ、大変な訳で。’
- b. beNkjoo se-Nna ik-aN=mitai.
 se-^an-^fja
 勉強 する-NEG-COND 行く-NEG:NPST=SEEM
 ‘勉強しなければいけないみたい。’

5.1.7 動詞屈折接尾辞の分析に関する問題

5.1.7.1 -^aziN, -^azjaa, -^aziNja

-^aziN ‘NEG.CTX’ と -^azjaa ‘OBLG’ を見比べると、前者は //^azi=N// ‘NEG-??’, 後者は //^azi=^wa// ‘NEG-TOP’ と分析できそうである。しかし、//^azi// はもはや使われておらず、//^azi=N// の //N// が何を意味するかもわからないので、-^aziN も -^azjaa も分析しない。なお、-^azjaa と同義の -^aziNja は //^aziN=^wa// と分析できそうである (ただし、//^aziN=^wa// からは -^aziNna が期待される)。

//^azi(N)=^wa// に由来する -^azjaa および -^aziNja は、かつては否定条件 (NEG.COND) を表す動詞連用接尾辞であったと推定されるが、現在は義務 (OBLG; 引いては強い意志) を表す動詞終止接尾辞となっている。

- (38) kobos-aN goto se-n-jaa
 溢す-NEG:NPST 様子 する-NEG-COND
 ‘溢さないようにしなければ’ (荒木 1970: 108)

5.1.7.2 -ta, -ta(i)ba

次のように、-ta ‘PST’ は、=joo ‘INFR’ を取る時だけ -ta(i) で実現する (甕島方言一般の現象)。

- (39) 無標 SFP SFP CSL INFR
 age-ta age-ta=a age-ta=na age-ta=dee age-ta=joo
 ↓
 ageta agetaa agetana agetadee ageta(i)joo

(i) 里方言において //ru// が i で実現すること (cf. 3.4 節(12)参照) と, (ii) 日本語の過去表現がかつては屈折ではなく、派生で行なわれていたこと (cf. 黒木 2013a) を踏まえると、-ta は -tai //tar-^ru// ‘PST-平叙’³³に由来し、音色の似た j が続く時だけ、-tai の i を保持していると考えられる³⁴。

また、指示名詞 *kore, sore, are, dore* および一人称名詞 *ore* の *re* に i が対応することから、//ta(i)ba// ‘PST.COND’ は -taiba //tar-^reba// ‘PST.COND’ に由来すると考えられる。

-ta, -ta(i)joo, -ta(i)ba, -taroo ‘PST.INFR’ (里方言を含む甌島方言では -taijoo が一般的) をまとめて、次のように分析する手もある。

(40) -taR-^ru -taR-^ru=joo -taR-^reba -taR-^au

↓ 形態音韻規則 3.3 節: (9)

-taR-u -taR-u=joo -taR-eba -taR-oo

↓ 交替規則 (41)

-ta -ta(i)joo -ta(i)ba -taroo

(41) RV → rV / _o

→ (i) / _=joo, [v-ta_ba]

→ Ø / EW

しかし、交替規則 (41) は語彙的条件によりすぎていて、説得力に欠ける。その上、-ta(i)joo, -ta(i)ba, -taroo の成り立ちに説明を付けるため、これらより頻繁に使用される -ta まで分析するのは、不憚でもある。よって、-ta, -ta(i)joo, -ta(i)ba, -taroo からは //taR-// を抽出せず、それぞれ //ta//, //ta=joo//, //ta(i)ba//, //taroo// とする。

5.1.7.3 ⁱØ

(A) 動詞性と名詞性

VSTM-ⁱØ を準体動詞とするのは、次のように名詞節³⁵を統べることによる。

(42) a. [VP [NCx [NCL nikjaanjaa mo+ciQto age-Ø]=ga] nai].

二階:DAT.TOP もう+ちょっと 上げる-NL=NOM なる:NPST

‘2 階にはもうちょっと上げることができる。’

b. zikatjaanjaa maada ikjaa se-N=baQte

[VP [NCL zikata=ⁱnjaa maada ik-ⁱØ]=^wa se-N=baQte]

本土=DAT.TOP まだ 行く-NL=TOP する-NEG:NPST=CONC

‘本土にはまだ行きはしないけど’

(42)a の nikjaanjaa, mociQto を承けているのは age-Ø で、(42)b の zikatjaanjaa, maada を承けているのは ik-i である。nai, seN の項構造 (argument structure) と格標示を考慮すると、(42) を次のように

³³ かつての -^ru は平叙の標識で、過去 (PST) の -ta と対立するようになってから、非過去 (NPST) の標識に変わったと考えられる。

³⁴ 形容詞連体接尾辞 -ka も、=joo を取る時だけ -ka(i) で実現する (cf. 7.7.1.1 節: (83))。-ta と同様に考えて、-ka は -kai //ka-^ru// ‘VLZ-平叙’³⁴に由来し、音色の似た j が続く時だけ -kai の i を保持していると見なす。

³⁵ (42) のように =ga や =^wa を取りうることに拠る。ただし、補部になることは稀である。

解釈するのは妥当ではない。

- (43) a. #nikjaanjaa mo+ciQto nai.
二階:DAT.TOP もう+ちよつと なる:NPST
‘2階にはもうちよつとなる。’
b. #zikatjaanjaa maada se-N=baQte
本土=DAT.TOP まだ する-NEG:NPST=CONC
‘本土にはしないけど’

次のように補部も付加部も承けない VSTM-ⁱØ は、名詞語幹のようでもある。

- (44) a. [NCL asob-i]=ga na-ka=baQte=naa.
遊ぶ-NL=NOM ない-NPST=CONC=SFP
‘遊びがないけどねえ。’
b. [NCL huse-Ø]=ba si-te kui-jar-e.
繕う-NL=ACC する-CTX くれる-HON-IMP
‘繕ってください。’

複合名詞語幹の構成要素たる次の VSTM-ⁱØ に至っては、もはや動詞とは言えない。

- (45) a. [NCx [N [NSTM ake-Ø]+[NSTM jaiki]]=i]
空ける-NL+屋敷=DAT
‘空き屋敷に’
b. [NCx [N [NSTM iso]+[NSTM kuzii]]=ba]
iso+kuzir-ⁱØ=ba
磯+いじくる-NL=ACC
‘貝掘り用の鉤を’
c. [NCx [N [NSTM hito]+[NSTM uc-i]+[NSTM koros-i]]=i]
1+打つ-NL+殺す-NL=DAT
‘一打ち殺しに’

(荒木 1970: 109)

以上のように、VSTM-ⁱØ は (42) 準体動詞でも (45) 名詞語幹でもある。

(B) -ⁱØ 動詞に由来する名詞語根

次の斜体の名詞語根は -ⁱØ 形準体動詞に由来すると考えられる。

- (46) a. *ha.saa.mi* (B) ‘*缺*’ (cf. //ha.sa.m-ⁱØ// (B) ‘*挟む*-NL’)
b. omiki+*bi.raa.ki* (??) ‘お神酒を皆で飲む行事’, hana+*bi.raa.ki* (??) ‘初旅から帰ってきた人を祝う行事’ (cf. //hi.ra.k-ⁱØ// (B) ‘*開く*-NL’)
(47) a. joQ+*gii* (??) ‘捨て惜しんで、無理に食べること’, kjaa+*gii* (??) ‘*買い食い*’ (cf. //k(u)w-ⁱØ// (B) ‘*食う*-NL’)
b. *kjaa*+*gii* (??) ‘*買い食い*’, goso+*kjaa* (A) ‘ウサギを飼うこと’ (cf. //kaw-ⁱØ// (A) ‘*買う*-NL’ or (B) ‘*飼う*-NL’)
c. *cukjaa* (A) ‘*使い*’ (cf. //cukaw-ⁱØ// (A) ‘*使う*-NL’)

- d. *ita+ziki+barjaa* ‘結婚式の翌日、式に呼べなかった関係者を招待して行なう披露宴’
(cf. //haraw-ⁱØ// ‘払う-NL’)
- e. *toborjaa* ‘葬式’ (cf. //toboraw-ⁱØ// ‘弔う-NL’)

(46)–(47) を -ⁱØ 形準体動詞と区別するのは、それぞれ次の理由による。

- (48) a. (46): 動詞語幹から -ⁱØ 形準体動詞を作る場合、次末尾音節は長母音化させない。
b. (47): w 語幹から -ⁱØ 形準体動詞を作る場合、//uw-ⁱØ// は uu で、その他の //Vw-ⁱØ// は Vi で実現する。

5.1.8 動詞派生接尾辞

5.1.8.1 動詞派生接尾辞の承接順位

動詞語幹から何らかの語幹を派生させる接尾辞を動詞派生接尾辞と呼ぶ。里方言の動詞派生接尾辞はほとんど動詞語幹化接尾辞で、その他のものとしては、次のように形容詞語幹を派生させる -ⁱta- ‘DES’ しか確認していない。

- (49) *kuruma cure-te* [_{ASTM} [_{VSTM=VR} ik-*ita*]-kaQ-ta=te
車 連れる-CTX 行く-DES-VLZ-PST=QUOT
‘車は [持っているから] 連れて行きたかったって’

動詞派生接尾辞は動詞語幹内に複数個現れることがあり、その場合は次の順に並ぶ。

- (50) a. b. c. d. e. f. g. h.
-^kas- -^sase- -^rare- -tor- -ⁱor- -ⁱjar- -ⁱmos- -^an-
TR CAUS PASS CONT IPFV HON POL NEG
-e- -^rar-
POT 2/3
- (51) a. *uc-i+koros-are-toQ-te* b. *omoQ-tor-ai*
ut-ⁱØ+koros-^sase-tor-te *omow-tor-^rar-^ru*
打ち-NL+殺す-PASS-CONT-CTX 思う-CONT-2/3-NPST
c. *kak-ase-rare-oi* d. *das-itoi-joQ-ta*
kak-^sase-^rare-ⁱor-^ru *das-tor-ⁱor-ta*
書く-CAUS-PASS-IPFV-NPST 出す-CONT-IPFV-NPST
e. *si-joi-jai-moi-ta* f. *nom-e-mos-aN-de*
si-ⁱor-ⁱjar-ⁱmos-ta *nom-e-ⁱmos-^an-te*
する-IPFV-HON-POL-PST 飲む-POT-POL-NEG-CTX

動詞語幹から可能語幹を派生させる時は -^rare- ‘PASS’ ないし -e- ‘POT’ を使う。ただし、次のとおり、後者は母音語幹には接尾できない。

- (52) *jom- kak- age- ko-*
読む 書く 上げる 来る
-^rare-:jom-are- kak-are- age-rare- ko-rare-
-e-: jom-e- kak-e- N/A N/A

5.1.8.2 語形成上の汎用性

動詞派生接尾辞の承接順位 (50) は、語形成上の汎用性の高低 (左に位置するほど高い) を大よそ反映している。

表 19 動詞派生接尾辞と動詞屈折接尾辞の接続関係

	ⁱ kjaa	ⁱ ∅	-tai	^a u, ^a zjaa -e, ^r una ^a ziN	-teNka	-ta -ta(i)ba	-te ^r eba	^r u
	ⁱ nagara V~FULL							
- ^k as-, - ^s ase-, - ^r are-	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓
-e-		✓	✓			✓	✓	✓
-tor-, - ⁱ or-, - ⁱ jar-			✓	✓	✓	✓	✓	✓
- ^r ar-	()	()	(✓)	(✓)	✓	✓	(✓)	✓
- ⁱ mos-				✓	✓	✓	✓	✓
- ^a n-							✓	✓

[表 19] のとおり、基本的には (50) での順位が高い動詞派生接尾辞ほど、様々な語の構成要素になれる。^{-e-} ‘POT’ が語形成の面で承接順位 (50) を反映していない (= [表 19] において、^{-e-} が ^{-r}are-, -tor-, ⁻ⁱor-, ⁻ⁱjar-, ⁻ⁱmos- より低位である) のは、次のことによると考えられる。

(53) 動性および意志性に欠ける動詞語幹は、⁻ⁱkjaa ‘PURP’, -ta#mama ‘PST#まま’, ^{-a}u ‘VOL, HORT, INFR’, -e ‘IMP’ などには取れない (e.g. *ar-ikjaa ‘ある-PURP’, *mie-ta#mama ‘見える-PST#まま’, *na-kar-e ‘ない-VLZ-IMP’)。可能を表す ^{-e-} 動詞語幹も動性および意志性に欠けるので、やはり ⁻ⁱkjaa, -ta#mama, ^{-a}u, -e などには取れない。

^{-a}n- ‘NEG’ と -te ‘CTX’ からなる ^{-a}N-de ‘NEG-CTX’ は、次のように ^{-a}ziNに通じる。

(54) [AdvCL hitocu kaw-aN-de] jo-ka goto
(kaw-aziN)

1つ 買う-NEG-CTX 良い-NPST 様子

‘1つ買わなくていいよう’

ただし、^{-a}N-de は過去の文献に見られないので、最近の形式かもしれない。

5.1.9 動詞派生接頭辞

次のように動詞派生接頭辞も僅かに存在する。

- (55) a. oQ-: tor- ‘取る’
b. huQ-: cuzum- ‘縮む’, cume- ‘詰める’
c. hiQ-: kake- ‘掛ける’, cik- ‘付く’

d. ciN-: modor- ‘戻る’, nige- ‘逃げる’, ne^r- ‘寝る’

ただし、いずれの動詞派生接頭辞も動詞派生接尾辞に比べると、生産性が極めて低く、調べた限り、それぞれ (55) の動詞語根にしか付かない。いずれの動詞派生接頭辞も、現実性 (reality) ないし完成性 (perfective) を表す際に好んで用いられるようであるが、詳細は解明できていない。

(56) a. **ut+takur-**³⁶ **ut+koros-**
 打つ+乱雑にする 打つ+殺す
 ↓ 交替規則 (57)

uQtakur- **uQkoros-**
 殴打する 打ち殺す

b. **uw+cuk-** **uw+kake-**
 追う+付く 追う+掛ける
 ↓ 交替規則 (57)

uQcuk- **uQkake-**
 追い付く 追い掛ける

(57) C[-nas] → Q / _+C[-son]

(56) の uQ も動詞派生接頭辞のように映るが、‘打つ’ ないし ‘追う’ を意味することから、ut- または uw- の表層形と見做す³⁷。

(58) uQkuje- ‘壊れる’, uQkujas- ‘壊す’, uQtek- ‘置いとく’ (cf. *kuje-, *kujas-, *tek-)

動詞語幹 (58) は uQ- による派生動詞語幹でも、ut- や uw- を前項とする複合動詞語幹でもない。なぜなら、動詞語根 kuje-, kujas-, tek- が存在しないからである。uQ-X や uQ+X とは分析できないので、uQkuje-, uQkujas-, uQtek- を 1 つの動詞語幹とする。

5.2 形容詞

5.2.1 形容詞語幹および形容詞の構造

4.3 節: (15) で述べたとおり、形容詞とは屈折接尾辞 -ka ないし -u で終わり、動詞と同じく、事態を描写する語である。

(59) a. take=N [A [ASTM=AR taQ]-ka].
 背=GEN 高い-NPST
 ‘背が高い。’
 b. namana [A [ASTM=AR uresju]-u] si-te
 とても 嬉しい-NL する-CTX

³⁶ takur- はいわゆる cramberry 形態素で、単独では動詞語幹になれない。次のように必ず何らかの言語形式を伴って、動詞語幹を形成する (なお、momoN と momozii も cramberry 形態素)。

(XIII) huN+takur- momoN+takur- momozii+takur-
 踏む:NL+乱雑にする ??+乱雑にする ??+乱雑にする
 ‘滅茶苦茶に踏む’ ‘もみくちやにする’ ‘くしゃくしゃに揉む’

³⁷ なお、‘打ち割る’ を意味する動詞語幹の音形は uciwar- が期待されるが、実際は ucuwar-。

‘とても嬉しくて’

- c. koi=ba [A [ASTM [VSTM kuw-ase]-ta]-ka].
 これ=ACC 食う-CAUS-DES-NPST
 ‘これを食わせた。’

形容詞は統語的には動詞に等しいので、清瀬 (1971) のように動詞の一種 (清瀬の用語では「形状動詞」とする手もある。しかし、動詞にしては活用が貧弱なので (詳しくは 5.2.3-5.2.4 節で)、動詞とは区別する。

(59) からわかるように、形容詞語幹および形容詞の構造は次のように単純化できる。

- (60) a. [ASTM AR]- or [ASTM STM-ALZ]- b. [A ASTM-INFL]
 (注) ALZ: 形容詞語幹化

(60)a の [ASTM STM-ALZ]- にあたるのは (59)c の ⁱ-ta- 形容詞語幹だけである。これを除けば、形容詞語幹は形容詞語根と一致する。

なお、形容詞語幹は名詞語幹と同じく、複合語幹の構成要素にはなりうるが、名詞語幹とは異なり、自立性に欠ける。

5.2.2 形容詞語幹

前述のとおり、形容詞語幹を作る形態素は、ⁱ-ta- を除けば、すべて形容詞語根である。動詞語幹とは異なり、形容詞接尾辞との間に連結音を入れることはない。

- (61) a. 形容詞語根: namai- (B) ‘生な’, uresi- (B) ‘嬉しい’, sewasi- (A) ‘忙しい’, sewarasi- (A) ‘うるさい’, sekarasi- (B) ‘うるさい’, sii- (B) ‘酸い’, obu- (A) ‘重い’, waru- (B) ‘悪い’, karu- (A) ‘軽い’, manmaru- (A) ‘まん丸い’, kosu- (??) ‘狡い’, huku- (B) ‘低い’, uu- (B) ‘多い’, ganZjuu- (B) ‘頑丈な’, uto- (B) ‘疎い, 鈍い’, jo- (B) ‘よい’, odoo- (??) ‘意地悪い’, mizjoo- (A) ‘見目よい’, kowa- (B) ‘固い’, na- (B) ‘ない’, tazina- (??) ‘少ない’, oQkina- (B) ‘大きい’, ara- (A) ‘荒い’, joora- (B) ‘柔らかい, 弱い’, aQtara- (??) ‘勿体ない’, komeka- (A) ‘小さい’, databjaa- (??) ‘大きい, 多い’
 b. 形容詞語幹化接尾辞: ⁱ-ta- ‘DES’

5.2.3 形容詞屈折接尾辞

形容詞語幹を形容詞に加工するための接尾辞を形容詞屈折接尾辞と呼ぶ。ただし、形容詞の最終構成要素たるこの接尾辞は、次の2種類しかない。

- (62) a. 連体接尾辞: -ka ‘NPST’
 b. 準体接尾辞: -u ‘NL’
- (63) a. [VCX [NP [ADNCL terebi=mo naN=mo na-ka] zidai]=jai-moi-ta=dee]
 テレビ=も 何=も 無い-NPST 時代=VLZ-POL-PST=CSL
 ‘テレビも何もない時代でしたんで’ 《連体》
- b. [s jakusoku=ba mamoi=naraaba suN-de=mo jo-ka].
 約束=ACC 守る:NPST=COND 住む-CTX=も いい-NPST

- ‘約束を守るならば、住んでもいい。’ 《終止》
- (64) a. [NCL *hijoo*] naQ-ta.
 hija-u
 寒い-NL なる-PST
 ‘寒くなった。’ 《付加部》
- b. [NCX [NCL *too*]=ni] hanare-te
 too-u
 遠い-NL=DAT 離れる-CTX
 ‘遠くに離れて’ 《名詞複合体の基幹》(荒木 1970: 113)
- c. [NCX [NCL *hajoo*]=kara] ki-toi.
 haja-u
 早い-NL=ABL 来る-CONT:NPST
 ‘早くから来てる。’ 《名詞複合体の基幹》

5.2.4 形容詞派生接尾辞

形容詞語幹から何らかの語幹を派生させる接尾辞を形容詞派生接尾辞と呼ぶ。里方言の形容詞派生接尾辞は、いずれも動詞語幹ないし名詞語幹を派生させるもので、形容詞語幹化接尾辞は今のところ得ていない。

- (65) a. 動詞語幹化接尾辞: -ka^r- ‘VLZ’, -gar- ‘ACT’, -mar- ‘INTR’, -me- ‘TR’ (他にもあると思われるが、突き止めていない)
- b. 名詞語幹化接尾辞: -sa (他にもあると思われるが、突き止めていない)
- (65)b の -sa が作る名詞は常に =ⁿi を取り、付加部となる (補部とはならない)。

- (66) saru-doN=ga [NP hoQ-saa] [QCL hitocu kure. hitocu kure-e]=te
 hosi-sa=ⁿi
 猿-TTL=NOM 欲しい-NLZ=ESS 1つ くれる:IMP 1つ くれる-IMP=QUOT
 i-u=baQte
 言う-NPST=CONC
 ‘猿が [握り飯] 欲しさに「1つくれ。1つくれ」と言うけど’

形容詞語根が取りうる接尾辞の種類は動詞語根のそれよりも少なく、形容詞では待遇や過去を表すことも副詞節を作ることもできない。よって、形容詞語根語 (≠形容詞) でこれらを実現するためには、次のように、動詞語幹化接尾辞 -ka^r- で動詞にするか、助動詞 s^e- を利用する必要がある。

- (67) a. taroo-saN=na se=N [v taQ-ka-jai].
 太郎-TTL=TOP 背=GEN 高い-VLZ-HON-PST
 ‘Xさんは背が高くていらっしゃる。’
- b. hoNni [v jo-ka-moi-ta].
 本当に 良い-VLZ-POL-PST
 ‘本当に良かったです。’

- c. [AdvCL se=no [V taQ-kar-jaa]] [V jo-kaQ-ta]=tee.
背=GEN 高い-VLZ-COND 良い-VIZ-PST=CONC
‘背が高ければ良かったのに。’
- (68) a. [AdvCL he+kusoo si-te] moo kuw-are-N=hiko
屁+臭い:NL する-CTX もう 食う-POT-NEG:NPST=だけ
he+kusa-kaQ-ta=to=jo.
屁+臭い-VLZ-PST=NL=SFP
‘屁臭くて、もう食えないくらい屁臭かったのよ。’ (荒木 1970: 261)
- b. [AdCL kaerimici=njaa naNgoto=mo noo si-te] tooge=N sita=de=na
帰り道=LOC.TOP 何事=も 無い:NL する-CTX 峠=GEN 下=LOC=CNF
kizewai-ka=huu=de kicune=ga maQ-toi-jai-moi-ta=te.
気忙しい-NPST=SEEM=ESS 狐=NOM 待つ-CONT-HON-POL-PST=QUOT
‘帰り道には何事もなくて、峠の下でな、気忙しい様子で狐が待っていたらっしゃいましたって。’ (里村教委 2003: 7)

5.3 名詞

5.3.1 名詞語幹および名詞の構造

4.3 節: (15) で述べたとおり、名詞とは屈折せず、項の指示や連用修飾を行なう語である。

- (69) a. [N hacu+jume] mi-ta=taa
初+夢 見る -PST=NL:TOP
‘初夢を見たのは’ (荒木 1970: 150)
- b. [N iQsoo+keNmee] nak-ior-aQ-ta=te.
一生+懸命 泣く -IPFV-HON-PST=QUOT
‘ひどく泣いてらしたって’ (荒木 1970: 110)
- (70) a. [VCx [N saru-waroo]=jaQ-ta=a=jo].
猿-野郎=VLZ-PST=SFP=SFP
‘猿野郎だったわよ。’ (荒木 1970: 110)
- b. [ADN [N he+hui]=no] taisjoo=ga
屁+振る:NL=GEN 大将=NOM
‘屁ふりの大将が’ (荒木 1970: 260)
- c. [NCx neNgazjoo=ba] kak-u.
年賀状=ACC 書く -NPST
‘年賀状を書く。’
- d. [N icu]=mo samu-kai-joQ-ta.
いつも 寒い-VLZ-IPFV-PST
‘いつも寒かった。’

名詞語幹および名詞の構造は次のとおり。

- (71) a. [NSTM NR] or [NSTM STM-NLZ] b. [N NSTM]

5.3.2 名詞語幹の自立性

多くの名詞語幹は自立形式であるが, waroo ‘野郎’, koto ‘事’, sama ‘様’, toki ‘時’, goto ‘様子’ などは自立性に欠ける。したがって, 自立形式の構成要素として用いられる際は, 次のように複合するなり, 連体詞を承けるなりする。

- (72) a. [N saru+waroo]=jaQ-ta=a=jo.

猿+野郎=VLZ-PST=SFP=SFP

‘猿野郎だったわよ。’

- b. [NP [ADN aN] waroo=ga]

あの 野郎=NOM

‘あの野郎が’

- (73) a. [N naN+goto]=mo noo si-te

何+事=も ない:NL する-CTX

‘何事もなくて’

- b. kam-aru-i kotoa kam-aru-i=tai=ga

[NP [ADNCL kam-aru-i] koto]=^wa

噛む-PASS-NPST 事=TOP 噛む-PASS-NPST=NLZ:VLZ:NPST=CONC

‘[鬼に] 食われることは食われるんだけど’

- (74) a. jama+samjaa nige-te i-ta.

[NCX jama+sama=i]

山+様=DAT 逃げる-CTX 行く-PST

‘山の方に逃げて行った。’

- b. jama=no samjaa nige-te i-ta.

[NP [ADN jama=no] sama=i]

山=GEN 様=DAT 逃げる-CTX 行く-PST

‘山の方に逃げて行った。’

- (75) a. cume=N [N kata+goto] si-ta ai

爪=GEN 型+様子 する-PST あれ

‘爪の型のようなあれ’

- b. [NP [ADN sikaisi=N] goto] si-te

仕返し=GEN 様子 する-CTX

‘仕返しのようなこととして’

- c. [NP [ADNCL siibeN su-i] goto] ar-aa=jo

小便 する-NPST 様子 ある-NPST:SFP=SFP

‘小便しそうだわよ。’

(荒木 1970: 107)

- d. agaN gotai=to
 [NP [ADN agaN] goto]#ar-^ru=to
 あんな 様子#ある-NPST=NLZ
 ‘あんなようなの’

本稿では、このような名詞語幹を「形式名詞語幹」と呼ぶ。次に挙げる =huu ‘SEEM’, =soo ‘SEEM’ も一見形式名詞語幹に似ているが、連体詞を承けないので、接尾語 (enclitic) とする。

- (76) a. [VCx toi=huu=ja=do].

取る:NPST=SEEM=VLZ:NPST=SFP

‘取るそうだぞ。’

- b. soo [VP jaQ-ta=huu=jai=to]=jo

そう やる-PST=SEEM=VLZ:NPST=NLZ=SFP

‘そうやったそうなのよ’

- (77) a. taroo=no aNSaN=ga kaeQ-te ku-ru=soo=jai.

太郎=GEN 兄=NOM 帰る-CTX 来る-NPST=SEEM=VLZ:NPST

‘太郎の兄さんが帰ってくるそうだ。’

- b. doNkjuu-doN=to tomaasu-zjoo=to josi=no ai tokoi=de asuu-de

蛙-TTL=COM イタチ-TTL=COM 葦=GEN ある:NPST 所=LOC 遊ぶ-CTX

[VP oQ-ta=soo=jai].

いる-PST=SEEM=VLZ:NPST

‘蛙さんとイタチさんとが葦のあるところで遊んでたそうだ。’ (里村教委 2003: 9)

5.3.3 名詞派生接尾辞

名詞語幹から何らかの語幹を派生させる接尾辞を名詞派生接尾辞と呼ぶ。里方言の名詞派生接尾辞はほとんど名詞語幹化接尾辞で、その他のものとしては、次のように動詞語幹を派生させる -mek- ‘INTR’ しか確認していない。

- (78) asa-mek-jai-moos-a=N?

[V [VSTM [NR asa]-mek-ⁱjar-ⁱmos]-^ru]=a=na.

朝-INTR-HON-POL-NPST=SFP=Q

‘おはようございます’

名詞語幹化接尾辞は、待遇を表すものと連合複数 (associative plural; cf. Corbett 2000) を表すものに分けられる。派生名詞語幹 omai-sama-taaci ‘2-TTL-PL’ の構造が示すとおり、両者が同時に現れる際は、前者が後者に先行する。

- (79) a. 待遇接尾辞

i. 上位待遇: -cjaN, -saN, -sama, -zjoo, -doN

ii. 下位待遇: -buroo ‘奴’, -kuroo ‘駄目な奴’

- b. 連合複数接尾辞: -taaci

-cjaN, -saN, -sama, -zjoo は、大まかに言えば、次のような名詞語幹に付く。

- (80) a. -cjaN: 親しみを感じる人物の名前を指す名詞語幹。
 b. -saN: 敬意を払っている人物やその名前を指す名詞語幹。
 c. -sama: 神仏を指す名詞語幹や上位待遇の2人称名詞語幹 omai。
 d. -zjoo: 親しみを感じる女性やその名前を指す名詞語幹。

-doN は, (81)a のように, 親しみを感じる男性やその名前を指す名詞語幹に付くのが普通であるが, (81)b のように, 女性を指す名詞語幹にも付きうる。

- (81) a. zii-saN-doN ‘爺さん殿’ b. baa-saN-doN ‘婆さん殿’

下位待遇の -buroo と -kuroo は, 現時点での調査結果によれば, 次の名詞語幹にしか付かない。

- (82) a. mogai tamagai
 駄々をこねる:NL たまがる:NL
 ↓
 mogai-buroo tamagai-buroo
 理屈者 臆病者
- b. zii baa suQpa
 爺 婆 ??
 ↓
 zii-kuroo baa-kurooo suQpa-kuroo
 老いぼれ爺 老いぼれ婆 いい加減な人

次に挙げる goroo も, 意味の面では -buroo, -kuroo に似ている。しかし, (83)b のように, 自立性を欠く形式名詞語幹や形容詞語幹にも付くので, 名詞語幹化接尾辞ではなく, 形式名詞語幹とする

- (83) a. kizu hijuuzi desjabai jase-Ø uu+ne-Ø
 傷 怠け でしゃばる:NL 痩せ-NL 多い+寝る-NL
 ↓
 kizu+goroo hijuuzi+goroo desjabai+goroo jase+goroo uune+goroo
 乱暴者 怠け者 でしゃばり 痩せっぽっち よく寝る人
 asa+ne-Ø uso+{ juu / hui }
 朝+寝る-NL 嘘+{ 言う / 振る }NL
 ↓
 asane+goroo usohui+goroo
 朝寝坊 嘘つき
- b. zi kiN kida hiNja hija-sjaa jowa-
 地 金 ?? 貧家? 寒い-NLZ? 弱い
 ↓
 zi+goroo kiN+goroo kida+goroo hiNja+goroo hijasjaa+goroo jowa+goroo
 地元民 睾丸 硬い糞 貧乏人 寒がり 弱虫

5.4 副詞, 連体詞

4.3 節: (15) で述べたとおり, (i) 副詞とは屈折せず, 連用修飾を行なう語を, (ii) 連体詞とは屈折接尾辞 -N, -gaN, -gaNta, -gaNmeeta のいずれかで終わり, 名詞句の構成要素として連体修飾を行なう語を指す。

- (84) a. moo (B) ‘もう’, namana (A) ‘たくさん, とても’, guNbai (??) ‘一杯’, cubakai (??) ‘大体’, heesii (??) ‘いきなり’, manekjaa (??) ‘たまに’, gaQcui (??) ‘丁度’, naikjaa (??) ‘なぜ’, mohjaa (??) ‘もはや’, etc.
- b. DR-u (DR: 指示語語根) ‘こう, etc.’, DR-gaN ‘こんなに, etc.’, DR-gaNte ‘こうして, etc.’
- c. ciQ-to ‘ちよつと’, cibiQ-to ‘ちよつと’, cjobiQ-to ‘ちよつと’, heQ-to ‘すぐに’, gabaa-to ‘ごっそり’, kociN-to ‘小さく’, soroQ-to ‘静かに’, muriQ-to ‘あまりに’, jurui-to ‘ゆるりと’
- d. doQci+mici ‘いずれにせよ’
- e. ciN~ciN ‘少しずつ’, kii~kii-to ‘さっさと’
- (85) a. DR-N ‘この, etc.’, DR-gaN ‘こんな, etc.’, DR-gaNta ‘こうした, etc.’, DR-gaNmeeta ‘こんなめいた, etc.’
- b. N=no, N=ga

DR-N 以外の連体詞は, 準体助詞 =to で名詞に変えることもできる。

- (86) a. [_{NCX} [_{ADN} kogaN]=to=ba] agaN su-i=jokja
 こんな=NLZ=ACC あんなに する-NPST=CMP
 ‘こののをああするよりか’
- b. [_{NCX} [_{ADN} mukasi=N]=to=N] cuzui-te
 昔=GEN=NLZ=NOM 続く-CTX
 ‘昔のが続いて’
- c. [N [_{ADN} taroo=ga]=to]=jai=ka=mo wakar-aN=naa.
 太郎=GEN=NLZ=VLZ:NPST=Q=も わかる-NEG:NPST=SFP
 ‘太郎のかもしれないなあ。’

副詞および連体詞の調査はまだ十分ではない。これらの記述は今後の課題である。

5.5 接尾語

里方言は日本語と同じく, 様々な種類の形式に付いて, 特定の語を派生させる接尾語を数多く有している。

5.5.1 動詞語幹を派生させる接尾語

次のように, =jar- ‘VLZ’ は名詞 (=名詞語幹) に付いて, 動詞語幹を派生させる。

- (87) a. araa [V [VSTM [NPasokoN]=jai]-mos-u].
 あれ:TOP パソコン=VLZ-POL-NPST
 ‘あれはパソコンです。’
- b. [V [VSTM [NP [ADN sogaNta] toki]=jai]-moi-ta]=na.
 そうした 時=VLZ-POL-PST=SFP
 ‘そんな時でしたな。’

自立性を欠く形式名詞語幹 (cf. 5.3.2 節) に =jar- が接尾する場合、次のように、形式名詞語幹は必ず複合するなり、連体詞を承けるなりしている。したがって、=jar- が付く形式は名詞語幹ではなく、名詞である。

- (88) a. [N saru+waroo]=jaQ-ta=a=jo.
 猿+野郎=VLZ-PST=SFP=SFP
 ‘猿野郎だったわよ。’
- b. [NP [ADNCL hoNnii jo-ka] koto]=jai=naa.
 本当に よい-NPST 事=VLZ:NPST=SFP
 ‘本当にいいことだなあ’

=jar- は派生力に欠け、(50)f-g (p. 77) の ⁱ-jar- ‘HON’ と ⁱ-mos- ‘POL’ しか取れない。その上、前者を取るのは非常に稀である (2010 年に調査を始めてから、=jar- 以外に関する面接調査で偶然 1 例を得たのみ)

- (89) a. koko=N huto=jai-jai=naa.
 huto=jar-ⁱjar-^ru=na
 ここの 人=VLZ-HON-NPST=CFP
 ‘この人でいらっしゃるな。’

5.5.2 名詞を派生させる接尾語

5.5.2.1 準体助詞

次のように、(90)–(91) =to ‘NLZ’, =siko ‘だけ’ は連体詞に、(92)–(93) =dake ‘だけ’, =baQkai ‘ばかり’ は名詞ないし連体節 (≠連体詞) に、(94) =ka は名詞、副詞、連体詞に付いて、名詞を派生させる。本稿ではこのような接尾語を「準体助詞」と呼ぶ。

- (90) a. [NCX [N [ADN kogaN]=to]=ba] agaN su-i=jokja
 こんな=NLZ=ACC あんなに する-NPST=CMF
 ‘こんなのをああするよりか’
- b. koN riNgaa [VCX [N [ADNCL kinoo koo-te ki-ta]=to]=jai=doo].
 この りんご:TOP 昨日 買う-CTX 来る-PST=NLZ=VLZ:NPST=SFP
 ‘このりんごは昨日買ってきたものだよ。’
- (91) a. [N [ADN dogaN]=siko]=jai-mos-u=to?
 どんな=だけ=VLZ-POL-NPST=NLZ
 ‘どれだけですか?’

- b. [N [ADNCL ee ai]=siko] moQ-te ki-te kui-jai-mos-e.
 家:LOC ある:NPST=だけ 持つ-CTX 来る-CTX くれる-HON-POL-IMP
 ‘家にあるだけ持って来てくださいませ。’
- (92) a. [NCX [N [NPkawa]=dake]=ba] ku-ta.
 皮=だけ=ACC 食う-PST
 ‘皮だけを食べた。’
- b. [N [ADNCL ee ai]=dake] moQ-te ki-te kui-jai-mos-e.
 家:LOC ある:NPST=だけ 持つ-CTX 来る-CTX くれる-HON-POL-IMP
 ‘家にあるだけ持って来てくださいませ。’
- (93) a. [N [N NNma-ka=to]=baQkai] ku-ta.
 美味しい-NPST=NLZ=ばかり 食う-PST
 ‘美味しいのばかり食べた。’
- b. [NP [ADN [N [ADNCL ku-te nom-u]=baQkai]=no] seekacu]
 食う-CTX 飲む-NPST=ばかり=GEN 生活
 ‘食って飲むばかりの生活’
- (94) a. araa [N [N naN]=ka] siQ-toi=do.
 あれ:TOP 何=Q 知る-CONT=CFP
 ‘あれは何か知ってるぞ’
- b. [N [ADNCL raineN ik-e-ru]=ka] [N [ADV doo]=ka] wakar-aN.
 来年 行く-POT-NPST=Q どう=Q わかる-NEG:NPST
 ‘来年行けるかどうかわからない。’

準体助詞によって派生する形式は複合できないので、名詞語幹ではなく、名詞である。それらのうち、(90)–(94)bのように連体節を承けるものは、名詞節としても分析できる。ただし、主格や対格 (cf. 6.1.1–6.1.2, 6.1.5 節) を受けることができるのは、=to 節と =ka 節に限られる (前者の用法は 6.5.1 節で、後者のそれは 6.5.2 節で詳しく記述する)。

名詞のように事物を指示する =to に繫辞動詞 (語幹) =jar- ‘VLZ’ ないし =ja //de=^wa// ‘VLZ.CTX=TOP’ が接尾すると、しばしば =cja(r)- なる。

- (95) a. koN riNgaa [N [ADNCL kinoo koo-te ki-ta]=to]=jai=doo.
 この りんご:TOP 昨日 買う-CTX 来る-PST=NLZ=VLZ:NPST=SFP
 ‘このりんごは昨日買ってきたものだよ。’
- b. koN kuruma=a [NP oi=ga=to]=ja na-ka=doo.
 この 車=TOP 1SG=GEN=NLZ=ESS:TOP ない-NPST=SFP
 ‘この車は私のではないよ。’
- (96) a. koN riNgaa kinoo koo-te ki-ta=cjai=doo.
 [NCL kinoo kaw-te ki-ta=to]=jar-^ru=doo
 この りんご:TOP 昨日 買う-CTX 来る-PST=NLZ=VLZ-NPST=SFP
 ‘このりんごは昨日買ってきたものだよ。’

b. koN kuruma=a oi=ga=cjaa na-ka=doo.

[_{NP} oRe=ga=to]=ja

この 車=TOP 1SG=GEN=NLZ=ESS:TOP ない-NPST=SFP

‘この車は私のではないよ。’

(95) は非連声形式 =to=ja(r-) で, (96) は連声形式 =cja(r-) である。この連声形式は常に =cja(r-) であって, 後述の =sa(r-) や =ta(r-) とはならない。

いわゆるノダ文の「のだ」に相当する =to=jar- は, =cjar- の他, =sar- や =tar- でも実現しうる。これらは集落や性別によるバリエーションで, おおむね, (i) =cjar- は村西で, (ii) =sar- は藪上と藪中で, (iii) =tar- は藪下と村東で使用されている。また, =sa(r-) は女性が使用する傾向にあるようである。

(97) a. mizuciQcii doQ=ka hicihacineN+mae cuku-ta koto=ga
水鉄砲 どこ=Q 7,8年+前 作る-PST こと=NOM
ai=cjai=do.

ある:NPST=NLZ:VLZ:NPST=SFP

‘水鉄砲を7,8年前に作ったことがあるんだよ。’

b. ima=wa na-ka-mosai=joo=moN.

今=TOP ない-VLZ-POL:NLZ:VLZ:NPST=INFR=SFP

‘今はないのでしょうか。’

c. koNmeN-kaQ-te=mo kiQ-te hes-eba koQpjaa nai=tai=dee.

小さい-VLZ-CTX=も 切る-CTX 干す-COND コップ:DAT なる.NPST=NLZ:VLZ:NPST=CSL

‘小さくても, 切って干せば, コップになるんだから。’

5.5.2.2 モダリティ接尾語

次のように, 認識的モダリティを表す =joo ‘INFR’, =hoo ‘SEEM’, =soo ‘SEEM’ は動詞類に付いて, 名詞節を形成する。これらの名詞節も, 前節で取り上げた =siko, =dake, =baQkai が作る名詞節と同じく, 主格や対格を受けることができない (=joo 節の用法は 6.5.2 節で詳しく記述する)。

(98) a. [N [_{ADNCL} dokee iQ-ta]=joo] sir-aN.

どこ:DAT 行く-PST=INFR 知る-NEG:NPST

‘どこに行ったか知らない。’

b. [NCX [N [_{ADNCL} naN+niN ku-i]=joo]=de] ciga-u.

何+人 来る-NPST=INFR=INST 違う-NPST

‘何人来るかで違う。’

(99) a. [V [N [_{ADNCL} taroo=no aNsaN=ga kaeQ-te ku-i]={ soo / hoo }]=jai].

太郎=GEN 兄=NOM 帰る-CTX 来る-NPST=SEEM=VLZ:NPST

‘太郎の兄さんが帰ってくるそうさ。’

b. [NCX [N [_{ADNCL} tooge=N sita=de=na kizewai-ka]=hoo]=de] kicune=ga

峠=GEN 下=LOC=CNF 気忙しい-NPST=SEEM=ESS 狐=NOM

maQ-toi-jai-moi-ta=te.

待つ-CONT-HON-POL-PST=QUOT

‘帰り道には何事もなくて、峠の下でな、気忙しい様子で狐が待っていらっしましたって。’
(里村教委 2003: 7)

5.5.3 副詞, 連体詞を派生させる接尾語

副詞を派生させる接尾語は次のように, 引用助詞 =to, =(Q)te は文に付いて, 副詞を派生させる。

(100) a. [Adv [sjakuiN-taci=dake=de]=te] ju-u hanas-i+a-i=o
役員=PL=だけ=INST=QUOT 言う-NPST 話す-NL+合う-NL=ACC
‘役員たちだけで, という話をすればと思っているわけよ。’

b. [Adv [scuzuke-te ik-an-ja nar-aN]=to] omoo=to=jo=na.
続ける-CTX 行く-NEG-COND なる-NEG:NPST=QUOT 思う:NPST=NLZ=SFP=SFP
‘続けていかなければならないと思うのよね。’

c. kodomo moc-u okaasaN-taci=moo [Adv [smata kotosi=mo
子ども 持つ-NPST お母さん-PL=も また 今年=も
ai-mos-u=to=N]=te] juu-te
ある-POL-NPST=NLZ=Q=QUOT 言う-CTX
‘子どもを持つお母さんたちも「また今年もあるんですか?」と言って’

=to, =(Q)te が作る派生副詞のうち, (100)b-c のように連体節を承けるものは, 引用の副詞節としても分析できる (引用節の用法は 8.6 節で詳しく記述する)。

そして, 次のように, 属格助詞 =ga, =no は名詞に付いて, 連体詞を派生させる。後者は, N で終わる語に接尾する場合は必ず =no で実現するが, その他の環境では =N と自由に交替する。

(101) a. oi=ga [N [N aQko]=ga] sigoto=ba kasee si-te kuru-i=ga.
1SG=NOM 2SG=GEN 仕事=ACC 加勢 する-CTX くれる-NPST=SFP
‘私がおまえの仕事を手伝ってやるよ。’

b. omae=N=taa=naa mise=N jo-ka moN=baQkai
[N [ADN [N omae]=no]=to]=^wa=naa [NP [ADN mise=N] [NP jo-ka moN]]=baQkai
2SG=GEN=NLZ=TOP=CNF 店=GEN いい-NPST もの=ばかり
kuu-jai=dee.

食べる-HON:NPST=CSL

‘あなたのはなあ, 店のいいものばかり食べなさるから。’

第6章 統語論

6.1 格

里方言の格配列は基本的には対格主格型で、述部 (V) と中心項を指す補部 (=自動詞主語 (S), 他動詞主語 (A), 他動詞目的語 (O)) の並びは, (i) 自動詞節では (S)V, (ii) 他動詞節では (A)(O)V (OAV も可能) となる。しかし, 以下に述べるように, 当方言の主格標示は単純ではなく, (i) 名詞の種類, (ii) 待遇の有無, (iii) 節の他動性に影響される (なお, 本節の記述は藪上集落の調査結果による)。

6.1.1 基本配列《主節, 待遇なし》

本節では格の基本配列を記述する。

格標示とその配列は, 一言語中であっても, 節や補部の種類によって変わるということが報告されている (cf. Harris 1990)。そのため, 格配列を検討する際は, (i) 条件を細分化し, (ii) 各条件毎に他動詞主語, 他動詞目的語, 自動詞主語を調べるという手順が推奨されている (cf. 角田 2009)。よって, 本稿で格配列を記述する際は, 節の種類を主節に限定する (なお, 従属節の格配列は調査不足につき, 今後の課題とする)。

また, 里方言の主格標示は, 当該名詞に対する待遇の有無によっても変わるという点で特徴的である。そこで, 待遇を欠く例に限定し, 格の基本配列をまとめると, [表 20] のようになる。

表 20 里方言の格の基本配列《主節, 待遇なし》

		人称名詞		親族	人間	動物	無生物
		一人称	二人称	固有名詞			
他動詞	主格	=ga	=ga	=ga	=ga	=ga	=no
意志自動詞	主格			=no, =ga		=no, =ga	
非意志自動詞	主格			=no, =ga		=no, =ga	
他動詞	目的語	=ba, =o	=ba, =o	=ba, =o	=ba, =o	=ba, =o	=ba, =o

まず, 目的語の標示から述べると, 目的語は基本的に =ba によって標示され, =o によっても標示される。=ba は =o と自由に交替でき, =ba と =o の関係は, 文法的に使い分けられる類のものではないようである (=ba, =o については 6.1.5.2 節)³⁸。

一方, 主格は =ga または =no によって標示される。=no は, 末尾が N である語に接尾する際は必ず =no で実現するが, その他の環境では =N でも実現する。

=ga と =no は, 次節以降で詳述するとおり, 自由に交替できるわけではない。[表 20] のとおり,

³⁸ =o は伝統形式ではなく, 標準語などとの接触によってもたらされたものであると考えられる。

=ga および =no の分布は階段状になっており、次のような傾向が見いだせる。

(1) a. 名詞階層における序列の高い (= [表 20] で左に位置する) 名詞ほど、すなわち、動
作主になりやすい名詞ほど、=no より =ga で主格標示される。

b. 他動性の高い (= [表 20] で上に位置する) 節ほど、=no より =ga で主格標示する。

このような分布の様相について、十分には考察できていないが、(1)a に関連する動作主性も、つ
まるところ、他動性の変数の 1 つと考えられることから (Hopper and Thompson 1980)、節の他動性
が =ga と =no の分布を左右すると考えられる。すなわち、他動性の高い節は =ga で、そうでない
節は =no で主格標示するのである。

6.1.2 主格標示

本節では、主格標示の使い分けを中心とする格配列を記述する

6.1.2.1 名詞階層との関係

(A) 人称名詞

同等以下の人物を指す人称名詞に主格を与える時は、もっぱら =ga が用いられる。次のように、
述部が他動詞からなる (2)a, 意志自動詞からなる (2)b, 非意志自動詞からなる (2)c のいずれにお
いても、=ga しか用いられない。

- (2) a. aN={ ga / #no } waQ-tai=joo=ga.
おまえ=NOM 割る -PST-INFR=SFP
‘おまえが割ったでしょうが。’ 《他動詞節》
- b. aN={ ga / #no } saigee hasir-e.
おまえ=NOM 最後:DAT 走る -IMP
‘おまえが最後に走れ。’ 《意志自動詞節》
- c. aN={ ga / #no } taoru-i=doo.
おまえ=NOM 倒れる -NPST=SFP
‘おまえが倒れるよ。’ 《非意志自動詞節》

(B) その他の人間名詞

その他の人間名詞 (= 親族名詞, 固有名詞, 人間名詞) に主格を与える場合は、節の種類によっ
て使う助詞が異なる。

まず、他動詞節および意志自動詞節の主格は =ga で標示され、=no は許容されない。

- (3) [「荷物はいつ送ってくれるのか?」と電話で聞かれた場面]
asita zinaN={ ga / #no } okui=doo.
明日 次男=NOM 送る:NPST=SFP
‘あした次男が送るよ。’ 《親族名詞, 目下, 他動詞》
- (4) otooto={ ga / #no } ik-imoos-aa.
弟=NOM 行く -POL-NPST:SFP

‘弟が行きますよ。’

《親族・固有名詞，目下，意志自動詞》

(3) は，親族名詞 *zinaN* ‘次男’ に主格を与える他動詞節である。主格は =*ga* で標示され，=*no* との交替は許容されなかった。また，(4) は，親族名詞 *otooto* ‘弟’ に主格を与える意志自動詞節である。ここでも主格は =*ga* で標示され，=*no* との交替はやはり許容されなかった。

一方，非意志自動詞節の主格は基本的に =*no* で標示される。なお「基本的に」と述べるのは，=*ga* も許容されるためであるが，面接調査の第1回答も内省判断で適切とされるのも，=*no* の方である。

(5) *mago*={ *ga* / *no* } *Nmare-ta*
 孫=*NOM* 生まれる-*PST*

‘孫が生まれた。’

《親族名詞，目下，非意志自動詞》

(5) は親族名詞 *mago* ‘孫’ に主格を与える非意志自動詞節である。ここでは =*ga* も許容できるとのことであるが，話者が好ましいと判断したのは =*no* の方であった。

(C) 動物名詞

動物名詞に主格を与える場合，他動詞節では常に =*ga* が，自動詞節では基本的に =*no* が用いられる。

(6) a. *iN*={ *ga* / #*no* } *wai=doo.*
 犬=*NOM* 割る:*NPST=SFP*

‘犬が割るよ。’

《他動詞節》

 b. *iN*={ *ga* / *no* } *de-te* *ki-ta.*
 犬=*NOM* 出る-*CTX* 来る-*PST*

‘犬が出てきた。’

《意志自動詞節》

 c. *neko*={ *ga* / *no* } *Nmare-ta=na*
 猫=*NOM* 生まれる-*PST=SFP*

‘猫が生まれたな。’

《非意志自動詞節》

(6)a は，動物名詞 *iN* ‘犬’ に主格を与える他動詞節である。主格は =*ga* で標示され，=*no* との交替は許容されないという³⁹。一方，(6)b–c は，*iN* ‘犬’ ないし *neko* ‘猫’ に主格を与える自動詞節である。ここでは =*ga* による主格標示も許容されるが，基本的には =*no* が用いられる。

(D) 無生物名詞

無生物名詞に主格を与える場合，基本的に =*no* が用いられる。(7)a は，主語が無生物名詞 *kawa* ‘川’，動詞が *nagare-* ‘流れる’ の他動詞節であり，(7)b は，主語が無生物名詞 *kumo* ‘雲’，動詞が *dete#kur-* ‘出てくる’ の意志自動詞節であり，(7)c は，主語が無生物名詞 *hoN* ‘本’，動詞が *ar-* ‘ある’ の非意志自動詞節である。いずれも =*ga* を許容するが，第1回答や，好ましいとされるのは =*no* である。

³⁹ 2014年11月の調査において一度だけ，=*no* も許容できるという回答を得た。しかし，2011–14年に行なった調査で =*no* が許容されたのは，この一度だけである。今回の記述では，=*no* を許容しないという多数の結果をとった。

- (7) a. ziNka=N maNnaka=ba kawa={ ga / no } nagare-toi.
 人家=GEN 真ん中=ACC 川=NOM 流れる-CONT:NPST
 ‘人家の真ん中を川が流れている。’ 《他動詞節》
- b. kumo={ ga / no } de-te ki-ta=ga=ja.
 雲=NOM 出る-CTX 来る-PST:NPST=SFP=SFP
 ‘雲が出てきたなあ。’ 《意志自動詞節》
- c. hoN={ ga / no } ai=gaa.
 本=NOM ある:NPST=SFP
 ‘本があるよ。’ 《非意志自動詞節》

6.1.2.2 待遇との関係

先述のように、当方言では主語への待遇が加わることで、主語標示 =ga, =no の使用状況が変わる。目上の人物を指す名詞に主格を与える場合、次のような分布となる。

表 21 里方言の格配列《主節，待遇あり》

		二人称 (目上)	親族・固有名詞 (目上)	人間名詞 (目上)
他動詞節	主格	=ga, ?=no	=ga, ?=no	=ga, ?=no
意志自動詞節	主格		?=ga, =no	?=ga, =no
非意志自動詞節	主格			
他動詞節	対格	=ba, =o	=ba, =o	=ba, =o

待遇を欠く [表 20] に比べ、=no の範囲が広がっていることが窺える⁴⁰。以下、それぞれ記述する。

まず、目上の二人称名詞 omai-sama ‘あなたさま’ に対する主格標示には主に =ga が用いられ、面接調査においても、=ga と =no との入れ替えの可否を尋ねたところ、多くの場合は動詞の種類に関わらず、=ga の方を用いると回答された。しかし回答者によっては、=ga を主に用いるものの、=no も許容するとの回答もあった⁴¹。(8)a は他動詞節、(8)b は意志自動詞節、(8)c は非意志自動詞節で、主格名詞はいずれも omai-sama である。いずれの例でも、第 1 回答も話者が好むのも =ga であるが、中には =no も許容できるという回答もあった (ただし、許容するという回答は、今回の調査の中では少なく、許容度が高いようには見えなかった)。

⁴⁰ この傾向について、十分な考察はできていないが、待遇も、動作主性と他動性に関連すると考えられ、注目される。動作主性を下げることによって待遇を高める、というのは通言語的にも見られる現象である。そして、6.1.1 節にも考察を述べたように、当方言では、動作主性が低い主格標示に =no が用いられている。ここから現時点の仮説としては、待遇を高める操作の一環として、=no で動作主を下げるという動機が加わった結果、=no の領域が繰り上がっていると見ている。

⁴¹ 断言はできないが、待遇がある場合の =ga と =no の使用については、男女差や個人差が大きいのかもしれない。同じ集落内での調査において、男性は =ga で回答することが多かったが、女性は =no を許容することが多く、傾向があるように窺えた。

- (8) a. omai-sama={ ga / ?no } war-ijai-moi-tai=joo=ga.
 2SG-TTL=NOM 割る-HON-POL-PST=INFR=SFP
 ‘あなたさまが割りなされたんでしょが。’ 《他動詞節》
- b. [リレーの順番決めの場面]
 omai-sama={ ga / ?no } icibaN hazimee hasiQ-te kui-jai-mos-e.
 2SG-TTL=NOM 一番 始め:DAT 走る-CTX くれる-HON-POL-IMP
 ‘あなたさまが一番初めに走ってくださいませ。’ 《意志自動詞節》
- c. omai-sama={ ga / ?no } taore-jai-mos-u=doo
 2SG-TTL=NOM 倒れる-HON-POL-NPST=SFP
 ‘あなたさまが倒れなさいますよ。’ 《非意志自動詞節》

人称名詞以外の人間名詞(親族・固有名詞, 人間普通名詞)に主格を与える場合, 他動詞であるか自動詞であるかによって, =no の許容度が変わる。他動詞の場合は主に =ga が用いられる。=ga と =no の入れ替え可能性を尋ねても, 多くの場合, =no は許容されないという回答であった。ただし, 話者によっては, =ga を主に用いるものの, =no も許容できるとのことである⁴²。

一方, 自動詞の場合は, 主に =no が用いられる。=ga と =no の入れ替え可能性を尋ねると, 可能であるとの回答が得られたものの, 第1回答も話者が好むのも =no の方であった。参考として, 親族名詞の例を次に挙げる。

- (9) a. otoQcjan={ ga / ?no } war-ijaQ-ta=doo.
 お父さん=NOM 割る-HON-PST=SFP
 ‘お父さんが割られたよ。’
- b. otoQcjan={ ga / no } kaeQ-te ki-jaQ-ta.
 お父さん=NOM 帰る-CTX 来る-HON-PST
 ‘お父さんがお帰りになった。’
- c. oziicjan={ ga / no } or-ijai=doo.
 おじいちゃん=NOM おる-HON:NPST=SFP
 ‘おじいちゃんがいらっしゃるよ。’

(9)a は他動詞節で, 主格を受けるのは目上の親族名詞 otoQcjan ‘お父さん’ である。この場合は基本的に =ga が用いられ, =no はあまり許容されない (=no も許容できるという回答もあった)。(9)b は意志自動詞節で, 主格主格を受けるのは同様に otoQcjan ‘お父さん’ である。この場合は基本的に =no が用いられ, =ga も許容される。(9)c は非意志自動詞節で, 主格を受けるのは目上の親族名詞 oziicjan ‘おじいちゃん’ である。この場合も基本的に =no が用いられ, =ga も許容される。

6.1.3 格助詞

名詞の格関係は格助詞で標示する。里方言の格助詞の音形, 機能, 意味を [表 22] に示す。

⁴² これも, 二人称名詞への待遇と同様, 個人差, 或いは男女差が大きいのかもしれない。二人称名詞の場合と同じ傾向が窺えた。

表 22 格助詞一覧

標示項	名称	音形	統語機能	意味
N/A	属格	=ga, =no	連体詞形成	所有, 所属, 属性
中心項	主格	=ga, =no	主語 (S/A) の標示	無標: 動作主, 自動詞節のテーマ (theme) 受動: 被害者, 他動詞節のテーマ
	対格	=ba	目的語 (O) の標示	他動詞節のテーマ
	与格	= ⁿ i	間接目的語の標示	無標: 受け手, 変化の結果, 目的地, 移動の目的となる事象, 存在の場所, 動作の時点 受動: 動作主 使役: 動作主=被使役者
周辺項	所格	=de		空間, 領域
	具格	=de		道具, 材料, 手段, 時間量, 原因
	奪格	=kara		起点, 経路, 手段, 材料
	共格	=to		事態をともに成立させる相手
	比較格	=juukja		比較対象
	限界格	=made		限界点

(注) 無標: 有標の -^sase- ‘CAUS’ や -^rare- ‘PASS’ によらないヴォイス。能動 (active) に近い。

それぞれの使用範囲は [表 23] のとおりである。以下, 各形式の意味・用法を記述する。

表 23 格助詞の使用範囲

	形式	中心項の標示	周辺項の標示	取り立て
属格	=ga, =no			
主格	=ga, =no	✓		
対格	=ba	✓		
与格	= ⁿ i	✓	✓	
向格	samja		✓	
所格	=de		✓	
具格	=de		✓	
奪格	=kara		✓	
共格	=to		✓	
比較格	=juukjaa		✓	
限界格	=zui, =made		✓	(✓)

6.1.4 属格助詞 =ga, =no

属格助詞は =ga と =no の 2 種である。属格助詞の統語機能は連体修飾であり, 所有を始め, 属性, 所属, 全体/部分の関係などを広く表す。たとえば, 次のようなものである。

(10) a. taroo-saN=*no* moN=jai=doo

太郎-TTL=GEN もの=VLZ:NPST=SFP

‘太郎さんのものだよ。’

《所有》

b. isi=N hasira=ni atama=ba uQcuke-ta

石=GEN 柱=DAT 頭=ACC 打ちつける-PST

‘石の柱に頭をぶつけた。’

《属性》

属格助詞 =ga, =no は、これを取る名詞の階層と待遇に応じて使い分けられる。まず、当該名詞に対する上位待遇を欠く (=同等以下である) 場合は、階層に応じて次のように使い分けられる。

表 24 属格《待遇なし》

人称名詞		親族・固有名詞 (同等・目下)	人間 (同等・目下)	動物	無生物
一人称	二人称				
=ga	=ga	=ga, =no	=ga, =no	=no	=no

表 25 属格《待遇なし》

二人称	親族・固有名詞	人間名詞
(目上)	(目上)	(目上)
=no	=no	=no

まず、人称名詞は =ga を取る。

(11) oi=ga tebukuro

1SG=GEN 手袋

‘私の手袋’

《一人称名詞》

(12) omai=ga tebukuro

2SG=GEN 手袋

‘おまえの手袋’

《二人称名詞》

親族・固有名詞、人間普通名詞は基本的に =ga を取る。ただし、=no も許容する。

(13) boozu=ga tebukuro

息子=GEN 手袋

‘息子の手袋’

《親族名詞》

(14) [友人である太郎の落しものについて]

太郎=ga=to=jai=ka=mo wakar-aN=naa.

太郎=GEN=NLZ=VLZ:NPST=Q=も わかる-NEG:NPST=SFP

‘太郎のかもしれないなあ。’

《固有名詞》

(15) aN ko=ga=to=jai=doo.

あの 子=GEN=NLZ=VLZ:NPST=SFP

‘あの子のだよ。’

《人間普通名詞》

動物名詞と無生物名詞は =no を取る。これらが =ga を取ることはない。

- (16) iN=no kobo
 犬=GEN 子ども
 ‘犬の子ども’

《動物名詞》

一方、目上の人物を指す名詞は =no を取る。

- (17) omai-sama=no tebukuro
 2SG-TTL=GEN 手袋
 ‘あなたさまの手袋’

《二人称名詞・目上》

- (18) otoQcjaN=no=to=jai=doo.
 お父さん=GEN=NLZ=VLZ:NPST=SFP
 ‘お父さんのだよ。’

《親族名詞・目上》

また、属格助詞 =ga にさらに =no を付加する、再属格と見られる例もある。次の (19)a は、被所有者が K という家族で、所有者名詞の一人称単数 oi に =ga が付き、さらに =no が =ga に接尾している。なお、このような例は、被所有者が家族である場合に限らず、たとえば、(19)b のように被所有者が物 (例文では ie) の例もある。また、所有者側の名詞の性質には、現時点では特に制限は見られず、(19)c のように複数形に、(19)a のように普通名詞に付く場合もある。

- (19) a. oi=ga=N K
 1SG=GEN=GEN 個人名
 ‘私のところの K’
 b. oi=ga=N ie
 1SG=GEN=GEN 家
 ‘私たちの家’
 c. oi=do=ga=N ojazi=do
 1=PL=GEN=GEN 親父=PL
 ‘私たちの親父たち’
 d. koocjooseNsee=ga=N ko
 校長先生=GEN=GEN 子
 ‘校長先生のところの息子’

なお、属格助詞 1 つと =ga=no の違いについては、まだ調査不十分であるが、面接調査での回答によると、単純な属格の方は、所有の含意がその所有者名詞の指示範囲のみに留まるのに対し、=ga=no の場合は、その所有者名詞を含む構成員全体での所有を含意するとのことであった。たとえば、(20)a は属格助詞 1 つの例であるが、所有者としては oi1 人が含意されるという。一方、(20)b は =ga=no の例であるが、この場合は oi を含む集団の所有という意味になるという。

- (20) a. oi=ga ie
 1SG=GEN 家
 ‘私 [だけ] の家’
 b. oi=ga=N ie
 1SG=GEN=GEN 家

‘私 [を含む集団] の家’

6.1.5 中心項を標示する格助詞

6.1.5.1 主格助詞 =ga, =no

主格助詞としては =ga と =no がある。=ga と =no の詳細な使い分けについては、6.1.2–6.1.2.2 節を参照されたい。ここでは =ga と =no の基本的な統語機能と意味役割を述べる。

主格助詞 =ga, =no は、無標ヴォイスの動作主 (A) や自動詞節のテーマ (S) を標示する。たとえば、(21)a では、odor- ‘踊る’ という動作の動作主 omai ‘あなた’ を、(21)b では、ar- ‘ある’ という状態のテーマ sasimi ‘刺身’ を標示している。また、(22) のように、受動ヴォイスにおいては被害者を標示する。

- (21) a. omai=*ga* odoi*o*=to=*to*
2SG=*NOM* 踊る:IPFV:NPST=*NLZ*=COM
‘あなたが踊っているのと’ 《動作主》
- b. sasimi=*no* ja*n*to ar-*eba*
刺身=*NOM* たくさん ある-COND
‘刺身がたくさんあれば’ 《テーマ》
- (22) taroo=*ga* se*n*see=*ni* omocja=*ba* toiager-are-*ta*.
太郎=*NOM* 先生=*DAT* おもちゃ=*ACC* 取りあげる-PASS-PST
‘太郎が先生におもちゃを取り上げられた。’

6.1.5.2 対格助詞 =ba, =o

対格助詞は =ba と =o で、他動詞節のテーマ (O) を標示する。(23) では、okur- ‘送る’ という動作のテーマ nimocu ‘荷物’ を =ba によって標示されており、またこの =ba は =o と交替できる。なお、両者は自由に交替できる⁴³。

- (23) nimocu={ *ba* / *o* } omai=*i* okuQ-*te* kui-jai=*doo*.
荷物=*ACC* 2SG=*DAT* 送る-CTX くれる-HON:NPST=*SFP*
‘荷物をあなたに送ってくださるよ。’

6.1.5.3 与格助詞 =ⁿi

与格助詞 =ⁿi ‘DAT, LOC, ESS’ は間接目的語を標示する (形態音韻的特徴については 3.5.1 節を参照)。ここで言う間接目的語の意味役割を大まかに分類すると、次のようになる。

- (24) a. 受け手 (授与のゴール) b. 変化の結果 (変化のゴール)
c. 目的地 (移動のゴール) d. 移動の目的

⁴³ 本節で対象とする菌上の話者は、面接調査では =ba を優先的に回答していた。テキスト調査においても、=ba: 11/19 例、=o: 5/19 例、標示なし: 3/19 例で、=ba の方が優勢であった。ただし、平塚 (2013) によれば、里町の他集落では =o の方が優勢とのことであるから、里方言における =ba と =o の使用頻度には、集落差や個人差があるものと考えられる。

e. 存在場所

f. 事態の成立時間

与格助詞 =ⁿi が標示する名詞の意味役割は上記のように多様であるが、なお、本稿では、=ⁿi には便宜的に DAT, LOC, ESS のいずれかを当てている。

また、=ⁿi は、有標のヴォイス (≒結合価) においても重要な役割を持つ。=ⁿi は基本的には動作主は標示しないが、-^sase- による使役ヴォイスや -^rare- による受動ヴォイスでは、動作主 (前者の場合、被使役者でもある) を標示する。次に挙げる (25) は -^sase- による使役ヴォイスの例で、納豆を食べる hanako が =ni によって標示されている。(26) は -^rare- による受動ヴォイスの例で、おもちゃを取り上げる sensee が =ni によって標示されている。

- (25) miciko=ⁿga hanako=ⁿi naQtoo=ⁿba k-ase-ta.
ミチコ=ⁿNOM 花子=ⁿDAT 納豆=ⁿACC 食べる-CAUS-PST
‘ミチコが花子に納豆を食べさせた。’

- (26) taroo=ⁿga seNsee=ⁿi omocja=ⁿba toiager-are-ta.
太郎=ⁿNOM 先生=ⁿDAT おもちゃ=ⁿACC 取りあげる-PASS-PST
‘太郎が先生におもちゃをとりあげられた。’

(A) 受け手

=ⁿi は受け手 (=授与のゴール) を標示する。具体的には、やりもらいの受け手、行為による恩恵や依頼や害などの受け手、動作や心的活動の受け手などを表す。たとえば、(27)a では、本の授受において、その受け手が aNsaN ‘兄さん’ であるということが、(27)b では、体操を教わるという恩恵の受益者が oi ‘私’ であるということが、(27)c では、kik- ‘聞く’ という動作の受け手が waaki=N#ko ‘隣の子’ であることが =ⁿi によって示されている。(27)d は、akogare- ‘憧れる’ という心理活動の受け手が ano#seNpai ‘あの先輩’ であることが =ⁿi によって示されている。

- (27) a. oi=ⁿga aNsaN=ⁿi koN hoN=ⁿba kui-ta=doo.
1SG=NOM 兄さん=ⁿDAT この 本=ⁿACC くれる-PST=SEF
‘私が兄さんにこの本をあげたよ。’ 《授受活動の受け手》
- b. niisaN=ⁿga oi=ⁿi taisoo=ⁿba juutekai-ta⁴⁴=doo.
兄さん=ⁿNOM 私=ⁿDAT 体操=ⁿACC 教える-PST=SEF
‘兄さんが私に体操を教えてくれたよ。’ 《恩恵の受け手》
- c. waaki=N kee kii-te mir-oo=ka?
ko=ⁿi
脇=GEN 子=ⁿDAT 聞く-CTX みる-HORT=Q
‘隣の子に聞いてみようか?’ 《動作の受け手》
- d. ano seNpai=ⁿjaa akogaru-i.
あの 先輩=ⁿDAT.TOP 憧れる-NPST
‘あの先輩には憧れる。’ 《心理活動の受け手》

⁴⁴ 基底形はおそらく //iw-te#kas-ta// (cf. 7.8.2.4 節)。

(B) 変化の結果

=ⁿi は、変化の結果として成立するもの・状態 (=変化のゴール) も標示する。たとえば, (28)a は、「なる」という変化のゴールが *seNsee* ‘先生’ であるということが =ⁿi によって示されている。(28)b は, *kawar-* ‘変わる’ という変化のゴールが黄色であることが =ⁿi によって示されている。(28)c は, *kir-* ‘切る’ という変化の結果が *hanbuN* ‘半分’ の状態であることが =ⁿi によって示されている。

- (28) a. *seNsee=ni nai cumoi=jai.*
先生=*ESS* なる:*NPST* つもり=*VLZ:NPST*
‘先生になるつもりだ。’
- b. *siNgoo=ga ao=kara kiiree kawaQ-ta tookjaa*
kiiro=ⁿi
信号=*NOM* 青=*ABL* 黄色=*ESS* 変わる-*PST* 時:*TOP*
‘信号が青から黄色に変わった時は’
- c. *soi=ba hanbuN=ni kiQ-te kure-e.*
それ=*ACC* 半分=*ESS* 切る-*CTX* くれる-*IMP*
‘それを半分に切ってくれ。’

(C) 目的地

=ⁿi は目的地 (=移動のゴール) も標示する。たとえば, (29)では, *ita-te#ku-* ‘行ってくる’ という移動の目的地が *nakagosiki* ‘中甕’ であるということが =ⁿi によって示されている。

- (29) *nakagosiki=ni ita-te ku-i=dee*
中甕=*DAT* 行く-*CTX* 来る-*NPST=SFP*
‘中甕に行ってくるよ。’

(D) 移動の目的

=ⁿi は移動の目的となる事象も標示する。たとえば, (30) では, *ik-* ‘行く’ という移動の目的が仕事であるということが, =ⁿi によって示されている。

- (30) *kore=kara sigotee ik-u=to*
sigoto=ⁿi
これ=*ABL* 仕事=*DAT* 行く-*NPST=NLZ*
‘これから仕事に行くの。’

(E) 存在場所

=ⁿi は存在場所も標示する。たとえば, (31) では, 本の存在場所が *nikai* ‘2階’ であるということが =ⁿi によって示されている。

- (31) *nikai=i hoN=no ai=dee*
2階=*LOC* 本=*NOM* ある:*NPST=SFP*

‘2階に本があるから’

(F) 事態の成立時間

=ⁿi は事態の成立期間を標示する。たとえば, (32) では, カズラタテという行事についての発話であるが, その行事の時期が nuQ-ka#toki ‘暖かい時’ であることが, =ⁿi によって示されている。

- (32) nuQka toki=ⁿi uQ+taQ-ta wake=jai=dee=na
暖かい:VLZ 時=LOC 打つ:NL+立つ-PST わけ=VLZ:NPST=CSL=SFP
‘(カズラタテについて) 暖かい時に打ち立ったわけだよ。’ 《時点》

なお, 上記の意味以外にも, =ⁿi は, 結合価交替により, 受動ヴォイスや使役ヴォイスの動作主を標示することがある。

- (33) [甌島について]
umi=ⁿi kakom-are-toi=cjai=dee
海=DAT 囲む-PASS-CONT:NPST=NLZ:VLZ:NPST=CSL
‘海に囲まれているから’ 《受動ヴォイスの動作主》

6.1.6 周辺項を標示する格助詞

6.1.6.1 形式名詞語幹 sama

形式名詞語幹 sama ‘様’ は与格助詞=ⁿi を取って, 移動や動作の方向を標示する。sama 自体は格助詞ではないが, =ⁿi より明確に方向を示す, 格助詞相当の形式としても用いられるので, ここで言及しておく。次の (34)a では, 向かう先が jama=no#hoo ‘山の方’ であるということが, (34)b でも同様に, 向かう先が oki ‘沖’ であるということが sama によって示されている。

- (34) a. jama=no hoo+samjaa juk-eba jo-ka=doo.
hoo+sama=ⁿi
山=GEN 方+様=DAT 行く-COND いい-VLZ:NPST=SFP
‘山の方へ行けばいいよ。’
b. oki+samaa ik-ijoQ-ta moN=jai.
oki+sama=ⁿi
沖+様=DAT 行く-IPFV-PST もの=VLZ:NPST
‘沖の方へ行ったもんだ。’

6.1.6.2 所格助詞 =de

所格助詞 =de ‘LOC’ は, 事態が成立する空間を標示する。たとえば, (35) では, 遊ぶ場所が kawa ‘川’ であるということが =de によって示されている。

- (35) kawa=de asub-ijoQ-ta moN=jaraa.
川=LOC 遊ぶ-IPFV-PST もの=VLZ:INFR
‘川で遊んでいたものだ。’

また, たとえば, (36)a では, 「遠目木山が一番高い」という事態が成立する空間が, 上甌島の範囲内であるということが, そして, (36)b では, 「富士山が一番高い」という事態が成立する空間が

日本の範囲内であるということが、それぞれ所格助詞 =de によって示されている。

- (36) a. kamigosikizima=*de* icibaN taQka=taa toomekijama=jai=doo.
 上甕島=*LOC* 一番 高い:NPST=NL:TOP 遠目木山=VLZ:NPST=SFP
 ‘上甕島で一番高いのは遠目木山だよ。’
- b. huzisaN=*wa* nihon=*de* icibaN taQka jama=jai=doo
 富士山=TOP 日本=*LOC* 一番 高い:NPST 山=VLZ:NPST=SFP
 ‘富士山は日本で一番高い山だよ。’

6.1.6.3 具格助詞 =de

具格助詞 =de ‘INST’ は、次の意味役割を持つ名詞を標示する。

- (37) a. 道具 b. 材料 c. 手段 d. 時間量 e 原因
 それぞれの例を次に挙げる。

- (38) a. basu=*de* ik-imos-u=*dee*.
 バス=*INST* 行く -POL-NPST=SFP
 ‘バスで行きますよ。’ 《道具》
- b. dateeku=*no* haQpa=*de* hune cukuQte
 ダテーク=GEN 葉っぱ=*INST* 船 作って
 ‘ダテークの葉っぱで舟を作って’ 《材料》
- c. basu=*de* ik-imos-u=*dee*.
 バス=*INST* 行く -POL-NPST=CSL
 ‘バスで行きますから。’ 《手段》
- d. icizikaN=*de* cjoroQto sumase-ta=*doo*.
 一時間=*INST* ちょろっと 済ませる -PST=SFP
 ‘一時間でちょろっと済ませたよ。’ 《時間量》
- e. joozi=*de* ie=*ni* kaeQ-ta=*doo*.
 用事=*INST* 家=DAT 帰る -PST=SFP
 ‘用事で家に帰ったよ。’ 《原因》

(38)a では kak- ‘書く’ という動作を成立させるために用いた hude ‘筆’ が、(38)b では、作った舟の材料が datekuu#no#haQpa ‘ダテークの葉っぱ’ であることが、(38)c では、交通手段が basu ‘バス’ であることが、(38)d では、sumase- ‘済ませる’ という事態の成立にかかった時間の量 icizikaN ‘一時間’ が、(38)e では、帰る原因が joozi ‘用事’ であることが =de で示されている。

6.1.6.4 奪格助詞 =kara

奪格助詞 =kara ‘ABL’ は、次の意味役割を持つ名詞を標示する。

- (39) a. 起点 b. 経路 c. 手段 d. 材料

また、結合価交替にも関与しており、与格助詞 =ⁿi に代わって、受動ヴォイスにおける動作主の標示を行なうことがある。なお、本稿では、=^wa には一律 ABL というグロスを当てている。

(A) 起点

奪格助詞 =kara ‘ABL’ は起点を標示する。具体的には、人や物の移動における空間的起点、行為によって恩恵や害などをもたらしてくる起点、行為や事態の時間的起点などを標示する。たとえば、(40)a では、moQte#ku- ‘持ってくる’ という行為によるものの移動の起点が、(40)b では、osie- ‘教える’ という恩恵の起点となる人物が、(40)c では、mi- ‘見る’ という行為の時間的起点が asa ‘朝’ であることが =kara によって示されている。

- (40) a. sjoogacudoogu=ba naja=kara moQ-te ki-te kui-jai-mos-e.
正月道具=ACC 納屋=ABL 持つ-CTX くる-CTX くれる-HON-POL-IMP
‘正月道具を納屋から持ってきてください。’
- b. 太郎-san=kara hoogen=ba juutekase-te morjaa-moi-ta.
太郎-TTL=ABL 方言=ACC 教える-CTX もらい-POL-PST
‘太郎さんから方言を教えてもらった。’
- c. asa=kara baN=zui mi-toQ-te=mo jo-ka=do.
朝=ABL 晩=TERM 見る-CONT-CTX=も いい-NPST=SFP
‘朝から晩まで見ていてもいいよ。’

(B) 経路

=kara は移動の経路も示す。たとえば、(41) では、移動する経路が koQciN#mici ‘こっちの道’ であることが =kara によって示されている。

- (41) ora=a koQci=N mici=kara ik-u=dee
1SG=TOP こっち=GEN 道=ABL 行く-NPST=CSL
‘私はこっちの道から行くから。’

(C) 手段

=kara は、事態の成立のための手段を標示する。たとえば、(42) では、行くための交通手段が basu ‘バス’ であることが =kara によって示されている。

- (42) basu=kara ik-u=dee.
バス=ABL 行く-NPST=CSL
‘バスで行くから。’

なお上述のように手段を標示するという点においては、一見すると具格に重なる意味役割を持つようにも見える。しかし里方言の =kara は道具を標示することまではできず、また、材料を標示する例も現時点では確認できていない。この点で具格助詞 =de とは大きく異なる。たとえば、(43)a における kak- ‘書く’ という動作の道具である hude ‘筆’ や、(43)b における cukur- ‘作る’ という動作の材料である mugi ‘麦’ は =kara で標示するのが不自然であるとされる。

- (43) a. hude={ de / #kara } kai-ta
筆=INST 書く-PST

‘筆で書いた。’

b. [味噌について]

mugi={ *de* / ?*kara* } *cukuQta*.

麦=*INST* 作る-*PST*

‘麦で作った。’

なお、=*kara* は、与格に代わって受動ヴォイスの動作主を標示することがある。これは、受動ヴォイスの動作主が、当該行為をもたらしてくる起点でもあることから、起点を標示する =*kara* が用いられると考えられる。

(44) a. *seNsee=kara gar-aree~gar-aree*

先生=*ABL* 怒る-*PASS:NL~SIM*

‘先生から怒られながら、’

b. *sogaNta hito=kara tanom-are-te*

そうした 人=*ABL* 頼む-*PASS-CTX*

‘そんな人から頼まれて’

6.1.6.5 共格助詞 =*to*

共格助詞 =*to* ‘COM’ は、事態とともに成立させる相手を標示する。たとえば、(45) では、結婚するという事態を成立させる相手 *omai* ‘あなた’ が =*to* によって示されている。

(45) *omai=to keQkoN su-u goto ai.*

2SG=*COM* 結婚 する-*VOL* 様子 ある:*NPST*

‘あなたと結婚したい。’

また、=*to* には、上例のように動詞と名詞を関係付ける用法だけでなく、次に示すような、名詞同士を関係付ける用法もある。(46) では、*cukur*-‘作る’という事態に関わる *mugi* ‘麦’, *daizu* ‘大豆’, *sio* ‘塩’ が共格で繋がられている。なお、最後の名詞への =*to* の添加は必須ではない。

(46) *mugi=to daizu=to sio { =to / Ø } =de cukui-mos-u.*

麦=*COM* 大豆=*COM* 塩 { =*COM* / Ø } =*INST* 作る-*POL-NPST*

‘麦と大豆と塩(と)で作ります。’

6.1.6.6 比較格助詞 =*juukjaa*

比較格助詞 =*juukjaa* (= *jokjaa* と同) ‘CMP’ は比較対象を示す。たとえば、(47) は、好きなものの比較対象 *kuQkii* ‘クッキー’ が =*juukjaa* によって示されている。

(47) *kuQkii=juukjaa=mo karaimo=ga suki=jai-mos-u.*

クッキー=*CMP*=も サツマイモ=*NOM* 好き=*VLZ-POL-NPST*

‘クッキーよりもサツマイモが好きです。’

6.1.6.7 限界格助詞 =*zui*, =*made*

限界格助詞の =*zui* ‘TERM’ と =*made* ‘TERM’ は、空間的・時間的な終点を表す。=*zui* と =*made* の

間に意味的な棲み分けは見られず、自由に入れ替えることができるようである（話者の内省によると、=zui は方言形式で、=made は標準語形式とのことである）。

(48) では、ik- ‘行く’ という事態の空間的終点が kagosima ‘鹿児島’ であることが、0 では、見るという事態の終点が baN (晩) であることが、=zui によって示されている。前述のとおり、=zui は =made と交替できる。

- (48) a. kagosima={ zui / made } kaimono=ni ita-te ku-i=dee.
 鹿児島=TERM 買い物=DAT 行く-CTX 来る-NPST=CSL
 ‘鹿児島まで買い物に行ってくるから。’
- b. asa=kara baN={ zui / made } mi-toQ-te=mo jo-ka=do.
 朝=ABL 晩=TERM 見る-CONT-CTX=も いい-NPST=SFP
 ‘朝から晩まで見てもいいよ。’

なお、=made と =zui は上述の用法以外に、6.2.6 節に示す取り立ての用法も有している。

6.2 取り立て

本節では、当方言の「取り立て」について、その基本構造と、その標識である「取り立て助詞」について、形式面の整理を中心に記述する。なお、取り立てとは、当該の項を特に際立たせたり、当該の項と他の項との関係について情報をさらに加えたりする操作を指す。

6.2.1 被取り立て名詞の構造

被取り立て名詞の構造は次のとおりである。

- (49) 被取り立て名詞の構造
- a. 主格・対格名詞以外の取り立て: N=格=取り立て
- b. 主格・対格名詞の取り立て: N=取り立て (cf. 4.5.2 節)

(49)a 「主格・対格名詞以外の取り立て」では、名詞の後ろに格助詞を、さらにその後ろに取り立て助詞を付ける。たとえば、与格名詞を添加の意で取り立てる (50) では、被取り立て名詞 doko ‘どこ’ に与格助詞 =i が付き、その後ろに添加の取り立て助詞 =mo が続く。

- (50) dokee=mo der-are-N wake=jai=dee.
 doko=i=mo
 どこ=DAT=も 出る-POT-NEG:NPST わけ=VLZ:NPST=CSL
 ‘どこにも出られないわけだから。’

(49)b 「主格・対格の項の取り立て」では、名詞の後ろに格助詞を付けず、取り立て助詞を名詞に直接させる。たとえば、添加の意味で取り立てる (51) では、(51)a のように、柴投げの動作主を指す主格助詞 onago ‘女’ に =mo を直接させる。(51)b のように、主格助詞 =ga, =no を付けるのは、不適格である。(52) も同様で、(52)a のように kam- ‘噛む’ という動作のテーマを指示する対格名詞 riNgo ‘りんご’ と momo ‘桃’ に =mo を直接付ける。(52)b のように、対格助詞 =ba を付けるのは、やはり不適格である。

- (51) a. [「柴投げ」という遊びについて]
 onago=*mo* si-joQ-ta=*baQte*
 女子=*も* する-IPFV-PST=CONC
 ‘女子もしていたけど’
- b. *onago={ ga / no }=*mo* si-joQ-ta=*baQte*
 女子=NOM=*も* する-IPFV-PST=CONC 《主格名詞の取り立て (添加)》
- (52) a. riNgo=*mo* koo-da=*si* momo=*mo* koo-da=*doo*
 りんご=*も* 噛む-PST=PARA 桃=*も* 噛む-PST=SFP
 ‘りんごも食べたし、桃も食べたよ’
- b. *riNgo=*ba=mo* koo-da=*si* momo=*ba=mo* koo-da=*doo*
 りんご=ACC=*も* 噛む-PST=PARA 桃=ACC=*も* 噛む-PST=SFP
 《対格名詞の取り立て (添加)》

6.2.2 取り立て助詞

当方言の取り立て助詞には、次のものがある。

- (53) =^wa ‘主題, 対比’, =*mo* ‘添加, 並列’, =*saaka* ‘添加’, =*zui* ‘添加’, =*doogu* ‘例示’(, =*siko* ‘限度’)

これらのうち、=*doogu* については意味・用法の詳細が掴めていない。以下、=*doogu* 以外の形式に取り立て助詞についてそれぞれ記述する。

6.2.3 =^wa (主題, 対比)

=^wa ‘TOP’ は「主題」と「対比」を表す (形態音韻的特徴については 3.5.2 節を参照)。=^wa は主題用法と対比用法では統語的に異なるふるまいをするが、意味の面で完全に二分できるものではなく、それぞれの典型を両極とし、互いに連続していると考えられる。なお、本稿では、=^wa には一律便宜的に TOP というグロスを当てている。

まずは主題用法について述べる。=^wa は当該名詞を主題として提示する機能を持っており、たとえば、(54)a では、*kinoo* ‘昨日’ が、(54)b では、*aN#ko* ‘あの子’ が、(54)c では、*huzisaN* ‘富士山’ が、(54)d では、*koN#io* ‘この魚’ が主題であることが =^wa によって示されている。

- (54) a. *kinoo=wa* *kodomo=o* *mukae-nja* *nar-aN=jaQ-ta=dee*
 昨日=TOP 子ども=ACC 迎える-NEG.COND なる-NEG=VLZ-PST=CSL
hajo *kaeQ-ta.*
 早く:NL 帰る-PST
 ‘昨日は子どもを迎えなければならなかったのに、早く帰った。’
- b. *aN* *kaa* *meme=N* *na-ka* *ujee* *seekaku=zui* *waika=doo.*
ko=^wa
 あの 子=TOP 見目=GEN ない-NPST うえ:DAT 性格=TERM 悪い:NPST=SFP
 ‘あの子は見た目が悪いうえに、性格まで悪いよ。’

- c. huzisaN=*wa* nihonN=*de* icibaN taQ-ka jama=*jai*=doo.
 富士山=TOP 日本=LOC 一番 高い-NPST 山=VLZ:NPST=SFP
 ‘富士山は日本で一番高い山だよ。’
- d. koN io=*wa* naN=*cju*-u io=*ja*-imos-u=*ka*?
 この 魚=TOP 何=QUOT:言う-NPST 魚=VLZ-POL-NPST=Q
 ‘この魚は何という魚ですか?’

次に対比用法について述べる。=*w*a は当該名詞を他の名詞と対比させる。たとえば, (55)a では, sakana ‘魚’ に対して niku ‘肉’ が, (55)b では, otoko ‘男’ に対して onago ‘女’ が対比されている。

- (55) a. sakana=*wa* mainici tabe-toQ-te=*mo* sogaN sjokusjoo
 魚=TOP 毎日 食べる-CONT-CTX=*も* そんなに 食傷
 se-N=*ba*Qte niku=*wa*=naa.
 する-NEG:NPST=CONC 肉=TOP=CNF
 ‘魚は毎日食べていても, そんなに食傷しないけれど, 肉はなあ。’
- b. siN=*no* sjoogacu=*wa* otoko=*dake*=no mono=*de* onagaa anmai de-te
 onago=*w*a
 新=GEN 正月=PST 男=*だけ*=GEN もの=INST 女=TOP あんまり 出る-CTX
 dearuki si-oi-moos-aN=*ja*Q-ta.
 出歩き する-IPFV-POL-NEG=VLZ-PST
 ‘新正月は男だけのもので, 女子はあまり出歩きしていませんでした。’

6.2.4 =mo (添加, 並列)

=mo は「添加」と「並列」を表す。まずは添加用法について述べる。(56)a では, 柴投げという遊びについて, 男子だけでなく, onago ‘女’ もしていたという意味が, (56)b では, 色々見せるものがある, さらに kazuratate ‘カズラタテ’ を見せようという意味が =mo によって示されている。

- (56) a. [子どもの頃の遊び「柴投げ」について]
 onago=*mo* si-joQ-ta=*ba*Qte
 女=*も* する-IPFV-PST=CONC
 ‘女の子もしていたけど’
- b. oboN=*ni* ku-i hito=*ni* kazuratate=*mo* mise-joo.
 お盆=DAT 来る-NPST 人=DAT カズラタテ=*も* 見せる-VOL
 ‘お盆に来る人にカズラタテも見せよう。’

次に並列用法について述べる。(57)a では, 項を指す各名詞の並列関係が, (57)b では, 並列された節を超えて, riNgo ‘りんご’ と momo ‘桃’ の並列関係が =mo で標示されている。

- (57) a. ima=*koso* juQkui icizicu=*mo* hucuka=*mo* miQka=*mo* si-mos-u=*ba*Qteka
 今=*こそ* ゆっくり 元日=*も* 二日=*も* 三日=*も* する-POL-NPST=CONC
 ‘今でこそ, ゆっくり元日も二日も三日もしますけれども’
- b. [_{PARA} riNgo=*mo* koo-da=*si*] [_S momo=*mo* koo-da=*doo*].

りんご=も 噛む-PST=PARA 桃=も 噛む-PST=SFP
 ‘りんごも食べたし、桃も食べたよ。’

6.2.5 =saaka (添加)

=saaka は添加を表す。調査は十分でないが、その意味は標準語の「さえ」のそれに相当すると考えられる。たとえば、(58) では、当該の状況が満たされれば、結果が生じるという意味（「せめて～だけでも」の意）で、=saaka によって kuruma ‘車’ が取り立てられている。

(58) kuruma=*saaka* moQ-toor-eba nakagosiki=*made*
 車=さえ 持つ-CONT-COND 中甕=TERM
 ik-aru-i=cjai=*baqte*=na.
 行く -pot-npst=nlz:vlz:npst=conc=sfp
 ‘車さえもっていれば、中甕まで行けるんだけどな。’

6.2.6 =zui, =made (添加)

=zui と =made は、6.1.6.7 節のとおり、格助詞としても用いられるが、本節に述べるように、取り立て助詞としても使用される。この場合、=zui も =made も添加を表し、両者の交替は自由である（6.1.6.7 節に述べたとおり、話者の内省によると、=zui は伝統的な方言形式で、=made は標準語であるという）。

=zui, =made の取り立ての用法では、たとえば、(59)a では、k(u)w- ‘食べる’ という動作について、自分の分だけでなく、さらに妹の分も食べたという意味が、(59)b では、キビナゴだけでなく、さらに鯛まで食べたという意味が、=zui によって示されている。

(59) a. imooto=no buN={ zui / made } ku-te simoo-ta.
 妹=GEN 分=TERM 食べる-CTX しまう -PST
 ‘[自分の分だけでなく] 妹の分まで食べてしまった。’
 b. tai=*zui* koo-da.
 鯛=TERM 噛む-PST
 ‘[キビナゴだけでなく] 鯛まで食べた。’

6.2.7 動詞の取り立て

取り立て助詞は名詞以外の語にも接尾でき、次のように、動詞句内の動詞類を取り立てることもある。それぞれの意味の詳細は分かっていないが、参考までに例を挙げておく。

(60) a. kak-*jaa* si-ta=*baQte* b. kak-*i=mo* si-ta=*baQte*
 kak-ⁱ∅=^wa
 書く -NL=TOP する -PST=CONC 書く -NL=も する -PST=CONC
 ‘書きはしたけど’ ‘書きもしたけど’
 c. jasu-u={ wa / mo } na-ka=*baQte*
 安く -NL={ TOP / も } ない -NPST=CONC

‘安くもないけど’

d. kak-u=*saka* su-rja jo-ka.

書く-NPST=さえ する-COND よい-NPST

(60)a-c のとおり, =^wa, =mo は ⁱØ 形準体動詞ないし -u 形準体形容詞に付く。一方, =saaka は =^wa, =mo とは異なり, (60)d のように -^ru 形連体動詞に付く。

=wa, =mo を取る動詞の構成要素と =saka を取る動詞のそれは, 次のように制限されている。

(61)	- ^k as-	- ^s ase-	- ^r are-	-e-	-tor-	- ⁱ or-	- ⁱ jar-	- ⁱ mos-	- ^a n-
V={ wa / mo }:				?		*	*	*	*
V=saka:									*

(注) -^rar- は使用語彙ではなかったため, その適格性は不明。

6.3 述部の構成要素と文法カテゴリー

述部の構成要素は一定の順序で承接しあう。文法カテゴリーの観点からその序列を整理すると, おおむね次のようになる (cf. 5.1.8.1 節: (50))。

(62)									モダリティ
	ヴォイス	アスペクト	主格尊敬	丁寧	極性	時制	対事的	対人的	
	- ^k as-, - ^s ase-	-tor-, - ⁱ or-	- ⁱ jar-	- ⁱ mos-	- ^a n-	- ^r u	- ^a u, - ^a Nmjaa,	=a, =ga,	
	- ^r are-, -e-					-ta	=joo, =huu,	=do, =na,	
							=soo, goto, etc.	=taa, etc.	

ヴォイス形式とアスペクト形式では, 前者が先行する。

(63) a. [過去に近所の人々が家を作ろうとして作らなかった話題]

soide cukur-ase-toi-jai=giinja

それで 作る-CAUS-CONT-HON:NPST=COND

‘それで [大工に] 作らせていらっしたら’

b. [甌島について]

umi=i kakom-are-toi=cjai=dee

海=DAT 囲む-PASS-CONT:NPST-NLZ:VLZ:NPST=CSL

‘海に囲まれているんだから’

ヴォイス形式・アスペクト形式と極性形式では, 前者が先に現れる。

(64) a. [手紙を書いていたが, 途中で便せんがなくなったので]

saigo=made kak-e-N-kaQ-ta.

最後=TERM 書く-POT-NEG-VLZ-PST

‘最後まで, 書くことができなかった。’

b. kojasi=mo si-tor-aN=giini

肥やし=も する-CONT-NEG:NPST=COND

‘肥やしもししていなければ’

極性形式と時制形式では、前者が先行する。

(65) [手紙を書いていたが、途中で便せんがなくなったので]

saigo=made kak-e-N-kaQ-ta.

最後=TERM 書く -POT-NEG-VLZ-PST

‘最後まで、書くことができなかった。’

時制形式と対事的モダリティ形式では、前者が先行する⁴⁵。

(66) a. [あの人は飲み会に]

iQ-ta=joo=ka?

行く -PST=INFR=Q

‘行っただろうか。’

b. [熱もあるし、咳も出るので]

kaze hii-ta=huu=jai=naa.

風邪 引く -PST=SEEM=VLZ:NPST=SFP

‘[私は] 風邪を引いたみたいだな。’

対人的モダリティ形式のうち、伝達態度に関わるものは主に終助詞によって表されるので、述部の末尾に現れる。

6.4 文の階層構造

南 (1974) が明らかにした文の階層構造は、里方言にも認められる。本稿では南 (1974) と田窪 (1987) を参考にしながら、どのような要素を取りうるかに基づいて、節を次の4種類に分ける。

(67) A類

- a. 補部を取りうる。
- b. 様態付加部を取りうる。
- c. ヴォイス形式を述部に取りうる。

(68) B類

- a. 動作主主語を取りうる。
- b. 制限的付加部 (=時空間を表す付加部) を取りうる。
- c. アスペクト形式から一部の対事的モダリティ形式まで (cf. (62)) を述部に取りうる。
(いずれも A 類節が取れない要素)

(69) C類

- a. 主格相当の N=wa を取りうる。
- b. 非制限的付加部 (=可能性を表す付加部) を取りうる。

⁴⁵ goto 基準で見れば、時制形式 -ru ‘NPST’, -ta ‘PST’ はその前後どちらにも現れる。よって、言語形式 (=接辞、接語、形式名詞、助動詞など) の別に注意を払わない研究者は、里方言では、時制形式が対事的モダリティ形式の前後どちらにも現れると考えるかもしれない。しかし、形式 X に接続しえない形式 Y の位置を X 基準で見ると、妥当ではない。よって、本稿では、接続しうる形式同士の間でしか順序は考慮しない。

- c. 推量を表す対事的モダリティ形式 (動詞連体接尾辞 $-^a u$ と連体動詞類に付く接尾語 $=joo$) を述部に取りうる。 (いずれも A-B 類節が取れない要素)

(70) D 類 (=文)

- 意志・勧誘を表す対事的モダリティ形式から対人的モダリティ形式までを述部に取りうる。 (A-C 類節が取れない要素)

A-D 類節の構造と A-D 類節を作る形式を整理すると、次のとおり。

(71) A 類: [様態付加部#補部#語幹-ヴォイス]

B 類: [制限的付加部#動作主主語#A 類節-アスペクト-主格尊敬-丁寧-否定-時制-対事的]

C 類: [非制限的付加部#主格主題#B 類節-推量]

D 類: [C 類節-意志・勧誘-対人的] (cf. 南 1974; 田窪 1987)

(72) A 類: [副詞節] \sim FULL ‘SIM’, $-^i$ nagara ‘SIM’, $-te$ ‘CTX (様態)’, $-^i$ kjaa ‘PURP’

B 類: [名詞節] 準体接尾辞 (cf. 5.1.6.3, 5.2.3 節), 準体助詞 (cf. 5.5.2.1 節), モダリティ接尾語 (cf. 5.5.2.2 節)

[連体節] 連体接尾辞 (cf. 5.1.6.2, 5.2.3 節)

[副詞節] $-^r$ eba ‘COND’, $-ta(i)ba$ ‘PST.COND’, $-tara$ ‘COND’, $=nara$ ‘COND’, $=gii$ ‘COND’, $tookjaa //tooki=^w a//$ ‘時=TOP (COND)’, $tamee //tame=^n i//$ ‘ため:DAT (PURP)’, goto ‘様子’, $-te$ ‘CTX (CSL)’

C 類: [副詞節] $=dee$ ‘CSL’, $-te=mo$ ‘CTX=も (逆接假定)’, $=tee //to=^n i//$ ‘NZL=LOC (CONC)’, $=baQte(ka)$ ‘CONC’, $=dee=te$ ‘CONC’

[並列節] $-te$ ‘CTX’, $=si$ ‘CSL’

D 類: [文] 終止接尾辞 (cf. 5.1.6.1 節), 終助詞

[副詞節] $=to$ ‘QUOT’, $=(Q)te$ ‘QUOT’ (cf. 5.5.3 節)

6.4.1 A 類節

次のように、A 類節は構成要素の種類が最も少なく、様態副詞と補部しか取れない。B-C 類節の構成要素となりうる動作主主語や時空間を表す補部などは、取ることができない。

(73) a. [juQkui terebi=ba mii- \emptyset ~mii]^A meesi=ba ku-u.

ゆっくり テレビ=ACC 見る:NL~SIM 飯=ACC 食う-NPST

‘ゆっくりテレビを見ながら、ご飯を食べる。’

b. *[taroo=ga terebi=ba mii- \emptyset ~mii]^A ziroo=ga meesi=ba ku-u.

太郎=NOM テレビ=ACC 見る-NL~SIM 次郎=NOM 飯=ACC 食う-NPST

‘太郎がテレビを見ながら、次郎がご飯を食べる。’

次のように、A 類節の述部 (以下「X 類述部」) は $-e$ ‘POT’ 以外のヴォイス形式は取れるが、 $-tor$ -アスペクト形式以下のもの (cf. (62)) は取れない。

(74) a. hoN=ba jom-asee- \emptyset ~jomasee

本=ACC 読む-CAUS-NL~SIM

‘本を読ませながら、’

- b. seNsee=kara gar-aree-Ø~gararee
先生=ABL 怒る-PASS-NL~SIM
‘先生に怒られながら、’
- c. ?jom-ijai~jomijai
読む-HON:NL~SIM
‘お読みになりながら’
- d. *jom-imos-i~jomimosi
読む-POL-NL~SIM
‘お読みになりながら’

次のように、A 類節は A 類節を内包することができる。

- (75) [[te=ba cunai-de]^A aib-inagara]^A uta=ba uta-ijoQ-ta=naa.
手=ACC 繋ぐ-CTX 歩む-SIM 歌=ACC 歌う-IPFV-PST=SEFP
‘手を繋いで、歩きながら、歌を歌っていたなあ。’

6.4.2 B 類節

B 類節は、A 類節の構成要素に加え、制限的付加部 (=時空間を表す付加部) や動作主主語を取ることができる。ただし、C 類のように主格主題は取ることができない。

- (76) a. [nicijoobi=i kagosima=de kaze hii-te]^B gecujoobjaa waga=no ie=de
日曜日=LOC 鹿児島=LOC 風邪 ひく-CTX 月曜日:TOP 自分=GEN 家=LOC
ne-toi.
寝る-CONT:NPST
‘日曜日に鹿児島で風邪をひいて、月曜日は自分の家で寝ている。’
- b. [asitaa aN huto=ga kai-jai=to=nara]^B kjuu=no uci oi=mo
明日 あの 人=NOM 帰る-HON=NLZ=COND 今日=GEN うち 1SG=も
a-ikjaa ik-aN-eba nar-aN=naa.
会う-PURP 行く-NEG-COND なる-NEG:NPST=SEFP
‘明日あの人が帰りなされるのなら、今日中に俺も会いに行かなければならないなあ。’
- c. [naikjaa isomocijaki ki-jar-aN=jaQ-ta=to=te juu-taiba]^B
なぜ 磯もち焼き 来る-HON-NEG=VLZ-PST=NLZ=QUOT 言う-PST.COND
sir-aN=jaQ-ta=too.
知る-NEG=VLZ-PST=QUOT
‘「なぜ磯もち焼き来られなかったの」って言ったら、「知らなかった」って。’
- d. * [taroo=wa sjukudai hajoo sum-eba]^B oi=mo hajoo
太郎=TOP 宿題 早い:NL 済む-COND 1SG=も 早い:NL
asob-arui-i=tee=naa.
遊ぶ-POT-NPST=CONC=SEFP
‘太郎は宿題早く済めば、僕も早く遊べるのになあ。’

B 類述部はヴォイス形式から一部の対事的モダリティ形式まで取れるが、推量形式は取れない。
B 類節は A-B 類節を内包することができる。

- (77) a. *kokee oi-jar-eba iQkii basu=N ki-mos-u=dee.*
 ここ:DAT いる-HON-COND すぐ バス=NOM 来る-POL-NPST=CSL
 ‘ここにいらっしやれば、すぐバスが来ますよ。’
- b. *kibai-jai-mos-eba dekui=goto nai-jai-mos-u.*
 気張る-HON-POL-COND できる:NPST=こと なる-HON-POL-NPST
 ‘[あなたなら] 頑張りなさったら、できるようになるようになります。’
- c. *kojasi=mo si-tor-aN=giini curu=mo akoo si-toi=dee.*
 肥やし=も する-CONT-NEG:NPST=COND 蔓=も 赤い:NL する-CONT=CSL
 ‘肥やしもしていなければ、蔓も赤いから。’
- d. *cukoo-ta=naraa onasi toko-i naos-itok-e.*
 使う-PST=COND 同じ ところ-DAT 直す-CTX:おく-IMP
 ‘[道具を] 使ったなら、同じところへしまっておけ。’
- (78) a. *[[okure-te]^A i-taiba]^B moo suN-doQ-ta.*
 遅れる-CTX 行く-PST.COND もう 済む-CONT-PST
 ‘遅れて行ったら、もう済んでいた。’
- b. *[[ku-i tooki=i]^B renraku su-reba]^B jo-ka=tee.*
 来る-NPST 時=LOC 連絡 する-COND よい-NPST=CONC
 ‘来る時に連絡すればいいのに’

6.4.3 C 類節

C 類節は、(i) 主格相当の主格主題、(ii) *zeQtai* ‘絶対’ や *masaka* ‘まさか’ などの非制限的付加部 (=可能性を表す付加部)、(iii) 推量を表す対事的モダリティ形式 =*joo* を取ることができる。

- (79) a. *[taroo=wa zeQtai jakusoku jabur-aN otoko=jai=dee ziroo=wa*
 太郎=TOP 絶対 約束 破る-NEG:NPST 男=VLZ:NPST=CSL 次郎=TOP
taroo=ba siNzi-toi.
 太郎=ACC 信じる=CONT:NPST
 ‘太郎は絶対に約束を破らない男だから、次郎は太郎を信じている。’
- b. *[masaka amjaa hur-aN=joo=baQte] kasa=ba moQ-te mir-oo=ka.*
 まさか 雨:TOP 降る-NEG:NPST=INFR=CONC 傘=ACC 持つ-CTX 見る-HORT=Q
 ‘まさか雨は降らないだろうけど、傘を持って[行って]みようか。’

また、下位の A-C 類節を内包することもできる。たとえば、=*baQte* は、(80) のように動詞重複節 (A 類) や =*dee* 節 (C 類) を、=*dee* 節は、(81) のように ^r*eba* 節 (B 類) や =*baQte* 節 (C 類) を内包することができる。

- (80) a. *[[hanasi=ba kik-u~kik-u]^A memo toQ-ta=baQte]^C wakar-aN=jaQ-ta.*
 話=ACC 聞く-NPST~SIM メモ 取る-PST=CONC わかる-NEG=VLZ-PST

‘話を聞きながらメモを取ったが、わからなかった。’

- b. [[aN huto=no jo-ka=tee ju-u moN=jai=dee]^C
 あの 人=NOM いい-NPST=QUOT 言う-NPST もの=VLZ:NPST=CSL
 mii-kjaa i-ta=baQte]^C sogaN=demo na-kaQ-ta.
 見る-PURP 行く-PST=CONC そんなに=でも ない-VLZ-PST
 ‘あの人がいいと言うから見に行ったが、そうでもなかった。’

- (81) a. [[rokuzi=ninar-eba]BotoQcjaN=ga kaeQ-te
 6時=DAT なる-COND お父さん=NOM 帰る-CTX
 ki-ja-i=dee]c maq-tor-oo=ja.
 来る-hon=csl 待つ-cont-hort=sfp
 ‘6時になればお父さんが帰ってくるから、待とうよ。’
- b. [[sokee i-ta=baQte]C moo suN-doQ-ta=dee]C kaeQ-te ki-ta.
 そこ.DAT 行く-PST=CONC もう 済む-CONT-PST=CSL 帰る-CTX 来る-PST
 ‘そこへ行ったがもう終わっていたから、帰ってきた。’

6.5 名詞節

6.5.1 =to 節

5.5.2.1 節で述べたとおり、準体助詞 =to は連体詞に付いて名詞を作る。本節では連体節に =to が付いた形式を名詞節と見なして、「=to 節」と呼ぶ。

- (82) a. [NCL karaimo=ba siQcu-i=to]=N ai tookjaa kui-jar-e=joo.
 サツマイモ=ACC 捨てる-NPST=NLZ=NOM ある 時:TOP くれる-HON-IMP=SFP
 ‘サツマイモの捨てるのがある時は、くださいね。’
- b. oi=mo [NCL kaN komaN-ka=to]=ba koo-te ki-te.
 1SG=も こんな 小さい-NPST=NLZ=ACC 買う-CTX 来る-CTX
 ‘私もこんな小さいのを買ってきて。’

=to 節を名詞節とするのは、(82) のように、主題助詞 =^wa, 主格助詞 =N, 対格助詞 =ba などを取りうることによる。

また、疑問文の場合、=to=jar- ではなく =to か =to=N が用いられる。=to=N は =to に疑問の終助詞 =na が接尾した =to=na が変化したものと考えられる (cf. 7.7.2 節)。

- (83) a. rjoodo=ba toQ-te ik-imos-u=to=na?
 領土=ACC 取る-CTX 行く-POL-NPST=NLZ=Q
 ‘領土を取っていくのですか?’
- b. mata kotosi=mo ai-mos-u=to=N?
 また 今年=も ある-POL-NPST=NLZ=Q
 ‘また今年もあるんですか?’

さらに、準体助詞 =to を用いることでスコープを広げることができる。

- (84) ik-oo gotaQ-te ik-u=to=ja na-ka.
 行く-VOL 様子:ある-CTX 行く-NPST=NLZ=VLZ.CTX:TOP ない-NPST
 ‘行きたくて行くんじゃない。’

(84) では, ikoo#gotaQte#iku を準体助詞 =to で名詞節にして, 述部の iku から ikoo#gotaQte に焦点を移している。

また, 次のように =to を使って, 分裂文を作ることにもできる (次の例では, =^wa と融合して, /=taa/ となっている)。

- (85) oi=ga umare-ta=taa koko=N bjooiN=jaQ-ta=to=jo.
 1SG=NOM 生まれる-PST=NL:TOP ここ=GEN 病院=VLZ-PST=NLZ=SFP
 ‘私が生まれたのはこの病院だったんだよ。’

(85) では, =to に続く koko=N#bjooiN ‘この病院’ が焦点化されている。

6.5.2 疑問節

推量の =joo ないし疑問の =ka で終わり, 補部として働く名詞節を「疑問節」と呼ぶ。次のように, 疑問語疑問も真偽疑問 (選択疑問) も疑問節で表現できる。

- (86) a. [NCL dokee iQ-ta=joo] sir-aN.
 どこ:DAT 行く-PST=INFR 知る-NEG:NPST
 ‘どこに行ったか知らない。’
- b. [NCL aQkaa iku=cjai=joo] [NCL ika-aN=cjai=joo]
 2SG:TOP 行く:NPST=NLZ:VLZ=INFR 行く-NEG:NPST=NLZ:VLZ=INFR
 wakar-aN.
 わかる-NEG:NPST
 ‘おまえは行くか行かないかわからない。’
- c. [NCL raineN ik-e-ru=ka] doo=ka wakar-aN.
 来年 行く-POT-NPST=Q どう=Q わかる-NEG:NPST
 ‘来年行けるかどうかわからない。’
- d. [NCL dokee ik-u=joo] juutekas-e.
 どこ:DAT 行く-NPST=INFR 教える-IMP
 ‘どこに行くか教えてください。’

(86) のように, 疑問節を取る動詞の多くは, sir-aN- ‘知らない’, wakar-aN- ‘わからない’ のように否定形式を取るが, (86)d の osie- ‘教える’ のように絶対ではない。

標準語では疑問節に推量形式を入れることはできないが, 次のように, 里方言ではそこに =joo を入れることができ, かつ =ka なしで名詞節となる。

- (87) a. naNniN ku-i=joo=de ciga-u.
 何人 来る-NPST=INFR=INST 違う-NPST
 ‘何人来るかで違う。’
- b. geNki=de iki-te-ru=ka doo=ka=mo wakar-ana-i=zja

元気=ESS 生きる-CONT-NPST=Q どう=Q=も わかる-NEG-NPST=VLZ.CTX:TOP

na-i=no.

ない-NPST=NL

‘元気で生きてるかどうかもわからないじゃないの。’

ただし、現在確認している補部用法の疑問節は、(87)aのように具格助詞 =de を取るものと、(87)bのように取り立て助詞 =mo を取るものに限られる。その上、後者は標準語の影響が強く感じられる。主格や対格のように動詞の中心項を示す格助詞を付けることができるかどうかは、今後詳しく検討する必要がある。

6.6 並列節

名詞節と副詞節は主節の構成要素で、前者は補部や付加部として、後者は付加部として用いられる。それに対し、並列節は主節に先行し、それと対等関係で結ばれるため、主節の構成要素とは言い難い。

(88) a. [PARA asita taroo=wa oosaka ita-tee] ziroo=wa asaQte kjooto=ni

明日 太郎=TOP 大阪 行く-CTX 次郎=TOP 明後日 京都=DAT

ik-u=cjaroo.

行く-NPST=NLZ:VLZ:INFR

‘明日、太郎は大阪に行って、次郎は明後日京都に行くのだろう。’

b. [NCL [PARA takimon acume-tai] doogu acume-tai] su-i.

焚きもの 集める-ILST 道具 集める-ILST する-NPST

‘[磯もち焼きの準備として]薪を集めたり、道具を集めたりする。’

並列節は、-te, -^aziN, -^reba, =si, =baQte などによって形成される。-^reba と =baQte は、(89)c, e のように主節との対比を意味する。

(89) a. asita taroo=wa oosaka ita-tee ziroo=wa asaQte kjooto=ni

明日 太郎=TOP 大阪 行く-CTX 次郎=TOP 明後日 京都=DAT

ik-u=cjaroo.

行く-NPST=NLZ:VLZ:INFR

‘明日、太郎は大阪に行って、次郎は明後日京都に行くのだろう。’

b. kjooto=iik-aziN oosaka=i ik-u.

京都=DAT 行く-NEG.CTX 大阪=DAT 行く-NPST

‘京都に行かないで、大阪に行く。’

c. huto-ka moN=mo or-eba ciQka moN=mo oi-mosu.

大きい-NPST 者=も いる-COND 小さい:NPST 者=も いる-POL:NPST

‘年上の者もいれば、若い者もいます。’

d. sjoocjuu=mo ai=si biiru=mo ai=doo.

焼酎=も ある:NPST=CSL ビール=も ある:NPST=SFP

‘焼酎もあるし、ビールもあるよ。’

- e. kinoo=wa oijaraN=jaQ-ta=*baQte* kjuu=wa oi-jai=gai.
昨日=TOP いる-HON-NEG=VLZ-PST=CONC 今日=TOP いる-HON:NPST=SFP
‘昨日はいらっしゃらなかったが、今日はいらっしゃるよ。’

-ta(r)i は並列節ではなく、名詞節を形成するが (cf. 5.1.6.3 節), 次のように, -ta(r)i 節同士は対等関係で結ばれ, 動詞句の構成要素となる。

- (90) [VP [NCL taroo-san=ga mii-kjaa aiko ki-tari] [NCL hanako-cjan=ga
太郎-TTL=NOM 見る-PURP あそこ 来る-ILST 花子-TTL=NOM
ki-tai] si-te]
来る-ILST する-CTX
‘太郎さんが見にあそこに来たり, 花子ちゃんが来たりして, ’

第7章 意味論

7.1 有生性

7.1.1 存在動詞

有生物の存在を表す場合は *or-* ‘いる’ が、無生物の存在を表す場合は *ar-* ‘ある’ が用いられる。*or-* の否定形式は *or-an-* ‘いる-NEG’ で、*ar-* のそれは *na-* ‘ない’ である。

- (1) a. *omajaa kjuu=wa ie oi=na?*
2SG=TOP 今日=TOP 家 いる:NPST=SFP
‘おまえは今日は家にいるか?’
- b. *jama=N uje=e sakura=no ki=no ai.*
山=GEN 上=DAT 桜=GEN 木=NOM ある:NPST
‘山の上に桜の木がある。’
- (2) a. *otoQcjaN=wa sigoto=de ie=njaa oi-jar-an=doo.*
お父さん=TOP 仕事=INST 家=DAT.TOP いる-HON-NEG:NPST=SFP
‘お父さんは仕事で家にはいらっしやらないよ。’
- b. *ima uci=Nnja kuuraa=wa na-ka.*
今 うち=DAT:TOP クーラー=TOP ない-NPST
‘今うちにはクーラーはない。’

ただし、船や車など、移動可能な無生物は有生物と同じように *or-* を使用することも可能である。

- (3) a. *kuruma=a or-an.*
車=TOP いる-NEG:NPST
‘車はいない。’
- b. *kurumaa na-ka.*
車=TOP ない-NPST
‘車はない。’

肯定の場合、空間的存在文と限量的存在文で *ar-* と *or-* の使い分けは変わらず、有生物の存在は *or-*、無生物の存在は *ar-* で表される。

- (4) a. *kookoo de-te kaeQ-te ku-ru hito=mo oi=baQte*
高校 出る-CTX 帰る-CTX 来る-NPST 人=も いる:NPST=CONC
zikata=de hatarai-te kaeQ-te ke-N huto=mo oi.
本土=LOC 働く-CTX 帰る-CTX 来る-NEG:NPST 人=も いる:NPST
‘高校を出て帰って来る人もいれば、本土で働いて帰って来ない人もいる。’
- b. *k-aru-i hana=mo ar-eba dooku=N ai hana=mo ai.*
食う-POT-NPST 花=も ある-COND 毒=NOM ある:NPST 花=も ある:NPST
‘食べられる花もあれば、毒のある花もある。’

ただし、人間名詞の場合は、否定の限量的存在文に *na-* が用いられうる。

- (5) a. *wagako=o oNm-aN oQkaN=wa oi-jar-aN.*
 我が子=ACC 思う-NEG:NPST 母親=TOP いる-HON-NEG:NPST
 ‘我が子を思わない母親はいらっしゃらない。’
- b. *wagako=o oNm-aN oQkaN=wa na-ka.*
 我が子=ACC 思う-NEG:NPST 母親=TOP ない-NPST
 ‘我が子を思わない母親はない。’

したがって、存在動詞の使い分けは次のようになる。

表 26 主語による存在動詞の使い分け

	人称	親族	人間	動物	無生物 移動可	無生物 移動不可	抽象
空間 肯定	<i>or-</i>	<i>or-</i>	<i>or-</i>	<i>or-</i>	N/A	<i>ar-</i>	<i>ar-</i>
空間 否定	<i>or-an-</i>	<i>or-an-</i>	<i>or-an-</i>	<i>or-an-</i>	<i>or-an-</i> <i>na-</i>	<i>na-</i>	<i>na-</i>
限量 肯定	<i>or-</i>	<i>or-</i> <i>?ar-</i>	<i>or-</i>	<i>or-</i>	<i>or-</i>	<i>ar-</i>	<i>ar-</i>
限量 否定	N/A	<i>or-an-</i> <i>na-</i>	<i>or-an-</i>	<i>or-an-</i>	<i>or-an-</i> <i>na-</i>	N/A	N/A

7.1.2 受動ヴォイスの選択

本節では、Silverstein (1976) の名詞階層を参考に、項を指示する名詞の種類がヴォイスと関連するか否かを記述する。ヴォイスの判断は、質問票調査で自然に得られた回答 (≒ 第一回答) に基づいている。

まず、二人称の人物から一人称の人物への動作は無標ヴォイスで、三人称の人物から二人称の人物への動作は受動ヴォイスで表現される傾向にある。

- (6) a. *kinoo aQkaa oi=ba uQ-ta=baQtekaa kaNm-aN=ga.*
 昨日 2SG:TOP 1SG=ACC 殴る-PST=CONC 構う-NEG:NPST=SEP
 ‘昨日おまえは私を殴ったけれども構わないよ。’ 《二人称→一人称》
- b. *omae=ga ut-are-ta gotai=ga are doo si-ta*
 2SG=NOM 殴る-PASS-PST 様子:ある:NPST=CONC あれ どう する-PST
wake=jaQ-ta=to?
 わけ=VLZ-PST=NLZ
 ‘おまえが [あの人に] 殴られたようだが、あれはどうした訳だったのか?’
 《三人称→二人称》

固有の人物から三人称の人物への動作は受動ヴォイスで表現されやすい。しかし、親族から三人

称の人物へ動作は無標ヴォイスで表現される傾向にある。

- (7) a. aN huto=ga josidaseNsee=kara ut-are-joi=doo.
 あの 人=NOM 吉田先生=ABL 殴る-PASS-IPFV:NPST=SFP
 ‘あの人が吉田先生に殴られているよ。’ 《固有→三人称》
- b. [テレビに出ている男性をお父さんが殴っている場面を見て]
 naikjaa otoQcjaN=wa uQc-jaQ-ta=cjaroo=kai?
 なぜ お父さん=TOP 殴る-HON-PST=NLZ:VLZ:INFR=Q
 ‘どうしてお父さんは殴りなされたのだろうか。’ 《親族→三人称》

親族と固有の人物では、どちらが名詞階層の上位に来るのかわからない。

- (8) a. ojaQdon=ga josidaseNsee=kara ut-are-joi-jai=doo.
 お父さん=NOM 吉田先生=ABL 殴る-PASS-IPFV-HON:NPST=SFP
 ‘お父さんが吉田先生に殴られなさっているよ。’ 《固有→親族》
- b. josidaseNsee=ga cicioja=kara ut-are-joi=doo.
 吉田先生=NOM 父親=ABL 殴る-PASS-IPFV:NPST=SFP
 ‘吉田先生が父親に殴られているよ。’ 《親族→固有》

個性不明の人物から親族ないし固有の人物への動作は受動ヴォイスで表現されやすい。

- (9) josidaseNsee=wa otoko=kara ut-are-joi=doo.
 吉田先生=TOP 男=ABL 殴る-PASS-IPFV:NPST=SFP
 ‘吉田先生は男に殴られているよ。’ 《人間→固有》
- (10) josidaseNsee=no cicioja=ga otoko=kara ut-are-joi.
 吉田先生=GEN 父親=NOM 男=ABL 殴る-PASS-IPFV:NPST
 ‘吉田先生の父親が男から殴られている。’ 《人間→親族》

動物から人間への動作は、受動ヴォイスではなく、無標ヴォイスで表現される傾向にある。

- (11) a. aru otoko=ni iN=ga kaN+cii-ta.
 ある 男=DAT 犬=NOM 噛む:NL+付く-PST
 ‘ある男に犬が噛みついた。’ 《動物→人間》
- b. neko=ga otokee cjuudeta-te kaQ+kiQ-ta.
 猫=NOM 男:DAT 飛びかかる-CTX 掻く:NL+切る-PST
 ‘猫が男に飛びかかって、引っ掻いた。’ 《動物→人間》

自然現象から無生物ないし動物への動作は受動ヴォイスで表現されやすい。

- (12) aN iN=wa cunamii ki-te nagas-are-ta=cjai=gaa.
 あの 犬=TOP 津波 来る-CTX 流す-PASS-PST=NLZ:VLZ:NPST=SFP
 guurai-kaQ-ta=naa.
 かわいそう-VLZ-PST=SFP
 ‘あの犬は津波が来て流されたんだよ。可哀想だったなあ。’ 《自然→動物》

不完全ではあるが、ここまでの例文から次の名詞階層の可能性のあるものと思われる。調査を尽くしたとは言えないため、今後も検討していきたい。

表 27 名詞階層

二人称	一人称	三人称 親族 固有	動物	人間	無生物
-----	-----	-----------------	----	----	-----

7.2 ヴォイス

7.2.1 自動詞語幹化

生産性は非常に低いだが、自動詞語幹化する働きを持つ *-ar-* という接尾辞は、確認した限り、*musub-* ‘結ぶ’, *hodok-* ‘ほどく’, *tatam-* ‘たたむ’ という 3 種類の他動詞語幹に付く⁴⁶。次に挙げる (13)–(15)b の *-ar-* 語幹は、(13)–(15)a の他動詞語幹を自動詞語幹化させたものである。

- (13) a. *himo=ba musuu-da.*
 ひも=ACC 結ぶ-PST
 ‘ひもを結んだ。’
- b. *himo=no musub-aQ-ta.*
musub-ar-ta
 ひも=NOM 結ぶ-INTR-PST
 ‘ひもが結ばれた [=結んだ状態になった]。’
- (14) a. *himo=ba hodoi-ta.*
 ひも=ACC ほどく-PST
 ‘ひもをほどいた。’
- b. *himo=no hodok-aQ-ta.*
 ひも=NOM ほどく-INTR-PST
 ‘ひもがほどかれた [=ほどいた状態になった]。’
- (15) a. *ubaguruma=ba ciNkoo tataa-da.*
 乳母車=ACC 小さい:NL たたむ-PST
 ‘乳母車を小さくたたんだ。’
- b. *ubaguruma=no ciNkoo tatam-aQ-ta.*
 乳母車=NOM 小さい:NL たたむ-INTR-PST
 ‘乳母車が小さくたたまれた [=たたんだ状態になった]。’

-ar- は自動詞語幹から自動詞語幹を派生させることもある。ただし、これも生産性が低く、確認した限り、*uk-* ‘浮く’, *ak-* ‘開く’, *jam-* ‘止む’, *wak-* ‘沸く’, *cik-* ‘付く’ の 5 つにしか付かない。

- (16) a. *hune=no uk-aQ-toi.*
 船=NOM 浮く-INTR-CONT:NPST
 ‘船が浮いている。’

⁴⁶ *hogar-* ‘(穴が) 空く’, *tokar-* ‘溶/解ける’ もそれぞれ //hog-ar-//, //tok-ar-// と分析できるかもしれない。

- b. to=no ak-aQ-toi.
戸=NOM 開く-INTR-CONT:NPST
‘戸が開いている。’
- c. ame=no jam-aQ-ta.
雨=NOM 止む-INTR-PST
‘雨が止んだ。’
- d. ju=no wak-aQ-ta.
湯=NOM 沸く-INTR-PST
‘湯が沸いた。’
- e. oi=ga si-te cik-aN=jaQ-ta=tee aN=ga si-te
1SG=NOM する-CTX 付く-NEG=VLZ-PST=CONC 自分=NOM する-CTX
cik-ai moN=ka.
付く-INTR:NPST もの=Q
‘俺がして付かなかったのに、おまえがして付くものか。’

自動詞語幹に付いても、自動詞語幹にしかならず、意味的には何の違いももたらさない。ただし、
-ar- 動詞語幹は次の可能構文では使うことができない。

- (17) a. uk-i=ga nai.
浮く-NL=NOM なる:NPST
‘浮くことができる。’
- b. *uk-ai=ga nai.
浮く-INTR:NL=NOM なる:NPST
‘浮くことができる。’

7.2.2 使役・受動表現

使役表現では、動詞派生接尾辞 ^sase- が用いられる。動詞語幹にこれが付くと、項構造と格標示が変化し、使役者は主格助詞 =ga で、動作主=被使役者は与格助詞 =ⁿi で標示される。

- (18) a. sato=N hutee kik-ase-te=mo wakai=cju-u=N?
里=GEN 人:DAT 聞く-CAUS-CTX=も わかる:NPST=QUOT:言う-NPST=Q
‘里の人に聞かせても、わからないんじゃないか?’
- b. [母を探して歩く子どもを描いた、テレビドラマを見ながら]
koN ko=ba oQkaN=ni aw-asu-u gotai=naa.
この 子=ACC 母=DAT 会う-CAUS-VOL 様子:ある:NPST=SFP
‘この子を母に会わせたいなあ。’

受動表現では ^rare- が用いられる。動詞語幹にこれが付くと、やはり項構造と格標示が変化し、経験者は主格助詞 =ga で、動作主は与格助詞 =ⁿi ないし奪格助詞 =kara で標示される。

- (19) a. taroo=ga seNsee=ni omocja=ba toiager-are-ta.
太郎=NOM 先生=DAT おもちゃ=ACC 取りあげる-PASS-PST

‘太郎が先生におもちゃを取り上げられた。’

- b. seNsee=kara gar-aree~gar-aree
 先生=ABL 怒る-PASS:NL~SIM
 ‘先生から怒られながら’

里方言の使役・受動表現は、管見の限り標準語のそれと同じであるが、現時点では調査不足であるため、詳細な記述は今後の課題としたい。

7.2.3 可能表現

里方言の可能表現では、次の6つの形式が使用される⁴⁷。

- (20) a. ⁱØ=ga#nar- b. ⁱØ=ga#e- c. -e-
 d. +kir- e. ^rare- f. +das-

九州方言の可能表現は、成立条件の違いによって、能力可能と外的条件可能の大別できる(大分方言、鹿児島本土方言を除く)。能力可能とは、動作主体の能力に依存した可能表現で、外的条件可能とは、動作主体を取り巻く環境に依存した可能表現である。里方言の可能表現形式とその意味を次の[表28]に示す。

表 28 里方言における可能表現の体系

	ⁱ Ø=ga#na r-	ⁱ Ø=ga#e-	-e-	+kir-	^r are-	+das-
能力	✓	✓	✓	✓		
外的条件	✓	✓	✓		✓	?

里方言では、能力可能と外的条件可能の対立が失われつつある。表28のように、ⁱØ=ga#nar-、ⁱØ=ga#je-、-e- は、能力可能もしくは外的条件可能のどちらか一方に偏ることなく、可能全般を表す。^rare- は主に外的条件可能を表す。+das- は、時間的余裕を成立条件とする外的条件可能を表す。

以下では各形式の意味・用法を見ていく。まず、ⁱØ=ga#nar- は、次の(21)–(22)のように、能力可能と外的条件可能の区別なく、可能全般を表す。

⁴⁷ 調査した話者のうち、話者 01, 02, 17 は、ⁱØ=ga#deke- という形式も可能表現で使用するという。

(XIV) wasjaa kanazuci=jai=de ojog-i=ga deke-N=doo.
 1SG:TOP かなづち=VLZ:NPST=CSL 泳ぐ-ML=NOM できる-NEG:NPST=SNP
 ‘私はかなづちだから、泳ぐことができないよ。’

《能力可能》

しかし、話者 06, 18 は ⁱØ=ga#deke- をほとんど使わず、自分たちより若い世代が使い始めている新形式だとコメントしたため、今回の記述には加えなかった。

(21) a. oraa ojogjaa nai.
 ojog-ⁱØ=^wa nar-^ru
 1SG:TOP 泳ぐ-NL=TOP なる-NPST
 ‘私は泳ぐことはできる。’ 《能力》

b. watasjaa kanazuci=de ojogjaa nar-aN.
 1SG:TOP かなづち=INST 泳ぐ:NL:TOP なる-NEG:NPST
 ‘私はかなづちで泳ぐことはできない。’ 《能力》

(22) a. sio=ga miQ-toi=de ojog-i=ga nai=doo.
 潮=NOM 満ちる-CONT:NPST=CSL 泳ぐ-NL=NOM なる:NPST=SFP
 ‘潮が満ちているから、泳ぐことができるぞ。’ 《外的条件》

b. sio=ga hiQ-toi=de ojog-i=ga nar-aN=doo.
 潮=NOM 引く-CONT:NPST=CSL⁴⁸ 泳ぐ-NL=NOM なる-NEG:NPST=SFP
 ‘潮が引いているから、泳ぐことができないぞ。’ 《外的条件》

-ⁱØ=ga#e- も, (23)–(24) のように, 能力可能と外的条件可能の区別なく, 可能全般を表す。

(23) a. oraa akurjoku=ga cujo-ka=de doNna biN=demo
 1SG:TOP 握力=NOM 強い-NPST=CSL どんな 瓶=でも
 ake-Ø=ga ju-i=ga.
 開ける-NL=NOM 得る-NPST=SFP
 ‘私は握力が強いから、どんな瓶でも開けることができるよ。’ 《能力》

b. oraa akurjoku=no na-ka=de biN=no huta=a
 1SG:TOP 握力=NOM ない-NPST=CSL 瓶=GEN ふた=TOP
 ake-Ø=ga e-N.
 開ける-NL=NOM 得る-NEG:NPST
 ‘私は握力がないので、瓶のふたは開けることができない。’ 《能力》

(24) a. kagi=ga deki-ta moN=de mado=o ake-Ø=ga e-ta.
 鍵=NOM できる-PST もの=INST 窓=ACC 開ける-NL=NOM 得る-PST
 ‘鍵ができたものだから、窓を開けることができた。’ 《外的条件》

b. kagi=ga koware-te mado=o akjaa e-N=jaQ-ta.
 ake-ⁱØ=^wa e-^an-^ru=jar-ta
 鍵=NOM 壊れる-CTX 窓=ACC 開ける:NL:TOP 得る-NEG=VLZ-PST
 ‘鍵が壊れて、窓を開けることはできなかった。’ 《外的条件》

-e- は, (25) ojog- ‘泳ぐ’, (26) kak- ‘書く’, (27) ik- ‘行く’ といった子音語幹に接続し⁴⁹, 可能全般を表す。

⁴⁸ ‘引く-CONT:NPST’ にあたる動詞としては hii-toi が予想されるので, hiQ-toi ‘干る-CONT:NPST’ かもしれない。

⁴⁹ 母音語幹 mi- ‘見る’, ake- ‘開ける’ に -e- が接続する例を話者 06 から数例得た。しかし, 意味・用法が確認できていないことと, 話者 02 がこの形式を不自然と判断したことから, 今回の記述には加えなかった。

- (25) a. oraa ojog-u-i=do.
1SG:TOP 泳ぐ-POT-NPST=SFP
‘私は泳ぐことができるぞ。’ 《能力》
- b. watasjaa kanazuci=de ojog-e-N.
1SG:TOP かなづち=INST 泳ぐ-POT-NEG:NPST
‘私はかなづちで泳ぐことができない。’ 《能力》
- (26) a. biNseN=ba koo-te ki-ta=kara tegami=o kak-u-i=doo.
便せん=ACC 買う-CTX 来る-PST=CSL 手紙=ACC 書く-POT-NPST=SFP
‘便せんを買ってきたから、手紙を書くことができるよ。’ 《外的条件》
- b. [手紙を書いていたが、途中で便せんがなくなったので]
saigo=made kak-e-N-kaQ-ta.
最後=まで 書く-POT-NEG-VLZ-PST
‘最後まで、書くことができなかった。’ 《外的条件》
- (27) [磯餅焼きに行くお年寄りについて話している]
sore=koso asoko=daQ-tara moo=na cue=demo cui-tee=na
それ=こそ あそこ=VLZ-COND もう=CNF 杖=でも 突く-CTX=CNF
juQkuri juQkuri ik-u-i=taa.
ゆっくり ゆっくり 行く-POT-NPST=SFP
‘それこそあそこだったら、もうね、杖でも突いてね、ゆっくりゆっくり行けるよ。’
《外的条件》

+kir- は次のように能力可能を表すが、外的条件可能は表さない。

- (28) a. watasjaa kanazuci=de ojog-i+kir-aN.
1SG:TOP かなづち=INST 泳ぐ-NL+POT-NEG:NPST
‘私はかなづちで泳ぐことができない。’ 《能力》
- b. #kjoo=wa puuru=ga jasumi=de ojog-i+kir-aN.
今日=TOP プール=NOM 休み=INST 泳ぐ-NL+POT-NEG:NPST
‘今日はプールが休みで泳ぐことができない。’ 《外的条件》

次のように道具の有無を成立条件とする可能表現でも、+kir- は用いられる。

- (29) a. kagi=ba moQ-toi=de to=ba ake-Ø+kii.
鍵=ACC 持つ-CONT:NPST=CSL 戸=ACC 開ける-NL+POT:NPST
‘鍵を持っているから、戸を開けることができる。’ 《外的条件》
- b. kagi=ba nakus-ite kiNko=ba ake-Ø+kir-aN.
鍵=ACC なくす-CTX 金庫=ACC 開ける-NL+POT-NEG:NPST
‘鍵をなくして、金庫を開けることができない。’ 《外的条件》

このような +kir- の使用は、長崎県長崎市、同県福江市 (木部 2004; 2006)⁵⁰、熊本県八代市 (山本

⁵⁰ 木部 (2006) では、外的条件可能に +kir- が使用されることについて、「外的条件の位置づけが、「主体の能力」(次頁に続く)

2004) などでも報告されている。(28) を踏まえると, kagi ‘鍵’ のような道具も動作主の能力に含まれるのだろう。

神部 (1987), 渋谷 (1993; 2005), 青木 (2004) など指摘されているように, +kir- は, 「最後までし終える」という完遂の意味から可能を表すようになった形式である。そのためか, 里方言の +kir- も完遂の意味で使用されることがある。

- (30) kaQ+kiQ-ta.
 書く :NL+切る-PST
 ‘(100 通) 書ききった’ 《完遂》

このことから, +kir- は動作の完遂を明示する表現と馴染みやすい。たとえば, (31)a のように, 動作の完遂を明示する場合は +kir- が使え (て, 外的条件可能のようにも解釈でき) るが, (31)b のように, そうでない場合は不自然である。

- (31) a kinoo=wa zikaN=ga aQ-ta=dee neNgazjoo=ba zeNbu kak-i+kiQ-ta.
 昨日=TOP 時間=NOM ある-PST=CSL 年賀状=ACC 全部 書く-NL+切る-PST
 ‘昨日は時間があったので, 年賀状を全部書きあげた。’ 《外的条件》
- b. #biNseN=ga aQ-ta monN=de kinoo=wa tegami=ba kaQ+kiQ-ta.
 便せん=NOM ある-PST もの=CSL 昨日=TOP 手紙=ACC 書く :NL+POT-PST
 ‘便せんがあったので, 昨日は手紙を書きあげた。’ 《外的条件》

-are- は, (32) のように外的条件可能は表すが, (33) のように能力可能は表さない。

- (32) a. [子どもの頃の遊び「布団かぶせ」の話をしていて]
 sora omoni ame=toka sogaNta tooki=jai-moi-ta=naa.
 それ=TOP 主に 雨=ILST そうした 時=VLZ-POL-PST=SFP
 amebijori=de soto=de asub-are-N tooki=naa.
 雨日和=INST 外=LOC 遊ぶ-POT-NEG:NPST 時=SFP
 ‘それは主に雨とかそんな時でしたね。雨日和で外で遊べない時ね。’
 《外的条件》
- b. sio=ga miQ-toi=de ojog-arui=doo.
 潮=NOM 満ちる-CONT:NPST=CSL 泳ぐ-POT-NPST=SFP
 ‘潮が満ちているから, 泳ぐことができるぞ。’ 《外的条件》
- c. sio=ga hiQ-toi=de ojog-are-N=doo.
 潮=NOM 引く-CONT:NPST=CSL 泳ぐ-POT-NEG:NPST=SFP
 ‘潮が引いているから, 泳ぐことができないぞ。’ 《外的条件》
- (33) a. #oraa ojog-arui.
 1SG:TOP 泳ぐ-POT-NPST
 ‘私は泳ぐことができる。’ 《能力》

がおもてへ出る際の単なる外的・一時的な通過条件という位置づけから, 「主体の能力」を積極的に「援助」する, あるいは「引き出す」ものという位置づけへ変化したため」と分析している。

- b. # watasjaa kanazuci=de ojog-are-N.
 1SG:TOP かなづち=INST 泳ぐ-POT-NEG:NPST
 ‘私はかなづちで泳ぐことができない。’ 《能力》

次の -ⁱare- も厳密には能力可能ではない。

- (34) a. kono kaNzi=wa muzukasi-ka=de kak-are-N.
 この 漢字=TOP 難しい-NPST=CSL 書く-POT-NEG:NPST
 ‘この漢字は難しくて書くことができない。’ 《能力》

- b. oraa akurjoku=no na-ka=de biN=no huta=a ake-rare-N.
 1SG:TOP 握力=NOM ない-NPST=CSL 瓶=GEN ふた=TOP 開ける-POT-NEG:NPST
 ‘私は握力がないので、瓶のふたは開けることができない。’ 《能力》

(34)a の動作主は字を書く能力は備えているが、漢字の難しさという外的条件がそれを妨げている。(34)b も同様に、動作主はふたを開ける能力を備えているが、ふたの閉まり具合という外的条件がそれを阻害している。(32)–(33) を踏まえると、動作主の能力が発揮できるかどうか、外的条件に含まれるのだろう。

+das- は能力可能を表さず、時間的余裕を成立条件とする外的条件可能を表す⁵¹。神部 (1987) によると、九州方言では否定形式と共に用いられることが多いようであるが、里方言では必ずしもそうではない。

- (35) a. kjuu=wa jojuu=ga aQ-ta moN=de kocucumi=ba ake-Ø+djaa-ta.
 今日=TOP 余裕=NOM ある-PST もの=CSL 小包=ACC 開ける-NL+POT-PST
 ‘今日は余裕があったので、小包を開けることができた。’ 《外的条件》
- b. kinuu=wa isogasjuu si-te kocucumi=mo ake-Ø+das-aN-kaQ-ta.
 昨日=TOP 忙しい:NL する-CTX 小包=も 開ける-NL+POT-NEG-VLZ-PST
 ‘昨日は忙しくて、小包も開けることができなかった。’ 《外的条件》

7.3 アスペクト

里方言の主たるアスペクト形式は -ⁱor- と -tor- であり (-ⁱor- の代わりに -ⁱjor- を使う話者も)、

⁵¹ 話者 01 の +das- は他の話者のそれよりも使用範囲が広く、この条件以外でも用いられることがある。

- (XV) a. kjuu=wa puuru=ga jasumi=jai=dee ozug-i+das-aN.
 今日=TOP プール=NOM 休み=VLZ:NPST=CSL 泳ぐ-NL+POT-NEG:NPST
 ‘今日はプールが休みだから、泳ぐことができない。’ 《外的条件》
- b. dosi=kara zitenjsja=ba kai-daa-ta=de noi=ga nai.
 友達=ABL 自転車=ACC 借りる:NL+POT-PST=CSL 乗る:NL=NOM なる:NPST
 ‘友達から自転車を借りることができたので、乗ることができる。’ 《外的条件》
- c. * meNkjosjoo=ba modee-ta=dee noi+das-aN.
 免許証=ACC 戻す-PST=CSL 乗る:NL-POT-NEG:NPST
 ‘免許証を返納したので、乗ることができない。’ 《外的条件》

話者 01 によると、他の人から許可を受けてできる、あるいは禁止されてできないといった場合に使うということだが、(XIV)c のように、運転免許を返納して車に乗れない場合には使用されない。どういう条件で +das- が使用されるかは、さらに調査が必要である。

前者は (36) のように限界達成前の段階を、後者は (37) のように限界達成後の段階を表す。

- (36) a. [過去: ちょうど太郎が窓を開けている最中だったのを見て]
 iizen taroo=wa mado=ba ake-joQ-ta.
 さっき 太郎=TOP 窓=ACC 開ける-IPFV-PST
 ‘さっき太郎は窓を開けつつあった。’
- b. [現在: 部屋に入ると、ちょうど太郎が窓を開けている最中だったのを見て]
 ima ake-joi=doo.
 今 開ける-IPFV:NPST=SFP
 ‘今開けつつあるよ。’
- c. [未来: 今日は暑い日だったから、帰り着く頃には太郎が窓を開けているだろうと想像して]
 mado=ba ake-joi=saroo=na.
 窓=ACC 開ける-IPFV:NPST=NLZ:VLZ:INFR=SFP
 ‘窓を開けつつあるだろうな。’
- (37) a. [過去: 部屋に入ると誰もいないが窓が開けっ放しになっていた。太郎が窓を開けていたのだと思って]
 taroo=wa mado ake-toQ-ta=sai=gaa.
 太郎=TOP 窓 開ける-CONT-PST=NLZ:VLZ=SFP
 ‘太郎は窓を開けていたのだよ。’
- b. [現在: 太郎が窓を開けたままにしているのを見て]
 mata taroo=ga ake-toi=doo.
 また 太郎=NOM 開ける-CONT:NPST=SFP
 ‘また太郎が開けているよ。’
- c. [未来: 帰った時には既に窓を開けてしまっているところを想像して]
 mado=ba ake-toi=saroo=na.
 窓=ACC 開ける-CONT:NPST=NLZ:VLZ:INFR=SFP
 ‘窓を開けているだろうな。’

ⁱ-or- も -tor- も継続的な意味を表す形式である。次のように完成的な意味を表す場合、有標形式は使わない。

- (38) a. taroo=wa asita tookjoo=ni ik-u=sai=taa.
 太郎=TOP 明日 東京=DAT 行く-NPST=NLZ:VLZ:NPST=SFP
 ‘太郎は明日東京に行くだろうね。’
- b. ik-oo=to omoo-ta.
 行く-VOL=QUOT 思う-PST
 ‘行こうと思った。’

ⁱ-or- と -tor- の対立は、内的限界動詞 (=主体変化動詞および主体動作客体変化動詞) に見られる。非内的限界動詞ではこの対立が一部中和する。

- (39) a. [子どもが遊んでいるのを見かけて]
 ike=N naka=de asob-*ijoQ*-ta=sai=ga.
 池=GEN 中=LOC 遊ぶ-*IPFV*-*PST*=*NLZ:VLZ*=*SFP*
 ‘池の中で遊んでいたんだよ。’
- b. taroo=wa ike=de asuu-*doQ*-ta=doo.
 太郎=TOP 池=LOC 遊ぶ-*CONT*-*PST*=*SFP*
 ‘太郎は池で遊んでいたよ。’

内的状態動詞においても限界達成前/後の対立が中和する。

- (40) a. [来ると言っていた会になぜ来なかったのかを聞かれて]
 ik-oo=to omoo-*joQ*-ta=sai=baQte
 行く-*VOL*=*QUOT* 思う-*IPFV*-*PST*=*NLZ:VLZ*=*CONC*
 ‘行こうと思っていたのだが’
- b. jakuiN-taci=dake=de=te ju-u hanasai=o su-reba=to
 役員=PL=だけ=INST=*QUOT* 言う-*NPST* 話合い=ACC する-*COND*=*QUOT*
 onmui-toi wake=jo.
 思う-*CONT:NPST* わけ=*SFP*
 ‘役員たちだけで、という話をすればと思っているわけよ。’

標準語のアスペクト形式「ている」は、形容詞語幹や存在動詞語幹には接続しない。里方言の ⁱor-, -tor- も同様であるが、前者は形容詞語幹から派生した -kaⁱ- 動詞語幹に接続し、(41)a-c のように時間的限定性のある状態を表す。このような ⁱor- は非過去時制では使用されず、過去の何らかの状態を表す形式となっている。

- (41) a. [いつも寂しかった過去を思い出して]
 aN kora namana todeNna-kai-*joi*-moi-ta=a.
 あの頃:TOP とても 寂しい-*VLZ*-*IPFV*-*POL*-*PST*=*SFP*
 ‘あの頃はとても寂しかったです。’
- b. [最近のトマトは赤みがないという話になって]
 mukaasi=N tomataa aka-ka-*oQ*-ta.
 昔=GEN トマト:TOP 赤い-*VLZ*-*IPFV*-*PST*
 ‘昔のトマトは赤かった。’
- c. mukaasi=kara kokon moojaa
 昔=ABL ここ=GEN あたり:TOP
 sizuka=jai-*joi*-moi-ta=sar-aa.
 静か=*VLZ*-*IPFV*-*POL*-*PST*=*NLZ:VLZ*-*NPST*:*SFP*
 ‘昔からこのあたりは静かでしたよ。’

ⁱor- は存在動詞語幹 ar- にも接続し、何らかのイベントの継続ないし反復を表す。

- (42) [昨日の運動会の後片付けが行なわれているのを見て]
 kinoo uNdookai=no ai-*joQ*-ta=sai=taa.

昨日 運動会=NOM ある-IPFV-PST=NLZ:VLZ:NPST=SFP

‘昨日運動会が行なわれていたんだね。’

なお、-tor- が -ka^r- 動詞語幹や存在動詞語幹に付くことはない。

-ⁱor- は限界達成前の段階を表すことから、動作や変化の直前段階も表す。ただし、+kake-tor- や kaNmjaa ‘構え’ を利用した、組み立て形式で表現することもできる。

- (43) a. [金魚が苦しそうにしていたのを見て]

kiNgjoo siN-jor-aa.

金魚 死ぬ-IPFV-NPST:SFP

‘金魚が死にかけているよ。’

- b. [金魚が苦しそうにしていたのを見て]

kiNgjo=ga siN+kake-toQ-ta=a=jo.

金魚=NOM 死ぬ:NL-かける-CONT-PST=SFP=SFP

‘金魚が死にかけていたよ。’

- c. [太郎が窓を開けようとしているのを見て]

akui kaNmjaa si-joi.

開ける:NPST 構え する-IPFV:NPST

‘開けかけている。’

- d. [金魚が苦しそうにしているのを見て]

kiNgjo=ga siN kaNmjaa=jai=doo.

金魚=NOM 死ぬ:NPST 構え=VLZ:NPST=SFP

‘金魚が死にそうだよ。’

また、-tor- は限界達成後を表すことから、痕跡から推定される出来事も表しうる。

- (44) [今は雨は降っていないが、外で地面が濡れているのを見て]

ameN huQ-toQ-ta=sai=doo=naa.

雨=NOM 降る-CONT-PST=NLZ:VLZ:NPST=INFR=SFP

‘雨が降っていたんだろうな。’

過去・現在の習慣には、(45)aのように -ⁱor- が用いられる。一部、(45)cのように -tor- を用いる話者も存在する。ただし、未来の習慣には -ⁱor- は用いられにくく、(43)のように有標形式は使わない。

- (45) a. [今はもう飲まないが、昔毎日焼酎を飲んでた父親を回想して]

mukaasjaa juu nom-ijoi-jai-moi-ta=ga=naa.

昔:TOP いい:NL 飲む-IPFV-HON-POL-PST=SFP=SFP

‘昔はよく飲んでいらっしやいましたがなあ。’

- b. uci=no hana-cjaN=wa mainici umi=ni ik-ijoi=doo.

うち=GEN はな-TTL=TOP 毎日 海=DAT 行く-IPFV.NPST=SFP

‘うちのはなちゃんは毎日海に行っているよ。’

- c. mainici=N goto noN-doi-jai-moi-ta=doo=naa.

毎日=GEN 様子 飲む-CONT-HON-POL-PST=SFP=SFP

‘毎日のように飲んでいらっしやいましたよなあ。’

(46) mo taroo=wa asita=kara daigaQkoo=ni ik-imos-u=sar-aa.

もう 太郎=TOP 明日=ABL 大学=DAT 行く-POL-NPST=NLZ:VLZ-NPST:SFP

‘もう太郎は明日から大学に行くでしょう。’

周辺のなアスペクト形式としては、(47) +kata=jar-, (48) -te#ok-, (49) -te#ar-, (50) -te#simaw- が存在する。+kata=jar- は進行相で、限界達成前の段階を表す。

(47) aoziru nom-i+kata=jai=do.

青汁 飲む-NL+IPFV=VLZ:NPST=SFP

‘青汁を飲んでいるよ。’

-te#ok- と -te#ar- はパーフェクトを表す。しかし、-te#ar- も -te#ok- も -tor- と意味領域が重なるため、基本的には -tor- を用いる。

(48) a. rjoori=ba tanoo-dok-e=joo.

tanom-te#ok-e=joo

料理=ACC 頼む-CTX#置く-IMP=SFP

‘料理を頼んでおけよ。’

b. hutoN=ba sii-tok-e=joo.

sik-te#ok-e=joo

布団=ACC 敷く-CTX#置く-IMP=SFP

‘布団を敷いておけよ。’

(49) a. oi=ga jaa hasira=ni huQto-ka tokee=ba kake-te ai=doo.

1SG=GEN 家:TOP 柱=DAT 大きい-NPST 時計=ACC 掛ける-CTX ある:NPST=SFP

‘私の家は柱に大きな時計を掛けてあるよ。’

b. [[近所の人たちで宴会をするから料理を頼んでおくように言われ、それに答えて]

moo tanoo-de ai-mos-u=doo.

もう 頼む-CTX ある-POL-NPST=SFP

‘もう頼んでありますよ。’

-te#simaw- は不可逆性を強調する場合に用いる。

(50) waQ-te simoo-ta=a.

割る-CTX しまう-PST=SFP

‘割ってしまったわ。’

7.4 待遇表現

7.4.1 主格尊敬表現

主格尊敬表現では、動詞派生接尾辞 -^hjar- が用いられる。-^hjar- は、(51)a のように、主格に目上にあたる人物が来る時に、-^hjar- が用いられる。一方、(51)b のように主格に孫など目上以外の人物

が来る時には、-ⁱjar- は用いられない。

- (51) a. seNsee=ga iQk-jai-ta.
 ik-ⁱjar-ta
 先生=NOM 行く -HON-PST
 ‘先生が行かれた。’
- b. #mago=ga iQk-jai-ta.
 孫=NOM 行く -HON-PST
 ‘孫が行かれた。’

この -ⁱjar- は、待遇場面によって適用範囲が多少異なる。すなわち、-ⁱjar- は聞き手待遇ではウチ/ソト、親/疎に関わらず目上または対等の聞き手に対して使用され、目下に対しては使用されない。第三者待遇では、女性は、目下にも使用することがあるが (後述)、基本的に目上の人物が主語に来る時に使用される。

(52) [聞き手に対して、今日の夏祭りに行くか聞く。]

- a. iQk-jai-mos-u=to=N?
行く -HON-POL-NPST=NLZ=Q
‘[目上に] 行かれますか?’
- b. iQk-jai=to=N?
行く -HON:NPST=NLZ=Q
‘[対等に] 行かれるか?’
- c. ik-u=to=N?
行く -NPST=NLZ=Q
‘[目下に] 行くか?’

(53) [聞き手に対して、今日の夏祭りに来るか聞く。]

- a. ki-jai-mos-u=to=N?
来る -HON-POL-NPST=NLZ=Q
‘[目上に] 来られますか?’
- b. ki-jai=to=N?
来る -HON:NPST=NLZ=Q
‘[対等に] 来られるか?’
- c. ku-i=to=N?
来る -NPST=NLZ=Q
‘[目下に] 来るか?’

(54) [聞き手に対して、今日家にいるか聞く。]

- a. oi-jai-mos-u=to=N?
いる -HON-POL-NPST=NLZ=Q
‘[目上に] いらっしゃいますか?’
- b. oi-jai=to=N?

いる-HON:NPST=NLZ=Q
‘[対等に] いらっしゃるか?’

c. oi=to=N?
いる:NPST=NLZ=Q
‘[目下に] いるか?’

- (55) A: siQ-toi-jai=to=N?
知る-CONT-HON:NPST=NLZ=Q
B: sii-mos-aN.
知る-POL-NEG:NPST
A: ‘[あなたはそれを] 知っていらっしゃるの?’
B: ‘[私はそれを] 知らないです。’

なお、次の例文のように、無生物主語 (事柄) の時は ⁱjar- が用いられない。

- (56) uuN naaNda naN=mo kjaa=mo na-ka gote naQ-te
うん なんだ 何=も 彼=も ない-NPST 様子:DAT なる-CTX
ik-imos-ita=a.
行く-POL-PST=SFP
‘うーん何もかも、なくなっていました。’

さらに、その適用範囲には男女差も見られるようである。すなわち、調査で確認した数人の話者について言えば、女性は対等以上の人物に ⁱjar- のみまたは、ⁱmos-を使用し、下の人物には ⁱjar- を使用するという使い分けが見られる。一方、男性は、目下に対して ⁱjar- を使用しない。つまり、男性よりも女性の方が ⁱjar- の適用範囲が広い。

ⁱjar- は第三者待遇でも使用される。日本語の方言の中には、たとえば、関西方言において主格尊敬接尾辞の使用が第三者場面に偏ることが指摘されている。そのなかでも京都方言の「はる」は、聞き手待遇場面では主格が目上の時に使用されるが、第三者待遇場面ではほぼすべての有生物に対して使用される。このことから、京都方言の「はる」は、第三者場面ではその待遇性を失っており、その場にはいない第三者であることをマークする形式となっていることが指摘されている。里方言においても、第三者場面で主格尊敬を表す ⁱjar- が使用されるが、京都方言の「はる」のような第三者場面に使用が偏るといことは認められない。

第三者待遇においても聞き手待遇で見られた形式の適用範囲に男女差が見られ、女性の方が ⁱjar- の範囲が広い。男性は、第三者待遇では場合によっては ⁱjar- を使用するとの回答であった。一方、女性は対等以上の人物を第三者として待遇する時に ⁱjar- を用いる。

- (57) [第三者が夏祭りに行くか聞く時]
a. 聞き手: [ウチ・対等]; 第三者: [目上]
iQk-jai-mos-u=joo=kai?
行く-HON-POL-NPST=INFR=Q
‘[あの人は] 行かれるでしょうか?’
b. 聞き手: [ウチ・対等]; 第三者: [対等]

iQk-jai=joo=ka=i?

行く-HON:NPST=INFR=Q=POL

‘[あの人は] 行かれるだろうか?’

- c. 聞き手: [ウチ・対等]; 第三者: [目下]

ik-u=to=N?

行く-NPST=NLZ=Q

‘[あの人は] 行くか?’

- (58) [第三者が夏祭りに来るか聞く時]

- a. 聞き手: [ウチ・対等]; 第三者: [目上]

ki-jai-mos-u=joo=ka=i?

来る-HON-POL-NPST=INFR=Q=POL

‘[あの人は] いらっしゃるでしょうか?’

- b. 聞き手: [ウチ・対等]; 第三者: [対等]

ki-jai=na?

来る-HON:NPST=Q

‘[あの人は] いらっしゃるか?’

- c. 聞き手: [ウチ・対等]; 第三者: [目下]

ku-i=to=N?

来る-NPST=NLZ=Q

‘[あの人は] 来るか?’

- (59) [第三者が公民館にいるか聞く時]

- a. 聞き手: [ウチ・対等]; 第三者: [目上]

oi-jai-mos-u=na?

いる-HON-POL-NPST=Q

‘[あの人は] いらっしゃるでしょうか?’

- b. 聞き手: [ウチ・対等]; 第三者: [対等]

oi-jaQ-ta=na?

いる-HON-PST=Q

‘[あの人は] いらっしゃったか?’

- c. 聞き手: [ウチ・対等]; 第三者: [目下]

oQ-ta=na?

いる-PST=Q

‘[あの人は] いたか?’

- (60)

kaNnusi-saN=mo iQk-jai-moos-u=jai dogaja soko=wa

神主-TTL=も 行く-HON-POL-NPST-VLZ:NPST など:TOP そこ=TOP

sii-moos-aN=baQteN.

知る-POL-NEG:NPST=CONC

‘神主さんも行かれるかなどは、そこは存じませんが。’

- (61) ebisu-sama=wa asoko=ni oi-jai wake=jai=dee=naa.
恵比寿-TTL=TOP あそこ=LOC いる-HON:NPST わけ=VLZ:NPST=CSL=SFP
‘恵比寿様はあそこにいらっしゃるわけだからなあ。’

なお、主格尊敬接尾辞の ⁱ-jar- の他に、標準語で用いられる「いらっしゃる」、「召し上がる」のような主格尊敬動詞語根は里方言にはない。

7.4.2 丁寧表現

丁寧表現では、動詞派生接尾辞 ⁱ-mos- が用いられる。(62) に示すように、ⁱ-mos- は ⁱ-jar- と異なり、主格が目上かどうかに関わらず用いることができる。

- (62) { seNsee / mago }=ga ik-imos-ita.
{ 先生 / 孫 }=NOM 行く-POL-PST
‘{ 先生 / 孫 }が行きました。’

ⁱ-mos- の使用においても ⁱ-jar- と同様に、男女差があるようである。すなわち、男性は聞き手待遇場面の目上に対してのみ ⁱ-mos- を使用するが、女性は聞き手待遇場面の対等以上と第三者待遇場面のほぼすべての人物を話題にしている時に ⁱ-mos- を用いる。

なお、ⁱ-mos- は、前節で述べた ⁱ-jar- と共起することができ、ⁱ-jar-ⁱ-mos- > ⁱ-jar- > Ø の順に待遇度が高い ((52)-(54)参照)。

7.4.3 斜格尊敬表現

斜格尊敬表現では、授与動詞語幹 (特定形) age- ‘あげる’ が用いられる。標準語には「うかがう」(「行く」の斜格尊敬)、「申し上げる」(「言う」の斜格尊敬)などが存在するが、里方言では、その他の意味で斜格尊敬表現となる動詞語幹は見られない。春日 (1931) では標準語の「差し上げる」の意味を表す marase- が記述されているが、それも現在の里では聞かれない。他の意味でも、補部が上位者となる動作において、特別な敬語形式を使用することはないようである。

なお、age- は、他の動詞語幹と複合し、斜格尊敬を表すことがある。ただし、どのような動詞語幹にも接続できるわけではなく、調査では mise- ‘見せる’ と tanom- ‘頼む’ のみ確認できた。

- (63) a iizeN seNsee=ni rjokoo=no sjasiN=ba miQsjage-ta=jo.
mise+age-ta=jo
さっき 先生=DAT 旅行=GEN 写真=ACC 見せる+あげる-PST=SFP
‘さっき先生に旅行の写真をお見せしたよ。’
- b. tanoNmjage-mos-u=dee seNsee koNdo=N enkai=de
tanom-ⁱØ+age-mos-u=dee
頼む-NL+あげる-POL-NPST=CSL 先生 今度=GEN 宴会=LOC
aisacu=ba si-te kui-jai-moos-e.
あいさつ=ACC する-CTX くれる-HON-POL-IMP
‘お願いしますから、先生、今度の宴会であいさつをしてください。’

7.4.4 行為要求表現

行為要求表現で最も一般的に用いられる形式は、動詞終止接尾辞 *-e* と組み立て形式 *-^aN=ka* // *-^an-ⁱu=ka* // ‘NEG-NPST=Q’ である。

目上の人物に対する行為要求表現では、対象たる聞き手に応じて敬語接尾辞 *-ⁱjar-* ‘HON’, *-ⁱmos-* ‘POL’ も利用する (それぞれの待遇価値は平叙文でのそれと変わらない)。また、依頼表現では、一人称者への恩恵を表す *-te#kure-* (cf. 7.8.2.3 節) を使う。命令を表す *-e* の使用は、上位者に対してであっても、また発話機能の違いに関わらず依頼でも勧めでも、許容される。

- (64) a. [今から家に帰ろうとしている上位者に対して、雨が降りそうなので]
kasa=ba sas-ite iQk-ⁱ{jar / jai-mos}-e.
 傘=ACC さす-CTX 行く-ⁱ{HON / HON-POL}-IMP
 ‘傘をさして行ってください(ませ)。’ 《勧め》
- b. *suN-moos-aN=baQteka koN kairanbaN=ba taroo-saN=ga e*
 済む-POL-NEG:NPST=CONC この 回覧板=ACC 太郎-TTL=GEN 家:DAT
moQ-te ita-te kui-ⁱ{jar / jai-mos}-e.
 持つ-CTX 行く-CTX くれる-ⁱ{HON / HON-POL}-IMP
 ‘すみませんが、この回覧板を太郎さんの家に持って行ってください(ませ)。’ 《依頼》
- c. [上位者に対して、別の家に持って行ってほしいものがある時]
moQ-te iQtaQ-te kui-ⁱ{jar / jai-mos}-e.
 持つ-CTX 行く:CTX:やる-CTX くれる-ⁱ{HON / HON-POL}-IMP
 ‘持って行ってください(ませ)。’ 《依頼》
- (65) a. [勧め: お腹が空いていると言っている上位者に]
jo-kar-eba sono kasi=ba kui-jar-aN=ka.
 いい-VLZ-COND その 菓子=ACC 食う-HON-NEG:NPST=Q
 ‘よければ、そのお菓子を召し上がってください。’
- b. [勧め: お腹が空いていると言っている上位者に]
jo-kar-eba sono kasi=ba kui-jai-mos-aN=ka.
 いい-VLZ-COND その 菓子=ACC 食う-HON-POL-NEG:NPST=Q
 ‘よければ、そのお菓子を召し上がってくださいませんか。’

目下に対する行為要求表現で敬語接尾辞 *-ⁱjar-*, *-ⁱmos-* が用いられることはない。

- (66) [子どもに対して]
guzuguzu se-ziN hajo kak-ⁱ{aN=ka / e}.
 ぐずぐず する-NEG.CTX 早く:NL 書く-ⁱ{NEG:NPST=Q / IMP}
 ‘ぐずぐずしないで早く書け。’

行為要求表現で *-teNka* を用いる話者もいる。

- (67) a. *ore=mo cjoQto osie-teNka.*

1SG:DAT=も ちよつと 教える-IMP

‘俺にもちよつと教えて。’

《目下に対して》

b. ore=mo cjoQto osie-te kui-jai-moi-tenka.

1SG:DAT=も ちよつと 教える-CTX くれる-HON-POL-IMP

‘俺にもちよつと教えてください。’

《目上に対して》

また、これまでの記述には -^sai という動詞屈折接尾辞 (e.g. ik-ai ‘行きなさい’, mi-sai ‘見なさい’) も見えるが (『現代日本語方言大辞典』等), 現在は用いられていない。

禁止では -^runa が用いられる。

(68) aN mise=e ita-te=mo araa ka-una.

あの 店=DAT 行く-CTX=も あれ:TOP 買う-PROH

‘あの店に行っても、あれは買うな。’

7.5 否定表現

否定表現で用いられるのは、動詞派生接尾辞 -^an- と動詞連用接尾辞 -^aziN である。以下、それぞれの意味・用法を記述していく。

7.5.1 -^an-

-^an- は統語位置の制約を受けないので、連用に限られる -^aziN より汎用性に富む。

(69) a. dokee iQ-ta=sai=joo wakar-aN.

どこ:DAT 行く-PST=NLZ:VLZ:NPST=INFR わかる-NEG:NPST

‘どこへ行ったのかわからない。’

b. [新しく来た先生は結婚しているのか聞かれたが、誰のことかわからず]

soN seNsee=ba zeNzeN sir-aN=de wakar-aN=naa.

その 先生=ACC 全然 知る-NEG:NPST=CSL わかる-NEG:NPST=SFP

‘その先生を全然知らない、わからないなあ。’

否定推量表現では、組み立て形式 -^aN=joo // -^an-^ru=joo // ‘NEG-NPST-INFR’ が使用される。標準語の「まい」のように否定と推量を同時に表す形式はない。

(70) [あの人は飲み会に]

ik-aN=joo=ka?

行く-NEG:NPST=INFR=Q

‘行かないだろうか?’

-^an- は、行為要求を表す組み立て形式 -^aN=ka // -^an-^ru=ka // ‘NEG-NPST=Q’ でも使用される。

(71) [子どもに対して]

guzuguzu se-ziN hajo kak-{ aN=ka / e }.

ぐずぐず する-NEG.CTX 早く:NL 書く-{-NEG:NPST=Q / IMP}

‘ぐずぐずしないで早く書け。’

(72)aのように、勧誘表現では基本的に $-^a u=i$ ‘HORT=SFP’ が用いられ、「ない(か)」にあたる否定(疑問)形式は一般的ではない。また、(72)bのように、否定勧誘表現では $-^a Nmjaa$ (稀に $-^a Nmjaate$) が使われるのが普通で、「ない(か)」にあたる否定(疑問)形式はやはり用いられないようである。

- (72) a. sigoto=N agaQ-ta=nara daijami su-u=i.
 仕事=NOM 上がる-PST=COND 飲み会 する-HORT=SFP
 ‘仕事が終わったら、飲もう。’
- b. [友達と旅行に行ったが、楽しくなかった。次はあそこには]
 ik-aNmjaa=ka?
 行く-NEG.HORT=Q
 ‘行かないでおこうか?’

7.5.2 $-^a ziN$

動詞連用接尾辞 $-^a ziN$ は、様態、理由、並列などを表す動詞連用接尾辞である。同様に様態、順接確定条件、並列などを表す $-te$ (cf. 6.6, 8.3, 8.4.2 節) とは異なり、 $-^a ziN$ は事態の不成立・不存在という否定的意味を有している。次の (73)–(74) が様態、(75) が理由、(76) が並列の例である。

- (73) a. dokee=mo ik-aziN waga=no e=e oQ-ta.
 どこ:DAT=も 行く-NEG.CTX 自分=NOM 家=DAT いる-PST
 ‘どこへも行かずにうちにいた。’
- b. hiiru=mo naaN=mo tabe-ziN icinicizjuu sigoto=ba si-toQ-ta.
 昼=も 何=も 食べる-NEG.CTX 一日中 仕事=ACC する-CONT-PST
 ‘昼ご飯も食べずに一日中仕事をしていた。’
- c. oido=ga ieenjaa aisacu=ni=saaka ke-ziN kaeQ-ta=naa.
 1SG=NOM 家:DAT.TOP あいさつ=DAT=さえ 来る-NEG.CTX 帰る-PST=SFP
 ‘俺の家にはあいさつにも来ずに帰ったなあ。’

- (74) araa icio siozuke si-te koNdaa soi=ba moo
 あれ:TOP 一応 塩漬け する-CTX 今度:TOP それ=ACC もう
 kugurasi-te soi=kara ato=wa satoo=de tak-aziN son
 くぐらせる-CTX それ=ABL 後=TOP 砂糖=INST 炊く-NEG.CTX その
 guranjuutoo=ba cuke-ta=baQkai=ja.
 グラニュー糖=ACC 付ける-PST=ばかり=SFP
 ‘あれは、まず塩漬けて、今度はそれを湯ど、ゆで、もう [湯に] くぐらせて、それから後は、砂糖では炊かずにそのグラニュー糖を付けただけかな。’

- (75) a. seQkaku=jaQ-ta=tee aw-aziN zaNneN=jaQ-ta=naa.
 せっかく=VLZ-PST=CONC 会う-NEG.CTX 残念=VLZ-PST=SFP
 ‘せっかくだったのに会わずに残念だったなあ。’
- b. omajaa kega se-ziN jo-kaQ-ta=naa.
 おまえ:TOP けが する-NEG.CTX いい-VLZ-PST=SFP

‘おまえはけがをしないでよかったなあ。’

- (76) taroo=ga ku-i=ka=to omoo-toQ-taiba taroo=ga
太郎=-NOM 来る-NPST=Q=QUOT 思う-CONT-PST.COND 太郎=NOM
ke-ziN ziroo=ga ki-ta.
来る-NEG.CTX 次郎=NOM 来る-PST

‘太郎が来るかと思っていたら、太郎が来ずに次郎が来た。’

-^aziN は、繫辞動詞語根 =jar- や形容詞語幹から派生した -ka^r- 動詞語幹などには接続することができない。しかし例外的に、不存在を表す na-ka^r- ‘ない-VLZ’ には付くことができる。これは、存在動詞語幹 ar- の否定形式の不在を埋めるための便宜的な措置と考えられる。なお、接続のしかたは次の例に示すとおり na-ka-ziN であり、na-kar-aziN ではない。

- (77) a. kega=N na-ka-ziN jo-kaQ-ta=naa.
けが=NOM ない-VLZ-NEG.CTX いい-VLZ-PST=SFP
‘けががなくてよかったなあ。’
b. okjaku=saN=ga ki-jaQ-ta=baQte sjoocjuu=ga na-ka-ziN komaQ-ta.
お客=TTL=NOM 来る-HON-PST=COND 焼酎=NOM ない-VLZ-NEG.CTX 困る-PST
‘お客さんがいらっしゃったけど、焼酎がなくて困った。’

ところで、-te の場合は -te#kure- という恩恵表現形式を作ることができるが、-^aziN はそうした形式を作ることができない。たとえば、「しないでくれ」と言う場合には次のようになる。

- (78) a. si-te kuru-Nna.
する-CTX くれる-PROH
‘しないでくれ。’
b. #se-ziN kure.
する-NEG.CTX くれる-IMP

7.6 時制

動詞連体接尾辞 -^ru と -ta の対立は時制の対立に相当する。時制の調査は十分ではないため、ここでは、過去時制 -ta の用法について簡単に述べる。

標準語の過去時制「た」の用法は、事態時と参照時（話し手が言及事態を認識した、あるいは情報を取得した時点、または、聞き手にとって情報価値が高いと考えられる時点）の関係から、「過去」、「回想」、「再認識」、「気づき」の4つの用法に分類できる (cf. 黒木 2008)。

- (79) a. 過去: 事態時, 参照時が発話時より前。発話時においては言及事態が成立しない。
b. 回想: 事態時が発話時を包含し, 参照時が発話時より前。発話時においても言及事態が成立する。
c. 再認識: 事態時が発話時を包含し, 参照時 1 が発話時より前で参照時 2 が発話時の直前。何らかのきっかけにより, 発話時より前 (参照時 1) に漠然と持っていた認識を, その直前 (参照時 2) において明確なものに改めたもの。

- d. 気づき: 事態時が発話時を包含し, 参照時が発話時の直前。

里方言の *-ta* もこの4つの用法を持っている。

- (80) a. [最近のトマトは赤みがないという話になって]

mukaasi=N tomataa aka-ka-oQ-ta.

昔=GEN トマト:TOP 赤い-VLZ-IPFT-*PST*

‘昔のトマトは赤かった。’

《過去》

- b. [過去に近所の人々が家を作ろうとして作らなかった話題]

soide cukur-ase-toi-jai=giinja 太郎-saN=domo=mo jo-kaQ-ta=to=so.

それで 作る-CAUS-CONT-HON:NPST=COND 人名-TTL=PL=も いい-VLZ-*PST*=NLZ=SFP

‘それで [大工に] 作らせていらっしゃったら, 太郎さんたちもよかったのよ。’

《回想》

- c. [お盆に帰ってくる人たちにカズラタテを見せたことを振り返って]

sikasi ano keekaku=wa tasika=ni jo-kaQ-ta=to=jo=na.

しかし あの 計画=TOP 確か=ESS いい-VLZ-*PST*=NLZ=SFP=SFP

‘しかし, あの計画は確かによかったよな。’

《再認識》

- d. [子どものころの遊びを挙げていって]

soi=kara hutoNkabuse=cju-u=to=mo ai-joQ-ta=na

それ=ABL 布団かぶせ=QUOT:言う-NPST=NLZ=も ある-IPFV-*PST*=SFP

‘それから, 布団かぶせというのもあったな。’

《気づき》

また, 従属節の時制も標準語とは大きく変わるところはないと考えられるが, 調査が十分に行き届いていないため, 今回の記述からは割愛する。

7.7 モダリティ

本節では, 対事的モダリティと対人的モダリティを記述する。(i) 対事的モダリティとしては, 推量表現や様態・伝聞表現などの認識的モダリティ (epistemic modality) と, 意志・勧誘表現や希望表現などの義務的モダリティ (deontic modality) を, そして, (ii) 対人的モダリティとしては, 終助詞の意味・用法⁵²を扱う。

モダリティの記述は, 話し手の発話意図が必ずしも明確ではないテキストの例によると, 多くの労力を要するため, 主に面接調査の結果に基づいている。よって, 本節で挙げる例文は, 断りのない限り, 面接調査で得たものである。

なお, 質問項目数が膨大になったため, 面接調査の際には話者の負担を考えて, 調査例文の動詞部分のみを回答してもらうこともあった。そのため, 本節で挙げる例の中には, 動詞部分以外の情報を文脈で補足したものも多いが, ご容赦いただきたい。

⁵² 終助詞の形態統語的特徴を調査班内で厳密に定義していなかったこともあって, 本稿では「文末に現れうる助詞」をこう呼んでいる。「文末にだけ現れる助詞」ではないので, 注意されたい (節を名詞化する =ka (cf. 5.5.2.1, 6.5.2 節) は準体助詞, 文中でも使用できる =jo と =na (平) (cf. 7.7.2 節 (E)) は間投助詞とすべきだろう)。

7.7.1 対事的モダリティ

7.7.1.1 認識的モダリティ

本節では、認識的モダリティに関わる事項として次の各項目について記述する。

- (A) 推量表現
- (B) 様態・伝聞表現
- (C) その他の認識的モダリティ

なお、疑問表現については、疑問に関わる終助詞と関連させて 7.7.2 節で論じる。

(A) 推量表現

推量形式は動詞連体接尾辞 $-^a u$ ‘VOL, HORT, INFR’ と連体動詞類に付く $=joo$ ‘INFR’ の 2 つで、後者の方が汎用性が高い。

- (81) a. [家出した太郎を探しながら。うーん、あいつならどこに]

$ik-u=joo=ka?$

行く-NPST=INFR=Q

‘行くだろうか。’

- b. [財布を拾って。あれ？これは太郎の]

$saihu=jai=joo=ka?$

財布=VLZ:NPST=INFR=Q

‘財布だろうか？’

- (82) a. [あの人は飲み会に]

$iQ-ta(i)=joo=ka?$

行く-PST=INFR=Q

‘行っただろうか。’

- b. [あそこは人が来ないから]

$iN=jaQ-ta(i)=joo.$

犬=VLZ-PST=INFR

‘犬だっただろう。’

(82) のように、動詞連体接尾辞 $-ta$ ‘PST’ は、 $=joo$ を取る時だけ $-tai$ でも実現する (cf. 5.1.7.2 節)。次のとおり、形容詞連体接尾辞 $-ka$ ‘NPST’ も同様で、 $=joo$ を取る時だけ $-kai$ でも実現する (cf. 注 34; p. 75)。

- (83) a. [眠たそうにしている友人に確認するように話しかけて]

$nebu-ka(i)=joo=ga?$

眠い-NPST=INFR=SFP

‘眠いだろう。’

- b. [眠たそうにしている子どもを見て]

$nebu-ka(i)=joo=ka?$

眠い-NPST=INFR=Q

‘眠いだろうか。’

繫辞動詞では -^au も使用される⁵³。

(84) a. [あそこは人が来ないから]

sizuka=jar-oo.

sizuka=jar-^au

静か=VLZ-INFR

‘静かだろう。’

b. [財布を拾って。あれ？これは太郎の]

saihu=jar-oo=ka?

財布=VLZ-INFR=Q

‘財布だろうか？’

過去推量表現では, (82) に示した -ta(i)=joo の他に -taroo も使われる⁵⁴。-ta(i)=joo との意味の違いは掴んでいない。

(85) [あの人は飲み会に]

iQ-taroo=ka?

行く-PST.INFR=Q

‘行っただろうか？’

否定推量表現では, 動詞派生接尾辞 -^an- ‘NEG’ と =joo を使う。標準語の「まい」のように否定と推量を同時に表す形式はない (ただし, 否定意志・勧誘の形式としては -^aNmjaa がある。cf. 7.7.1.2 節 (A))。

(86) [あの人は飲み会に]

ik-aN=joo=ka?

行く-NEG:NPST=INFR=Q

‘行かないだろうか？’

なお, 菌下地区の話者は (i) =to=jar-^ru=joo ‘NLZ=VLZ-NPST=INFR’ を =taijoo と, (ii) =to=jar-^au ‘NZL=VLZ-INFR’ を =taroo と縮約させる。また, 村東地区の話者は後者を =cjaroo と縮約させる。

(87) a. iku=taijoo //ik-u=to=jar-^ru=joo// ‘行くのだろう’ 《菌下地区の話者 03》

b. iku=taroo //ik-u=to=jar-^au// ‘行くのだろう’ 《菌下地区の話者里 03》

c. iku=cjaroo //ik-u=to=jar-^au// ‘行くのだろう’ 《村東地区の話者 19》

以下, 意味的な面について簡単に記述する。繫辞動詞では -^au と =joo の 2 形式が使われるが, 両

⁵³ 標準語の推量形式「だろう」は, 繫辞動詞「だ」とは異なり, 動詞にも付く (e.g. 行くだろう, 赤いだろう; *行くだ, *赤いだ)。したがって, 「だ」とは別に「だろう」が設定できる。しかし, 里方言の推量形式 =jaroo は, 繫辞動詞語根 =jar- と同じく, 動詞に付くことはない。したがって, =jaroo は, 繫辞動詞語根 =jar- に動詞連体接尾辞 -^au が接尾したものと見なす。

⁵⁴ 5.1.7.2 節で述べたとおり, -taroo を //-taR-^au// ‘PST-INFR’ とは解釈しない。

者に意味的な違いは確認されなかったので、主に =joo を取り上げて論じる⁵⁵。

=joo は、標準語の「だろう」と同様、不確かな事態について推し量る場合に使用される。

(88) [空を見ながら。この様子だと雨が]

hui=joo=na.

降る:NPST=INFR=SFP

‘降るだろうな。’

また、疑問表現 (疑問の =ka や疑問語) と共起して、その事態に対する話し手の「疑い」の態度を表す場合もある。

(89) [家出した太郎を探しながら。うーん、あいつなら]

dokee ik-u=joo=ka?

どこ:DAT 行く-NPST=INFR=Q

‘どこへ行くだろうか?’

この他、未知の事態を推量しつつ、聞き手にその真偽を確認するような場合にも使用される。

(90) [飲み会に出席するか確認して]

aQka=mo ku-i=joo.

2SG=も 来る-NPST=INFR

‘おまえも来るだろう。’

ただし、標準語の「だろう」と異なり、既知の事実を聞き手に確認する場合には =joo 単独で使用することはできない。この場合、=joo=ga のように終助詞 =ga が必須となる。

(91) [目の前の信号を指さしながら道案内をする。ほら、あそこに信号が]

ai=joo{ #Ø / =ga }.

ある:NPST=INFR{ Ø / =SFP }

‘あるだろう。’

また、標準語の「だろう」とは異なり、=joo は疑問節を作る場合にも使用される。この例は、過去推量の -taroo でも確認されたので、合わせて示す (疑問文に関しては 7.7.2 節 (C) を参照)。

(92) a. [太郎がどこへ行ったか聞かれて]

[_{NCL} dokee iQ-{ ta=joo / taroo }] sir-aN.

どこ:DAT 行く-{ PST=INFR / PST.INFR } 知る-NEG:NPST

‘どこへ行ったか知らない。’

b. [飲み会の準備をしながら、酒をどれだけ用意するか考えて]

[_{NCL} naNniN ku-i=joo]=de cigoo-te ku-i=dee=na.

何人 来る-NPST=INFR=INST 違う-CTX 来る-NPST=CSL=SFP

‘何人来るかで違ってくるからな。’

⁵⁵ 調査時の反応では、=jai=joo よりも =jar-oo // =jar-^au// の方が新しいと内省する話者がいたが、両形式が新旧の違いによるものかどうかは確かではない。

(B) 様態・伝聞表現

里方言では、様態、伝聞に関わる表現として *goto*, *=soo*, *=huu* が用いられている。これらの形式は用法が類似しており、明確な使い分けは見出し難い。また、これらの用法は標準語の「ようだ」、「そうだ」、「らしい」等の形式と類似している。様態表現を中心に各形式をそれぞれ記述した後、伝聞表現について記述する。

(B-1) *goto*

様態を表す *goto* は形式名詞なので、他の語幹と複合させるか、連体詞で修飾するかしなければならない (cf. 5.3.2 節)。次のとおり、*goto* ‘様子’ は存在動詞 *ar-* ‘ある’ と共によく用いられる。

- (93) *hui* *gotai=do*.
 [_{NP} [_{ADNCL} *hur-u*] *goto*]#*ar-u=do*
 降る-NPST 様子#ある-NPST=SFP
 ‘[雨が] 降りそうだよ。’

goto#ar- とその縮約形式 *gotar-* (*r* 語幹に準じる) では後者の方がよく用いられるため、以下の記述では *gotar-* で代表させる。次に用例を示す。

- (94) a. *ik-aN* *gotai=naa*.
 行く-NEG:NPST 様子:ある:NPST=SFP
 ‘行かないようだな。’
 b. *hija-ka* *goto* *ai*.
 寒い-NPST 様子 ある:NPST
 ‘寒いようだ。’
 c. *omae=no* *goto* *si-ta* *jo-ka* *otoko=wa* *nakanaka* *or-aN=do*.
 2SG=GEN 様子 する-PST いい-NPST 男=TOP なかなか いる-NEG:NPST=SFP
 ‘おまえのような男は、なかなかいないよ。’
 d. *hwerii=ni* *mania-u* *goto* *hajo* *oki-ta*.
 フェリー=DAT 間に合う-NPST 様子 早い:NL 起きる-PST
 ‘フェリーに間に合うように、早く起きた。’

なお、限られてはいるが、*goto* と *ar-* の間には助詞を入れることも可能である。

- (95) *tee-toi* *goto=mo* *ai=si* *hur-oo* *goto=mo* *ai=si*
 照る-CONT:NPST 様子=も ある:NPST=PARA 降る-INFR 様子=も ある:NPST=PARA
 dogaN=ka *si-ta* *teNki=naa*.
 どんなに=Q する-PST 天気=SFP
 ‘晴れているようでもあるし、降っているようでもあるし、どうかした天気だなあ。’

この他、*goto=de=mo#ar-*, *goto=wa#ar-*, *goto=siko#ar-* なども聞かれたが、話者により許容する形式も容認度も異なる。

goto は、後述する *=soo*, *=huu* のような用法の偏りは見出し難く、里方言の様態表現において様々な用いられており、汎用性が高い形式であると言える。希望表現で用いられる *goto* については、義

務的モダリティと関連して、7.7.1.2 節 (B) で別に記述する。

(B-2) =soo

接尾語 =soo は ⁱØ 形準体動詞、-ka 形連体形容詞、名詞に接続する。^au 形連体動詞にも接続するが、話者によれば、ⁱØ=soo の意味と ^au=soo のそれは変わらないようである。

- (96) a. [空が曇ってきたのを見て]
{ hui / hur-oo }=soo=jai.
{ 降る:NPST / 降る-INFR }=SEEM=VLZ:NPST
‘[雨が] 降りそうだ。’
- b. [酒をどんどん飲む人に向かって、一升くらいお酒を飲んでしまいそうなので]
{ nom-i / nom-oo }=soo=jai.
{ 飲む-NL / 飲む-INFR }=SEEM=VLZ:NPST
‘[一升くらい] 飲みそうだ。’
- c. [目の前のお菓子を見て]
Nma-{ ka / kar-oo }=soo=jai.
うまい-{ NPST / VLZ-INFR }=SEEM=VLZ:NPST
‘うまそうだ。’
- d. [とある人の姿を見て]
sensee=soo=jai=naa.
先生=SEEM=VLZ:NPST=SFP
‘先生らしいな。’

(96) のとおり、=soo は繫辞動詞 =jar- を取ることが多い。先にも述べたとおり、様態表現で用いられる 3 形式はそれぞれ用法が重なっており、明確な使い分けは難しいが、=soo は「兆候の存在」を述べる際に用いられる傾向がある。

(B-3) =huu

接尾語 =huu は連体動詞類に付き (名詞には付かない)、多くの場合、繫辞動詞 =jar- を取る。また、=soo とは違い、^au 形連体動詞に接続する例は見られない。

- (97) a. [熱もあるし、咳も出るので]
kaze hii-ta=huu=jai=naa.
風邪 引く -PST=SEEM=VLZ:NPST=SFP
‘風邪を引いたみたいだな。’
- b. ame=ga huQ-ta=huu=de mici=no nure-toi=do.
雨=NOM 降る -PST=SEEM=INST 道=NOM 濡れる -CONT:NPST=SFP
‘雨が降ったらしく、道が濡れているよ。’
- c. [相当酒を飲むという人を見て]
cujo-ka=huu=jai=do.

強い-NPST=*SEEM*=VLZ:NPST=SFP

‘[あの人は酒が] 強いらしいよ。’

d. *sensee=jai=huu=jai=do.*

先生=VLZ:NPST=*SEEM*=VLZ:NPST=SFP

‘先生らしいよ。’

(B-4) 伝聞表現

goto, *=soo*, *=huu* の3形式は伝聞表現でも用いられる。ただし、伝聞専用の形式は里方言には見られない。

- (98) *taroo=no aNsaN=ga kaeQ-te ku-i*
太郎=GEN 兄=NOM 帰る-CTX 来る-NPST
{ *gotai / =soo=jai / =huu=jai* }
{ 様子:ある:NPST / =*SEEM*=VLZ:NPST / =*SEEM*=VLZ:NPST }

‘太郎の兄さんが帰ってくるそうだ。’

断定できない事態は *gotai=huu* で表現する。*goto* は *=huu* に常に先行するので、*=huu#gotar-* は見られない。

- (99) *kaeQ-te ku-u gotai=huu=jar-aa.*
帰る-CTX 来る-INFR 様子:ある:NPST=*SEEM*=VLZ:NPST:SFP
‘帰って来るようらしいわ。’

その他、直接話法の *=cju-u //te#juw-^fu//* が伝聞の意味を表すこともある。これは *=te#juw-^fu* ‘QUOT#言う-NPST’ が縮約したもので、動詞 *juw-^fu* が形態的にも意味的にも残っている。

- (100) *zjuuzi=madee kee=cju-u koto=jaQ-ta.*
10時=TERM 来る:IMP=QUOT:言う-NPST こと=VLZ-PST
‘「10時までに来い」とのことだった。’

(C) その他の認識的モダリティ

(C1) *=ka=mo#sir-e-N*

標準語の「かもしれない」と同様に、可能性があることを表す形式として *=ka=mo#sir-e-N* が用いられる。文末ではしばしば *sir-e-N* を省いて *=ka=mo* だけが使用される⁵⁶。

- (101) a. [勉強を全然しない子を見て]
benkjoo se-N=dee sikeN cjaaru-i=ka=mo sir-e-N=naa.
勉強 する-NEG:NPST=CSL 試験 落ちる-NPST=Q=も 知る-POT-NEG:NPST=SFP
‘勉強しないから試験に落ちるかもしれないな。’
- b. [冬に福岡に行く友人に]
hija-ka=ka=mo=naa.

⁵⁶ *=kamo* という形式を設定する積極的理由がないため、本稿では *=ka=mo* と分析する。

寒い-NPST=Q= も=SFP

‘寒いかもな。’

(C2) hazu

標準語の「はず」に相当する形式として、hazu が用いられる。詳しい調査は行なっていないが、ひとまず面接調査で得られた用例を挙げておく⁵⁷。

(102) [車を見て知人が在宅かどうか確認する]

kuruma=no oi=dee ie=ni oi hazu=jai.

車=NOM いる:NPST=CSL 家=LOC いる:NPST はず=VLZ:NPST

‘車がいるから家にいるはずだ。’

7.7.1.2 義務的モダリティ (Deontic modality)

本節では、義務的モダリティに関わる事項として、次の各項目について記述する (本稿では話し手や聞き手の行動に関わる deontic という概念を広く「義務的」と呼ぶことにし、「～なければならない」に相当する狭義の義務の概念は「当為」と呼ぶことにする)。

(A) 意志・勧誘表現

(B) 希望表現

(C) その他の義務的モダリティ

なお、行為要求に関する表現は待遇表現と関連させて記述しているので、該当の 7.4.4 節を参照されたい。

(A) 意志・勧誘表現

意志・勧誘の表現では -^au が用いられる。この -^au は基底形として設定される形であり、子音語幹動詞では //ik-^au → ik-au// → ikoo ‘行こう’, 母音語幹動詞では //ake-^au → ake-u// → akuu ‘開けよう’, //ke-^au → ke-u// → kuu ‘来よう’, //se-^au → se-u// → suu ‘しよう’ のように、oo ないし uu で実現する (cf. 5.1.3.2 節)。-^au は、標準語の「(よう)」と同様に、意志と勧誘の両方の意味を持つ⁵⁸。

(103) a. [ひとりごとで。晴れてきたから、そろそろ郵便局に]

ik-oo.

行く-VOL

‘行こう。’

b. [友達を誘って、一緒に旅行に]

⁵⁷ 詳細な調査は行なっていないが、標準語の「はず」と同様の形式名詞と見なし、グロスは「はず」としておく。また、標準語には「はず」に近い意味を表す「にちがいない」も存在するが、里方言にはこれに相当する形式がないようである。

⁵⁸ 「意志」と「勧誘」を分ける積極的理由はないように思うが、(日本語諸変種を含めた)、本稿では両者を呼び分けることにし、グロスでは意志を VOL、勧誘を HORT とする。

ik-oo.

行く-HORT

‘行こう。’

-^au 形連体動詞は標準語の「(よ)う」形動詞と同じく、基本的には文末に現れる。ただし、7.7.1.1 節 (B-2) で取り上げた =soo, ないし、本節 (B) で取り上げる goto を取る場合は、非文末にも生起しうる。詳しくは該当の箇所を参照されたい。

また、否定の意志・勧誘を表す場合には -^aNmjaa⁵⁹が用いられる。-^aNmjaa が子音語幹に付くと、//ik-^aNmjaa// → ikaNmjaa ‘行かないでおこう’ で、母音語幹に付くと、//ake-^aNmjaa// → akeNmjaa ‘開けないでおこう’, //ke-^aNmjaa// → keNmjaa ‘来ないでおこう’, //se-^aNmjaa// → seNmjaa ‘しないでおこう’ で実現する。

(104) a. [ひとりごとで。天気が悪いから、今日は郵便局に]

ik-aNmjaa=ka?

行く-NEG.VOL=Q

‘行かないでおこうか?’

b. [友達と旅行に行ったが、楽しくなかった。次はあそこには]

ik-aNmjaa=ka?

行く-NEG.HORT=Q

‘行かないでおこうか?’

面接調査ではたまたま上記のように =ka の付いた例しか得られなかったが、テキストでは =ka を欠く例も見られる。

(105) [船から落ちそうになって]

hoite moo cjaare-Nmjaa=te burasagaQ-te mi-tai.

それで もう 落ちる-NEG.INFR=QUOT ぶら下がる-CTX みる-ILST

‘それで、もう「落ちるまい」って、ぶら下がってみたい。’

(B) 希望表現

5.6.1.1 節 (B) で述べたとおり、希望表現では goto を用いる。希望表現で用いられる goto は様態表現のそれとは異なり、意志を表す接尾辞 -^au で終わる動詞を承けた、-^au#goto#ar- という形式で希望を表している。否定の場合は、ar- の代わりに na- ‘ない’ を使って、-^au#goto#na- とする。

(106) a. oraa sjoocjuu suki=jai=de=naa icu=demo nom-o gotai.

goto#ar-u

1SG:TOP 焼酎 好き=VLZ:NPST=CSL=SFP いつ=でも 飲む-VOL 様子#ある-NPST

‘私は焼酎が好きなのでね、いつでも飲みたい。’

b. nom-o goto na-ka=to=ba susume-rare-te noo-da=jo.

⁵⁹ 否定形式が重複する点是不審であるが、-^an-^ru=mai ‘NEG-NPST=NEG.VOL’ に相当すると考えられる。C[+nas]jai に /NC[+nas]jaa/ が対応することを踏まえると (cf. 3.9 節), -^aNmjaa は -^amai に対応するとも考えられる。しかし、瀬上方言で連体動詞に付く =mai が使われていたこと (cf. 南 1967) を踏まえると、-^aNmjaa は設定しづらい。

飲む-VOL 様子 ない-NPST=NLZ=ACC 勧める-PASS-CTX 飲む-PST=SFP
 nom-o goto na-kaQ-ta.
 飲む-VOL 様子 ない-VLZ-PST

‘飲みたくないものを勧められて飲んだよ。飲みたくなかった。’

希望表現で用いられる goto は、自分の意志を明確に断定する必要がある場面においても用いられ、また、話者自身では実現不可能な事態にも用いられる。このような goto は、希望を表す様々な場面において用いられている。

(107) A: asita hukuoka=ni ik-oo gotai=na?
 明日 福岡=DAT 行く-VOL 様子:ある:NPST=Q
 ‘明日福岡に行きたいか?’

B: ik-oo gotai.
 行く-VOL 様子:ある:NPST
 ‘行きたい。’

(108) [母を探して歩く子どもを描いたテレビドラマを見ながら]
 koN ko=ba oQkaN=ni aw-asu-u gotai=naa.
 この子=ACC 母=DAT 会う-CAUS-VOL 様子:ある:NPST=SFP
 ‘この子を母に会わせたい。’

里方言の希望表現では主として goto を用いる。ただし、九州方言によく見られる kak-ita- ‘書きたい’, mi-ta- ‘見たい’ などといった ⁱ-ta- ‘たい’ による希望表現も、里方言では稀に聞かれる。

(109) kuruma cure-te ik-ita-kaQ-ta=te
 車 連れる-CTX 行く-DES-VLZ-PST=QUOT
 ‘車は [持っているから] 連れて行きたかったって’

(C) その他の義務的モダリティ

禁止表現や当為表現では、nar- ‘なる’, ik- ‘行く’ から作った否定形式 nar-aN, ik-aN を使う。nar-aN, ik-aN が、標準語の「ては」に相当する -cjaa, -zjaa // -te=^wa//⁶⁰ を承けると、禁止を、標準語の「なければ」に相当する -^an-eba を承けると当為の意味を表す。

(110) sake=ba noo-zjaa { nar / ik }-aN.
 酒=ACC 飲む-CTX:TOP { なる / 行く }-NEG:NPST
 ‘飲んではいけない。’

(111) kuw-an-ja { nar / ik }-aN=cjai=baQteka.
 食う-NEG-COND { なる / 行く }-NEG:NPST=NLZ:VLZ:NPST=CONC
 ‘食べなければいけないんだけど。’

当為表現の nar-aN, ik-aN は、文脈によっては省略しうる。

⁶⁰ // -te=^wa// が -cjaa ないし -zjaa で実現する過程は次のとおり。

(XVI) // -te=^wa —[3.5.2 節: (24); 3.12 節: (66)]→ -te=a, -de=a —[3.5.2 節: (25)]→ -tjaa, -djaa// —[3.8 節: (57)]→ -cjaa, -zjaa

(112) [子どもに早く起きるよううながして]

hajoo oki-n-eba.

早い:NL 起きる-NEG-COND

‘早く起きなければ。’

許可表現では -te=mo#jo- が、勧め表現としては -'eba#jo- が用いられる。

(113) sake=ba noo-de=mo jo-ka.

酒=ACC 飲む-CTX=も いい-NPST

‘酒を飲んでもいい。’

(114) [泳ぎたいなら]

oomi=i ik-eba jo-ka.

海=DAT 行く-COND いい-NPST

‘海に行けばいい。’

また、詳しい調査は行っていないが、副詞節について述べる 8.4.2 節で触れるとおり、-te#jo- が標準語の「たらしい」に相当する勧めの意味を持つようである。テキストから得た例を示す。標準語で言えば、「ていい」よりも「たらしい」に近い意味のように見える。

(115) [地元の人同士の会話。方言の強い知人を話題にして]

koNdo ki-jai-moi-ta tokjaa kii-te mi-te jo-ka=a.

今度 来る-HON-POL-PST 時:TOP 聞く-CTX みる-CTX いい-NPST=SFP

‘[調査員たちが] 今度いらっしゃった時は、[その人に] 聞いてみたらいいよ。’

7.7.2 対人的モダリティ: 終助詞による表現

本節では、対人的モダリティに関して、終助詞 (cf. 注 52; p. 141) を中心に記述する。現在のところ、平叙文末に生起するものとして =a, =ga, =do, =jo, =na, =ne, =taa を、疑問文末に生起するものとして =ka⁶¹, =na を、勧誘文末に生起するものとして =ja を確認している⁶²。本節では、これらについて、次の順で記述していく。

(A) 形態統語的特徴

(B) 平叙文末に生起する終助詞

(B-1) 助詞相互の承接関係

(B-2) 標準語の「よ」、「ぞ」に相当する終助詞: =a, =ga, =do, =jo

(B-3) 標準語の「な」、「ね」に相当する終助詞: =na (平), =ne

(B-4) 確認要求に関わる終助詞: =ga, =taa

(C) 疑問文末に生起する終助詞: =ka, =na (疑)

(D) 勧誘文末に生起する終助詞: =ja

⁶¹ =kai という終助詞もあるが、ひとまず =ka に含めて考える。詳しくは本節 (C) 参照。このほか、テキストでは =bai という終助詞も出現したが、これについては面接調査を行っていない。

⁶² 標準語の終助詞と同様、一部のもの (とりわけ =na と =ne) については、=na が =naa, =ne が =nee のように長母音化する場合があるが、短母音の場合と区別せずに考えることとする。

(E) 文末以外でも使われる終助詞: =jo, =na

=na という終助詞は平叙文末と疑問文末に生起するが、前者においては上昇下降調 (昇降調) で実現するのに対し、後者においては下降調で実現する。このピッチの違いは平叙文のピッチと疑問文のその違いかもしれないが、ひとまず2つの =na を異なる形態素と見なし、区別の必要な場合は、前者を「=na (平)」, 後者を「=na (疑)」と呼ぶ。

里方言の終助詞の中には、標準語に直訳できない意味を持つものもあるため、本節の例文では、便宜的に似た意味の形式で標準語訳を当てているものもある。あくまで便宜的な処置と理解されたい。なお、グロスでは、疑問文末に生起する =ka, =na (疑) にのみ疑問の意味を認めて Q (question) を与えているが、それ以外の終助詞は単に SFP とだけ当てている。

なお、里方言の終助詞は多様であり、現時点ではそのすべてを整理することはできていない。特に本稿では、終助詞を含めたモダリティ全般について、能率的な手段として主に面接調査の結果をもとに記述を行なっている。

そのため、自然談話資料を整備する段階で新たに確認された =so や、他の言語項目の記述で新たに確認された =ni については、それぞれ (B-2) と (D) で存在に触れるだけで、本稿の記述から漏れている。また、標準語と同じく、形式名詞 mono に由来する終助詞 =moN も存在するが、これも本稿では記述の範囲外としている。

その他にも記述から漏れている未確認の助詞が存在するかもしれないが、現段階でのできる限りの記述としてご容赦いただきたい。

(A) 形態統語的特徴

まずは、各終助詞の形態統語的特徴について簡単に整理する。本節の様々な例文で示すとおり、いずれの終助詞も、文末では連体形の、つまり、-¹u, -ta, -ka のいずれかで終わる動詞に付く。また、次のように、=ga, =do, =taa 以外は名詞にも接尾できる⁶³。

- (116) a. VBL={ a / ga / do / jo / na (平) / taa / ka / na (疑) }
b. N={ *a / *ga / *do / jo / na (平) / *taa / ka / na (疑) }

=a は、前述のとおり、連体動詞類に付くが、3.5.2 節の形態音韻規則 (24)–(25)により、次のように動詞末尾と融合して、/aa/ 終わりの連声形式で実現する。

- (117) a. //ar-u=a// → araa ‘あるよ’
b. //hija-ka=a// → hijakaa ‘寒いよ’
c. //ar-ta=a// → aQtaa ‘あったよ’
d. //or-an-u=a// → oranaa ‘いないよ’

(B) 平叙文末に生起する終助詞

平叙文末に生起する終助詞は、=a, =ga, =do, =jo, =na, =ne, =taa である。まず、(B-1) においてこれ

⁶³ =ja は勧誘文専用の形式なので、意志動詞にしか付かない。=ne は、テキストを見る限り =na と同様にふるまうようだが、話者の内省を確かめていないので、ここでは取り上げない。

らの相互承接をまとめる。そして、(B-2) 以下においてこれらを意味の面から分類し、それぞれの意味の違いなどを記述する。なお、=ga は、標準語の「よ」、「ぞ」に似た意味を持つと共に、確認要求表現でも用いられるので、(B-2) と (B-4) の両方で取り上げることにする。

(B-1) 終助詞相互の承接関係

平叙文末に生起する終助詞は多様なので、まずは、形態統語的特徴の整理として、終助詞相互の承接関係をまとめておく。次に挙げるのは、ik-u ‘行く-NPST’ だけからなる一語文 (文脈は限定していない) の末尾に終助詞を 2 つ続けることができるかを複数名の話者 (話者 01, 02, 03, 13, 15) に確認した結果である。場合によっては話者ごとに内省の異なることもあったが、そのような場合は%で示す。

- (118) a. ika=a= { / *ga / *do / jo / *na / *taa } 《=a への承接》
 b. iku=ga= { *a / / *do / %jo / *na / *taa } 《=ga への承接》
 c. iku=do= { *a / *ga / / *jo / %na / *taa } 《=do への承接》
 d. iku=jo= { *a / *ga / *do / / na / *taa } 《=jo への承接》
 e. iku=na= { *a / *ga / *do / *jo / / *taa } 《=na への承接》
 f. iku=taa= { *a / *ga / *do / %jo / *na / } 《=taa への承接》

ここに示すとおり、=a=jo, =jo=na⁶⁴は適格であり、テキストにも次のような例が多数見られる。

- (119) a. [お礼の品を断って]
 ir-an-aa=jo=te ju-te.
 ir-^an-^ru=a=jo=te
 要る-NEG-NPST=SFP=SFP=QUOT 言う-CTX
 ‘「要らないよ」って言って。’
- b. [コッパ餅の話題。暖かいうちはやわらかいが]
 samu-reba namana kowa-ka=to=jo=naa.
 冷める-COND とても 硬い-NPST=NLZ=SFP=SFP
 ‘冷めるととても硬いんだよな。’

また、=ga=jo, =do=na, =taa=jo については、適格性の判断が話者によって揺れたが、=do=na については、テキストに次のような例が複数見られる。

- (120) [松原の話題]
 aiko=waa aziroi-kaQ-ta=do=naa.
 あそこ=TOP きれい-VLZ-PST=SFP=SFP
 ‘あそこはきれいだったよな。’

一方、=ga=jo, =taa=jo についてはテキストで例が確認できなかった。

以上のことから、各終助詞に関して、=a=jo, =jo=na, =do=na はありうるが、それ以外の承接は不

⁶⁴ =jo=na は標準語的な表現という内省も複数得られたが、(119)b のように方言による自然談話であっても頻繁に見られるので、里方言の体系の中に入れて分析する。

適格ないし非常に稀と言えそうである。精査の余地はあるが、本稿ではひとまずそのように整理しておきたい。

(B-2) 標準語の「よ」、「ぞ」に相当する終助詞

標準語の「よ」、「ぞ」などに相当し、聞き手に情報を提供する場合に使われる終助詞としては、=a, =ga, =do, =jo がある。

(121) a. [メガネを探している友達に]

koke aQ-ta=a.
ここ:DAT ある-PST=SFP
‘ここにあったよ。’

b. [メガネを探している友達に。台所に]

aQ-ta={ ga / do / jo }
ある-PST=SFP
‘あったよ。’

これらのうち、=a, =ga, =do は平叙文末以外には生起しないが、=jo は疑問文や命令文の末尾にも生起しうる⁶⁵。

(122) *dokee iQk-jai=to={ jar-aa / =jai={ ga / do } }

どこ:DAT 行く-HON-NPST=NLZ={ VLZ-NPST:SFP / VLZ:NPST=SFP }
‘どこへ行きなさんだよ。’

(123) a. dokee iQk-jai=to={ *ga / *do / jo }.

どこ:DAT 行く-HON:NPST=NLZ=SFP
‘どこへ行きなさんだよ。’

b. oi=ga sogaNta koto siQ-toi=ka={ *ga / *do / jo }.

1SG=NOM そうした こと 知る-CONT:NPST=Q=SFP
‘俺がそんなことを知っているかよ。’

c. aQci ik-e={ *ga / *do / jo }.

あっち 行く-IMP=SFP
‘あっちに行けよ。’

本稿では各終助詞の意味的な特徴については深く立ち入らないが、このうち =jo, =do は標準語の「よ」、「ぞ」に、ほぼ相当するものと考えられる。また、=ga は西日本諸方言に見られる終助詞「が」と同様のもの、=a は日本語諸方言に見られる終助詞「わ」と同様のものと考えられる。

なお、面接調査では聞き出せなかったが、テキストに確認された =so という終助詞があり、「よ」、「ぞ」のように、聞き手に情報を提供する文脈で用いられているようである。詳しい分析はできないが、テキスト中の例を下に挙げておく。この =so は本節 (E) で挙げる平叙文末以外での使用が多

⁶⁵ 例文 0-0 は=ga, =do, =jo のみの例を挙げているが、=a については、これを接尾させた形式が想定できないということで、話者からスムーズな内省が得られなかった。おそらく、=a の生起は不適格と考えられる。

数見られる。

- (124) [近所の人が家を作ろうとして作らなかったという話]
soide cukur-ase-toi-jai=giinja taroo-saN=domo=mo
それで 作る-CAUS-CONT-HON:NPST=COND 太郎=TTL=PL=も
jo-kaQ-ta=to=so.
いい-VLZ-PST=NLZ=SFP
‘それで [大工に] 作らせていらっしやれば、太郎さんたちもよかったのよ。’

(B-3) 標準語の「な」、「ね」に相当する終助詞

標準語の「な」、「ね」に相当する終助詞としては、=na, =ne がある。いずれも、下例のように、相手の発話に同意したり、相手に確認を取ったりする場合に使用されるもので、標準語の「な」、「ね」に相当するものと考えられる。

- (125) a. [「あの頃はよかった」という相手に同意して]
jo-kaQ-ta={ naa / nee }.
いい-VLZ-PST=SFP
‘よかったなあ。’
b. [道を行く子どもを指さしながら、相手に確認して]
aN=ga mago=jai={ naa / nee }.
自分=GEN 孫=VLZ:NPST=SFP
‘あなたの孫だな。’

このうち、=ne は聞き手のいる状況でしか使えないが、=na は独話でも用いることができる。

- (126) a. [聞き手と一緒に花を見て]
aziroi-ka hana=jai={ naa / nee }.
きれい-NPST 花=VLZ:NPST=SFP
‘きれいな花だな。’
b. [ひとりで花を見ながら]
aziroi-ka hana=jai={ naa / #nee }.
きれい-NPST 花=VLZ:NPST=SFP
‘きれいな花だな。’

また、=na も =ne も平叙文末に生起しうるが、=ka で終わる疑問文勧誘文にも生起しうる。

- (127) a. [孫に向かって。一緒に海に]
ik-oo={ na / ne }.
行く-HORT=SFP
‘行こうな。’
b. [あの人は、ちゃんと]
ik-u=ka={ naa / nee }?
行く-NPST=Q=SFP

‘行くかな。’

一方、命令文には生起しない。

(128) [孫に向かって。あっちに]

ik-e={ *na / *ne }.

行く -IMP=SFP

‘行けな。’

これも標準語の「な」、「ね」と共通する特徴と言える。なお、同じ疑問文でも、=na (疑) によってマークされる疑問文には生起しえない。

(129) [あの人は、ちゃんと]

ik-u=na={ *naa / *nee }?

行く -NPST=Q=SFP

‘行くかな?’

(B-4) 確認要求に関わる終助詞

当方言では =taa と =ga および推量形式の =joo が確認要求に関わっている。推量形式については 7.7.1.1 節で既に言及しているので、ここでは =taa および =ga について記述する。以下、形式ごとに整理してまとめる。

(B-3-1) =taa

=taa は確認要求 (標準語の「ではないか」や「だろう」が表す意味) を表すと考えられるが、6.5.1 節で言及した =cjai, =sai, =tai // =to=jar-¹u// ‘NLZ=VLZ-NPST’ (以下、=sai で代表) に付くものとそれ以外のものでは意味が異なる。

(130) a. keQkjoku koQpa=N mooci cuk-u=taa NN=domo=jai=taa.
結局 乾燥サツマイモ=GEN 餅 つく -NPST=NL:TOP 1=PL=VLZ:NPST=SFP

‘結局コッパ餅つくのは我々じゃない。’

b. [道を教える場面で、信号を指さしながら]

siNgoo=no ai=taa.

信号=NOM ある:NPST=SFP

‘信号があるじゃない。’

(131) [ひとりごとで]

ame=N hui-joi=sai=taa.

雨=NOM 降る -IPFV:NPST=NLZ:VLZ=SFP

‘雨が降っているじゃない。’

(130)a は「コッパ餅を作るのは我々だ」という共有知識を確認する発話であり、(130)b は聞き手に道を教える際に、目印となる信号を指さしながら発話しているものである。また、(131) は窓の外を見てつぶやいた独話である。(130) は =taa の例で、(131) は =sai=taa の例である。両者は聞き手の有無で異なる。

=taa と =sai=taa (形式面だけを見れば、=taa 終わりの文における =sai の有無) は「聞き手に伝える」か「自分を納得させる」かで異なるようである。

(132) a. [ほら、うちのクラスに山田ってやつが]

oQ-ta(#=sai)=taa.

いる-PST(#=NLZ:VLZ:NPST)=SFP

‘いたじゃない。’

b. [新しい服を着てきた友人に]

nioo-toi(#=sai)=taa.

似合う-CONT:NPST(#=NLZ:VLZ:NPST)=SFP

‘似合っているじゃない。’

(133) a. [聞き手に対して]

moo nigacu=jai=taa.

もう 2月=VLZ:NPST=SFP

‘もう2月じゃない。’

b. [ひとりごとで]

moo nigacu=jai=sai=taa.

もう 2月=VLZ:NPST=NLZ:VLZ:NPST=SFP

‘もう2月じゃない。’

(132) のように、明らかに聞き手に対する発話で =sai=taa を使うことはできない。また、0 とし
て挙げた、聞き手に対する発話と独話の対も、=taa と =sai=taa の意味の違いを示唆している。

以上のことから、=taa は聞き手に対して言う場合に、=sai=taa は自分で納得する場合に使うと言
えそうである。

(B-3-2) =ga

=ga は、上述の =taa と同じ文脈で使われることが多い。

(134) a. [メガネを知らないかと聞かれて]

sokee ai={ ga / taa }.

そこ:DAT ある:NPST=SFP

‘そこにあるじゃないか。’

b. [車が来るぞ。そんな所を歩いていたら]

abuna-ka={ ga / taa }.

危ない-NPST=SFP

‘危ないじゃないか。’

=ga と =taa は使用する文脈が異なる。具体的には、後に話し手の発話が続く場合、=taa は使える
が =ga は使えない。

(135) siNgoo=no ai={ #ga / taa }.

信号=NOM ある:NPST=SFP

‘[そこに] 信号があるだろう。’

(135) は、郵便ポストの存在を聞き手に確認し、それを踏まえてさらに「そこを左に曲がって」と道順を説明しているこのような場合であり、このとき =taa は使えるが =ga は使えない。

また、推量形式の =joo に =ga が接尾した =joo=ga については、「推量の意味合いが加わる」との内省が得られている。

- (136) sokee siNgoo=no ai(=joo)=ga
 そこ:DAT 信号=NOM ある:NPST(=INFR)=SFP
 ‘そこに信号があるだろう。’

この例は、聞き手に対して信号があること（話し手が既に知っていること）を確認する発話だが、=ga と =joo=ga では使用する状況が異なる。=ga を使う場面では、話し手は指をさして、聞き手に確認しているが、=joo=ga を使う場面では、話し手はその信号を見ていないという。これは、=joo 単独では「確認」できない (cf. 7.7.1.1 節: (84)) ということと関係しているかもしれない。

なお、話者の内省によれば、=joo=ga に比べて =ga は「荒っぽい」または「叱る時の」ことばらしい。調査時に得た第 1 回答は、ほとんどの例文において =joo=ga であり、=ga は調査者が誘導しなければ、まず出てこなかった。これは、前述の意味合いを避けてのことだと思われる。

(C) 疑問文末に生起する終助詞

疑問文末に生起する終助詞は =na と =ka である。前者は主に真偽疑問文末で用いられる。

- (137) a. asita=no keerookai ik-u=na?
 明日=GEN 敬老会 行く-NPST=Q
 ‘明日の敬老会、行くか?’
 b. koN heja nuQ-ka=na?
 この 部屋 暑い-NPST=Q
 ‘この部屋、暑いか?’
 c. keerookai iQk-jai-moi-ta=na?
 敬老会 行く-HON-POL-PST=Q
 ‘敬老会、行かれましたか?’
 d. aNta gakusee(=jai)=na?
 2SG 学生(=VLZ:NPST)=Q
 ‘あなた、学生?’

- (138) a. kuruma=de ki-jaQ-ta=to={ na / N }?
 車=INST 来る-HON-PST=NLZ=Q
 ‘車でいらっしやっただの?’
 b. keerookai iQk-jai-mos-u=to={ ?na / N }?
 敬老会 行く-HON-POL-NPST=NLZ=Q
 ‘敬老会、行かれますか?’

6.5.1 節の 0 で言及したように、いわゆるノダ文の「の」に相当する =to に =na が付く時は、基

本的に =N で実現する。このことを踏まえると、=to=N という形式が固定化している可能性がある。

ただし、=na と =N がいつでも置換できるわけでもないようである。(138)a では =N も =na も使えるという回答を得たが、(138)b では =na が使えないと判断する話者もいた。

その他の場合でも =na と =N はしばしば置換できるが、自然に得られるのは =na である。たとえば、話者 01 は (137)b の nuQ-ka=na を nuQ-ka=N とは言えないと判断した。

だが、WH 疑問文末では、=na も =N も取らない =to が出てくる。

- (139) a. dokee iQk-jai-mos-u=to?
 どこ:DAT 行く-HON-POL-NPST=NLZ
 ‘どちらへ行かれますか?’
- b. aN hutaa dare=jai=to?
 あの 人:TOP 誰=VLZ:NPST=NLZ
 ‘あの人は誰なの?’

一方、=ka (=kai が多い) は疑いや勧誘を表す際に用いられる。

- (140) a. [独話。店が閉まっていたので、不思議に思っ
 kjoo=wa jasumi={ ka / #na }.
 今日=TOP 休み=Q
 ‘今日は休みか。’
- b. asita=a hare=jai=joo={ kai / #na }?
 明日=TOP 晴れ=VLZ:NPST=INFR=Q
 ‘明日は晴れだろうか?’
- c. kasee si-mos-oo={ kai / #na }?
 加勢 する-POL-VOL=Q
 ‘お手伝いしましょうか?’

なお、6.5.2 節と 7.7.1.1 節: (92) でも触れたが、疑問節を作る際は推量形式 =joo が用いられる。
=na は疑問節を作ることができない。

- (141) dokee iQ-ta={ joo / *na } sir-aN.
 どこ:DAT 行く-PST={ INFR / Q } 知る-NEG:NPST
 ‘どこへ行ったか知らない。’

ノダ文相当の意味を加える場合は、=joo の前に =to=jar- を入れる。

- (142) dokee iQ-ta=sai=joo wakar-aN.
 どこ:DAT 行く-PST=NLZ:VLZ:NPST=INFR わかる-NEG:NPST
 ‘どこへ行ったのかわからない。’

(D) 勧誘文末に生起する終助詞

勧誘文末に生起する終助詞としては =ja がある。

- (143) [友達を誘って。一緒に旅行に]
 ik-oo=ja.

行く-HORT=SFP

‘行こうよ。’

この =ja は勧誘文末専用の終助詞と見られ、勧誘文末以外に生起した例はない。たとえば、同形の動詞をとる意志文末には生起しない⁶⁶。

(144) [誰も行かないなら、私が]

#ik-oo=ja.

行く-VOL=SFP

‘行こうよ。’

また、命令文末にも生起しにくい。たとえば、ike=ja の可否は判断が揺れ、「標準語のようで不自然」という内省が得られた⁶⁷。

(145) [子どもを追い払って]

?ik-e=ja.

行く-imp=sfp

‘[あっちに] 行けよ。’

なお、モダリティ項目の面接調査では確認できなかったが、指示語の面接調査で勧誘文末に現れる =ni, =i という終助詞を得た。そもそも勧誘文が現れにくいテキストでは用例が確認できず、分析には追加の面接調査を要するが、例だけでも挙げておく。

(146) a. aikē ucū-oo=ni.

あそこ:DAT 移る-HORT=SFP

‘あそこに移ろうよ。’

b. sigoto=N agaQ-ta=nara daijami su-u=i.

仕事=NOM 上がる-PST=COND 飲み会 する-HORT=SFP

‘仕事が終わったら、飲もう。’

(E) 平叙文末以外でも使われる終助詞

平叙文末で使用される終助詞のうち、=jo, =na (平), =ne は文中でも使用できる。=a, =ga, =do, =taa は文末でしか使用できない⁶⁸。

(147) kjuu=wa={ *ga / *do / jo / na / ne / *taa } mago ku-i=cjai=ga.

今日=TOP=CNF

孫 来る-NPST=NLZ:VLZ:NPST=CONC

‘今日はね、孫が来るんだけど。’

また、本稿では詳しくは記述できないが、テキストを見ると、本節 (B-2) に挙げた =so が文中で頻繁に使われている。

⁶⁶ (C) のとおり、意志文末には =ka は生起するが、それ以外の終助詞は確認されない。

⁶⁷ (B-1) のとおり、命令文末には =jo は生起するが、それ以外の終助詞は確認されない。

⁶⁸ =a の可否については、kjuu=wa に =a を付けた形式が想定できないということで、話者からスムーズな内省が得られなかったが、おそらく不適格である。また、この例文では動作主の mago に主格助詞が珍しく付いていないが、調査例文に引きずられている可能性がある。

- (148) [ご近所の助け合いの話題]
 koNdaa=so koQci=mo tanoo-dee.
 今度:TOP=CNF こっち=も 頼む-CTX
 ‘今度はね, こっちも頼んで。’

7.8 ダイクシス

7.8.1 指示表現

7.8.1.1 指示語根と指示語

里方言の指示表現は, 次に挙げる (149) 指示語語根から作られた (150) 指示語⁶⁹で行なう。

(149) ko- ‘コ’, so- ‘ソ’, a- ‘ア’

(150)		コ	ソ	ア	ド	
名詞	もの:	ko-i	so-i	a-i	do-i	
		// ko-Re	so-Re	a-Re	do-Re	// (cf. 3.13 節: (77))
	場所:	ko-ko	so-ko	ai-ko	do-ko	
	方向:	ko-Qci	so-Qci	a-Qci	do-Qci	
副詞	指定:	koo	soo	aa	doo	
		// ko-u	so-u	a-u	do-u	// (cf. 3.7.1 節: (42))
	性状:	ko-gaN	so-gaN	a-gaN	do-gaN	
		ko-gaNte	so-gaNte	a-gaNte	do-gaNte	
連体詞	指定:	ko-N	so-N	a-N	do-N	
	性状:	ko-gaN	so-gaN	a-gaN	do-gaN	
		ko-gaNta	so-gaNta	a-gaNta	do-gaNta	(4.2.3 節: (11) を再掲)

(150) のとおり, -gaN は副詞語幹と連体詞語幹を作る。連体詞語幹を作る接尾辞としては -gaNmeeta もある。

7.8.1.2 現場指示

ko-, so-, a- の用法は標準語のそれと大きく変わらない。ko-, a- はそれぞれ, 話し手からの物理的・心理的距離によって次のように規定される。

(151) a. ko- は話し手から近い要素を指し示す。

b. a- は話し手から遠い要素を指し示す。

話し手から近い要素を指す ko- には次のような例がある。

(152) a. [話し手の周囲のものについて聞き手に尋ねて]

koN iwaa naN=cju-u io=ja-imos-u=ka?
 この 魚:TOP 何=QUOT:言う-NPST 魚=VLZ-POL-NPST=Q

⁶⁹ 里方言では, 人に対するの卑称に標準語の「こいつ」, 「あいつ」のような語彙化したものはない。koN#waroo ‘この野郎’, aN#waroo ‘あの野郎’ のように, 指示語と人物を指す語の組み合わせによって表される。

‘この魚は何という魚ですか?’

b. [話し手の周囲にある録音機について]

NNdo=ga hanas-u=tai=taa. koree haii=tai=taa.

1PL=NOM 話す-NPST=NLZ:VLZ:NPST=SFP これ:DAT 入る:NPST=NLZ:VLZ:NPST=SFP

‘私たちが話すのね。これに録音されるんだね。’

話し手からも聞き手からも近い場合は、両者ともに ko- を用いる。

(153) [話し手からも聞き手からも近いものについて]

A: *koi=ba ku-ijai-mos-e.*

これ=ACC 食う-HON-POL-IMP

‘これを食べてください。’

B: *koi=ba=na.*

これ=ACC=SFP

‘これをね。’

一方、話し手から遠い要素を指す a- の例は、次のとおりである。

(154) [話し手からも聞き手からも遠いものについて]

A: *araa nan=cju-u mon=jai-mos-u=ka?*

あれ:TOP 何=QUOT:言う-NPST もの=VLZ-POL-NPST=Q

‘あれは何ていうものですか?’

B: *araa pasokon=jai-mos-u.*

あれ:TOP パソコン=VLZ-POL-NPST

‘あれはパソコンです。’

指示語根は、もの以外を指す場合でも、話し手からの距離によって使い分けられる。次は場所の例である。

(155) [話し手から遠い場所にあるものについて]

aiko=N tatemon=wa nan=cju-u mon=jar-oo=ka?

あそこ=GEN 建物=TOP 何=QUOT:言う-NPST もの-VLZ-INFR=Q

‘あそこの建物は何ていうものだろうか?’

話し手からの距離で表し分ける場合、近距離の ko- と遠距離の a- に加え、中距離の so- も用いられる。

(156) a. *koko=N tokoo juu mie-moos-aN=de*

ここ=GEN 所:TOP いい:NL 見える-POL-NEG:NPST=CSL

aiko=N hoo=ni ucui-moos-oo=ni.

あそこ=GEN 方=DAT 移る-POL-HORT=INFR=SFP

‘この所はよく見えませんので、あそこのほうに移りましょうよ。’

b. { *aikē / sokeē* } *ucur-oo=ni.*

{ *あそこ:DAT / そこ:DAT* } 移る-HORT=SFP

‘{ あそこ / そこ }に移ろうよ。’

so- が中距離を指すことができるのは標準語と同じく、話し手と聞き手の視点が一致する場合である。

7.8.1.3 聞き手の領域

so- には、中距離以外に聞き手の領域を表す用法も確認できる。話し手と聞き手が対立的視点をとる時、その要素が聞き手の領域のものであると判断されれば、so- が用いられる。相手の領域であると判断するための要因としては、距離はもちろんのこと心理的な側面も関与する。対象までの物理的距離や操作可能性、情報量や談話導入（どちらが決定権をもっているとやりとりの中で捉えられているか）などが影響を与える。

- (157) A: doko=N heN=ga ita-kai-jai=na?
 どこ=GEN 辺=NOM 痛い-VLZ-HON:NPST=Q
 ‘どの辺が痛いですか?’
- B: { soko=jai-mos-u /
 そこ=VLZ-POL-NPST
 soko=ja na-ka-mos-u. koko=jai-mos-u }.
 そこ=ESS.TOP ない-VLZ-POL-NPST ここ=VLZ-POL-NPST
 ‘{ ここです / ここではないです。ここです }。’

7.8.1.4 文脈指示

テキストに頻出する文脈指示では、基本的に so- が用いられる。ko-, a- も用いられるが、現場指示からの転用と見られる。そのため、文脈のみで導入された知識には、so- を優先的に用いる。

- (158) koNna koto=to=wa sir-ana-kaQ-ta=te ju-u-te
 こんな こと=QUOT=TOP 知る-NEG-VLZ-PST=QUOT 言う-NPST-CTX
 deNwa=de sogaN juu-jai-mos-u.
 電話=INST そんなに 言う-HON-POL-NPST
 ‘「こんなこととは、知らなかった」と言っ、電話でそうおっしゃいます。’

- (159) [ニガウリの調理法を尋ねて]
 A: siozuke-te nairoNbukuro=ni ire-te os-itoi=to=jo.
 塩漬ける-CTX ナイロン袋=DAT 入れる-CTX 押す-CONT:NPST=NLZ=SFP
 ‘塩漬けて、ナイロン袋に入れて、押しているのよ。’
- B: aa oi=mo sogaN si-tek-an-aa.
 ああ 1SG=も そんなに する-CTX:おく-NEG-COND
 ‘ああ、私もそうしておかなければ。’

- (160) [出版された本を自分に送ると言われた。しかし、自分たちに送るよりも調査員に送る方がいいという意見に賛成して]
 naa sono hoo=ga zuQto jo-ka=dee=jo. kogaN=to=ba agaN
 なあ その 方=NOM ずっと いい-NPST=CSL=SFP こんな=NLZ=ACC あんなに

su-i=jokja oraa sogaN oNm-uu oNm-uu-joi.

する-NPST=CMP 1SG:TOP そんなに 思う-NPST 思う-IPFV:NPST

‘ねえ、その方がずっといいからね。こんなのを、ああするより僕はそう思う、思っている。’

文脈によって導入された間接的知識を指す so- に対して、a- は話し手が直接体験した知識を指す。直接的知識には、有名な、よく知られている対象も含まれる。

(161) a. onseN=ni ik-joQ-ta aN koro=ga icibaN jo-ka-moi-ta=naa.

温泉=DAT 行く-IPFV-PST あの 頃=NOM 一番 いい-VLZ-POL-PST=SFP

‘温泉に行っていたあの頃がよかったですね。’

b. [運動会で子どもの踊った様子を思い出し、ほめて]

agaNte=so odoi=to=ga a=ga jo-ka=doo. agaN=to=ga.

ああして=CNF 踊る:NPST=NLZ=NOM あれ=NOM いい-NPST=SFP あんな=NL=NOM

‘ああしてさ、踊るのが、あれがいいよ。あんなのが。’

c. [年をとると遠出は疲れるという話の中で]

A: soi=de tatoeba ma uta=no zjoozu=na tatoeba=te naN=cju

それ=INST たとえば FIL 歌=GEN 上手=NPST たとえば=QUOT 何=QUOT

teNdoo

天童

B: josimi.

よしみ

A: josimi=ka=na aN reNcju=ga kagosima=ni sono ku-i=to naQ-ta

よしみ=Q=SFP あの 連中=NOM 鹿児島=DAT FIL 来る-NPST=QUOT なる-PST

tooki jaQpai kjai=to su-reba=Qte konDo=wa jaQpa

時 やっぱり 来る:HON=QUOT する-COND=QUOT 今度=TOP やっぱり

A: ‘それで、たとえば、歌の上手な、なんて言うの、天童’

B: ‘よしみ?’

A: ‘よしみかな、あの連中が鹿児島に、その、来るとなった時、やっぱりいらっしやるとすればって、今度はやっぱり’

so- と a- の関係を見ると、同一談話内でも対象が直接的知識に含まれると判明すれば、so- から a- に切り替わる。また、談話によって一度導入された対象は、たとえば、別の日に新しく談話を始める際は、so- から a- に切り替えて指示することも可能である。標準語と同じ機能を有していると言える。

(162) a. [新しく来た先生は結婚しているのか聞かれたが、誰のことかわからず]

soN seNse=ba zeNzeN sir-aN=de wakar-aN=naa.

その 先生=ACC 全然 知る-NEG:NPST=CSL わかる-NEG:NPST=SFP

‘その先生を全然知らないなので、わからないなあ。’

- b. [港の近くに住んでいる女の先生だとわかって]

aa aN onago=no seNsee.

ああ あの 女=GEN 先生

‘ああ、あの女の先生。’

- (163) [今、新しい本を読んでいると紹介されて]

hee sogaNta hoN=ba mii-joi-jai=to=N? sogaNta hoN=naraa joN-de

へえ そうした 本=ACC 見る-IPFV-HON=NLZ=Q そうした 本=COND 読む-CTX

miro gota=naa.

みる:VOL 様子:ある:NPST=SFP

‘へえ、そんな本を見ていらっしやるの？そんな本なら読んでみたいなあ。’

- (164) [(163) の会話をした翌日の談話で、(163) の発話と同一人物が]

juu-toi-jaQ-ta aN hoN=ba kas-ite kui-jar-e.

言う-CONT-HON-PST あの 本=ACC 貸す-CTX くれる-HON-IMP

‘おっしやってたあの本を貸してください。’

7.8.2 視点表現

7.8.2.1 移動の視点

標準語の「来る」は、一人称者 (=話し手ないし話し手側の人物) に視点を置き、そこに向かってくる動作を表す。里方言でも同様の動作は ik- ‘行く’ ではなく、ko- ‘来る’ で表すので、当方言の ko- も同様の視点表示機能を持っていると考えられる。

- (165) a. [電話で、明日聞き手の家に行くことを伝える。]

ku-i=dee=jo.

来る-NPST=CSL=SFP

‘[明日あなたの家に] 行くからね。’

- b. [電話で、明日聞き手 (上位者) の家に行くことを伝える。]

ki-mos-u=dee=jo.

来る-POL-NPST=CSL=SFP

‘[明日あなたの家に] 行きますからね。’

ただし、ko- は必ずしも一人称者に向かってくる動作を表すわけではない。一人称者が非一人称者に向かっていく動作を表す際も ko- が用いられる。

- (166) aicjaa oiga aN=ga e ku-i=dee.

明日 1SG=NOM 自分=GEN 家:DAT 来る-NPST=CSL

‘明日私があなたの家に行くから。’

7.8.2.2 授受の視点

授与は一般的に kure- で表す。里方言の kure- は非一人称者から一人称者への授与に加えて、一人称者から非一人称者への授与でも用いられる。

- (167) a. aNsaN=ga koN hoN=ba kui-ta=doo.
 兄さん=NOM この 本=ACC くれる-PST=SFP
 ‘兄さんがこの本をくれたよ。’
- b. oi=ga aNsaN=ni koN hoN=ba kui-ta=doo.
 1SG=NOM 兄さん=DAT この 本=ACC くれる-PST=SFP
 ‘私が [兄さんに] この本をあげたよ。’
- (168) a. hoN=ba kui-ta=doo.
 本=ACC くれる-PST=SFP
 ‘[子どもが] 本をくれたよ。’
- b. koN hoN=ba kuru-i=dee.
 この 本=ACC くれる-NPST=SFP
 ‘[孫に] この本をあげるよ。’

また、一人称者が非一人称者からものを受納する時は、moraw- が用いられる。

- (169) [上位者からおみやげをもらう場面。いくつか見せてもらって]
 wasjaa koQci=ba morjaa-mos-u.
 1SG:TOP こっち=ACC もらう-POL-NPST
 ‘私はこちらをもらいます。’

7.8.2.3 恩恵の視点

里方言の恩恵表現としては次の表現がある。

- (170) a. -te#kure- ‘～てくれる’
 b. -te#jar- ‘～てやる’
 c. -te#moraw- ‘～てもらう’
 d. -te#age- ‘～てあげる’

標準語に見られる「てくださる」と「ていただく」は、里方言本来の形式とは認識されていない。「てくださる」に相当する形式としては、-te#kure-jar- ‘CTX#くれる-HON’ がある。

- (171) sono omoci=mo cui-tari si-te kui-jar-ebaa
 その お餅=も つく-ILST する-CTX くれる-HON-COND
 ‘[役員さんが] そのお餅もついたりしてくだされば’

里方言の -te#kure- は、一人称者への授益や、一人称者から目下の非一人称者への授益を表す。標準語の「てくれる」は受益者が一人称者でなければならないという意味統語上の制約があるが、里方言の -te#kure- は、一人称者から非一人称者への授益も、その逆の授益も表すことができる。

- (172) a. iQsjoo mago=ga Ndoge=N koto=ba kasee si-te kuru-i=jo.
 よく 孫=NOM 1PL:家:GEN こと=ACC 加勢 する-CTX くれる-NPST=SFP
 ‘よく孫が私たちの家のことを手伝ってくれるよ。’
- b. [掃除を手伝う場面]
 oi=ga aQko=ga sigoto=ba kasee si-te kuru-i=ga.

1SG=NOM 2SG=GEN 仕事=ACC 加勢 する-CTX くれる-NPST=SFP

‘私がおまえの仕事を手伝ってやるよ。’

-te#jar- は一人称者から非一人称者への授益や、三人称者同士の授益を表す。非一人称者から一人称者への授益は表現できない。

- (173) a. waka-i hito=ga susume-te jononaka=ni das-ite jai=te
若い-NPST 人=NOM 勧める-CTX 世の中=DAT 出す-CTX やる:NPST=QUOT
ju-u=to=mo hitocu=no rihabiri=i nai.
言う-NPST=NLZ=も 1つ=GEN リハビリ=DAT なる:NPST

‘若い人が勧めて [老人を] 世の中に出してやるというもの、1つのリハビリになる’

- b. saQki koo-te jaQ-ta=ga=ne.
さっき 買う-CTX やる-PST=SFP=SFP
‘さっき [孫にお菓子を] 買ってやったがね。’
(「孫が私に買ってくれる」の時には非文法的)

-te#age- は基本的には謙譲語としての機能を有しており、目上の非一人称者に対する授益を表す。申し出の際にも用いられる。

- (174) a. [先生の仕事を代わることを申し出る]

seNsee soN sigoto=ba wasi=ga kawaQ-te age-moos-oo=ka?
先生 その 仕事=ACC 1SG=NOM 代わる-CTX あげる-POL-VOL=Q
‘先生、その仕事を私が代わってあげましょうか?’

- b. [A が料理の作り方を教えてほしいと頼まれたので]

A: cuku-i+kata=ba juutekase-te.
作る-NL+方=ACC 教える-CTX

B: ee cuku-i+kata=ba juutekase-te. jai=baQteka buNrjoo=mo=naa.
ええ 作る-NL+方=ACC 教える-CTX VLZ:NPST=CONC 分量=も=SFP

A: jai=dee buNrjoo=mo kai-te age-te ategoo-te ki-ta=to.
VLZ:NPST=CSL 分量=も 書く-CTX あげる-CTX あてがう-CTX 来る-PST=NLZ

A: ‘作り方を教えてあげて’

B: ‘えー、作り方を教えて、だけど分量も’

A: ‘だから、[紙に] 分量も書いてあげて、あてがってきたの。’

ただし、女性の中には、目下の非一人称者に対する授与を age- で表す人物もいるので、話者によってはこれを美化語と捉えていると考えられる。

7.8.2.4 juute#kas-

一人称者に対する恩恵は -te#kure- によって表すのが普通であるが、「教えてくれる」に相当する意味は例外的に juu-te#kas- //iw-te#kas-// のみで表す。juu-te#kas- を使う時は -te#kure- まで用いる必要はない (juu-te#kas- は分析されることが少ないので、グロスでは全体に「教える」を付した)。

- (175) a. niisaN=ga oi=ni taisoo=ba juutekai-ta=doo.

兄さん=NOM 1SG=DAT 体操=ACC 教える-PST=SFP

‘兄さんが私に体操を覚えてくれたよ。’

b. oi=ga niisan=ni taisoo=ba juutekai-ta=doo.

1SG=NOM 兄さん=DAT 体操=ACC 教える-PST=SFP

‘私が兄さんに体操を覚えてあげたよ。’

第8章 副詞節

8.1 副詞節の分類

副詞節は副詞に準じる節で、被修飾節(≠主節)に対して、原因や条件などの付加情報を付け加える。副詞節は、屈折接尾辞 (1)a, 接続助詞 (1)b, 動詞重複 (1)c によって形成され、被修飾節の述部に先行する。

- (1) a. [terebi=ba mii~mii] meesi=ba ku-u.
テレビ=ACC 見る:NPST~SIM 飯=ACC 食う-NPST
‘テレビを見ながら、ご飯を食べる。’
- b. aQko=nara [kibar-eba] deku-i koto nai=to=jo.
2SG=COND 気張る-COND できる-NPST こと なる:NPST=NLZ=SFP
‘おまえなら頑張れば、できるようになるよ。’
- c. [kaicjoo=mo ciQtaa wakaQ-cja oi=baQte] kiku=to
会長=も 少し:TOP わかる-CTX:TOP おる=CONC 聞く:NPST=QUOT
omoo=to=jo.
思う:NPST=NLZ=SFP
‘会長も少しはわかっていると思うけど、[私たちの進言も] 聞くと思うのよ。’

連体節と形式名詞からなる次の形式は名詞句である。しかし、付加部として安定的に用いられているので、本節では副詞節として扱う。

- (2) a. [NP [ADNCL moo kes-aN goto]] koohai=no hito-taci=ni umaa-ku
もう 消す-NEG:NPST 様子 後輩=GEN 人-PL=DAT うまい-NL
hikicui-de ik-anja deke-N.
引き継ぐ-CTX 行く-NEG.COND できる-NEG:NPST
‘もう [伝統を] 消さないように、後輩の人たちにうまく引き継いでいかなければならない。’
- b. [NP [ADNCL sigoto=N suN-da] tookjaa] nomikjaa ik-oo=ja.
仕事=NOM 済む-PST 時:TOP 飲み会:DAT 行く-HORT=SFP
‘仕事が済んだら、飲みに行こうよ’

里方言の副詞節は標準語のそれと同じく、どのような要素を取ることができるかによって、4種類に分けることができる。本稿では、南 (1974) と田窪 (1987) を参考に、A-D 類副詞節を作る主な形式を次のように分類する。

- (3) A 類: ~FULL ‘並行動作 (SIM)’, ⁱ-nagara ‘並行動作’, -te ‘様態’, ⁱ-kjaa ‘目的 (PURP)’
B 類: ^r-eba ‘順接仮定 (COND)’, -ta(i)ba ‘過去順接仮定 (PST.COND)’, -tara ‘順接仮定’, =nara ‘順接仮定’, =gii ‘順接仮定’, tookjaa //took^wa// ‘順接仮定’, tamee //tame=ⁿi// ‘目的’, goto ‘比況’, -te ‘順接確定’

C 類: =dee ‘順接確定 (CSL)’, =si ‘順接確定’, -te=mo ‘逆接假定’, =baQte(ka) ‘逆接確定 (CONC)’, =tee // =to=ⁱ// ‘逆接確定’, =dee=te ‘逆接確定’

D 類: =to ‘引用 (QUOT)’, =(Q)te ‘引用’

(i) 並行動作や様態を表す形式は A 類に, (ii) 順接假定条件を表す形式は B 類に, その他の条件 (=順接確定, 逆接確定, 逆接假定) を表す形式は C 類に分類されるように, A-D 類節を作る形式の意味的特徴は, 標準語のそれとほぼ同じである。

その他にも, 時間を表す副詞節を形成する koraa ‘頃:TOP’ などもあるが, 調査が不十分であるため, 本稿では上記の形式に絞って記述を行なう。

8.2 意味的傾向

副詞節が表す意味の代表格は条件である。条件は, (i) 主節の事態の成立に関与するか否かによって「順接条件」と「逆接条件」に, (ii) 確定的 (=既実現) か仮定的 (=未実現) かによって「確定条件」と「假定条件」に分けられる。したがって, 条件は, 順接/逆接と確定/仮定の組み合わせで, 「順接確定条件」, 「順接假定条件」, 「逆接確定条件」, 「逆接假定条件」の 4 種類に分類できる。

一般に, 標準語の「から」や「ので」は順接確定条件を, 「(れ)ば」や「なら」は順接假定条件を表すとされる。一方, 「が」や「けれど」は逆接確定条件を, 「ても」は逆接假定条件を表すとされる。ただし, これらはいくまで便宜的な分類に過ぎない。たとえば, 順接假定条件を表す「たら」が確定的な事態も表すなど, 各形式の意味・用法は多様である。

その他の意味としては, 並行動作 (A 類: 「ながら」, 「つつ」), 様態 (A 類: 「て」, 「たまま」), 目的 (A 類: 「ため(に)」), 比況 (B 類: 「よう(に)」), 引用 (D 類: 「と」, 「って」) などが挙げられる。

8.3 A 類副詞節を作る形式

A 類副詞節を作る形式としては, 主節の事態と並行する動作を表す, 動詞重複と ⁱ-nagara がある。両者の間に意味・用法の差は見られないが, ⁱ-nagara は動詞重複ほど使用頻度が高くない。標準語では「ながら」に似た意味を表す「つつ」も用いられているが, これに相当する形式は里方言にはない。標準語の「ながら」は逆接確定条件も表すことが知られているが, 里方言の動詞重複も ⁱ-nagara も逆接確定条件の意味では用いられない。

(4) a. terebi=ba mii~mii meesi=ba ku-u.

テレビ=ACC 見る:NPST~SIM 飯=ACC 食う-NPST

‘テレビを見ながら, ご飯を食べる。’

b. hoN=ba jom-inagara hito=N hanas-u=to=ba kii-toi.

本=ACC 読む~SIM 人=GEN 話す-NPST=NLZ=ACC 聞く-CONT:NPST

‘本を読みながら人の話すのをよく聞いている。’

動詞重複では ⁱ- \emptyset 形準体動詞ないし ⁱ-u 形連体動詞が利用されるが, 末尾の母音が長音化するという特徴がある。動詞重複は主節の事態に並行する動作を表すため, ware- ‘割れる’ のような変化動

詞語幹は重複できない。また、(5)a-b のとおり、^{-s}ase-, ^{-r}are- は重複できるが、(5)c-e のとおり、⁻ⁱjar-, ⁻ⁱmos- は許容されない。

- (5) a. hoN=ba *jom-asee~jom-asee*
 本=ACC 読む-CAUS:NL~SIM
 ‘本を読ませながら [教室を回っている]。’
- b. seNsee=kara *gar-aree~gar-aree*
 先生=ABL 怒る-PASS:NL~SIM
 ‘先生から怒られながら [反省した。]’
- c. **jom-ijai~jom-ijai*
 読む-HON:NPST~SIM
 ‘本をお読みになりながら’
- d. **jom-imos-u~jom-imos-u*
 読む-POL-NPST~SIM
 ‘本をお読みになりながら’
- e. **jom-ijai-mos-u~jom-ijai-mos-u*
 読む-HON-POL-NPST~SIM
 ‘本をお読みになりながら’

次のように様態を表す -te も A 類である。

- (6) hoNni aiikee naroo-de waroo-te.
 本当に あそこ:DAT 並ぶ-CTX 笑う-CTX
 ‘本当にあそこに並んで、笑って。’

8.4 B 類副詞節を作る形式

B 類副詞節を作る形式の代表格は、順接仮定条件を表す ^{-r}eba, -ta(i)ba, =nara, =gii である。接尾語である =nara は連体動詞類ないし名詞に、=gii は連体動詞類に付く。

- (7) a. dai=demo reNsjuu su-iba dekjuu=tai=ga.
 su-reba
 誰=でも 練習 する-COND できる:NPST=NLZ:VLZ:NPST=SFP
 ‘誰でも練習すればできるんだよ。’
- b. jee ku-i=to=nara reNraku se-N=ka.
 家:DAT 来る-NPST=NLZ=COND 連絡 する-NEG:NPST=Q
 ‘家に来るのなら、連絡してくれ。’
- c. uukaze=no ku-i=gii hune=wa de-N=naa.
 台風=NOM 来る-NPST=COND 船=TOP 出る-NEG:NPST=SFP
 ‘台風が来れば、船は出ないなあ。’

順接仮定条件形式を含む複文は、典型的には前件 (= 副詞節の事態) も後件 (= 主節の事態) も未

実現の事態 (反実仮想も含む) であるが、標準語のそれはよく知られているように、既実現の事態 (習慣と恒常的事態も含む) も許容する。本稿では、順接仮定条件形式の使用条件を記述するために、前件も後件も未実現である複文を「仮説的複文」、少なくともどちらか一方が既実現である複文を「事実的複文」と呼ぶ。

8.4.1 順接仮定条件

8.4.1.1 -^leba, -^lta(i)ba

-^lebaは仮説的複文で用いられる。一方、//^l-tar-^leba// ‘PST-COND’ に由来すると考えられる -^lta(i)ba (cf. 5.1.7.2 節) は、次のように仮説的複文では使いにくい。

(8) a. ?uukaze=no ki-^ltaba hune=wa de-N=naa.
 台風=NOM 来る-PST.COND 船=TOP 出る-NEG:NPST=SFP
 ‘台風が来たら、船は出ないなあ。’

b. ?hajoo oki-^ltaba jo-kaQ-ta=tee=naa.
 早い:NL 起きる-PST.COND いい-VLZ-PST=CONC=SFP
 ‘早く起きれば、よかったのになあ。’

(9) のとおり、-^leba と -^lta(i)ba は事実的複文では交替可能である。ただし、(10) のとおり、習慣や恒常的事態を表す事実的複文で用いられるのは、基本的に前者である。

(9) a. tegami=ba das-^l{ eba / itaba } iQkii heNzi=N ki-taa.
 手紙=ACC 出す-^l{ COND / PST.COND } すぐ 返事=NOM 来る-PST
 ‘手紙を出したら、すぐに返事がきた。’

b. isoi-de { ku-rjaa / ki-^ltaba } wasuremoN si-ta.
 急ぐ-CTX { 来る-COND / 来る-PST.COND } 忘れもの する-PST
 ‘急いで来たら、忘れものをした。’

(10) a. aN jee ik-^leba iicumo jo-ka moN=no de-toi-mos-u.
 あの 家:DAT 行く-COND いつも いい-NPST もの=NOM 出る-CONT-POL-NPST
 ‘あの家に行くといつも御馳走が出てます。’ 《習慣》

b. inekai=ga sum-^leba sjoocjuu noN-de goQsoo kuu-joQ-ta=naa.
 稲刈り=NOM 済む-COND 焼酎 飲む-CTX 御馳走 食べる-IPFV-PST=SFP
 ‘稲刈りが済むと、焼酎を飲んで、御馳走を食べていたなあ。’ 《習慣、過去》

c. ici=ni ici tas-^leba ni=ni nai=doo.
 一=DAT 一 足す-COND 二=DAT なる:NPST=SFP
 ‘1に1を足せば、2になるよ。’ 《恒常的事態》

後件が命令、勧誘、意志などであれば、-^lebaは使用されず、=naraが用いられる。このことから、標準語と同じく、-^lebaにはモダリティ制約があると考えられる。

(11) a. meesi kuQ-ta=nara ha=mo migak-e=jo.
 飯 食べる-PST=COND 歯=も 磨く-IMP=SFP
 ‘ご飯を食べたら、歯も磨きなさいよ。’ 《命令》

- b. sigoto=N agaQ-ta=*nara* daijami su-u=i.
 仕事=NOM 上がる-PST=COND 飲み会 する-HORT=SFP
 ‘仕事が終わったら、飲もう。’ 《勧誘》

標準語の「(れ)ば」は、後件が警告や禁止のニュアンスを持つ (12) のような複文では使えないが、里方言の -*eba* は使用できる。

- (12) hoN=ba jom-*eba* me=ga waikoo nai=doo.
 本=ACC 読む-COND 目=NOM 悪い:NL なる:NPST=SFP
 ‘[暗い所で] 本を読んだら、目が悪くなるよ。’

8.4.1.2 =nara, =gii

-*eba* は、前件と後件の時間関係が「前件→後件」でなければ使えないが、=nara は (13) のとおり、「後件→前件」(前提的な条件を表す場合) でも使える。また、先に述べたように、=nara は -*eba* とは異なり、後件が命令、勧誘、意志などであっても使用できる。

- (13) a. jee ku-i=to=*nara* reNraku se-N=ka.
 家:DAT 来る-NPST=NLZ=COND 連絡 する-NEG:NPST=Q
 ‘家に来るのなら、連絡しろ。’ 《命令》
- b. kusikino=i ik-u=to=*nara* iQsjoki ik-oo.
 串木野=DAT 行く-NPST=NLZ=COND 一緒に 行く-HORT
 ‘串木野に行くのなら、一緒に行こう。’ 《勧誘》
- c. io=o ka-u=to=*nara* aiko=no mise=ga jo-ka=doo.
 魚=ACC 買う-NPST=NLZ=COND あそこ=GEN 店=NOM いい-NPST=SFP
 ‘魚を買うのなら、あそこの店がいいよ。’ 《勧め》

=nara は非過去時制も過去時制も取れるので、-ta=nara という形式も実現しうる。この -ta=nara は、標準語の「たら」のように用いられる。

- (14) a. meesi kuQ-ta=*nara* ha=mo migak-e=jo.
 飯 食べる-PST=COND 歯=も 磨く-IMP=SFP
 ‘ご飯を食べたら、歯も磨きなさいよ。’
- b. sigoto=N agaQ-ta=*nara* daijami su-u=ii.
 仕事=NOM 上がる-PST=COND 飲み会 する-HORT=SFP
 ‘仕事が終わったら、飲み会しよう。’

(15)a のように、=nara は -*eba* とは異なり、仮説的複文では用いられないようである。また、(15)b のように前件も後件も既実現である事後的複文でも用いられない。ただし、(15)c のように、前件が事実であっても、後件が未実現であれば、使うことができる。この場合、後件はしばしば命令、勧誘、勧めなどである。

- (15) a. #uukaze=no ku-i=*nara* hune=wa de-N=naa.
 台風=GEN 来る-NPST=COND 船=TOP 出る-NEG:NPST=SFP
 ‘台風が来たら、船は出ないなあ。’

b. #tegami=ba das-ita=*nara* iQkii heNzi=no ki-ta.
 手紙=ACC 出す-PST=COND すぐ 返事=NOM 来る-PST
 ‘手紙を出したら、すぐに返事が来た。’

c. [牛乳パックを開けた子どもを見て]
 ake-ta=*nara* iQkii nom-an-eba neemai=doo.
 開ける-PST=COND すぐ 飲む-NEG-COND 腐る:NPST=SFP
 ‘開けたら、すぐに飲まないで腐るよ。’

以上のように、-*eba* と =*nara* は一定の使い分けがなされているようである。

=*gii* は、-*eba* と同じく仮説的複文で用いられる。

(16) a. uukaze=no ku-i=*gii* hune=wa de-N.
 台風=NOM 来る-NPST=COND 船=TOP 出る-NEG:NPST
 ‘台風が来たら、船は出ない。’

b. jasu-ka=*gii* ka-u=baQte=naa.
 安い-NPST=COND 買う-NPST=CONC=SFP
 ‘安ければ、買うけどなあ。’

《反実假定》

-*eba* と -*ta(i)ba* を時制の面で区別するように、=*gii* 節で時制を区別するかどうかは、話者によってかなり揺れる。前件も後件も既実現である事実的複文で -*ta=**gii* を使う話者は 60 代に偏っており、比較的年齢の高い 80 代話者は -*ta=**gii* を使わない傾向にある。この点については、さらに調査が必要である。

(17) isee-de de-*ta=**gii* wasure-*ta=*jo.
 急ぐ-CTX 出る-PST=COND 忘れる-PST=SFP
 ‘急いで出たら、忘れたよ。’

時間的限定性に欠ける習慣や恒常的事態を表す事実的複文でも、=*gii* は使用できる。さらに、前件が既実現であっても、後件が未実現であれば、許容度が上がる。ただし、この場合、80 代の話者も 60 代の話者も -*ta=**gii* は使わない。

(18) a. koko=zui ku-i=*gii* dai=mo ke-N=joo=moN.
 ここ=TERM 来る-NPST=COND 誰=も 来る-NEG:NPST=INFR=SFP
 ‘ここまで来れば、誰も来ないだろうね。’ 《前件: 事実, 後件: 假定》

b. aikee ik-u=*gii* jo-ka moN kui-jai=to=naa.
 あの家:DAT 行く-NPST=COND いい-NPST もの くれる-HON:NPST=NLZ=SFP
 ‘あの家に行くと、いいものを下さるんだなあ。’ 《習慣》

c. ici=ni ici=ba tas-u=*gii* ni=ni na-i=doo.
 一=DAT 一=ACC 足す-NPST=COND 二=DAT なる-NPST=SFP
 ‘1 に 1 を足せば、2 になるよ。’ 《恒常》

=*gii* は -*eba* とは異なり、後件のモダリティ制約を受けず、後件が警告や禁止であっても使える。しかし、=*nara* とは異なり、前提的な条件を表す「後件→前件」の複文では使用できない。

(19) kuara-ka toko=de hoN jom-u=*gii* me=ga waikoo nai=doo.

暗い-NPST 所=LOC 本 読む-NPST=COND 目=NOM 悪い:NL なる:NPST=SFP
 ‘暗い所で本を読むと、目が悪くなるよ。’

=gii の代わりに =giin(j)a(a), =giin(j)aaba, =giini など用いられる。これらの間に意味的な差は見られないので、いずれも =gii の自由変異と見なす。

- (20) a. kusuri=ba nom-u=giinaa juu na-i=doo.
 薬=ACC 飲む-NPST=COND いい:NL なる-NPST=SFP
 ‘薬を飲めば、よくなるよ。’
- b. ake-ta=giinjaa iQkii nom-an-eba nemai=doo.
 開ける-PST=COND すぐ 飲む-NEG-COND 腐る:NPST=SFP
 ‘開けたら、すぐに飲まないで腐るよ。’
- c. jasu-ka=giini kaw-arui=baQte
 安い-NPST=COND 買う-POT:NPST=CONC
 ‘安ければ、買えるけど’

8.4.2 その他

標準語の「たら」に相当する -tara は、面接調査においてはほとんど出てこない (ただし、テキストではしばしば用いられている)。次のように、事後的複文の「たら」には -ta(i)ba が、仮説的複文の「たら」には -ta=nara が対応する。

- (21) a. isoi-de ki-tabā wasuremoN si-ta.
 急ぐ-CTX 来る-PST.COND 忘れもの する-PST
 ‘急いで来たら、忘れものをした。’
- b. sigoto=N owaQ-ta=nara daijami su-u=i.
 仕事=NOM 終わる-PST=COND 飲み会 する-HORT=SFP
 ‘仕事が終わったら、飲もう。’

標準語の「たらいい」にあたる勧めの表現では、順接仮定条件形式ではなく、-te が用いられる。次に挙げる -te#jo- は形式的には「ていい」に相当するが、意味的には「たらいい」に近い。

- (22) a. aree tanoN-doQ-te jo-ka=jo.
 あれ:DAT 頼む-CTX:おく-CTX いい-NPST=SFP
 ‘あの人に頼んどいたらいいよ。’
- b. hoQ-te ku-te jo-ka=tee=naa.
 掘る-CTX 食う-CTX いい-NPST=CONC=SFP
 ‘[サツマイモを] 掘って、食べたたらいいのになあ。’

また、次のように前件と後件が継起的関係にある複文では、基本的に -eba が使われる。里方言では、標準語の「と」に相当する =to が単独で用いられることはあまりないが、「と言うと」に由来する =cju-u=to はしばしば用いられる。

- (23) a. samu-reba namano kowa-ka=to=jo=naa.
 冷める-COND とても 固い-NPST=NLZ=SFP=SFP

‘冷めると、とっても固いんだよね。’

- b. kura-ka toko=de hon=ba jom-u=cju-u=to me=no
暗い-NPST 所=LOC 本=ACC 読む-NPST=QUOT:言う-NPST=COND 目=NOM
waruu na-i=doo.
悪い:NL なる-NPST=SFP

‘暗い所で本を読むと、目が悪くなるよ。’

その他の順接仮定条件形式としては、標準語の「時は」に対応する *tookjaa* が挙げられる。

- (24) a. ee ku-i tookjaa deNwa si-te kure-e.
家:DAT 来る-NPST 時:TOP 電話 する-CTX くれる-IMP
‘家に来る時は電話してくれ。’
- b. sigoto=N suN-da tookjaa nomikjaa ik-oo=ja.
仕事=NOM 済む-PST 時:TOP 飲み会:DAT 行く-HORT=SFP
‘仕事が済んだら、飲みに行こうよ’
- c. #tegami=ba das-ita tookjaa iQkii heNzi=N ki-ta.
手紙=ACC 出す-PST 時:TOP すぐ 返事=NOM 来る-PST
‘手紙を出したらすぐに返事が来た。’
- d. #koko=zui { kur-u / ki-ta } tookjaa dai=mo ko-N.
ここ=TERM { 来る-NPST / 来る-PST } 時:TOP 誰=も 来る-NEG:NPST
‘ここまで来れば、誰も来ない。’

(24)a-b のとおり、*tookjaa* は =nara と同じく、非過去時制も過去時制も取れるが、(24)c-d のように事実的複文では使えない。

順接仮定条件形式以外では、目的ないし理由を表す *tamee //tame=ⁿi//* がある。次のとおり、*tamee* 節は、主節の動作主とは異なる動作主を取ることができるので、B 類とした。なお、里方言の理由表現では =dee を使うのが普通で、*tamee* はあまり用いられない。

- (25) soN ucii taroo=ga daigaku ik-u tame:e wasjaa cjokiN
その うち 太郎=NOM 大学 行く-NPST ため:DAT 1SG:TOP 貯金
si-mos-u=doo.
する-POL-NPST=SFP
‘そのうち太郎が大学に行くため、私は貯金をしますよ。’

比況を表す *goto* (標準語の「よう(に)」にあたる) も、次のように主節と従属節に異なる動作主を取ることができる。したがって、B 類である。

- (26) a. taroo=ga mainici hasiQ-toi goto aQko=moo hasir-aN=ka.
太郎=NOM 毎日 走る-CONT:NPST 様子 2SG=も 走る-NEG:NPST=Q
‘太郎が毎日走るように、おまえも走りなさい。’
- b. [陣取りゲームの説明]
hito=no naka sabaiQ-te ke-N goto kono huci=ni
人=NOM 中 入る-CTX 来る-NEG:NPST 様子 この 淵=DAT

uc-u wake.

打つ-NPST わけ

‘人が中に入ってこないように、[別の人が] この淵に打つわけ。’

次のように順接確定条件を表す -te も B 類である。

- (27) nicijoobi=i kagosima=de kaze hii-te gecujoobjaa waga=no ie=de
日曜日=LOC 鹿児島=LOC 風邪 ひく-CTX 月曜日:TOP 自分=GEN 家=LOC
ne-toi.

寝る-CONT:NPST

‘日曜日鹿児島で風邪をひいて、月曜日は自分の家で寝ている。’

8.5 C 類副詞節を作る形式

C 類副詞節を作る形式の代表格も条件形式で、順接確定条件形式と逆接条件形式に分けられる。

8.5.1 順接確定条件

順接確定条件 (=原因・理由) を表す形式として主に使われるのは、=dee である。

- (28) a. karadaa maa jo-ka=dee saNka su-i=tai=taa.
体:TOP まあ いい-NPST=CSL 参加 する-NPST=NLZ:VLZ:NPST=SFP
‘体は、まあ、いいから、参加するのよ。’
- b. uuame=no huQta=dee hune=N de-N=jaQ-ta.
大雨=NOM 降る-PST=CSL 船=NOM 出る-NEG=VLZ-PST
‘大雨が降ったので、船は出なかった。’
- c. keNkoo=de oi-jai=dee soNna adobaisu=mo deki-Ø
健康=ESS いる-HON:NPST=CSL そんな アドバイス=も できる-NL
kjoorjoku=mo deki-ru wake=jo.
協力=も できる-NPST わけ=SFP
‘健康でいらっしゃるからそんなアドバイスもでき、協力もできるわけよ。’

標準語の順接確定条件表現では、(i) 前件が客観的事実か判断の根拠か、(ii) 後件にモダリティ要素が取れるかどうか、(iii) 焦点化が可能かどうかなどによって、「から」と「ので」が使い分けられる。一方、里方言のそれではそうした使い分けが認められず、=dee が広く用いられる。

- (29) a. aikke jo-ka mise=ga ai=dee ita-tee mir-oo=ja.
あそこ:DAT いい-NPST 店=NOM ある:NPST=CSL 行く-CTX 見る-HORT=SFP
‘あそこがいい店があるから、行ってみようよ。’ 《判断の根拠》
- b. oomi=no sike-toQ-ta=dee=jo.
海=NOM 荒れる-CONT-PST=CSL=SFP
‘[船が出なかったのは] 海が荒れていたからだよ。’ 《焦点化》
- c. uuame=no hui-joi=dee dekake-N=joo=moN.

大雨=NOM 降る-IPFV:NPST=CSL 出かける-NEG:NPST=INFR=SFP

‘大雨が降っているから、出かけないだろう。’

《モダリティ: 推量》

-ta(i)ba も順接確定条件を表すが、(30)a のように前件は過去の事態に限られる。(30)b のように前件が非過去の事態であれば、-ta(i)ba の意味は順接確定条件とは解釈できない。-ta(i)ba に関するこのような解釈の違いは、前件が非過去の事態である場合に、標準語の「(れ)ば」が順接確定条件形式に置換できること (e.g. ここまで来れば (≒来たのだから) 彼も追いつかないだろう) に通じる。

(30) a. uuame=no huQ-taiba hune=N de-N=jaQ-ta.

大雨=NOM 降る-CSL 船=NOM 出る-NEG=VLZ-PST

‘大雨が降ったので、船は出なかった。’

b. #uuame=jaQ-taiba ita-cjaa nar-aN.

大雨=VLZ-CSL 行く-CTX:TOP なる-NEG:NPST

‘大雨だから、行ってはいけない。’

c. isoi-de ki-{taba / taiba} wasuremoN si-ta.

急ぐ-CTX 来る-{PST.COND / CSL} 忘れもの する-PST

‘急いで{来たなら / 来たから}, 忘れものをした。’

(30)c のような -ta(i)ba は、順接仮定条件（‘来たなら’の意）なのか、順接確定条件（‘来たから’の意）なのか判然としないが、後者の時は基本的に -taiba となっている。よって、-taba と -taiba は自由変異ではなく、使い分けられている可能性もあるが、この点については調査が十分ではないため、今後の課題としておく。

=dee は繫辞動詞 =jai // =jar-^ru// ‘VLZ-NPST’ に付けて、文頭で接続詞のように用いることができる。このような -taiba の例は見られない。

(31) a. N jai=dee jaQpai maemoQte koekake=mo daizi=jai=to=na.

うん VLZ:NPST=CSL やっぱり 前もって 声かけ=も 大事=VLZ:NPST=NLZ=SFP

‘うん、だから、やっぱり前もって声かけも大事だよ。’

b. asoko=de kimar-u wake=jai=taa.

あそこ=INST 決まる-NPST わけ=VLZ:NPST=SFP

jai=de joo=wa so cugi=no sedai=no hiQtaci=ga

VLZ:NPST=CSL 要=TOP そう 次=GEN 世代=GEN 人:PL=NOM

hikicui-de si-te kure-ru joo=ni.

引き継ぐ-CTX する-CTX くれる-NPST 様子=DAT

‘あそこで決まるわけよ。だから、要はそう次の世代の人達が引き継いで、してくれるように [しなければいけない]。’

=si は並列節を作る一方、次のように順接確定条件も表す。

(32) basu=o cukoo-te ik-an-ja ik-aN=si taiheN.

バス=ACC 使う-CTX 行く-NEG-COND 行く-NEG:NPST=CSL 大変

‘バスを使って行かなければならないし、大変。’

8.5.2 逆接条件

逆接条件を表す形式としては、*-te=mo*, *=baQte(ka)*, *=tee* がある。*=baQte* と *=baQteka* は意味的に変わらないようであるから、自由変異とする。

これらのうち、*=baQte(ka)* は最も汎用性が高く、逆接仮定条件と逆接確定条件の両方を表すことができる。そして、*-te=mo* は主に逆接仮定条件を、*=tee* は逆接確定条件のみを表す。

- (33) a. *aN mise=e { ita-te=mo / i-ta={ baQte / #tee } } araa ka-una.*
 あの 店=DAT { 行く-CTX=も / 行く-PST=CONC } あれ:TOP 買う-PROH
 ‘あの店に行っても、あれは買うな。’
- b. *uuame=jai=tee dekake-ta=naa.*
 大雨=VLZ:NPST=CONC 出かける-PST=SFP
 ‘大雨なのに、出かけたなあ。’
- c. *naagoo maQ-toQ-ta=baQte ke-N=jaQ-ta=naa.*
 長い:NL 待つ-CONT-PST=CONC 来る-NEG=VLZ-PST=SFP
 ‘ずっと待っていたけど、来なかったなあ。’

=baQte(ka) も繫辞動詞 *=jai* に付けて、文頭で接続詞のように使える。また、文末で終助詞のように用いることもできる。

- (34) a. *ik-u kii=ni naQ-ta=tee=naa. jai=baQte hitobaN*
 行く-NPST 気=DAT なる-PST=CONC=SFP VLZ:NPST=CONC 一晩
ne-te akuruhi nar-eba moo ik-ana-i=te.
 寝る-CTX 明くる日 なる-COND もう 行く-NEG-NPST=QUOT
 ‘行く気になったのにな。だけど、一晩寝て、明くる日になると、もう行かないって。’
- b. *huka-ku kaNgajui hicujoo=mo na-ka=baQte.*
 深い-NL 考える:NPST 必要=も ない-NPST=CONC
 ‘深く考える必要もないけど。’

-te=mo は、標準語の「ても」と同じく逆接仮定条件を表す。他の逆接条件形式とは異なり、(35)b-c のような繰り返しや、(35)d のような疑問語との共起が可能である。この点も「ても」に通じる。

- (35) a. *iki-toQ-te=mo ik-i=ga nar-an.*
 生きる-CONT-CTX=も 行く-NL=NOM なる-NEG:NPST
 ‘生きていても、[体が不自由で] 行くことができない。’
- b. *aN hutaa oQ-te=mo or-aN-de=mo kaNkee na-ka.*
 あの 人:TOP いる-CTX=も いる-NEG-CTX=も 関係 ない-NPST
 ‘あの人はいてもいなくても関係ない。’
- c. *maQ-te=mo maQ-te=mo ke-N=jaQ-ta.*
 待つ-CTX=も 待つ-CTX=も 来る-NEG=VLZ-PST
 ‘待っても待っても来なかった。’
- d. *naN=ga aQ-te=mo daizjoobu.*
 何=NOM ある-CTX=も 大丈夫

‘何があっても、大丈夫。’

次のように、疑問語との共起は =baQte(ka) も可能である。

(36) naN=ga aQ-ta=baQte daizjoobu.

何=NOM ある-PST=CONC 大丈夫

‘何があっても、大丈夫。’

=tee //to=ⁿi// ‘NLZ=DAT’ は標準語の「のに」にあたる。予想外の事態に対する話し手の意外感、不満、後悔などを表す「のに」の後件は、話し手が予想を外した事態、つまり、既知 (未実現でもよい) の事態に限られる。したがって、主節述部は、命令、意志、推量などのモダリティ要素を取ることができない。

=tee の後件も「のに」のそれと同じく、既実現の出来事に限られる。主節述部が前述のモダリティ要素を取る場合や、疑問文である場合、=tee ではなく、=baQte もしくは -te=mo が使用される。

(37) a. uuame=no hui-joi={ #tee / baQte } oraa ik-oo.

大雨=NOM 降る-IPFV:NPST=CONC 1SG:TOP 行く-VOL

‘大雨が降っていても、私は出かけよう。’

《意志》

b. uuame=no hui- { #joi=tee / joQ-te=mo } iQk-jai-mos-u=to=N?

大雨=NOM 降る- { IPFV:NPST=CONC / IPFV-CTX=も } 行く-HON-POL-NPST=NL=Q

‘大雨が降っていても、お出かけになりますか?’

《疑問》

「のに」は終助詞的用法を持つと言われるが、=tee も同様である。また、=baQte も終助詞的に用いることができるが、-te=mo はそうではない。

(38) a. hanako-cjaN=ni=mo=naa njuujokuzai kuru-reba jo-ka=tee=te.

花子-TTL=DAT=も=CNF 入浴剤 あげる-COND いい-NPST=CONC=QUOT

‘花子ちゃんにもな、入浴剤あげればいいのにつて。’

b. uuame=no hui- { joi=tee / joi=baQte / *joQ-te=mo }

大雨=NOM 降る- { IPFV:NPST=CONC / IPFV:NPST=CONC / IPFV-CTX=も }

‘[雨の中、出かけたと聞いて] 大雨が降っているのに’

逆接条件を表す形式としては、標準語の組み立て形式「からって」に相当する、=dee=te ‘CSL=QUOT’ も稀に見られる。意味的には -te=mo に近く、逆接仮定条件を表す (39)a-b では用いることができるが、逆接仮定条件を表す (39)c-d のような文では許容度が落ちる。

(39) a. aN misee i-ta=dee=te araa ka-una.

あの 店:DAT 行く-PST=CSL=QUOT あれ:TOP 買う-PROH

‘あの店に行っても、あれは買うな。’

b. ame=ga huQ-toi=dee=te ik-an-eba nar-aN.

雨=NOM 降る-CONT:NPST=CSL=QUOT 行く-NEG-COND なる-NEG:NPST

‘雨が降っていても出かけなければならない。’

c. ?uuame=no huQ-toi=dee=te aN kaa de-te iQ-ta=naa.

大雨=NOM 降る-CONT:NPST=CSL=QUOT あの 子:TOP 出る-CTX 行く-PST=SFP

‘大雨が降っているのに、あの子は出て行ったなあ。’

- d. ?nagoo maQ-ta=dee=te ke-N=jaQ-ta.
 長い:NL 待つ-PST=CSL=QUOT 来る-NEG=VLZ-PST
 ‘長く待ったけど、来なかった。’

また、次のように疑問語との共起は可能であるが、繰り返しは許容度が落ちる。

- (40) a. naN=no aQ-ta=dee=te daizjoobu.
 何=NOM ある-PST=CSL=QUOT 大丈夫
 ‘何があっても大丈夫。’
- b. ?maQ-ta=dee=te maQ-ta=dee=te ke-N=jaQ-ta.
 待つ-PST=CSL=QUOT 待つ-PST=CSL=QUOT 来る-NEG=VLZ-PST
 ‘待っても待っても来なかった。’

8.6 D 類副詞節を作る形式

D 類副詞節を作る形式は引用の =(Q)te, =to だけである。

- (41) a. roozinKurabii kui-jar-e=te juu=tai=taa.
 老人クラブ:dat くれる-hon-imp=quot 言う:npst=nlz:vlz:npst=sfp
 ‘「老人クラブにください」と言うんだよ。’
- b. karaimo=N hutoo si-te siQte-jai tookjaa
 サツマイモ=NOM 大きい:NL する-CTX 捨てる-HON:NPST 時:TOP
 kui-jar-e=cjuu-jar-e.
 くれる-HON-IMP=QUOT:言う-HON-IMP
 ‘サツマイモが大きくて捨てなさいる時は、「ください」と言ってください。’
- c. cuzuke-te ik-an-ja nar-aN=to omoo=to=jo=na.
 続ける-CTX 行く-NEG-COND なる-NEG:NPST=QUOT 思う:NPST=NLZ=SFP=SFP
 ‘続けていかなければならないと思うのよね。’

引用節を取る動詞は、(41)a-b に挙げる juw- ‘言う’ などの発話系の動詞と、(41)c に挙げる omow- ‘思う’ などの思考系の動詞である。(41)b のとおり、=(Q)te#juw- ‘QUOT#言う’ は基本的に =(Q)cjuw- で実現する。

発話・思考系の動詞以外にも引用節を稀に取る。この時の引用節は、ある思考に基づいて動作を行なっていることを表している。

- (42) neQcjuusjoo=ni nai=de nom-e=te moQ-teQ-te
 熱中症=DAT なる:NPST=CSL 飲む-IMP=QUOT 持つ-CTX:行く-CTX
 ‘「熱中症になるから飲みなさい」と [の気持ちで] 持って行って’

引用節の下位類型には、(43)a のような直接引用節と (43)b のような間接引用節がある。直接引用節は文を取ることができる。

- (43) a. ku-te ajo ajo unma-ka=doo=cju-u.
 食う-CTX あら あら おいしい-NPST=SFP=QUOT:言う-NPST

‘[ニガウリを] 食べて, 「あら, あら, おいしいね」と言う。’

b. kugacu=no naNci=wa siNsacubi=da=kara=*Qte*.

9月=GEN 何日=TOP 診察日=VLZ:NPST=CSL=QUOT

‘9月の何日は診察日だからって。’

第9章 語彙

9.1 人称名詞

里方言の人称名詞の体系を [表 29] に示す⁷⁰。

表 29 里方言の人称名詞

人称	数	対目上	対目上以外
一人称	単数	wasi	oi
	複数	wasi=domo	oi=domo
二人称	単数	omai(-sama)	wai, aQko
	複数	omai(-sama){ =domo }	-taci / wai=domo, { aQko / aku }=domo

里方言では「彼」や「彼女」のような三人称名詞が確認されず、「あの人」に対応する aN#huto や aN#nisi などが代用されている。

人称名詞は相手が目上か否かで語根を異にする。二人称名詞語根 aQko は wai よりもやや丁寧さを伴うが、便宜的に対同等・目下としてまとめている。

複数を表す形式としては =domo と -taci がある。話者によると、後者はやや新しい形式のように感じられるらしいが、omai(-sama)-taci は伝統的な形式とのことである。ただし、omai(-sama)=domo との間にはどのような違いがあるかについては、まだ明らかになっていない。

なお、=domo は複数を表すだけでなく、次のように動詞や名詞に付き、例示を表すこともある。

- (1) a. seNeN niseNeN kaseg-u=domo=wa kaNtaN=jai=taa.
千円 二千元 稼ぐ-NPST=ILST=TOP 簡単=VLZ:NPST=SFP
‘千円二千元稼ぐなんてことは簡単じゃないか。’
- b. geemu=domo zikaN=ba cuka-una.
ゲーム=ILST:DAT 時間=ACC 使う-PROH
‘ゲームなんかに時間を使うな。’

里方言の =domo を接語と判断したのは、(1)a のように動詞にも付くという事実からである。なお、=domo が複数を表すというのは、例示用法 (1) と密接に関わっていると思われる。たとえば、=domo は人称名詞以外にも、otoQcjan ‘お父さん’ などの親族名詞や、taroo ‘太郎’ のような固有名詞にも付けることができる (e.g. otoQcjan=domo, taroo=domo)。しかし、このような =domo は決して「お父さん」や「太郎」が複数いることを意味しているのではなく、それぞれの集団の代表者を例

⁷⁰ この他、人称名詞に関わるものに、uN という形式がある。これは uN=ga#kuruma ‘自分の車’ のように用いられ、標準語の「自分」に近い意味を表す。ただし、やや見下げているニュアンスを伴い、一人称としては使われず、uN=ga#kuruma は普通二人称か三人称として解釈される。

示している (associative plural; cf. Corbett 2000) に過ぎない。よって、里方言の =domo は、「似たような性質を持つ集団のなかから 1 つを代表させる接尾辞」と定義できる。

9.2 語彙表

この語彙表は、峰岸 (2000) の語彙表を利用して、2014 年 9 月に行なった語彙調査の結果を記したものである (峰岸 2000 の語彙表と完全に同じではない)。体系的には整理しておらず、伝統形式とは考えられないものも採録しているが、参考資料として掲載する。回答形式のうち、() が付されているものは、提示した意味に合致しないと思われるものである。

番号	意味	標準語	回答形式
1	頭	あたま	kasira, biŋta
2	髪; 髪の毛	かみ; かみのけ	kasirage
3	額	ひたい	hutjaa, deebu
4	眉; 眉毛	まゆ; まゆげ	mjaage
5	目	め	meŋtoo
6	涙	なみだ	namida
7	耳	みみ	miimi
8	鼻	はな	hana
9	口	くち	kuci, (cuba)
10	唇	くちびる	cuba
11	舌	した	sita
12	唾	つば	cuba, jodare
13	歯	は	ha
14	顎	あご	otogjaa
15	頬	ほお	huutoo
16	髭	ひげ	huuge
17	顔	かお	cura
17.1	顔の真正面	かおのましょうめん	macura
18	首	くび	kubi
19	喉	のど	nodo
20	肩	かた	heki
21	背中	せなか	senaka
22	腰	こし	kosi
23	尻	しり	zigo, sii
24	胸	むね	mune
25	乳; 乳房	ちち; ちぶさ	ciQcii

26	腹	おなか; はら	hara
27	臍	へそ	heso
27.1	臍のごま	へそのごま	kuziNma
28	腕	うで	ude
29	肘	ひじ	hiNzii
30	手	て	te
31	指	ゆび	jubi
32	爪 [人・動物の]	つめ	cume
33.2	足の上	あしのじょうぶ	huQtabura, hiQtabura
34	膝	ひざ	cuNbusi
35	肝臓	かんぞう	kimo
36	心臓	しんぞう	kimo
37	腸	はらわた	seNpirowata
38	皮膚; 皮; 肌	ひふ; かわ; はだ	hada
39	汗	あせ	ase
40	垢	あか	aka
41	膿	のう; うみ	uN
42	毛 [人間の体毛]	け	ke
43	脂; 脂肪	あぶら; しぼう	abura
44	血	ち	ci
45	骨	ほね	hone
46	肉	にく	niku
47	体; 肉体	からだ; にくたい	karada
48	病気	びょうき	jamai, jamjaa
49	傷; 怪我	きず; けが	kega
50	薬	くすり	kusui
51	米	こめ	kome
51.1	ごはん	ごはん	sirogoome
51.2	新米	しんまい	siNmjaa
52	粉	こな	kona
53	塩	しお	sio
54	油	あぶら	abura
55	酒	さけ	sake
56	タバコ	タバコ	tabako, kiseru
57	味	あじ	aazi
58	匂い; 香り	におい; かおり	kaoi

59	食べ物; 食物	たべもの; しょくもつ	kuumon
60	肉	にく	niku
61	卵	たまご	tamago
62	鶏	にわとり	niwatoi, niwatooi
63	鳥	とり	toi
64	翼	つばさ	hane
65	羽毛	うもう	wakage, horo
66	巢	す	su
67	嘴	くちばし	kucibaasi
68	角	つの	cuno
69	牛	うし	uusi
69.4	強そうな牛	つよそうなうし	dasigoroo
70	小刀; ナイフ	こがたな; ナイフ	naihu
71	刀	かたな	katana, (too)
72	刃	は	ha
73	棒	ぼう	boo
74	弓	ゆみ	jumi
75	矢	や	ja
76	槍	やり	jari
77	糸	いと	ito
78	針	はり	hai, hari
79	着物; 衣服	きもの; いふく	kiimon
80	紙	かみ	kami
80.1	障子紙	しょうじがみ	sjoozigaami
81	物	もの	mono
82	蛇	へび	heebu, heebi
83	虫	むし	muusi
83.1	青虫	あおむし	aomuusi
84	蠅	はえ	hjaa
85	蚊	か	ka
86	蚤	のみ	noomi
87	虱	しらみ	siraami
88	蟻	あり	suwai
89	魚	さかな; うお	io, uo
89.2	大漁	たいりょう	uudoru
90	貝	かい	kjaa

91	動物	どうぶつ	ikimōN
91.1	蛙	かえる	donkjuu
91.2	兎	うさぎ	goso
91.3	鼬鼠	いたち	tomaasu
91.4	メダカ	めだか	(PDF 版では削除)
92	猟	りょう	rjoo
92.1	猟師	りょうし	teQpoodoN
93	網	あみ	aami
94	犬	いぬ	iN
95	綱	つな	cuna
96	紐	ひも	himo
97	羊	ひつじ	hicuzi
98	馬	うま	NNma
99	豚	ぶた	buta
100	尻尾; 尾	しっぽ; お	siQpo
101	動物の毛	け	ke
102	毛皮	けがわ	kegawa
103	袋	ふくろ	hukuro
104	鍋	なべ	nabe
105	釜	かま	kama
106	瓶	かめ	kame
107	壺	つぼ	cubo
108	屋根	やね	jane
109	壁	かべ	kabe
110	窓	まど	mado
111	扉; ドア	とびら; ドア	to
112	家; 住居	いえ; じゅうきょ	ye, (uuci)
113	車	くるま	kuruma
114	船; 船舶	ふね; せんぱく	hune
115	井戸	いど	igawa
116	仕事	しごと	sigoto
117	金; 金銭	かね; きんせん	zeN
117.1	お釣り	お釣り	cui
118	木	き	ki
119	幹	みき	ki, miki
120	枝	えだ	yeda

121	草	くさ	kusa
122	茎	くき	kuki
123	根	ね	ne
124	葉	は	ha
125	花	はな	hana
126	実	み	mi
127	種子; 種	しゅし; たね	tane
128	樹皮	じゅひ	kawa
128.1	殻	から	kara
129	水田	た; すいでん	tanbo, (hatake)
130	林	はやし	hajaasi
131	森	もり	mori, uujama
132	道	みち	miici
133	穴	あな	ana
134	橋	はし	hasi
135	川	かわ	kawa
136	山	やま	jama
137	野; 野原	の; のはら	kusaQpara
138	平野; 平原	へいや; へいげん	noQpara, haraQpa
139	池	いけ	ike
140	湖	みずうみ	ike
141	海	うみ	uumi
142	島	しま	sima
143	水	みず	mizu
144	氷	こおり	koori
146	土	つち	doro
147	砂	すな	sunna
148	埃	ほこり	hokoi
149	煙	けむり	kemui
150	灰	はい	hjaa
151	火	ひ	hi
152	風	かぜ	kaaze
152.1	涼風	りょうふう	suzuikakaze
153	雲	くも	kumo
154	霧	きり	kii
155	雨	あめ	ame

156	雪	ゆき	juki
157	空	そら	teNdo
158	虹	にじ	niizi
159	太陽	たいよう	hidon
160	月	つき	cuki, ocukisaN
161	影	かげ	kage
162	星	ほし	hoosi
163	日	ひ	hi
164	毎日	まいにち	mainici
165	週	しゅう	sjuu
166	月	つき	cuki, ocukisaN
167	年	とし; ねん	toosi/neN
168	朝	あさ	asa
169	昼間	ひるま	hiiru
170	夕暮れ; 夕方	ゆうぐれ; ゆうがた	juugure, juugata, juuguraNmoto
171	晩; 夜	ばん; よる	joi
172	昨日	きのう	kinoo
173	明日	あす	asitaa, aitaa
174	今日	きょう	kjuu
175	今	いま	ima
176	何時	いつ	icu
177	何時 [時間]	なんじ	naNdoki, naNzi
179	一	いち; ひとつ	ici
180	二	に; ふたつ	ni
181	三	さん; みっつ	saN
182	四	し; よっつ	si
183	五	ご; いつつ	go
184	六	ろく; むっつ	roku
185	七	しち; ななつ	sici
186	八	はち; やっつ	haci
187	九	く; きゅう; ここのつ	kjuu
188	十	じゅう; と	too, zjuu
190	百	ひゃく	hjaaku
191	いくら	いくら	doiko, dogaiko
192	いくつ	いくつ	dogaiko, doiko

193	半分	はんぶん	hanbuN
194	全部	ぜんぶ; すべて	suQpato
195	若干	じゃっかん; いくらか; いくつか	ciQtobaQkai
196	数	かず	kaazu
197	歳; 年齢	とし; ねんれい	toosi
198	回	かい	nanben
199	夫	おっと	tonozjoo
200	妻	つま	omjaa
201	結婚	けっこん	keQkon
201.1	結婚式	けっこんしき	sanbjaakee
201.2	夫婦	ふうふ	mjuuto
202	父	ちち	otocjan, totoSAN
203	母	はは	oQkan, kakasan
204	祖父	そふ	ziisan
205	祖母	そぼ	baasan
205.4	親戚		siibe
206	息子	むすこ	wagako, oigaNotokonko
207	娘	むすめ	wagako, oigaNONnanko
208	子 [人間]; 子ども	こ; こども	kodomo, komankamon, kobo
209	仔 [動物]	こ	kobo
210	孫	まご	mago
211	兄	あに	anSAN, anCjan
212	姉	あね	neesan, neecjan, anesan, (anJoo)
215	兄弟	きょうだい	kjoodjaa
216	姉妹	しまい	ONnankjoodjaa
217	家族	かぞく	kenjaazjuu
218	友達	ともだち	doosi
219	喧嘩	けんか	kenkaa
220	力	ちから	cikara
221	唾	おし	(該当の語なし)
222	聾	つんぼ	cuNbuu
223	盲	めくら	meQkura
224	男	おとこ	otoko

225	女	おんな	onago
226	人	ひと	huto
227	私	わたし	oi, wasi, NNdoga, oidoN, oidoma, Nndomaa
228	おまえ	おまえ	omai, nisjaa
228	あなた	あなた	omaisama
229	彼	かれ	aNhuuto, aNko
230	彼女	かのじょ	aNhuuto, aNko
231	私たち	わたしたち	uNdomo, wasidomo
232	あなたたち	あなたたち	omaetaaci, omaesamataaci
237	誰	だれ	dai

参考文献

- 青木博史 (2004) 「複合動詞「～キル」の展開」『国語国文』73-9, 京都大学文学部国語学国文学研究室
- 荒木 博之 (編) (1970) 『甌島の昔話』, 三弥井書店
- 尾形 佳助 (1987a) 「上甌島瀬上方言の形態音韻論」九州大学大学院人文科学府・昭和 62 年度修士論文, 未公刊
- (1987b) 「上甌瀬上方言の子音体系」『九州大学言語学研究室報告』8, 九州大学文学部
- (1988a) 「上甌瀬上方言の人称代名詞」『九州大学言語学研究室報告』9, 九州大学文学部
- (1988b) 「上甌瀬上方言の音韻の記述」『日本方言研究会 第46回研究発表会 発表原稿集 (於国学院大学)』, 日本方言研究会
- 小川 辰雄 (2012) 『さとことば (里方言)』, 南勢出版 (語彙集)
- 春日 政治 (1931) 「甌島に遺れるマラスルとメーラスル」『九大国文学』2, 九大国文学研究会
- 上村 孝二 (1932) 「甌島方言集」『九大国文学報』3, 九州帝国大学国文学会
- (1936) 「甌島方言の系統に就いて」『九大国文學會誌』11, 九州帝國大學國文學研究室
- (1937a) 「甌島語彙考」『九大国文學會誌』12, 九州帝國大學國文學研究室
- (1937b) 「甌島方言の研究」『満鉄教育研究所研究要報』11, 満鉄教育研究所
- (1940) 「甌島方言の音韻に関する報告」『九大国文学会誌』16, 九州帝国大学国文学会
- (1941a) 「甌島方言のアクセント」『音声学協会会報』65-66, 音声学協会 (再録: 井上史雄・篠崎晃一・小林隆・大西拓一郎 (編) 『日本列島方言叢書 27 九州方言考 5 (鹿児島県)』, ゆまに書房)
- (1941b) 「甌島方言文例」『九大国文學會誌』17, 九州帝國大學國文學研究室
- (1965) 「上甌島瀬上方言の研究」『鹿児島大学法文学部紀要文学科論集』1, 鹿児島大学法文学部
- (1970a) 「甌島方言概説」荒木 博之 (編) (1970) 『甌島の昔話』, 三弥井書店
- (1970b) 「鹿児島県甌島方言資料」『昔話研究資料叢書』5, 三弥井書店
- (1971) 「甌島の方言」『国語国文薩摩路』15, 鹿児島大学法文学部国文学研究室
- (1982a) 「甌島方言の語彙の性格」『鹿児島短大研究紀要』29
- (1982b) 「甌島方言集 (1) 方言集のための甌島方言概説」『南日本文化』15, 鹿児島国際大学附属地域総合研究所
- (1983) 「甌島方言集 (2)」『南日本文化』16, 鹿児島国際大学附属地域総合研究所
- (1985) 「甌島方言集 (3)」『南日本文化』17, 鹿児島国際大学附属地域総合研究所
- (1986) 「甌島方言集 (4)」『南日本文化』18, 鹿児島国際大学附属地域総合研究所
- 神部 宏泰 (1987) 「九州方言の可能表現法—その存立と特性—」『兵庫教育大学研究紀要』7-2, 兵庫教育大学
- 木部 暢子 (2004) 「九州の可能表現の諸相—体系と歴史—」『国語国文薩摩路』48, pp.140-127, 鹿児島大学法文学部国文学研究室

- (2006)「九州方言の可能形式「キル」について—外的条件可能を表す「キル」—」『方言における文法形式の成立と変化の過程に関する研究』平成 14 (2002) 年度～平成 17 (2005) 年度科学研究費補助金基盤研究 B 課題番号 14310196 研究成果報告書
- (2011)「鹿児島県甕島方言」木部暢子・三井はるみ・下地賀代子・盛思超・北原次郎太・山田真寛『文化庁委託事業 危機的な状況にある言語・方言の実態に関する調査研究事業 報告書』第 6.4 節, 大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所
- 清瀬 義三郎則府 (1971)「連結子音と連結母音と—日本語動詞無活用論—」『国語学』86, 国語学会
- 窪 晴夫 (2009)「次世代の音声研究」『言語』38-12, 大修館書店
- (2012)「鹿児島県甕島方言のアクセント」『音声研究』16-1, 日本音声学会
- 黒木 邦彦 (2008)『中古日本語の文法的な時間表現—アスペクト・テンス・ムードをめぐる—』大阪大学博士学位申請論文
- (2012)「二段動詞の一段化と一段動詞の五段化」丹羽一彌 (編)『動詞類複合体の研究——日本語はどのような膠着語か——』, 笠間書院
- (2013a)「過去表現の構造とその変化」高山善行 (編)『日本語文法史研究』, ひつじ書房
- (2013b) Verbal morphology in Classical Gokayama dialect. 『甲南女子大学研究紀要』49 (文学・文化編), 甲南女子大学
- 児玉 望 (2012)「甕島の二型アクセント」『ありあけ 熊本大学言語学論集』11, アクセント研究
- 里村教育委員会 (編) (2003)『郷土の民話』, 私家版
- 里村郷土史編纂委員会 (編) (1985)『里村郷土史』, 里村 (概説書, 語彙集)
- 渋谷 勝己 (1993)「日本語可能表現の諸相と発展」『大阪大学文学部紀要』33-1, 大阪大学文学部
- (2005)「日本語可能形式にみる文法化の諸相」『日本語の研究』1-3, 日本語学会
- 下地 理則 (2011)『琉球諸語記録保存の基礎』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 (言語ダイナミクス科学研究プロジェクト)
- 田窪 行則 (1987)「統語構造と文脈情報」『日本語学』6-5, 明治書院
- 角田 太作 (2009)『世界の言語と日本語 改訂版 言語類型論から見た日本語』くろしお出版
- 平塚 雄亮 (2013)「甕島方言の言語変化」『日本語学会 2013 年度秋季大会発表予稿集』, 日本語学会
- 南 不二男 (1962)「三 文法」, 国語学会 (編)『方言学概説』, 武蔵野書院
- (1967)「鹿児島県甕島瀬上方言の音韻体系」『方言研究年報』10, 広島大学方言研究会
- (1974)『現代日本語の構造』, 大修館書店
- 屋名池 誠 (1986)「述部構造—現代東京方言述部の形態=構文論的記述—」『松村明教授古稀記念 国語研究論集』, pp. 583–601, 明治書院
- (1987)「活用—現代東京方言述部の形態=構文論的記述 [2] —」『学苑』565, 昭和女子大学
- (1988)「語—現代東京方言述部の形態=構文論的記述 [4] —」『学苑』577, 昭和女子大学
- 山本 友美 (2004)「熊本県八代市二見野田崎町方言の可能表現について」『日本方言研究会第 79 回研究発表会原稿集』, 日本方言研究会
- (2009)「鹿児島県上甕島瀬上方言の可能表現について」『地域政策科学研究』6, 鹿児島大

学

- 吉本 啓 (2004) 「日本語複文テンスの構成的意味論: 英語との対照の観点から」佐藤滋・堀江薫・中村渉 (編) 『対照言語学の新展開』, ひつじ書房
- Corbett, Greville G. (2000) *Number*. CUP.
- Harris, Alice C. (1990) Alignment typology and diachronic change. In Lehmann, Winfred P. (ed.), *Language typology 1987: systematic balance in language: papers from the Linguistic Typology Symposium, Berkeley, 1-3 December 1987*. Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins.
- Hopper, Paul J. & Sandra A. Thompson (1980) Transitivity in grammar and discourse. *Language* 56.
- Shimoji, Michinori (2008) *A Grammar of Irabu, a Southern Ryukyuan Language*. Australian National University, Ph.D thesis.
- Silverstein, Michael (1976) Hierarchy of features and ergativity. In Dixon, Robert M. W. (ed.), *Grammatical categories in Australian languages*. pp. 112–171. Canberra: Australian Institute of Aboriginal Studies & New Jersey: Humanities Press.
- UNESCO Ad Hoc Expert Group on Endangered Languages (2003) *Language Vitality and Endangerment*. International Expert Meeting on UNESCO Programme Safeguarding of Endangered Languages.

『上甌島里方言文法書』PDF版補足

執筆分担一覧

範囲	担当者	備考（部分執筆者）
第1章 社会的状況	平塚・森	共同執筆につき個人担当部分の抽出不可能。
第2章 音韻論	黒木	
第3章 音韻規則	黒木	
第4章 言語形式の単位	黒木	
第5章 形態論	黒木	5.5.2.1 準体助詞は野間が執筆。
第6章 統語論		
6.1 格	坂井	
6.2 取り立て	坂井	6.2.7 動詞のとりたては黒木が執筆。
6.3 述部の構成要素と文法カテゴリー	黒木	
6.4 文の階層構造	岩田	
6.5 名詞節	岩田	6.5.1=to 節は野間が執筆。
6.6 並列節	岩田	
第7章 意味論		
7.1 有生性	久保菌	
7.2 ヴォイス		
7.2.1 自動詞語幹化	平塚	
7.2.2 使役・受動表現	黒木	
7.2.3 可能表現	山本	
7.3 アスペクト	久保菌	
7.4 待遇表現		
7.4.1 主格尊敬表現	酒井	
7.4.2 丁寧表現	酒井	
7.4.3 斜格尊敬表現	森	
7.4.4 行為要求表現	森	
7.5 否定表現		
7.5.1 -an-	黒木	
7.5.2 -aziN	高木	
7.6 時制	森	
7.7 モダリティ	白岩	7.7.1.1(B)伝聞様態表現, 7.7.1.2(B)希望表現は門屋が執筆。 7.7.2(B-4)確認要求に関わる終助詞: =ga, =taa, (C) 疑問文末に生起する終助詞は野間が執筆。 調査は白岩・門屋・野間・松丸が分担して実施。
7.8 ダイクシス		
7.8.1 指示表現	藤本	
7.8.2 視点表現	森	
第8章 副詞節	岩田	
第9章 語彙		
9.1 人称名詞	平塚	
9.2 語彙表	黒木・藤本	

執筆者

本書の執筆者は以下の通りです（五十音順，所属は2015年1月時点）。

岩田 美穂	(就実大学)
門屋 飛央	(九州大学大学院生)
久保 蘭 愛	(愛知県立大学)
黒木 邦彦	(啓明大学校)
酒井 雅史	(大阪大学大学院生)
坂井 美日	(日本学術振興会特別研究員)
白岩 広行	(上越教育大学)
高木 千恵	(大阪大学)
野間 純平	(大阪大学大学院生)
平塚 雄亮	(西南学院大学非常勤講師)
藤本 真理子	(尾道市立大学)
松丸 真大	(滋賀大学)
森 勇太	(関西大学)
山本 友美	(椎葉民俗芸能博物館)

本文 P. 13 の執筆分担一覧に誤りがありました。正しくは以下の通りです。

- 1 章 社会的状況: 平塚, 森
- 2 章 音韻論: 黒木
- 3 章 音韻規則: 黒木
- 4 章 言語形式の単位: 黒木
- 5 章 形態論: 黒木, 野間
- 6 章 統語論: 岩田, 野間, 坂井
- 7 章 意味論: 門屋, 久保蘭, 黒木, 酒井, 白岩, 高木, 野間, 平塚, 藤本, 松丸, 森, 山本
- 8 章 副詞節: 岩田
- 9 章 語彙: 黒木, 平塚, 藤本

訂正

冊子版刊行後、以下の誤りが判明しました。お詫びして訂正いたします。

ページ	位置	誤	正	説明
12	図 2	菌上	菌下	地図の地名表記で菌上と菌下が逆
		菌下	菌上	
96	表 23	=samja	samja	表記の統一
98	(19)d	seNsei	seNsee	表記の誤り
100	8 行目	seNsei	seNsee	表記の誤り
100	(26)	seNsei	seNsee	表記の誤り
102	16 行目	(下記参照)	(下記参照)	sama に関する説明の修正
132	(49)a	ALL	DAT	= ⁿ i のグロスの誤り
138	(69)a	ALL	DAT	= ⁿ i のグロスの誤り
139	(73)a	e-e	e=e	= ⁿ i のグロスの誤り
		家-ALL	家=DAT	
150	(107)a	ALL	DAT	= ⁿ i のグロスの誤り
151	(114)	ALL	DAT	= ⁿ i のグロスの誤り
156	17 行目	(B-3-1)	(B-4-1)	節番号の誤り
157	23 行目	(B-3-2)	(B-4-2)	節番号の誤り
164	(161)a	ALL	DAT	= ⁿ i のグロスの誤り
166	(166)	家:ALL	家:DAT	= ⁿ i のグロスの誤り
169	28 行目	3 種類	4 種類	直後 (3) との不整合
169	29 行目	C 類	D 類	直後 (3) との不整合
171	(7)b	家:ALL	家:DAT	= ⁿ i のグロスの誤り
173	(13)b	ALL	DAT	= ⁿ i のグロスの誤り
174	14 行目	事既実現	既実現	衍字
180	(38)	b	a	例文番号の誤り（‘花子ちゃんにもな、入浴剤あげればいいのにな。’の例文）
187	91.4	saNperogjaa	(削除)	saNperogjaa(ru)は‘メダカ’のこと

102 ページ 16 行目、6.1.6.1 形式名詞語幹 sama について、下記の通り説明を修正しました。

(修正前)

格助詞ではないが、形式名詞語幹 sama ‘様’ は移動や動作の方向を標示する。

(修正後)

形式名詞語幹 sama ‘様’ は与格助詞=ⁿi を取って、移動や動作の方向を標示する。sama 自体は格助詞ではないが、=ⁿi より明確に方向を示す、格助詞相当の形式としても用いられるので、ここで言及しておく。